明治四十年一月一日發行
每月一回一日發行

明治三十三年十二月廿五日
第三種郵便物認可



女學世界

第七卷第一號



◉美顔水は天下唯一の美白光艶剤なり◉
化粧用美顔水は品質最もよろしく方今満天下の貴婦人令嬢佳人争ふて之を用ひ賞賛の聲囂すし
●色を白くし●
●きめをこまかに●
●光艶をだし●
●うつくしくなる●
殊に化粧に用ゆればおしろい意のまゝにのりむらにならず常に用ふれば「花の顔せ雪の肌となり」真に玉を欺く美しき顔となるべし
（本品御購求の節は化粧用美顔水と御指名なさ乞ふ）
△東京市内は勿論日本全國各地いたる處の有名なる小間物店にて販賣す
美顔水
紀州桃谷


新年の御慶
目出度申納候
明治四十年一月一日
越
東京市日本橋區駿河町
三越呉服店

女學世界

第七巻第壹號

目次

恭賀新年

新年用品澤山取揃有之候



袴乃親玉

卸 ㊊ 部

東京日本橋長谷川町
美濃磯本店
（電話浪花二一八五九番）

本郷五丁目 美濃磯支店（電話下谷一四一五番）
淺草區諏訪町 美濃磯支店
日本橋佐内町 美濃磯支店
深川區高橋際 美濃磯支店
神田區小川町 美濃磯支店
芝區新櫻田町 小田商店
牛込區神樂坂 伊澤商店
四谷傳馬町一丁目 伊澤支店

恭賀新年

●（ハナワポマード）ハナワ香すき油（スミレ色）

▲束髮結髮用ねばりなし
▲チック用赤毛の患ひなし
▲油くさからずよごれる事なし
●大壺入金拾五錢●小壺入金拾錢
●詰替、試用鉛紙包金參錢



●（ハナワヲイル）ハナワ香油（淡黄色油 赤色油）

▲束髮、散髮、結髮用
▲サラ〳〵として水髮の如し
●大罎金參拾五錢●小罎金貳拾五錢
實用罐入、壹合入、貳合入

本舗 東京市神田明神下 **大和屋藤井製**

取次 各小間物化粧品店

女（いの二）

改正內外圖書目錄

無代進呈　御入用の方は郵券二錢御送被下度候

大詩豪　カーリダーサ原著
高橋五郎　小森彥次共譯

梵劇 さくんたら姫

歐米の劇本は其の多きをもつて著しく、印度の戯曲は其の乏しきをもつて著し。今、其の稀に乏しく随つて最も珍しき戯曲中に於て最も名高く遠叢今に香しきカリダサが一生の傑作サクンタラ姫をとりて優美艷麗の美文に譯出す。眞に破天荒の業にして一讀天女の清歌妙舞を見て身心恍惚の思ひ有らむ。而も、譯文に一新機軸を出せるのみならずまた印度の爲め、否東洋の爲め氣焔萬丈——眞に近來稀れに見る文壇の佳作也

紙數二百六拾頁
最新式典麗美本
定價金五拾錢
郵稅八錢

宮中御歌所寄人　中邨秋香先生著　增訂六版

文鑑 千草の錦

菊判和裝
定價六拾錢
郵稅拾錢

此書は中邨秋香先生が三十餘年閲讀書の餘暇、古學復興以來諸名家の文中金玉の響あるものを抄錄せられしが積んで數十卷と成りしを、中に就て男女學生の模範となるべき美文、記事、紀行、論說、消息、物語體等無慮數百篇を選出せられ、之に加ふるに當代諸名流の文を以てせられ、特に上欄には要語數萬を載せ作者の模範と應用とに供せられしは、他に其比を見ざる最良の文鑑なり、國文學研究者は是非一本を座右に供すべき也。

宮中御歌所寄人　中邨秋香先生新作
華族女學校講師　小野鵞堂先生淨書

新編手紙

（男子用）

木版半紙摺
無類の美本
男女各一册
定價四拾錢
郵稅四錢

女子消息 文の手ほどき

本書は中邨秋香先生の新作にして書簡文獨習者の爲に通俗平易なる實用の文題百餘種を纖振かな付にせられたるは他に其比を見ざる處、特に小野鵞堂先生が大字に書かれたれば習字の手本として此上もなき良書なり

新編書簡文例

（男子用）

木版半紙摺
頗高尙優美
男女各一册
定價六拾錢
郵稅六錢

新編 女子書簡文例

本書の文例は現代の文豪中邨秋香先生の腦漿より迸出せしものなれば、一言一句津々たる趣味あり、案に流れず僻に失せず、擬古に陥らず流俗に同せずして眞に今日書簡文の好模範たり、加ふるに書は筆硯界の巨擘小野鵞堂先生の手腕に成りしものなれば又習字の龜鑑として上せの秘なり、特に上欄に類語數千句を掲げ書簡文を作習せんと欲する人をして自由自在に應用を遂せしむるの便に供せられたるものなれば、新編書簡文法式と相待て斯の完璧と稱すべきなり。

發兌元　東京市京橋區中橋廣小路六　電話本局五七七番　振替貯金四一〇九　前川文榮閣

女(いの三)

滋養新劑 グリコナール錠

本劑は醫學博士北里柴三郎氏指導の下に佐伯矩氏が牡蠣の滋養成分に就き研究の結果創製せるものなり本劑は滋養劑として病者及一般衰弱者に有効なるのみならず心臟を強め盜汗を治し速かに體力を恢復し元氣を旺盛ならしむる特異の効能ある事を多數の醫學者に證明せられたり……本劑の說明書は御申越に從ひ呈送す

消化新劑 タカヂアスターゼ

本劑は工學博士藥學博士高峰讓吉氏の發見に係る澱粉消化新藥なり

我醫學諸大家が治療上に於ける本劑の効果に就き發表せられたる實驗報告を集載せる說明書は御希望に依り無代郵送す

本劑は粉末及錠劑各大小容器入として各地藥舖に販賣す類似品あり必す高峰氏タカヂアスターゼと御指定を乞ふ

發賣元 東京市日本橋區南茅場町 三共商店藥品部

女(いの四)

試筆



日高嶋助筆

恭賀新年

松みどり香油

新年必需品



松みどり香油は原料を吟味し製法を注意いたし候者にて優雅高尚なる香氣を長く有ち頭髪の光澤を増す特効ありて世に有り觸れたる香油とは大に趣きを異にいたし居候へば貴夫人令孃方には缺くべからざる逸品に御座候御試用の上御高評願上候

定價 ○大壜 四十五錢 ○中壜 二十錢 ○小壜 十二錢 ○一合 三十五錢

製造本舗 東京上[illegible] 山崎屋油店 電話下谷[illegible]

◎販賣所は各化粧品店にあり

工學博士 平賀先生 試驗證明

延金細工品は黄金の延板を以て製し中身に純銀其他の重金屬を用ひあれば頗る重くして美麗永年變色せざる請合

ゆびわ 時計用鎖 根掛類 洋服飾釦 帶留金具 良入金具 徽章帽章 時計磁石 眼鏡種々

延金細工



本品の美觀と丈夫は世間既に定評あり何人も試給へ見本のゆびわ僅か一圓六十錢同時計鎖三圓九十錢眼鏡二圓九十錢送料十錢

東京日本橋十軒店 土産商會 電話本局九七五

専賣特許 隆鼻器

低き鼻の高くなる器械



容姿改良時事新報に掲載せられ隆鼻器の應用歐米に盛也

鼻の低き人は試給へ速に高くなり自然に良形狀を好くす奇効絶體狀態し特一圓九十錢並一圓四十錢送料十錢

説明書郵税二錢 東京日本橋十軒店土産商會 振替貯金口座第壹貳九參番

専賣特許簿記用

カード分類器 ● 口座表示器

手數を省き事務整頓す見本は七錢にて送る

六（その一）

(第一號卅九年十一月三日發行)

最新式

婦人技藝講義

會員募集

▲常宮周宮両内親王殿下每號御覽を賜ふ▼

●本會は時勢の要求に應じて起つたのです

●本會は女子に**技藝**と品性の修養に必要なる**學科**とを獨修せしめ且修得の技藝を實地に應用せしむる事を目的とす

●本會は機關として毎月二回**技藝講義**を發行します

●**講義科目**は刺繍、造花、袋物、編物、割烹、圖畫、の諸技藝を主として加ふるに修身、家政、國語、英語、習字、法制、音樂、禮法、茶道、挿花、園藝等女子普通教育上必須の學科を講じます

●**講義**は各斯道の大家にして女子美術學校女子職業學校青山手藝學校高等師範學校女子大學跡見女學校三輪田女學校の諸先生

●講義の**方法**は平易明瞭なる文章を以てし且**繪畫**若しくは**寫眞**を應用して叮嚀懇切に講じます

●本會の**販賣部**は會員の製作品の委託販賣を爲し又製作上必要の材料を極めて安價に供給します

●**實地練習所**は實地に練習せんとするものゝ爲に設け**研究會**は毎月一回開設して大家の講話を乞ふ

●名譽**顧問**は大隈伯高野子爵秋元子爵辻新次君佐藤進君等

●**贊助員**内外朝野の紳士、淑女數十名に及ぶ

●一ヶ年卒業▲入會金貳拾錢●月謝五拾錢

●**免除**新年祝賀の意を表する爲本月十五日迄に入會申込者には入會金を免除す

●見本入用の向は貳拾七錢(切手代用一割増にて一錢切手に限る)會則入用の方は往復ハガキにて申込み下さい

東京京橋區銀座壹丁目六番地(振替貯金口座番號一七)

帝國婦人技藝協會

女(ろの二)

諸專門家講述 ◉ 全部約拾卷

早稻田通俗講話

（一編）理學博士 石川千代松述 **動物講話**（二編）理學博士 松村任三述 **植物講話** 池田晃淵・浮田和民講述（新刊）

第五編 **歷史講話** 全一冊

此書は内外歷史中の大人物にして一世を代表するに足るべき者若干を選びて委しく其言行事歷を講述したる者なれば讀者は之に依て史上有益の智識を得ると與に終生の指針たるべき重要の教訓に接すべき者也

總洋布製美本 正價金六十錢 郵稅金十錢

農學士志賀重昂講述（新刊）

第六編 **地理講話** 全一冊

此書は地理の研究法と内外地理の一斑とを述べたるものなり其說く所固より事の詳細に亘らずと雖も乾燥なる事實を捉へて之を他の事實に比較べ或は過去を忍び未來を想ひ[illegible]紙上に活動せしめたるもの實に本書獨特の長所とす

總洋布製美本 正價金六十錢 郵稅金十錢

文學士横地清次郎・岡田正美・久保得二講述（新刊）

第七編 **國語漢文講話** 全一冊

本書は初學の爲めに國語漢文の研究方法を示せる者にして或は書籍の選擇研究の順序を論じ或は[illegible]初學の注意すべき要點を[illegible]或は初學者の一般に誤られる文字[illegible]を正す等その用意最も周到なるものなり

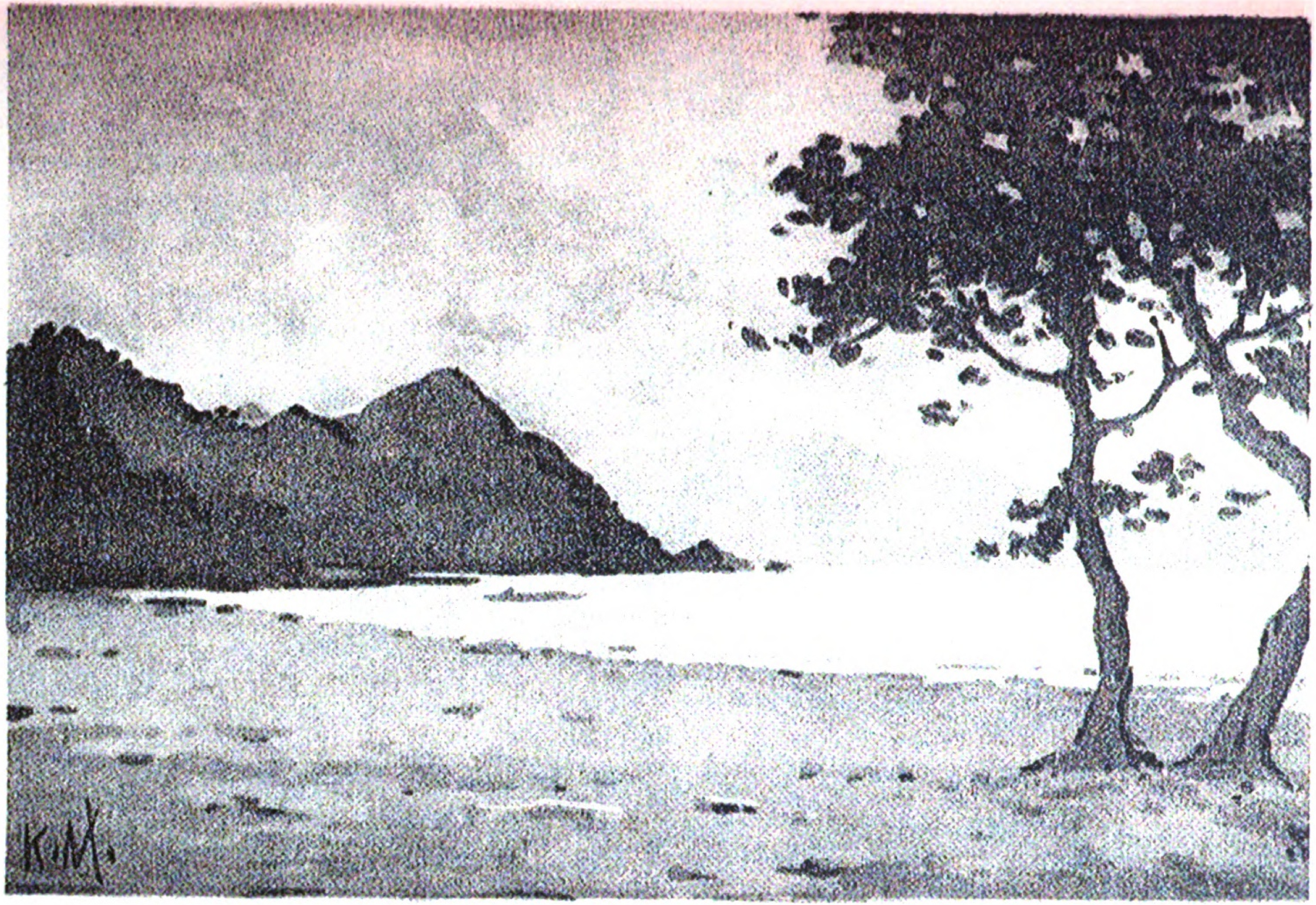
總洋布製美本 正價金六十錢 郵稅金十錢

（三編）[illegible] **地文鑛物講話**（四編）[illegible]述 **生理衛生講話**

發行所 東京牛込 早稻田 早稻田大學出版部
發賣所 東京日本橋區本町 博文館


THE GEM
ゼム
衛生家必携
懐中良薬
ゼム一粒の馥郁たる香氣と愛すべき美味とは一度用て終生忘るゝ能はざらしむ故にゼムは廣く萬人に愛用せらる
ゼム二粒は煙草の味を美にし心神を爽快にし疲勞を減じ息切れを防ぎ渇を醫す故にゼムは外遊學生に愛用せらる
ゼム三粒は音聲を美くす音聲は美の一要素也故にゼムは紳士佳人に愛用せらる
ゼム五粒を食前食後に用ふれば食慾を增進し消化を助く故にゼムは衛生を重んずる士の常用劑として愛用せらる
ゼム十粒は異境に於ける風土病疾癘食當り水傷りを治して神効あり舟車の醉を防ぐ故にゼムは進取的遠征家及び旅行家の必携劑として愛用せらる
ゼム定價
七十五粒入 十錢　四百粒入 五十錢
百六十粒入 廿錢　九百粒入 一圓
容器入ゼム 二十錢
東京市檜町二丁目
日本一手發賣元 山崎榮三郎
大阪高麗橋二丁目
支舖 山崎丸業商會
其他賣捌は全國各地賣藥化粧品店にあり
女(ろの四)

あけぼの



三宅克己筆

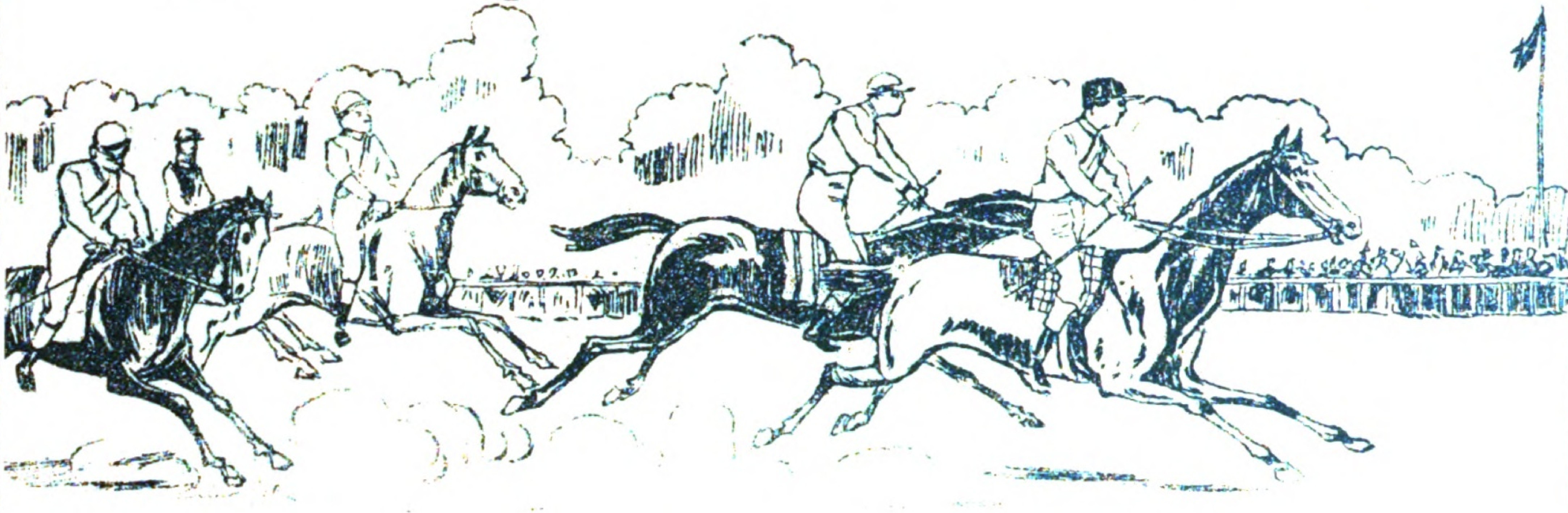
佛國製

THE OMNIUM

大勇吾号

ケーバ香水

有名なる各和洋小間物化粧品店にあり



◎中瓶一本……金壹圓
◎小瓶一本……金廿五錢
（御進物用として各三個美裝箱入あり）

化粧品雑貨直輸出入商

東京日本橋
橘町二丁目

竹間商店

電話浪花一六一四番

ス(二の1)

新年號口繪

▲**青年文筆戰場**（三十四年十月創刊）

◉牧場の朝（大判上等用紙コロタイプ色刷）チャーレス、ジャツパー筆

◉雪のあした（水彩繪葉書石版十色刷）三宅氏筆

▲寫眞銅版……（八頁）

△新年の松△艦と浮木△ひめ松△雪の曙△樂しき旅△乳兄弟△妙義山旭嶽△浮萍△田舍の娘△森の神△墳友の肖像……

秀才文壇

毎月（百册餘頁一日十五日發行）

正價表

一册郵税共十錢○六册同六十三錢○十二册同一圓廿錢○廿六册同二圓卅四錢

年二回定期增刊

時代的讀詩眼……尾上文學士
藤原惺窩の思想……河野紫雲
ひつじかひ……中内文學士
塲合の彼れ……沼波文學士
理想の文章……武島文學士
故鄉の松……河井醉茗
讀書の餘香……野口米次郎
日本詩史談……小笠原臨舟

毎號選評大家（○叙事文、抒情文（中内文學士）○新體詩（馬場孤蝶）○俳句（高濱虚子）○新派和歌（尾上文學士）○和歌（佐々木信綱）○漢詩。論文。小說。日用文。五行文。評論。文士會（以上編輯局選））

▲**第七卷第壹號**（四十年一月一日發行）

少年之友

▽少年少女の作文滿載▽

第貳卷第一號（一月一日發行）

口繪

○力自慢……（ポンチ）
○あるき初め……（泰西名畫）
○誌友のおもかげ……

內容

○細君の傘……[illegible]二
○ひつぢ太郎……伊留慶
○少年喜劇 千歲の松……太郎
○わたしの日記○松の話……
○目白の悲み……メッ郎
○お正月の養生……代診生
○動物園……

少年文壇 ○普通文○日記文○はがき文○和歌○俳句○お笑草○新考物○友達會○筆蹟○スケッチ……

無比低廉雜誌

正價 一册がたった金五錢 六册郵税共金廿七錢○十二册金五十四錢（郵券代用一割增）

發兌元 東京神田區旅籠町一丁目 **文光堂**（振替口座壹九五五番）

賣捌 東京堂 北隆館 東海堂 良明堂 上田屋 外書店

（其の二）

女子文壇社

創業第三年紀念廉賣

紀念廉價申込期限　四十年一月三十一日迄（期限後は斷然定價に復す）

▲好機逸すべからず　▲丸でロハの如し

廉賣書目

書名	體裁	正價	廉賣價	郵税
▲詩と美文 玉むし	全中形 新式上製	正價金六十錢	廉賣價參拾錢	郵税六錢
▲女子懸賞文集	全中形 洋装上製	正價金二十五錢	廉賣價拾五錢	郵税六錢
▲美文作法	全大形 洋装上製	正價金四十錢	廉賣價廿五錢	郵税四錢
▲小説美文 朝ばれ	全中形 洋装上製	正價金四十五錢	廉賣價廿五錢	郵税四錢
▲言文一致文範	全大形 洋装上製	正價金四十錢	廉賣價廿五錢	郵税四錢
▲卅九年增補 女子遊學便覽	全中形 洋装上製	正價金三十錢	廉賣價貳拾錢	郵税四錢

（郵劵代用は必ず一割増）

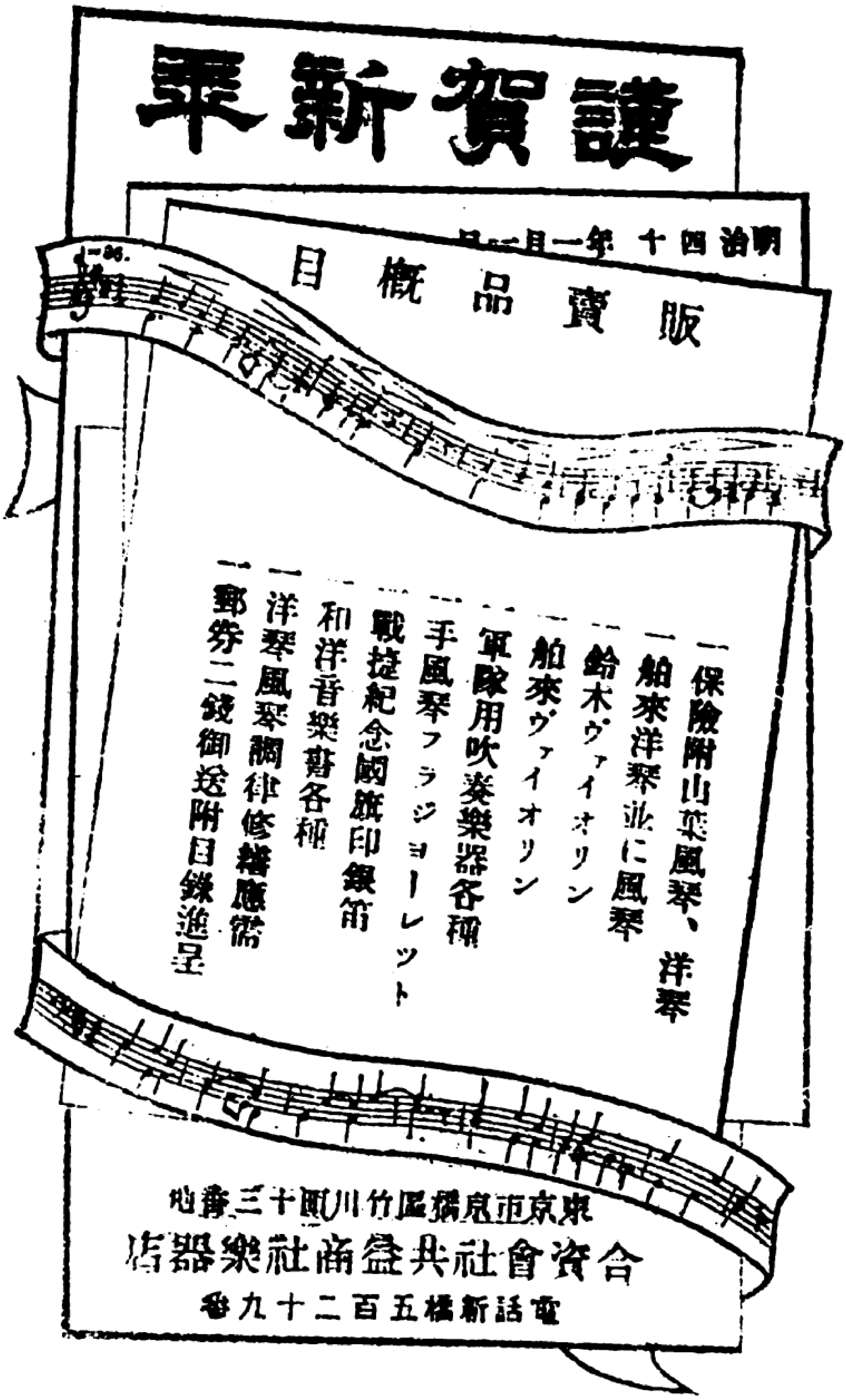
●新年號の女子文壇は面目一新 重賞詩文發表す

右各書とも分賣いたします「出版元」へ早く申込ざれば賣切になり升

出版元　女子文壇社　東京京橋大鋸町十一

——（郵便振替貯金口座第壹七貳九番）——

女（ロの三）

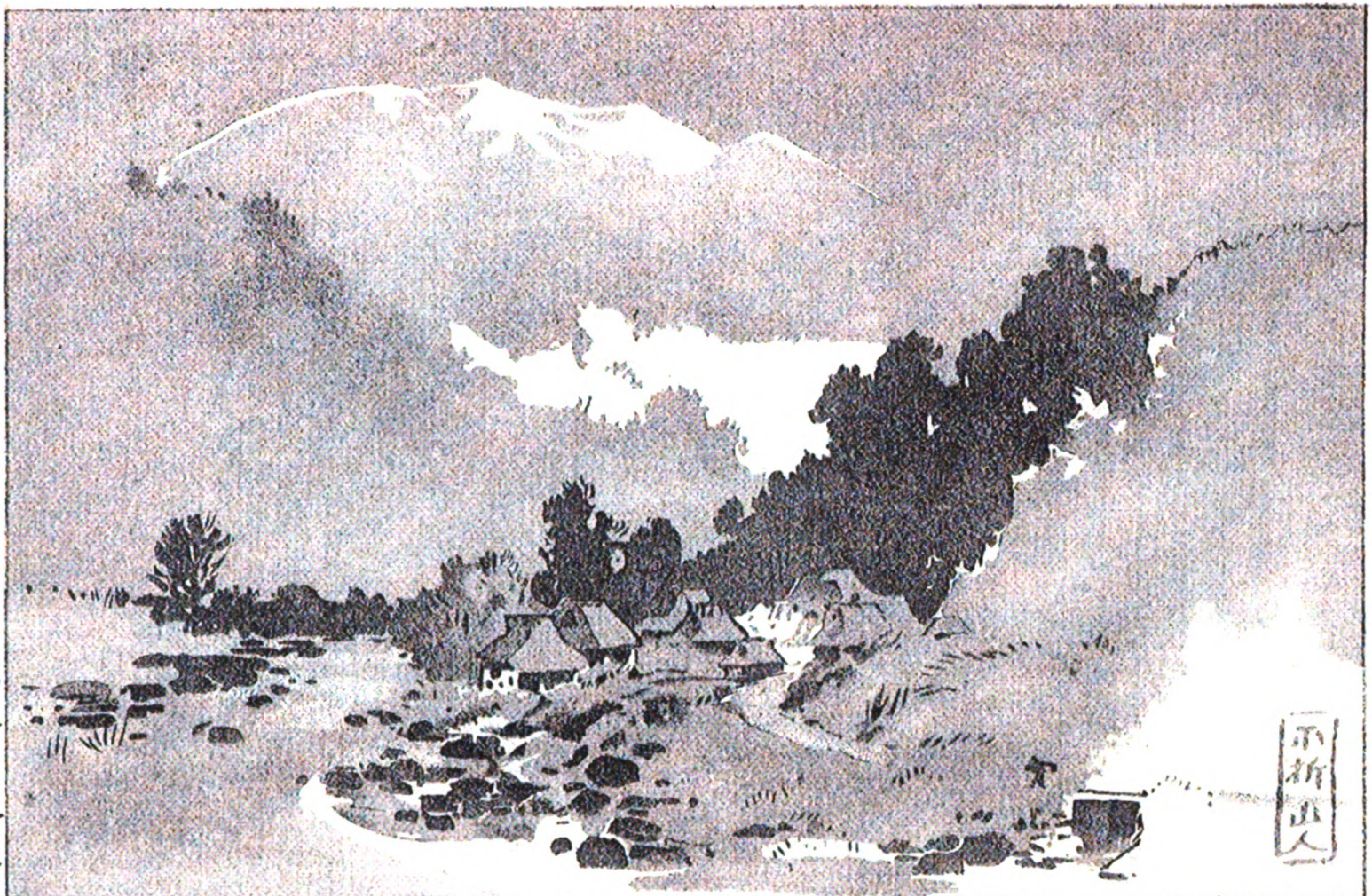

謹賀新年
明治四十一年一月一日
販賣品概目
一 保險附山葉風琴、洋琴
一 舶來洋琴並に風琴
一 鈴木ヴァイオリン
一 舶來ヴァイオリン
一 軍隊用吹奏樂器各種
一 手風琴フラジョーレット
一 戰捷紀念國旗印銀笛
一 和洋音樂書各種
一 洋琴風琴調律修繕應需
一 郵券二錢御送附目錄進呈
東京市京橋區竹川町十三番地
合資會社共益商社樂器店
電話新橋五百二十九番

女(はの調)



川端玉章筆

高嶺ノ雪



中村不折筆

女(にの一)

女(にの二)

女學世界 第壹號 壹割引

此處切り抜き御注文の方は

(切取線)

美人トナル秘密

獻文ハウツービービフチフル參照

色の白きは七難かくすと申し御婦人は勿論男子にても皮膚の綺麗な愉快き[illegible]にするも[illegible]に依るは云へ彼の歐米人が賞美し容貌の少さは日の出クリームを缺く可らざる化粧品とし使用しつゝある所以にして。日ノ出クリームが又東洋の御方にも適當なることは衛生試驗所の證明其他博士の實驗上明であります色を白くしキメを細かに美麗ならしむることは勿論日ノ出クリームは電氣乳劑なれば。皮膚を緊縮する時は脂肪が一面に普及し柔軟ならしむる故、老年に至るも皺の寄ることなく。如何に其花の如き若き姿を永く保ち得るでしようか又皮膚のあれ性の方は必ず朝夕御使用あればひゞしもやけ等にかゝることなく又全治する特効を有す彼の恐るべき白粉の鉛毒を防ぐは無論日本流の艶化粧白粉や白粉下を用ゆるの要なく。又つき悪き眞の無鉛毒の白粉を使用前日ノ出クリームを用ゆれば極めて美くしくつき。眞正の美人となることは獨逸國醫學博士エエボーン氏の證明する所。さて如何に日ノ出クリームを使用すべきか、初め微温湯を浸したるタオルの切にて面部を數分間温蒸し白粉と顏の毛孔に吸取られたる塵と垢を發出さしめ其後日ノ出クリームの極少量を、指先きに付け充分(マーサージ)擦り込たる後ハンカチーフ或は紙にてふき取らるべし。尚白粉を用ひらるゝ方は前記の如く拭ひおりたる後白粉を使用さるゝ時は衛生上有効なるのみならず恰も花の滿開せし如く實に美麗を極むべし尚毛髮用日の出クリームはコスメチツクと水香油を合せし如くにて適度に亂毛を止め毛髮を保護養成する媾香油なり化粧用毛髮用共に佳香馥郁の佳品にして衛生的に完備せり

何故に美は人生の最大幸福なるか？美は愉快を醸し心を爽然とす愉快の感覺は精神の滋養なり、精神の滋養は追次に肉體の滋養となり血は増し肉は肥えて體健全となり、益々艶美しくなる、此最初に美人となるは日ノ出クリームを朝夕使用するにあり

右日の出クリームの儀當市内に於ては非常に御高評を辱し一時品切に相成申し廣告を中止致し候處今度多大入荷仕り候間猶々御用命の上御高評の榮を給はり度市内は高名なる化粧品小間物店に販賣仕候地方も逐次販賣店擴張中に付御便宜御注文奉願上候

本品は宮内省御買上の光榮を得

日ノ出クリーム 價定

	價	郵税
特製	二圓	十錢
大瓶	一圓	同
中瓶	五十錢	同
小瓶	三十錢	四錢
見本瓶	十五錢	同

(化粧用毛髮用共同値に有之候)

右中瓶以上直接御注文の方には御年玉として優美の化粧品を進呈す

發賣品定價表

色白くなる	ケーパ洗粉	廿錢	五錢
にきび取	サクラ水	五十錢	十五錢
高等香油	日ノ出オイル	一圓 五十錢	廿五錢
佛國	サムライ白粉		五十錢
英國	プールトロース石鹸		九十錢
獨逸	ケーパ石鹸		卅五錢

日の出クリーム特約大販賣店

- 銀座 佐々木藥店
- 小川町 信盛堂洋品店
- 各所 白牡丹本支店
- 須田町 三ッ井屋
- 本鄉 兼康小間物店
- 牛込 山城屋
- 淺草 百助小間物店
- 同 尾張屋雜貨店
- 馬喰町 花王堂
- 橫山町 臨田盛眞堂
- 同 柳下藤五郎
- 同 天野源七
- 通鹽町 大和屋
- 長谷川町 廣田孫七
- 藥研堀 櫻金洋品店
- 牛込 酒井商店
- 橫山町 清水開花堂
- 大阪博勞町 小林文店
- 名古屋末廣町 村瀨谷二郎
- 福知山 大辻文永堂

一手販賣元 舶來化粧品商 ケーパ洗粉本舖

東京日本橋區村松町廿二番地

須原啓三郎商店

有名信用ある化粧品販賣店にあり)不正商店贋物あり注意)

清節



跡見玉枝女史筆

明くるみそら



河崎蘭香筆

女(ほの一)

大阪高等醫學校校長兼同病院長醫學博士佐多愛彦序
元大阪高等醫學校病院小兒科醫長心得 長濱宗佶著

増訂
再版

小兒養育の心得

全一冊 正價金八十錢 郵税金八錢 郵券代用一割増

初版千部は發行後直に賣切れ久敷缺本の處愈増訂再版發行す紙數は初版に倍し大に内容を改善せり本書は小兒の健康時と疾病時とに於ける育兒上の心得を懇切叮嚀に説明したるものなれば何づれの家庭にも缺くべからざる良書なり

○本書は年末年始の贈り物として最も適當なるものなり
○本書は結婚の祝物として最も適當なるものなり
○本書は出産の祝物として最も適當なるものなり

發賣所 東京日本橋通り三丁目 丸善株式會社 大阪東區博勞町四丁目 丸善株式會社支社 ◉全國有名書肆販賣

女(ほの二)

登錄商標

佛國天然葡萄酒古「メドック」



海外直輸出入 洋酒食料品商 東京新橋竹川町 三組屋 大塚琢造 電話新橋七三六番

此「古メドック」は佛國產純料の天然葡萄酒にて弊店に於て十有年來一手直輸入專賣するものに御座候此葡萄酒は藥用としても常用飲料としても饋に人體に有益あるものとして諸大醫及需用者諸彦の稱讃を辱ふし古「メドック」の名稱世に知らざるものなきに至りしは誠に仕合に奉存候然るに世間往々同一の名稱の葡萄酒を賣捌くもの有之候に付弊店の「古メドック」には印の商標を印し有之候間御注意御買求被下度候◉御注文之品は直ちに御屆可致候◉代價表は御申越次第進呈す

ホワイト家庭用裁縫ミシン

●●足踏ミシン　自金四拾貳圓 至金百貳拾圓　二十七種類

●●手廻ミシン　自金貳拾圓 至金四拾圓　十二種類

外ニ針、和洋鋏、和洋アイロン各種、チョーク、トレーサー（筋立）インチ尺、油、火熨斗、等裁縫用具一切

リンガー洗濯絞器械、仕事用エプロン、自轉車等

▲ミシン御購求の節は御都合にて現金若くは月賦に代金御支拂被下候て不苦候▲御使用中萬一ミシンに故障又は御不明の處も相生し候ば何時にても店員參堂教示可申上候▲ミシン御使用の方法は左記之場所を御紹介申上候間就而規則書御覽被成下度候

ミシン使用法教授所

東京麹町區富士見町一丁目廿五番地　ホワイトミシン裁縫研究會

同　市同區飯田町四丁目十一番地　ホワイトミシン練習所

橫濱市常盤町一丁目八番地　ホワイトミシン裁縫研究會

一手販賣店

東京市神田區南乘物町一番地（今川橋通）（新規開店）　古屋商店

橫濱市元濱町二丁目四番地（電話二〇八八）　古屋商店

神戸市加納町四丁目十五番地　古屋商店

○特に現金にて御支拂の場合には定價より壹割五分御減價可仕候

（ほの三）

●一圓の舶來石鹼よりもクラブ洗粉は衞生美身術に適合す
●千種以上ある洗粉の中にもクラブ洗粉のみは石鹼に優れる特點あり



總代理店

輸出入雑貨
化粧品問屋

中山太陽堂 神戸本店 大阪支店

●内外各地の信用ある小間物化粧品店及呉服店にて販賣せられつゝ有之候御便宜御用命相成度候・

門松



戸田玉秀筆

女(への一)

數年難治の慢性胃病を根治し
消化機能を強壯健全にする靈藥

胃病根治劑

從來世に胃病藥頗る多しと雖ども皆一時の苦痛を輕く制酸劑（即ち重曹、マグネシヤ）、苦味劑の如き一時おさへムチスカシ的舊式賣藥のみにして未だ嘗て根治的に其病の基因を斷つ良藥あるを見ず、本劑は獨乙國高名大醫ノーテル氏處方に基き本邦胃病患者に適切なる新新有効藥を配合し百方實驗其奏効顯著なるを確認發賣せし最も進歩せる完全なる新藥にして數年難治の頑固なる**慢性胃病**にても根本より**誓って根治**し胃腸を健全に消化機能を強壯ならしめ食慾を催進し便通を快くし氣力を壯にし精神を爽快活潑にする空前の完全最新藥なれば從來種々雜多の胃病藥を用ひて効なく多年病苦に呻吟せる患者は一日も早く本劑を服し病根を斷絶し無病強健の大幸を得られよ輕症は壹劑重症は貳劑慢性症は參劑にて根治確證す

（藥價）壹劑四拾貳錢　貳劑八拾錢　參劑壹圓拾錢　郵券代用貳割増し

新輸入 肉體美容料

色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黑き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色に變化**し艶麗の容貌となるを確證す尚上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を發ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は並製金壹圓貳拾錢特別製金壹圓七拾錢

以上貳藥 **專賣元** 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

月やくおろし

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず忽ち**快通流下**する特効あり本劑參劑分を用ゆれば二三ヶ月間滯りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を用ゆれば半年以上の月經閉止及び**血塊**にても必ず立處ろに流經す且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及**惡血毒血**を一掃するを確證す但し本劑は其發効極めて**峻烈顯著**なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢

（注意）本劑の**大盛**を羨み近時續々怪しき無効なる**類似偽藥**顯はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



わきが 腋臭

根治確證 新發見藥

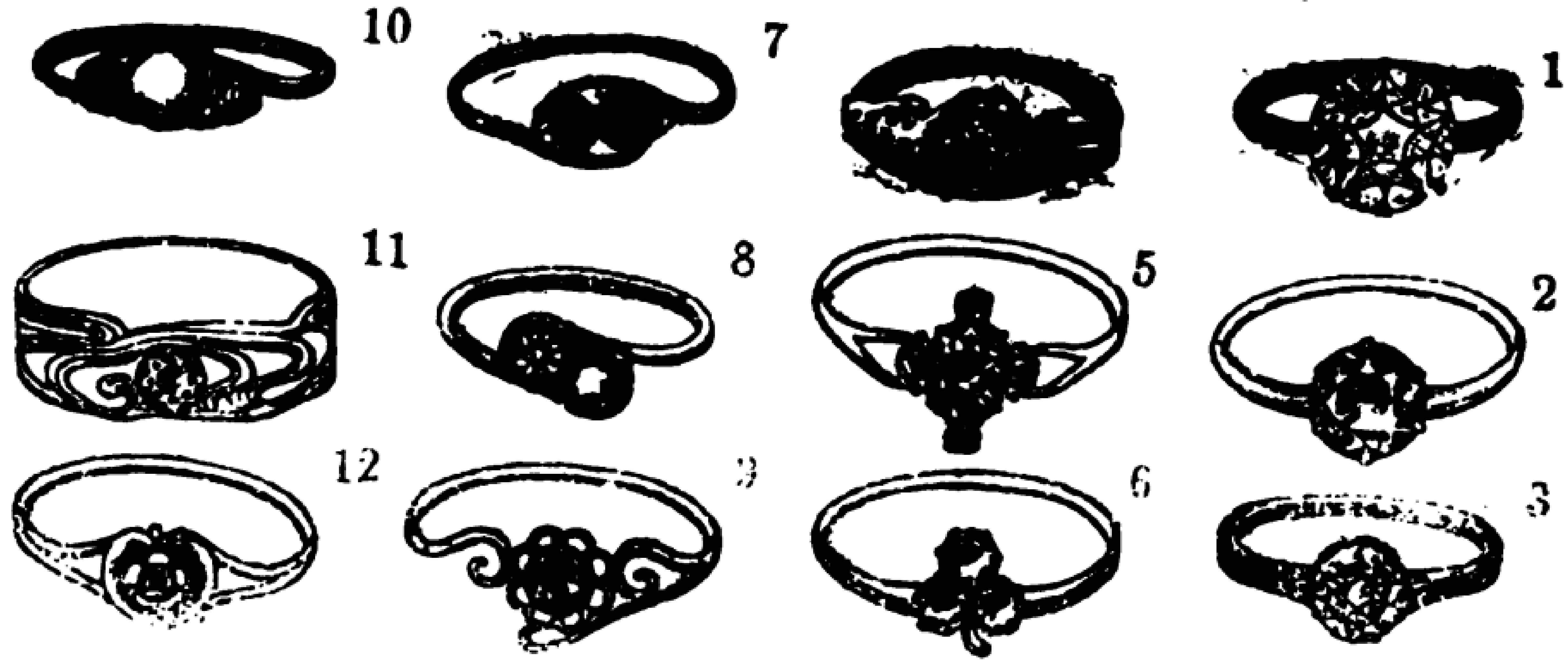
醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても**誓て根治**し決して再發或は他病に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に試み苦惱を脫せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢着金即刻送藥す郵券代用必ず二割增の事

以上貳藥 **專賣元** 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**（電話下谷五四四六番）

（への三）

謹賀新年

ダイヤモンド入指輪



番號	價格
1	千二百圓以上千五百圓
2	五百五十圓以上六百圓
3	二百五十圓以上二百八十圓
4	二百八十圓以上三百圓
5	三百圓以上三百五十圓
6	百二十圓以上百四十圓
7	百六十圓以上百八十圓
8	百三十圓以上百五十圓
9	七十圓以上八十圓
10	百圓以上百三十圓
11	八十圓以上百圓
12	三十五圓以上四十圓也

貴金屬彫刻品
婦人用装飾品商
寶石美術装飾

いかほど寶石の王といはるゝダイヤモンドでも其の輝に於て等差のあるのハ甚しいものです、善良でない石の装飾ハ交際場裡に立つて却つて品位を卑めたまふべしされバ装飾の寶石などへ殊に善良純質の特品を選み遊ばす必要が御座ります、そこで下店夙に其點に注意し且つ多年の御愛眷に報ひまつらんと思ひ立ち先般彼の地取引先へ特約せしに今回善良なる石類も澤山税率改正前に着せるゆゑに左記の装飾に調製し價格も當分從前の通りにて販賣仕りますゆへ此際の御買上げは最も時宜に適したるものと存じ升何卒多少に不拘御用命の程願上候

㊀男子用（指環、手釦、胸針、鈕釦、鎖り等）

㊁婦人用（指環、簪、帶止メ、襟留、鎖り、ブローチ、腕輪、洋装々身具等）

東京市日本橋區若松町

丸嘉

電話浪花七六八番

五二共進會に於進歩金牌受領

女(への四、

兩內親王殿下



常宮昌子內親王殿下





周宮房子內親王殿下



新年の松



三景の松島

石油暖爐と厨爐

●專賣特許一〇三二一號



特製　金拾貳圓

上製　金八圓

並製　金五圓五拾錢

石油暖爐は最も美麗なる構造にしてマッチで點火せば直ちに強熱を發し無煙無臭一點の塵なし僅か廿分間に七八十度となり煙突を要せず衛生と經濟に最も適す

きりとり

割引券

此券切り取り持参の方は定價の五分引◎地方注文は荷造り運賃丈け弊店持ち

きりとり



金貳圓廿錢より

金參圓廿錢より

石油厨爐は僅卅分間に三夕の石油で一升の飯が炊け魚煮附を焼くも臭くなく下等石油で使用するも無煙無臭保證せり

發賣元　東京日本橋區室町（電話本局二八九）　久能木商店

代理店　京都四條通高倉角（電話一七一二）　宮本商店

女（その一）

女（との二）

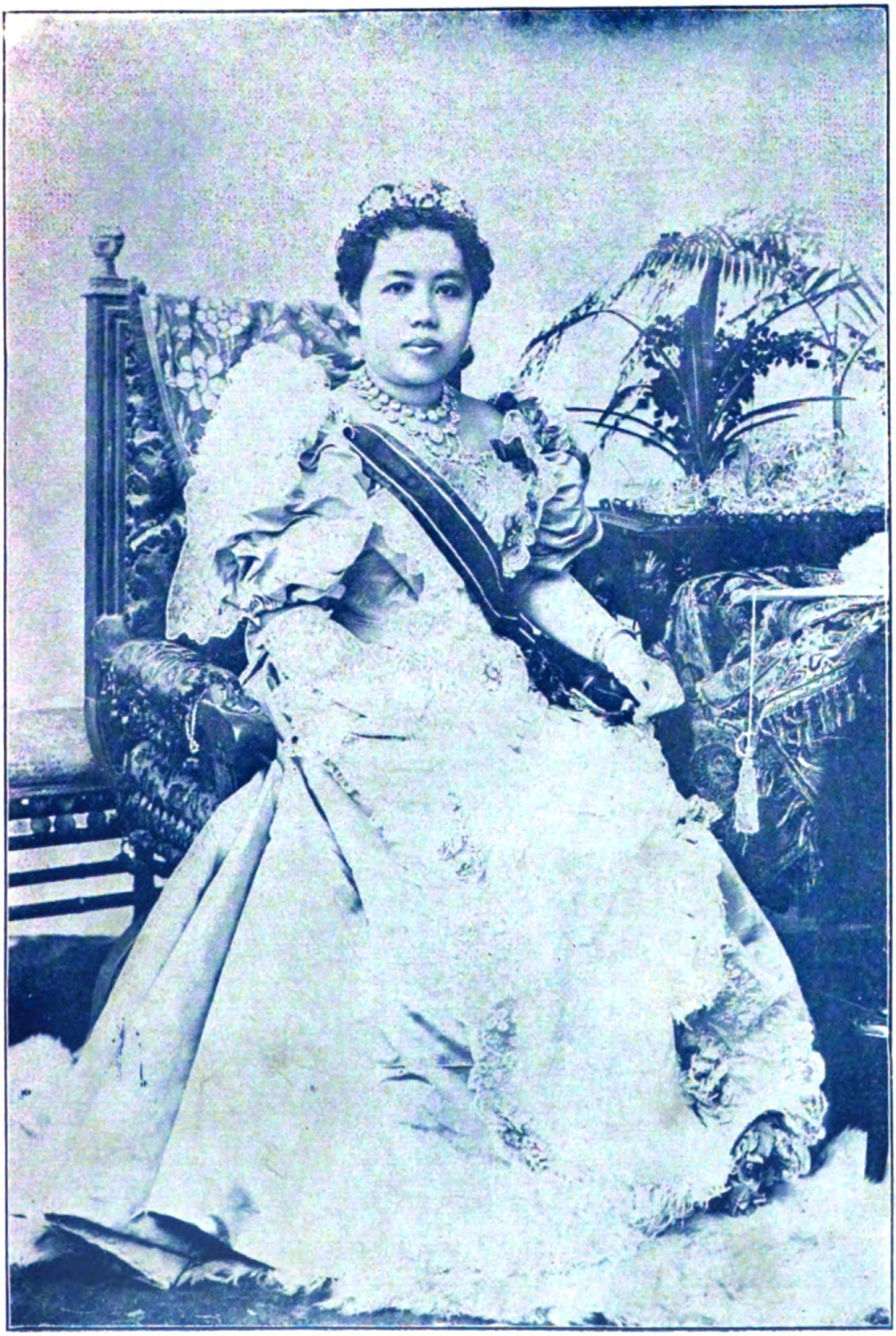
女(その四)

伊藤統監の一族



世嗣夫人（侯爵令孃）　末松男爵　伊藤大勳位　伊藤式部官（世嗣）　侯爵夫人梅子　末松男爵夫人郁子

暹羅の王后



受賞

最高名譽大賞（明治三十七年）米國聖路易萬國大博覽會
一等賞牌（明治三十六年）第五回內國勸業博覽會
金牌（明治三十六年）佛領ハノイ亞細亞博覽會
金牌（明治三十三年）佛國巴里萬國博覽會
有功金牌（明治三十年）御設二十五年紀念博覽會
一等有功賞牌（明治二十八年）第四回內國勸業博覽會
優等賞牌（明治二十六年）米國市俄古閣龍世界博覽會
二等有功賞牌（明治二十三年）第三回內國勸業博覽會
花紋賞牌（明治十年）第一回內國勸業博覽會

最上醬油

ヒゲタ印

恭賀新禧



(の一)

宮內省御用達

釀造元田中玄蕃

千葉縣銚子港

薄田泣菫著　中澤弘光画

子守唄

近刊

子守唄は兒童唱歌です、或は調子を民謠から拾つて來たり、或は情味を西歐のものから借りて來たり、色々な方面に材料を選んで、清新な趣味を兒女の上に開發したいと思つて試みられたのがこの本です、花の歌やら、鳥のあくびやら、豚の居ねむりやら、猿のいたずらやら、つい目の前に現はれて居る日常の事柄がどれ程に、面白い調子で聞かれる事でせうそれに中澤弘光先生の苦心の筆になつた挿畫七十枚は單に畫本としても此の本の價値を語つてゐます、体裁は美し、印刷は良し、學校、家庭のお子供さん達の御褒美やら其他贈り物などゝして、此上もないよい本で何を措いても之をお勸めしますのです。

女(ちの一)

醫科大學藥學專攻 藥學得業士金澤嚴著

肺病患者の福音

著者肺病全快の經驗と最近の學說に基き親切叮嚀に根治の法を詳述せし物也◎郵劵二錢封入申込者に無代施本

東京市下谷區上根岸町 衛生書院

優美高尙極薄手形

米國形銀時計



本品は小店特約東洋一手販賣の時計にして價は頗る廉價なるも機械の精確なると形狀の優美高尙にして而も側の銀質等總て米國ウォールサム製に遜色なき良品なり

價拾三圓半　銀側兩蓋中形機械金製
蓋附16 17 18子地寶石入二枚車別爪石巻上向アンクル龍頭引出針廻し

價拾貳圓半　右同品乙號

價拾圓半　銀側兩蓋機械ニッケル惣寶石入別爪巻上向アンクル

價九圓半　右同品乙號

極薄手形　太文字鐵針

注意◎保險三十ケ年
◎送料内地拾錢　臺、淸、韓參拾錢
◎代金引替は卅錢前金○振替爲替口座百七十三番

注意　大景品附此廣告を切抜き御注文書同封の御方には鐵磁石、一切の附屬を添へ景品として進呈す

東京銀座壹
伊勢伊時計店

新發明

お声の出るくすり

美音錠

將校軍人	教師	僧侶	演舌家	音曲家	謡曲家
定價	十錢	廿錢	五十錢	壹圓	

右は從來内藤家の製劑に有之所今回弊店に讓受候間猶引續御用命給り度此段奉希望候
定價廿錢以上のものへは引繼御披露のため極めて美麗なる丸藥及楊枝入を封入進呈仕度各地有名藥店に差出し有之候得共若し品切の場合には直接御註文被下度全國は無遞送料にて御郵送申上候

東京日本橋區兩國米澤町二丁目一番地

美音錠發賣所　稀敷丸本舗　萬珠堂藥局

吉田安五郎

衛生無害

衣服洗淨

玉川

一名シヤボンイラズ

手もあれず、さゝくれもできません

御試驗濟　東京本町三　玉屋支店

▲

互選俳句

製本の遲延せるは、〆切延期と、年末に際し印刷の捗取らざりし故を以て、投句者に對し豫告に背くの罪尠なからずと雖も、次回よりは必ず期日勵行すべく、猶送本は昨年末に悉く發送せるを以て着本の上は、至急拔句の上集本と共に送られたし、茲に遲延の罪を詫ることしかり

◎東京神田表神保町

俳句奬勵會

女(ちの三)

天才畫人榊原蕉園



蕉園女史の畫風は浮世繪より出でゝ浮世繪の流俗に泥まず、畫品高雅にして妖艶眞に一世の傑品也

◉佛國最新流行キセロール會社製化粧品◉

キセロール

化粧香料

恭賀新年

XEROL

◉此化粧品は○○○○‖在來の化粧香料が往々有毒性原料を含有し人體に危害を及ぼすもの多きに反し最新香料として宇内に其比を見ざる逸品也

◉此化粧品は○○○○‖佛國醫科大學教授藥學博士ペロー先生が多年研究の結果主として衛生殺菌の特質効力を有する様に精製せられたる逸品也

◉此化粧品は○○○○‖佛國最新流行の化粧品にして品質の優秀佳良なると香氣持久力の強きと香氣の奥床しく貴婦人の日用に缺く可からざる品也

◉此化粧品は○○○○‖既に女學世界第六卷第十三號に某令夫人の實驗談を掲載しあり請ふ御參照の上多少とも御愛用あらんと希望に堪へざる也

販賣品目

◉石鹸　白背包の二種

◉香水　七種
▲エッサンス▲ヴ井オレット▲エリオトロープ▲リラ▲ジャスマン▲イリス▲トレーフル

◉香紙　佛國衛生博覽會にて最高賞牌を得たる室内薫燃紙なり

◉キシユドリン　足部汗止用にて靴を履く人には日常欠くべからざる必要品なり。

◉オー、ド、トワレット

◉クリーム　◉ヴキテーグル　◉プードル、ド、リ　以上四種面部化粧用

◉歯香水　◉煉歯磨　◉粉歯磨　◉カシユー　以上四種口中用

◉コスメチック　◉ブリヤンチン　◉ローション　◉フリクション　以上四種頭髮化粧用

◉ワセリン

日本一手販賣元　萬治商會　小賣部　めでたや

東京市京橋區尾張町貳丁目貳拾五番地（東海銀行支店前）

女(りの一)

女（りの二）

空前の奇書

●驚くべき廿世紀の運命觀（大好評初刊將に盡んとす）●南勢新報社長村上東洲先生序文●武桃庵居士著

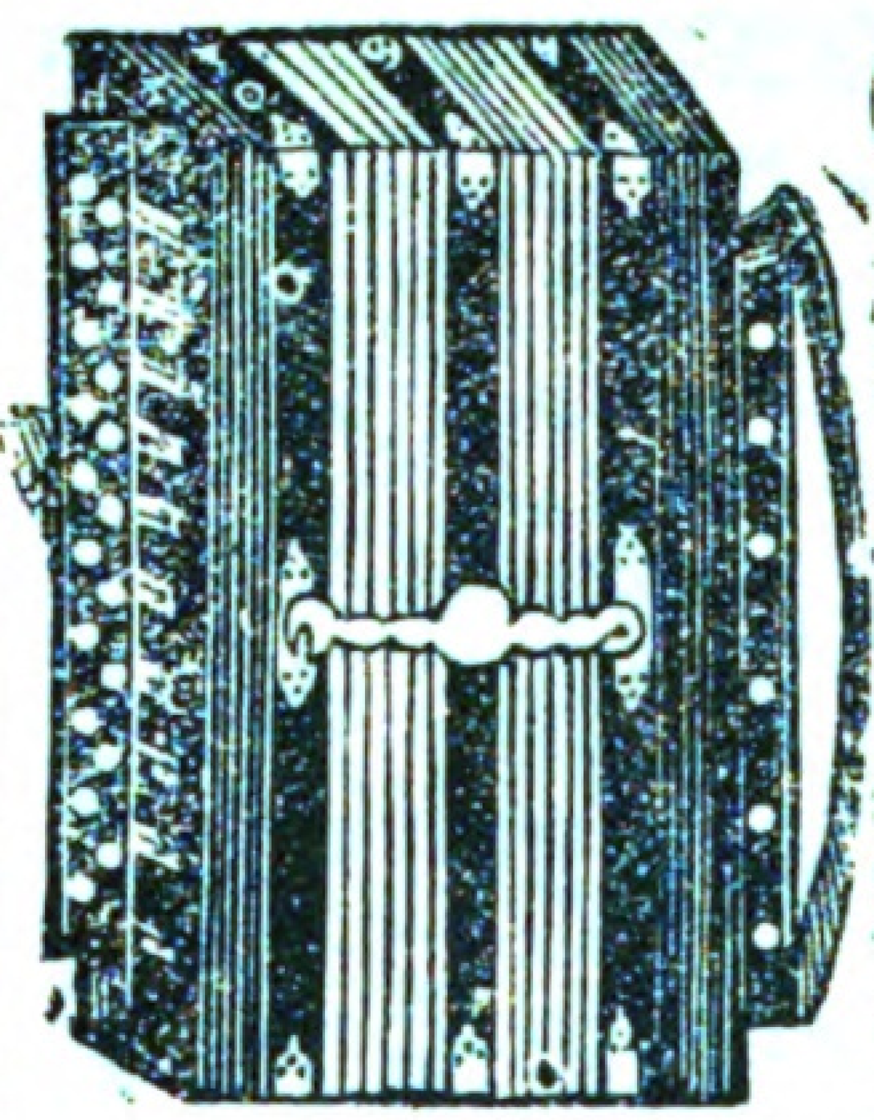
破邪顯正 開運秘鑑

一名運命哲學 附卜筮排斥論
四六版全一册
正價金三十錢
郵稅四錢

内容 緒言▲運命は神授也▲神意ト神力▲神力の支配及成敗▲運命照觀の情玻璃鏡▲人生觀死生觀▲人生運命觀人間一代の運命は生れたる時に定まる壽命病痾災難奇禍奇遇奇緣姙娠死亡▲人間罪惡觀▲自殺觀▲情死觀▲交際觀▲開運の寳鍵▲處世運命觀立志學問修業就職適業轉業結緣和合不和合離緣再緣▲運命雜觀家居轉居旅立門出願事勝負事宮籤▲願望成就幸福圓滿安心立命▲附錄卜筮排斥論一切の卜筮占術を駁す

本書は著者が入禪冥想の餘、神授の靈鏡に映發したる光明也、眞個に幽明に出入し三世を透觀す、一たび之を繙く者は人生の有らゆる運命を照破し悲觀煩悶苦痛なるもの求めんと欲するも得べからず、勿疑、勿惑、非卜、非占、宗敎以外の宗敎也、哲學以外の哲學也、神授の妙諦也

發行所 伊勢國多氣郡相可村 達磨堂



堅牢無比 懷中

手風琴

本品は最も優美且高尚の小形なる手風琴にして音律の正確なる音聲の強大なる事舶來手風琴に異なる事なし左れば旅行散歩等には至極輕便なり獨習書附屬す

正價 上製金壹圓八拾錢 並製金壹圓五拾錢
送料拾錢切手代用一割增

大阪市東區和泉町貳丁目
發賣元 硯商店

自宅療法 子宮病

妾嫁きてより七年此方子宮病ちの道の難病をわづらい色々と藥療を盡せしも更に効なく一家悲歎の折柄ふと試みたる療法にて忽ち全快妊娠の身となり今や安す／＼と健兒を擧げゝれば嬉しさの餘りこれを弘く傳へたし望む人は返信料三錢と容躰書を添へ遠慮なく問合せあれ

奈良縣宇陀郡榛原町 笹岡りん

肺病

私儀多年肺病にて九死の際偶々一奇藥發明の爲め全治せる故世の同病者を救ひ度き志願に付望の方は郵券二錢封入にて御照會あれ

東京府下大森入新井村 川名助次郎

婦人血塊 つきやくをしろ藥

家傳 専用商標

他藥を用ゐても効能なくば本劑を速に御服用あれ此藥は數年の血塊も胃腸子宮等は少しも痛めずして安々おろし升からしろと方の輕症は其夜に有ること請合也近年種々似寄の藥出來居候間能く御注意願上候
定價廿五錢五十錢一圓特製二圓切手一割增爲替銀座局

調劑元 東京麴町區有樂町二丁目二番地 江戸屋

女(りの三)

大陸の雪景



瑞西山中の一市タボスミッシーホルン

家庭整理の指導

當代第一流の女子教育家編著



家庭百科全書

全部五拾冊——毎月二回發行——第一巻二月創刊す

和装頗美本◉紙數二百五十頁◉石版彩色口繪一葉、挿畫十數個

▲定價一冊金四拾錢——郵税八錢

近時婦人教育の普及するや、女流の才學は一般に著しく進みたりと雖も、尚ほ之を日常家庭の上に施こすに臨み、輙もすれば實際に適せざるを憾むこと多し。是れ學校に在るの日には概ね理想の學修に止まるが故に、實際の應用に臨み、或ひは學ぶ所高尚に過るか、然らざれば未だ十分ならざるの憾ある所以なり。若しも家庭に教師ありて一々實際の問題に就て指導せんには、世の良妻賢母は言ふも更なり、未だ在學中の女流學生達の爲にも如何に裨益の多かるべきかは、敢て多言を須ゐざることながら、人ことに家庭に教師を聘するが如きは、得て望むべからず。是に於て本書は、最良なる家庭教師たる目的を以て編述發行し、敢て婦人教育の缺點を補はんと欲するなり。

發兌元 東京

女(ぬの二)

婦女必讀の大全書發行

去れば本書は全部を五十卷と爲し、毎月二卷づゝ、左の諸大家に請ひ、編を逐ふて發刊す。著者は皆な現代婦人教育界に第一流の諸名家にして、各家皆な多年の經驗に徵し、最も實際に適切なる事物を選み、文章は平易流暢を旨とし、之れを讀で趣味多く、記事は明細精確に之を實地に施して遺憾なきを期せらる。幸ひに世上の女流にして、各一本を家庭に備へられんには、恰も常に家庭教師を自家に聘し、日々に起る所の事物に對して、一々指導を受くるに異ならざる裨益あるべきなり。

第一編

新家庭訓

三輪田高等女學校長　三輪田眞佐子女史著

紙數二百五十頁
石版極彩口繪挿入
挿畫十數個

續刊

四季料理
宮中臣民兩流料理師範
大日本割烹學會々長
石井泰次郎君著

禮式と作法
女子高等師範學校教授
佐方鎭子女史著

家政要訣
女子高等師範學校教授
後閑菊野女史著

本町　博文館

名譽總裁博恭王妃經子殿下

會長侯爵夫人鍋島榮子

女(ぬの四)

大日本女學會

本會は女學通信教授に從事すること茲に拾參年此度第七回の學期を開きて新に會員を募集す●本會講義錄を女學講義と稱し其學科并に講義囑托講師左の如し

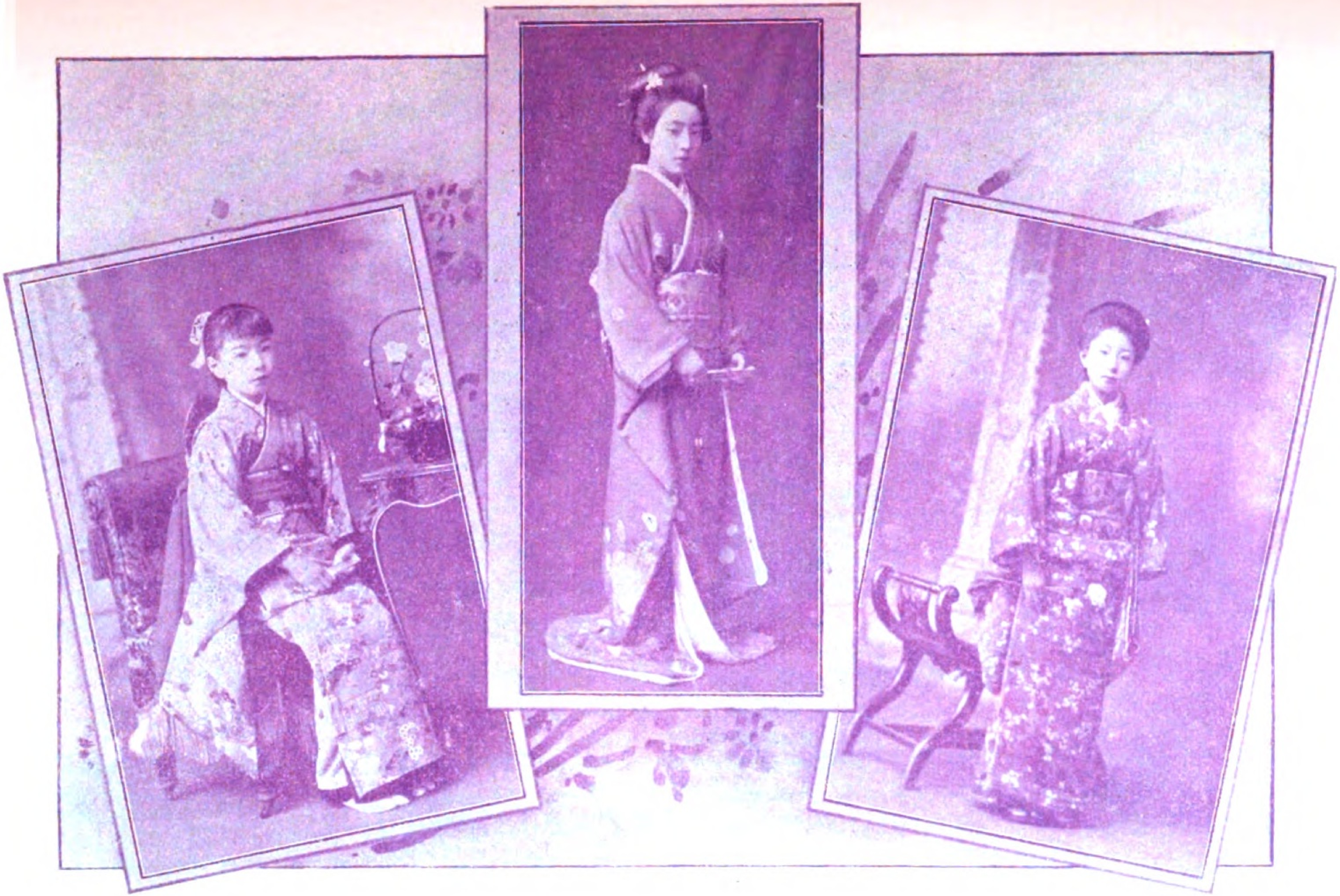
○修身(後閑菊野)○禮法(佐方鎭子)○國文(同人)○作文(今泉定介)○漢文(菊池晩香、桂湖邨)○歷史(大森文學士)○地理(熹田文學士)○地文(脇水理學士)○數學(藤野了祐)○博物(脇水理學士)○理化(同人)○生理衛生(三宅博士)○家事(後閑菊野)○家庭敎育(三輪田眞佐子)○割烹(石井泰次郎)○裁縫(渡邊辰五郎)○習字(坂正臣)○畫學(武村千佐子)○史傳(下田歌子)其他附錄數欄あり

學期終了は貳ヶ年にして一個月の紙數約百五十頁以上之に對する會費は僅かに一個月貳拾五錢にて別に入會金を要せず●講義は其文章極めて平易にて總かな附なれば高等小學を卒へざる人々にても講習することを得べし高等女學校に入學し難き事情ある女子達は此書の配布を受けて女の道を辨へられよ●詳細なる會則希望の向はハガキにて申込あれ直に進呈すべし(尙此外に高等科もあり入學を許す)

新學期開始會員募集

東京市麴町區下二番町三七 大日本女學會(電話番町一三三〇)

上杉伯の三令孃



女(ろの一)

女（その二）

謹賀新年

意匠登録

登録商標

玉おしろい

へちまのみづ

雲井

定價 瓶入 金貳拾錢 同筒入 金拾五錢 金六錢

この玉おしろい(雲井)の儀はへちまの水にてよく晒し玉に製したる白粉へ化粧料の藥品と龍腦麝香の芳しき香を加へ候故御顔の皮膚を淸く艶を出し其他御顔一切によろしく腫物を防ぎ候等實に類なき御重寶なるおしろいなり

御用法は常のおしろいの如く水にてときて御使用相成候得ば麗しく相付申候

調製所

八

東京市京橋區銀座參丁目

松澤八右衞門

(電話新橋特五百參拾四番)

▲賣捌は各處小間物店賣藥店にあり

女(ろの三)

特別割引券

添呈

迎春の祝意を表し例年の如く圖書雜誌特別割引券を呈し愛讀諸君平素の御眷顧に酬ひんとす

●圖書御注文の方は甲種●雜誌御注文の方は乙種を添へ期限中御申込被下度希上候

(甲種)

博文館發行

圖書特別割引券

(女學世界揭出)

●圖書御注文は此券を切取り御添附の事

●有効期限は明治四十年二月十日限り

●期限中は定價の壹割引を以て特賣仕候

●豫約募集中の圖書は豫約價の三分引とす

●館友は館友規定引の外尚圖書五分引豫約品二分引の事●總て前金の外無効とす

(乙種)

博文館發行

雜誌特別割引券

(女學世界揭出)

●雜誌御注文は此券を切取り御添付の事

●有効期限は明治四十年二月十日限り

●期限中一冊賣は定價の五分引●冊數に依り割引ある前金拂込は其金額の三分引とす

●館友は館友規定引の外割引せず

●本券は前金御注文の外は効用なし

●御申込の節は博文館小賣係宛のこと

◀自宅獨修通信教授▶

會頭 帝國大學教授法學博士 和田垣謙三
編輯主任 文學士 松平桃蹊
監學 數學院長 上野清
中學校長
外講師博士學士三十五名

普通教育 全科講義

▲廿四冊完結●毎號質問券あり●一ヶ月分六百頁●全部紙數七千二百頁●價一冊六十錢●六冊一圓六十錢●十二冊三圓廿四冊五圓八拾錢●郵税毎冊二錢宛本會へ直接又は各書店に就き必要の卷數を購讀あれ●會員として入會の諸氏郵券四錢御送付あれば規則書を呈す

(學科)
▲倫理▲教育▲論理▲國語▲漢文▲日本地理▲世界地理▲地文▲日本史▲西洋史▲東洋史▲代數▲平面幾何▲立體幾何▲平面三角▲微分▲積分▲解析▲球面三角▲物理▲化學▲動植鑛物▲生理▲解剖▲法制▲經濟▲外國語▲農業▲法學通論▲其他講演時事雜報

本會は當代に於て名聲嘖々たる人士に謀り本講義録を發刊し講師は經驗に富み學識に秀でたる博士學士教師等を以て之に當り材料の選擇は最新の學說に據り行文平易記事正確以て丁寧深切を旨とし一點の遺憾なからしめんことを期す
●特に本會は購讀者の便を計り講師諸氏の專攻學科を選定し左に列記の各科目を發行す

著者		書名	冊數	代價	小包
講師	松本小七郎	▲算術講義	完	八十錢	十錢
同	奥平浪太郎	▲代數學講義	完	壹圓	十錢
同	奥平浪太郎	▲平面幾何學講義	完	壹圓	十錢
同	奥平浪太郎	▲立體幾何學講義	完	壹圓	十錢
同	奥平浪太郎	▲三角法講義	完	壹圓	十錢
スミス	上野清補譯	▲新撰大代數講義	完	壹圓五十錢	十錢
數學院長	上野清	▲解析幾何學講義	完	壹圓五十錢	十錢
同	上野清	▲微分學講義	完	壹圓	十錢
同	上野清	▲積分學講義	完	壹圓五十錢	十錢
同	上野清校	▲球面三角法講義	完	壹圓五十錢	十錢
理學士	東海林	▲物理學講義	完	壹圓	十錢
同	杉谷佐五郎	▲化學講義	完	壹圓	十錢
同	廣中宗太	▲最新無機化學講義	完	六十錢	十錢
同	廣中宗太	▲最新有機化學講義	完	六十錢	十錢
工學士	影山穗作	▲測量術講義	完	壹圓廿錢	十錢
醫學士	庄司久	▲最新生理學講義	完	九十錢	十錢
同	庄司久	▲最新解剖學講義	完	九十錢	十錢
農學士	小倉延足	▲鑛物學講義	完	壹圓廿錢	十錢
	和田垣博士	▲法制講義	完	壹圓廿錢	十錢
法學士	和田垣博士	▲經濟學講義	完	壹圓廿錢	十錢
講師	鵜澤聰明	▲法學通論	完	壹圓五十錢	十錢
同	小澤政許	▲民法講義	完	壹圓九十錢	十錢
	林治一	▲日本文法講義	完	壹圓廿錢	十錢
農學士	大澤淺太郎	▲最新簡易貨川農業講話	完	九十錢	十錢
文學士	山岸辰三	▲三ヶ月修得普通文作新書	完	九十錢	十錢
研數學館		▲英語新獨修講義	完	七十錢	十錢
松平文學士		▲論理學講義	完	壹圓廿錢	十錢
大島文學士		▲倫理學講義	完	壹圓廿錢	十錢

東京神田區表神保町
(電話本局一七五三)

普通教育學會

近世受驗全書

●最新形●全卅六冊●
毎冊價十五錢宛●郵税二錢宛

●日本歷史全●日本地理全●西洋史上下●外國地理上中下●生理衛生學全●化學上下●地文學全●物理學上下●算術學全●動物學上下●植物學上下●鑛物學全●日本史年表上下●西洋史年表上下●東洋史年表上下●代數學上下●幾何學全●三角術全●作文法全●英文典全●國文典全●漢文典全●英作文及會話全●立體幾何學全

中學校、師範學校、高等學校、女學校、其他是等の學校に在學せらるゝ諸氏及び普通學を修めて以て之か試驗に應ぜられんとする準備の爲めに缺くべからざるは蓋し本書の外之あらざるべし本全書は斯道専門家の執筆に成りしものにて繁簡宜しきを得たる表解的に編成せられたるものなるも簡潔に過ぎて事實明斷を缺くが如き嫌なく文章は平易にして說明は親切を旨とし且つ攜帶至便の最新形にして紙本の堅牢紙質の佳良なるは勿論無二の低價世に流布する類書と混同せらるゝ勿れ

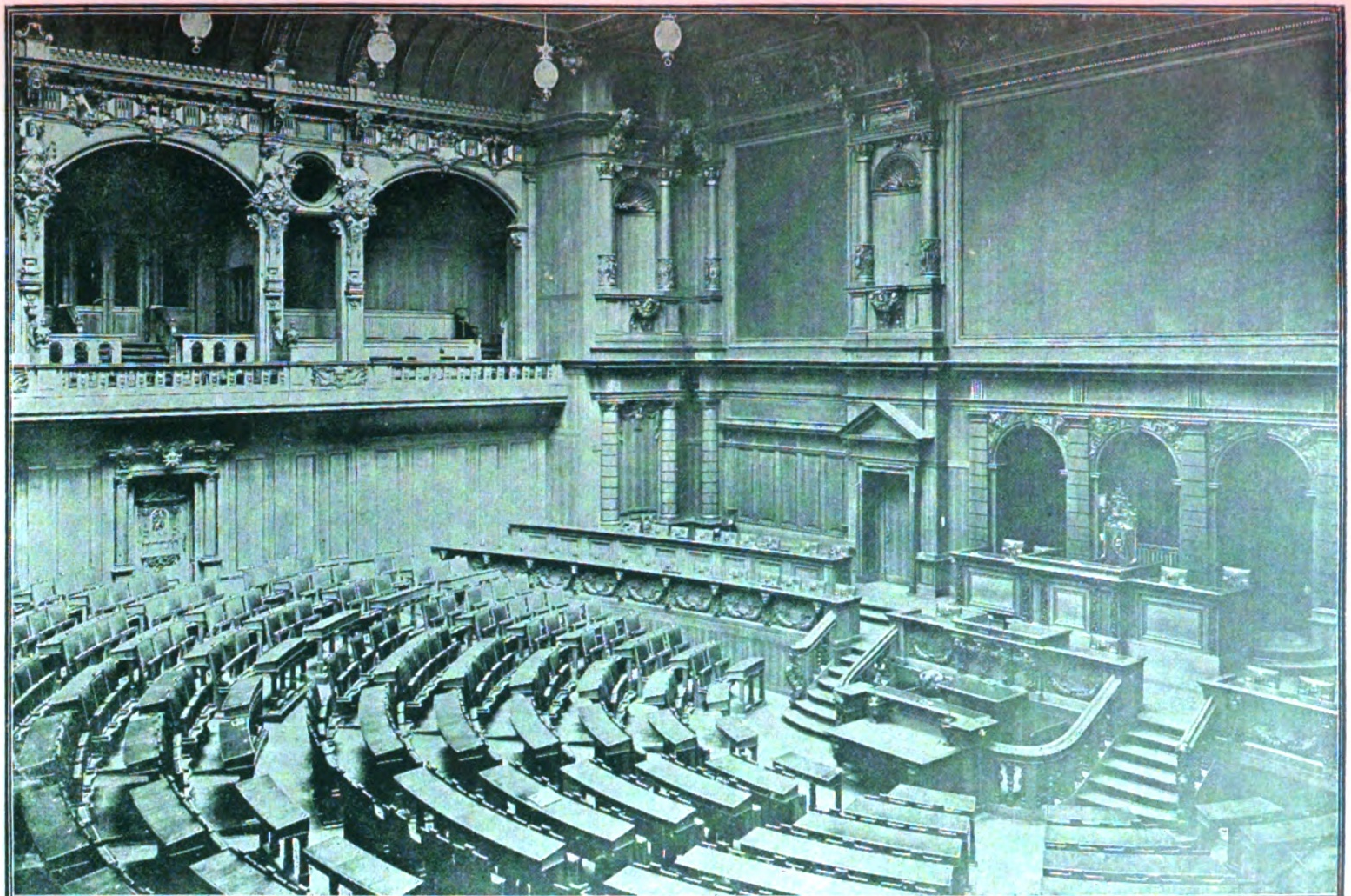
官立諸學校入學試驗問題答案

●卅九年度價五十錢●卅六年度價六十錢●卅八年度價五十錢●●卅七年度價六十錢●送本毎冊六錢宛

官立諸學校に於て施行せられたる毎年度試驗問題を蒐集し問題毎に各自専門諸先生の懇篤なる答案解釋を求め以て受驗者の好伴侶たらん事を期せり若し夫れ問題の正確なる答案解釋の懇切なるに至りては本書の右に出るものなきを確言す

東京神田表神保町
修學堂發兌
振替口座三二八

(四)の名な



佛國議院の議席

根治確證

わきが

新治療藥 ラピヨシン

本劑を塗擦すれば主成分は皮膚及び肉の組織に吸收せられ其組織にある毒素を潔淸し腺臭を逐滅し惡臭を根底より全滅せしむる作用を有する最近發見の特種の新劑にして如何程頑固劇烈の難症も甲價特別製を用ひよ速に變ぜず速に用ひて苦惱を脫せよ

必ず全治して決して再發或は他病に變ぜず

價七拾錢乙價壹圓卅錢甲價特製貳圓五拾錢

毛のはへる

原名ベグネス 毛髮生養液

Haarbegeness

定價壹圓卅錢特別製貳圓送料拾四錢本品は原名をベグネスと稱する現今最賞用せらるゝ有力なる最新液にして毛たはやしたき人く早く試みられよ●わけ毛落毛を止めはへぎわうすき人●まゆ毛●ひげを始め入こまあたりのはげ●あるべき所に毛なき人用ひよ毛髮增生す頭などにはげのあるのは見苦しき者也

價A印壹圓B印特製壹圓五拾錢送料十三錢

色の白くなる

化學製品 名ハンドコロン溶液

本劑は貴紳淑女粹士間に大高評を博し殊に愛用せらるる最新流行の秘方奇劑にして本劑を塗擦すれば主性分の力に依り皮膚は次第に新陳代謝をなし盛に皮膚を漂白するを以て全身次第に白色艷美となる男女交際上最も必用の品なりし

月やくをとほし

メリルビン此藥は子宮を痛めず如何ほど長き月經とまりも必ず下る二三月位のは壹劑も用ゆればすぐ下る二三ヶ月以上のとまり又は血塊には特製を用ひよ速に流經す本劑は効能極めて强烈なるも身體に害なくたやすく下る又月經不順よりおこる子宮血の道を全治し古血を一掃す價半劑六拾五錢壹劑壹圓貳拾錢特別製分貳劑參拾錢小包料拾錢

電話下谷二五三五

專賣 東京本郷湯島四丁目十四 オリエンタル藥舘

根治確證 新治療藥

梅毒

本劑は多年學理と實驗に依り發明發見の完全なる一種稀有の新劑にして忽ち全身の毒を大小便にとり如何なる劇烈のばい毒●そう毒●かさ●ふきでもの●よこね●かんそう●骨うづき其他如何なる惡性の梅毒も必根治す

輕症は半劑惡症重症も二劑用ゆれば奏效する世間種々雜多の無效なる驅黴藥の比に非ず藥價半劑八十五錢一劑一圓六十錢二劑三圓郵券代用一割增

らい病

新治療藥 ダービン

本劑は最近歐洲諸大家の最良藥と認めたる有力藥品の成劑にして何人にも容易に服藥し得る樣幹舘幾多の調劑にして本劑に優る者なし本劑の實驗に鑑み丸藥となしたる者にて其有效確實なる試に一劑分丈けも用ひ見よ必ず大效あり一劑廿日分三圓二劑四十日分五圓特別製九十日拾圓●郵券三錢送れ說明書進呈す

獨逸藥方 効驗一夜に顯る

りん病

新治療藥 キーロン

本劑は最新の文明的有力藥にして如何程頑固劇烈なる淋病もよく一夜にして輕快を覺え膿血速に止り痛を止め

輕きは一劑分重きは二劑分

本劑は內服すれば一種の化學的變化を起し强度の殺菌防腐液となりて便と共に排泄せられ自然の洗滌法となり淋菌を根底より驅逐し如何なる惡性の頑固慢性病も特製を用ひよ忽ち根治の目的を達す人に知られず居ながら文明的新治療を受るを得速に用ひて病根を斷絕し苦惱を脫せよ

日本一手發賣本舖

藥價一劑輕症用六十五錢二劑重症用一圓廿錢特製惡性頑固症用二圓卅錢

電話下谷二五三五

專賣 東京本郷湯島四丁目十四 オリエンタル藥舘

（その一）


最も愛すべき香料馥郁
石鹸
高評煉香油（水油代用品）
カスガオイル
紳士令嬢貴婦人用として最も上流社會に歡迎せらる 有名なる小間物化粧品店薬舗にて販賣す
發賣元 東京橋町 小川潮華園

●男女學生の福音●

▲英和對譯男女學生日記出版の嚆矢▼

桃潭　宮森麻太郎君
花亭　丹羽俊彦君
共著

英和對譯學生日記　花光月影

ランドゼイヤー

▲新刊▼

最新式製本
頗美本クロース
紙數三百餘頁
定價五拾五錢
郵稅六錢

目次

▲春の巻　男學生日記▼
▲夏の巻　女學生日記▼
▲秋の巻　苦學生日記▼
▲冬の巻　田舍女學生日記▼

最も容易くしてしかも愉快なる方法を以て**英作文に熟達**せんとする者は此の書を讀め!!本書は英文大家**宮森先生**多年英作文教授の結果英作文熟達の最良法は**英文日記**を書くにあるを知り丹羽花亭氏に謀り男女學生の日常遭遇すべき萬般の事項を集めて四季の日記を作り**和英對譯**して其の模範を示すものにして其の内容に至つては花亭氏が深刻健全の想と桃潭氏が**精緻穩健**の筆と相待つて或は狂瀾怒濤の壯を畫き或は鳴禽野花の愛をさゝやく。これたゞに**英文日記の模範**たるのみならず又以て**邦文日記**の**模範**とするに足る。加ふるに中澤。小林。岡野三畫伯の手になる六枚の**挿畫は錦上更**に**美花**を飾る満天下の男女學生幸に一本を座右に飾ることを吝むなかれ

▲文明の士女は青年の贈答品に此の種のものを以てす▼

發兌　東京市日本橋區本銀町三丁目　特電話本局百〇三番　**鐘美堂書店**

女(その五)

恭賀新年

大橋省吾

（商號）
東京堂書店（位置）東京神田區表神保町
文武堂書店（電話）本局 百二十三番 同長 二百四十八番
英學新報社（振替貯金口座）二百七十番

書籍雜誌 勉強販賣 東京堂書店

◎讀書家諸彦の御便利を計り新刊圖書雜誌は汎く蒐集陳列致置候間御來觀希上候
◎地方御同業者の取引は薄利を以て發送は非常の敏速に勉强致候間御注文希上候
◎書籍雜誌の委托一手販賣は獨特の擴張法を以て販路勉強致候間御申込被下度候
◎東京堂出版部（文武堂英學新報社）は擴張し良書續々出版可致候間御愛顧希上候

○見よ!! 新年號の大活躍を

ハガキ文學

第四卷第一號

定價金十錢 八冊七十五錢 本號に限り價十五錢
〜全國郵稅無料〜

要目

○畫伯ケリユーズ 木暮理太郎
○日本將來の文明 相馬御風
○はあーちやん 坂井犀水
○淺間の噴火 文學士 久保天隨
○獨唱 畑荷香
○音づれ 橋本春郊
○風たえぬ 文學士 尾上柴舟
○アルバムは如何なるものを買ふべき乎 太田三郎
○紅葉山人の年賀狀 鵜澤四丁
○新體詩 野口雨情
其他青年文士の懸賞文如山

口繪

○花神（石版極彩色）橋本邦助
○小羊（着色寫眞版）ケリユーズ
○繪葉書（ひつじ草）（石版極彩色）和田英作
○動物園（寫眞版）和田三造
○俗謠十二題（木版彩色刷）太田三郎
挿繪泰西名畫スケツチ等數十面

○見よ!! 大附錄 中澤弘光先生口紅

發行所 東京小石川 日本葉書會 發賣所 全國各書林

恭賀新年

博文館主　大橋新太郎
副館主　大橋進一

博文館編輯部　主幹　坪谷善四郎

巖谷小波
石坂橘樹
石橋思案
伊東祐穀
長谷川天溪
西村渚山
仁藤保治
鳥谷部春汀
沼田笠峯
太田善男
押川春浪
大竹竹舟
金子紫草
鹿野化骨
海賀變哲
武内桂舟
田山花袋

竹貫妻文
竹貫佳水
鷹野止水
武田賀川
内山幻堂
久留島武彦
松原岫雲
前田木城
遠藤鈴川
出野淺治
淺田江村
齋木菊雨
岸上質軒
木村小舟
神保荷月
鈴木西湖

(イロハ順)

博文館營業部　支配人　羽田福太郎

宮川大壽
上村恭三
堀野賢龍
田中六藏
愛敬利世
佐藤憲斌
關謹平
金子督太郎
谷俊三
松原濱之助
細野佐藏
玉井喜重郎
小峯正一
小林久四郎
菅五太郎
山本順治
中村慶次郎
高橋常吉
松澤義一

古賀豐策
兒玉幡太郎
有田利雄
荒井芳太郎
番塲宗八
權藤文雄
横田地巴
繁田郁藏
今井淳
今井玉三郎
福澤市太郎
永井泰
林彦之助
佐藤誠
小林長次郎
菊池金五郎

大野金太郎
山田靜三
杉山常次郎
青木傳四郎
覺張半四郎
富所三郎
藤井唯一
中村長
塚脇十三
飯塚市郎治
磯岡鶯郎
松木玉之助
松本勉治
廣瀬貞一
矢野千代松
神崎新四郎
早川多輔

女(その七)



女學世界

第七卷第壹號

一月一日發行

▲年　賀＝元旦より七日までに婦人は二十日頃までの間に親戚知己を尋ねて祝詞を交換し遠方には年賀狀を出し尤も親しき間柄には年玉を贈答す

▲寶　船＝もと大晦日の朝より元日朝までの間に吉夢を見んとする事なりしが今は初夢とて二日に之れを用ゆる事となれり

▲人　日＝七日の事なり此の日七種粥を炊きてお祝をなし門松を取りはづし心松となす、荊楚歳時記に七種粥を食ふ人は萬病なしと云へり

▲小豆粥＝小正月と云ひ十五日の早朝之れを食す雇人は十六日より藪入とて小使錢を貰ひて宿に還る

▲若　菜＝正月上の子の日早乙女など山野に若菜を摘むことにして宇多天皇の寛平頃より初まりしと云ふ

▲三　寶＝別に蓬萊とも云ふ海老＝熨斗、昆布、榧、橙、穗俵、搗栗などを載せて賀客に供して拜賀す

▲初日出＝元旦昧爽富士、給の島、二見ヶ浦など高嶺若くは見晴らしのよき所にて日輪の初光を拜す

▲惠方詣＝其の年の惠方に當る方角の神社に詣で一年の福運を祈る東京にては日枝、神田、龜戸、氷川等年によりて大に賑ふ惠方とは歲德神の位せる最上吉の方を云ふなりとぞ

▲初緣日＝新年初めての神佛祭にして男女共に參詣し家內の安穩を祈る信徒頗る多し

▲鷽かへ＝月の二十五日龜戸天滿宮にて木もて彫みたる鷽を參詣人の袖の中にて取り換へ禍を福に轉ずる神事なりこは太宰神社の舊例なりしが文政の頃此所に移せしとなん

▲寒　詣＝この月上旬小寒に入り三十日間若者白衣を着て產土神に詣でゝ水垢離を取る昔は裸詣なりしが今は禁ぜられて單衣を着腰に鈴を下げ夜間に之を行ふ

▲日　曜＝六日、十三日、廿日、廿七日、孝明天皇祭卅日、

天皇陛下と我が皇室

前駐日英國公使フレーザー夫人述

西暦紀元一千八百五十二年は日本國民に取りて、誠に紀念すべき年にぞある、何となれば殆んど古今東西の歴史にも傳ひ稀れなる中興の英主、日本皇帝陛下は實に此の年を以て呱々の第一聲を擧げさせ玉ひたればなり、而して提督ペルリが、其水師を率ゐて日本の表玄關なる浦賀に來り、桃源洞裡の春夢を貪りつゝある、日本國民の寢耳に警鐘を打ち込み、其長夜の眠りを破りたるも亦實に此年にぞある、爾來猛然として覺醒の途に就きたる日本人は、躍進又躍進、清國を破り露國を斃し、世界の一大强國として、今上皇帝陛下の御稜威は、今や天の涯より地の角に到るまで、光被せざる隈もあらざる程なり。

熟ら日本皇帝陛下が御踐祚ありし以來の卅九年間の御宇を按じ奉つるに、其勳榮の偉大なるに於て、亦其波瀾の饒き點に於て、今日までの世界の帝王の、何人も未だ經驗せざる所なるのみならず、亦夢にだも企て及ぶ能はざる所にして、譬へば皇天特に、御一人を選び奉つり、魔術的蒸溜器を用ゐて、既往世界歴史の幾千年の

出來事を、斯の帝の御一生に壓搾したらんが如し。

實にや五十年の昔、京都なる九重の宮殿奥深く、生ひ立たせ玉ひ、日常の御遊戯に於かせられても、動もすれば、玩具など打ちつけ玉ひて多くの侍臣を苦しめ玉ひたる頑是なき神孫が僅に三十八年の短日月の間に、模範的の立憲君主として世界國民の賞讃の的とならせられんとは、何人も想ひ及ばざる所なるのみならず、恐らくは、皇帝陛下御自身に於かせられても、首を回らして五十年の昔に想到あらせらるゝに於ては、多少の感慨を禁じ敢えさせられざるべし、いでや吾が短き滯在の間に知り得たる、皇帝陛下及び陛下を中心とせる周圍につき記し奉つらん。

神格を有し給ふ君主

日本皇帝陛下は、日本國民に依りて全く神格を有し玉ふと信せらる、而して其神格たるや、基督教の謂ふ所の全智全能の神にあらざるも、少くも人類を遙に隔たりたる靈體として尊崇せられ玉ふ、想ふに日本國民以下の外國人にして、日本人の斯の信條に悉く賛成する能はざる人と雖も、陛下を以て殆んど超人間的に莊重崇高の一大人格にして、且つ英武聰明に於て倫を絶つ明君となす事に躊躇せざるべし。

蓋し日本皇帝陛下が不世出の英主なるは、既に世界列國の人の耳目にあり、今更ら事新しく敷張を要せざれども、謹んで陛下の御治世三十年間の御事蹟を通觀し奉つるに、陛下の御性格に際立ちて存する二個の特色を看過す能はざるを思ふ、亓は陛下が鐵の如き鞏固なる意思を有せらるゝこと及び、聰明てふ點に於て、千古を曠うし玉ふの慨ある事にぞある。

陛下が意志の鞏固に渉らせらるゝことは、僅に十五歳の御弱齡を以て、御即位あり、時に內憂外患交も臻

り、國步艱難を極め、上下臣民の危懼動搖は其頂點に達したるの時、普通人にありては、椀白盛りの前後の區別さへつかざるべき御弱齡を以て毫しも狐疑逡巡の風なく、毅然又泰然として、徐に國家の進路を開拓せられたるに徴すべし、殊に登極後間もなく、五條の御誓文を發せられ、立憲政體の基礎を定めさせられ、萬民の自由と權利とを確保し玉ひたるは、未だ世界の歷史に其例を見ざる所なるが、然るにても幾多歐米の先進國が、幾百年の長日月、血を流し骨を曝し、やうやくにして贏ち得たる立憲政治の恩澤に、血一滴の代價も拂はずに、浴し得る日本人こそ誠に羨むに堪えたる多幸の國民とこそ云ふべけれ。

陛下が極めて聰明に渡らせ玉ふとは、維新の際、人材を廣く各藩より取り玉ひ、更に異材を民間より拔擢せられ、各の其能を盡さしめ玉ひたるにて知らるべし、殊に幕政王政交叉の際、其進退去就を誤りし幕府の遺臣をも棄て玉はざりし御盛德は、眞に帝王の襟度として百世の後迄嘆美せらるゝの價値ありとこそ云ふべけれ。

數年前の事なるが、日本に滯在中余は普ねく內外臣僚に賜はりたる宮中の御宴に列席するの光榮を辱うしたり、當日席に余と向ひ合せに座したる氣品高き白髮の老貴族あり、是れぞ前將軍德川慶喜公にぞありける、余は好奇にも、陛下は如何の御態度を以て、三十年前進退を誤まり一時朝敵となりし、此の老翁に對し玉ふかを注視したるに、陛下は龍顏に微笑を湛えさせ玉ひ、些の隔りなく極めて打解けさせられ、丁寧に御會釋ありて御盃を賜りたるを見て、今更ながら、寬仁大度の御盛德の程こそ有難けれと感佩し奉つりたり。

日本天皇の乾德は斯の如く盛んにして、常に神聖なる感化を四民の上に垂れさせられつゝあるが、其御稜威は亦たいみじき者の限りなり、日露戰爭中、滿洲の野に、將た旅順堅壘の下に戰ひつゝありし日本兵士は、皆夢寐の間にも尙ほ且つ、陛下を忘るゝ能はずして其精神を躍らしめつゝ、彼等の愛國心は、全く天皇陛下に集中せり、亦以て彼等が如何に陛下に對する信仰の厚きかを推して想すべし、大山、東鄉、乃木、黑木の諸名

將が戰地より發する戰勝の公報には、必ず『天皇陛下の御稜威に依らずんば安んぞ斯の如き大勝を得んや』の文句あり、彼等はあらゆる勳績功勞を擧げて悉く陛下の御稜威に歸し奉つるなり、君主神聖の事實は日本天皇に於て始めて見るを得べしとこそ云ふべけれ。

兩陛下の盛德

日本天皇陛下の乾德の盛んなることは、誠に上述の如くなるが、また皇后陛下の淑德の高きは、流石に五千萬國民の國母たるに耻じさせ玉はず、日本皇后陛下の御婚嫁は紀元千八百六十八年(西曆)天皇十六歲皇后十八歲の時に座まし、折柄内外多事、國歩甚だ艱難なりしが、皇后には、能く少年皇帝を輔佐し奉つり、終に國運今日の隆昌を致させ玉ひたり。

皇后陛下の坤德の盛んなることは、今更ら事々しく述べ奉つるも管なれど、特に其御性格に於て、著しく目立ちて見えさせ玉ふ御長所は、意志の鞏固に渡らせらるゝこと、優雅にして且つ仁愛の德に富ませ玉ふことなるが、殊に驚くべき程賢明にして且つ非常なる天才を有させ玉ふ事は、其和歌の才に於て、優に大詩人の域に迫らせ玉ふにて知らるべし。

日本天皇、皇后兩陛下は、多年特に日本女子の敎育に力を注がせ玉ひ、幾百千年の間日本女子に向つて鎖されたる、女子の活動すべき舞臺の門戸を開放されたり、故に日本の女子は今日皆西歐日新の智識を授けられ、文明の恩澤に浴しつゝあるが、就中皇后陛下には、女子の敎育に大御心を注がせ玉ひ、時々華族女學校に行啓あらせられ、學事を勸奬せられ玉ふこと非常なるが、併し四内親王殿下の御敎育は、帝室に傳はりたる古來の式典、禮儀、國風の和歌、古典等に重きを置かせ玉ひ、西洋の科學等には左程重きを置かせ玉はざるやに漏れ承りたり。

御精勵と御仁慈

日本皇帝陛下の御精勵は、流石に興國の君主だけに、何人も驚嘆し奉つる所なり、陛下は平常必ず午前五時に御寢殿を出でさせられ、直ちに其日の日課の準備に取り懸らせ玉ふ、日曜日は陛下に取りて唯一の安息日にして、陛下は此一日に於て、一週間の勞を忘れさせ玉ふが常なれど、日露開戰以來は、此唯一の安息日さへ犧牲に供せられ潮の如く沓至する國務に鞅掌あらせられたり、日露戰爭中にありて、陛下の御精勵は傍人の想像に絶したり、戰爭中陛下は、午前九時までに、其日の日課なる萬般の國務を御親裁あり、終れば直ちに内外臣僚に賜はるべき拜謁は始まり、拜謁は二時間にして終り、夫れより山の如く堆積せる諸文書の御檢閲を終らせられ、更に軍事參議官と重要なる軍事上の機務を協議せられ、或は内閣大臣と緊要なる内外政務につき審議せらるゝ等、其御繁忙到底常人の堪え得る所にあらざる程なりしが、斯くの如き御繁務の中に御座して尙は且つ、寸時も出征軍人の勞苦を忘れさせ玉はず、『如何にして出征軍人の勞苦を慰むべき乎』は、陛下が日露戰爭中を通じて、最も叡慮を惱まされたる問題にして、之が爲めに宮中の供御は減せられ、更に滿洲の寒氣の酷烈を思召めされては、出征軍人の勞苦を御軫念あり、戰爭の終るまで、宮中の煖爐を全廢せられたるやに漏れ承はりぬ、日本軍人が陛下の爲めには死を見ること歸するが如くなるは、決して怪しむに足らざるを知るべし。

日本皇帝陛下の御仁德は、斯の如く深厚なるが、御仁德てふ點に於て、皇后陛下は決して天皇陛下に讓らせ玉はず、戰爭中慰問使を遣はされ或は物品を賜はり、一日も軍隊の慰問を怠らせ玉はざりし等の事は云はずもがなるが就中戰爭中皇后陛下の最も力を致させ玉ひたるは、病傷兵の救恤にぞある、日露戰爭中名譽の負傷の爲めに、手足を失ひ不具となりたる日本軍人は、朝夕皇后陛下恩賜の義手足を推し戴きては、隨喜の涙に咽

びつゝあり。

両陛下が仁慈の徳に富ませ玉ひ下民を恤へさせ玉ふこと既に斯の如くなれば、隨つて内親王方の、斯の徳に富ませ玉ふことも亦非常なり、今其一端を記るし奉つらんに、四内親王殿下には、日露戰爭中は、御國を憂へさせ玉ふの餘り、寢食をも安らかに取らしめ玉はず、殊に戰死者及び其が遺族の上には、一層御心を注がしめ玉ひ、特に御殿内には忠魂堂を設け、將校より下士卒に到るまで、戰死者の英魂は、一人も洩れなく玆に祀つらしめ玉ひて、雪の朝風の夕と雖も、一度も御參拜を怠らせ給ひしことなく、畏くも篠突く許りの大風にも親しく、傘取らせ玉ひて、御后庭の畑に大根、人參、芋の子、茄子等其時々の物を御手づから採らせ玉ひ、之を神前に捧げらるゝ等平和克復後に至るまで一日も怠らせ玉はざりき、又忠魂錄を御調製あらせられ、御日課の御閑暇には、之に將校より下士卒に到るまで、戰死者の原籍名簿より戰死の月日戰死の場所從前の隊名等詳細に書き取らしめ玉ひ、夜の更くるをも厭はせられず、剩へ戰爭中に御召物の御新調を全廢し玉ひて其料を戰死者遺族に下し賜はりたる程なりき、日本兵の强きは、決して故なきにあらずと云ふべし。

理想的伉儷

近世稀有の明君にして、且つ理想的伉儷の模範を萬民に垂れさせ玉ひたるヴヱクトリア女皇の宣ひたる、『伉儷一致は啻に一家和合の基なるのみならず、亦實に國家富强の基礎なり』との事實は亦、日本皇帝陛下の宮庭に於て之を見るを得べし、日本皇帝陛下は、常に萬民の上に神聖なる感化を垂れさせられつゝある傍ら、亦理想的伉儷に於て、好個の模範を萬民に示めされつゝあり、實にヴヱクトリア女皇の宣ひたるが如く、日本が今日の興隆は、両陛下を中心とせる其の宮庭に於ける春風和氣の裡より胚胎し來りたるものにあらざるなから

んや、さるにても卅有餘年の間、内外極めて多事の間に處し、或る場合には天皇陛下の慰藉者となり、或る場合には忠實なる相談相手となり、陛下をして古今稀れに見る明君たらしめし、皇后陛下の御婦德こそ、世界人類の仰望措く能はざるものなれ。

日本天皇陛下が、日々常人には到底堪へ能はざる程の繁務に鞅掌あらせ玉ふことは、前述の如くなるが、斯の繁忙より生ずる天皇陛下一日の勞苦を慰め奉つるは、實に皇后陛下にぞある。

朝は未明より、夜は時として深更まで終日目の廻はる程の一日の勤務を終らせ玉へば、天皇陛下には、皇后陛下の御書齋に出御ありて兩陛下睦じく御談話を交換あらせ玉ふが常なり、此時間こそ天皇陛下に取りて、無上の安息時間なれ、此時皇后陛下には陛下獨得の機智を用ひさせられ、新刊書籍、繪畫、寫眞帖など目を樂しますべきあらゆる世界の珍らしき品々を集め置かれ、天皇陛下をして其國政上の御憂慮と、一日の勞苦より忘れしめ、兼ねて御心を樂しませ參らするなり、此安息時間には侍臣等は悉く退けさせられ、たゞ御二方にて、此時御側に奉侍するを許さるゝは、本年十七歳のヨルクシャイアー種のテリエル（洋犬の名）孃のみなるが、此テリエル孃につきては、普ねく世に知られたる面白き逸話あり、其は例の御安息時間に、テリエルのみ兩陛下の御側に奉侍したるが心なきテリエルは何の憚る所もなく、皇后陛下の御膝の上に駈け登り、睦まじく語らせ玉ふ兩陛下の御談話に良や暫らく耳を澄まし居りしが、其儘陛下の御膝を枕として心地よげに華胥の境に入りたり、軈て陛下には座を起たせられんとしたるを、天皇陛下は目敏く其を樹はし玉ひ、口早に『其處を動く勿れ、テリエルの眠りを覺まさんは心なき業なり』と仰せられたれば、皇后陛下には、已むなくテリエルの目覺むるまで數時間、其罪なき夢を守るを餘儀なくせられたりとなん。（倫敦隔週評論所載胡蝶生譯）

家庭未來記

△西洋心醉の餘波としてそれ何會それ何俱樂部と頻りに外出するゝとになりたるが爲めに自然裁縫杯をなすの餘暇はなきことになり衣服の新調は勿論破綻の繕に至る迄悉く仕立屋に托することになり其結果學校にても裁縫科を廢することに至り別に仕立職とならんとする者の爲めに裁縫專門學校設立せらるゝに至る又仕立屋も昔の如く看板を掛けて我家に頼み來るものを待つ樣では間に合はぬ處より裁縫道具及び小切れを携へて下駄や靴直しの如く日々觸れ歩くことになれり。

△又段々地價の騰貴する處より臺所として要する比較的廣き坪數を省節することになり食物は飯より魚獸肉野菜等に至る迄毎日賣り歩るくものより買ふことになる此商賣人は大なる車附の屋臺に竈、釜、鍋等一切の道具を備へ毎朝未明より其得意々々を廻ることになり銘々各家にて煮燒することは殆ど稀れなるに至る又酒等臨時に入用のものは水道管の如くメートル付にて冷熱口にて自在に各家に供給せらるゝとになる又一層進みたる方法ありて飯、菜其他總て水道管の如く一仕出屋より管にて送る仕掛をなし飯、肉、野菜等各出口を別にし栓を開けは何時にても入用丈の食物を得らるゝとになる

△毎朝毎夜蒲團の出し入れ面倒なるより之れを床と疊との間に器械仕掛にて仕舞ふことにし心棒の如き坐敷の隅にあるものを右に廻はせば忽ち蒲團出で自然に敷け朝は之を左に廻はす時は忽ち仕舞はれ其仕舞はれる際に一の仕掛けに依り塵埃を掃ひ去り其入れ場に入るゝことになる坐敷の掃除も簡便なる空氣の仕掛けにてすることになり箒等一切不用となる。

△又之れと同時に呉服屋にて男女老幼の出來合服を賣り出すことになり段々人氣を損じ終には望外れ大なるか又は鮮少なるものゝ外は皆出來服を求むるに至るべき傾向顯然たるに至る。

△從來刻み煙草は專ら婦人の喫煙にのみ供せられたるが婦人達は次第にハイカラとなり紙卷を用ゆることになりたる結果煙草屋にても刻莨を賣るは內地の僻遠町村の外は殆どなきに至る。

△空中飛行器械完成し一人乘あり二人乘あり各勝手に且迅速に目的地に飛行するを得ることになり全然鳥の如く空中にて行き違ひざま御早ふ今日は抔と挨拶す始の間は空中に人と人の衝突ありたるも追々其危險なきに至る。

△除雨劑を發明するものありて之を塗たる帽外套を着する時は大雨中にも更らに濡れざることになる又電氣の應用尤も擴張して夜中も殆ど晝に異ならざるに至る

△發明應用の結果宇宙の原素を採用すること益多きを加ふるに至りたる爲め四時循環の順序を紊り地震續起し人間は畏怖を抱き暗に世界終滅說の現實とならんことを危疑するものあるに至る　(覗水漁夫記)

寸言

△平和の要素

家庭の平和は金三分規律三分愛情三分によつて保有せらる、若し三者其一を缺けば恰も鼎の一足を缺きたる如く内容の波瀾を免れず彼の設令手鍋を提げてもと深山の奥の共棲帶の謠の如きは全く生活の意義を無視したる沒常識の謬理に外ならず。

△黄金以外

黄金で買はれぬ快樂はあるまいかとは英國の一富豪が凡ての快樂を爲し盡したる果に嘆じたる述懐なり、これ頗る玩味すべき一般社會わけても貧者の福音にあらずや。

△生活難

岡山孤兒院に收容せる孤兒の數は一昨年中四百名に滿たざりしが戰爭後遽に增加し目下千二百名の多きに達して一ヶ月の經費一萬圓を要するに至れり。

△一夫一婦の天則

歐洲を平均して男子百人に對する女子の數百〇一、又日本にては男子百〇二に對する女子百人の比例なれば全世界を通じて一夫一婦は動かす可からざる天則なり。

△文章の秘訣

何人にも解り易く書けとは福澤翁の文章觀にて自己の著述をなす場合には必ず無學なる婦女子等に原稿を朗讀して聽せ、よく解りましたとの證明を得たる後初めて此を公にしたるとか、然り、文章の奥義は全く這個に外ならず。

△深憂に價せず

私の子女は中學校まで出しましたが日用の手紙一本滿足に書けませんとは父兄が學校先生に對する嫌味の小言なり、これ教ふる人の罪に非ず、又習ふ者の罪にもあらず、唯だ一時代の然らしめたる潮流に外ならず。

△平凡なる訓戒

人の言に誤謬ありとは輕々しく反對すべからず、其人には一種の見解ありて而なすが故也と味ある言葉なり。

△人間萬事

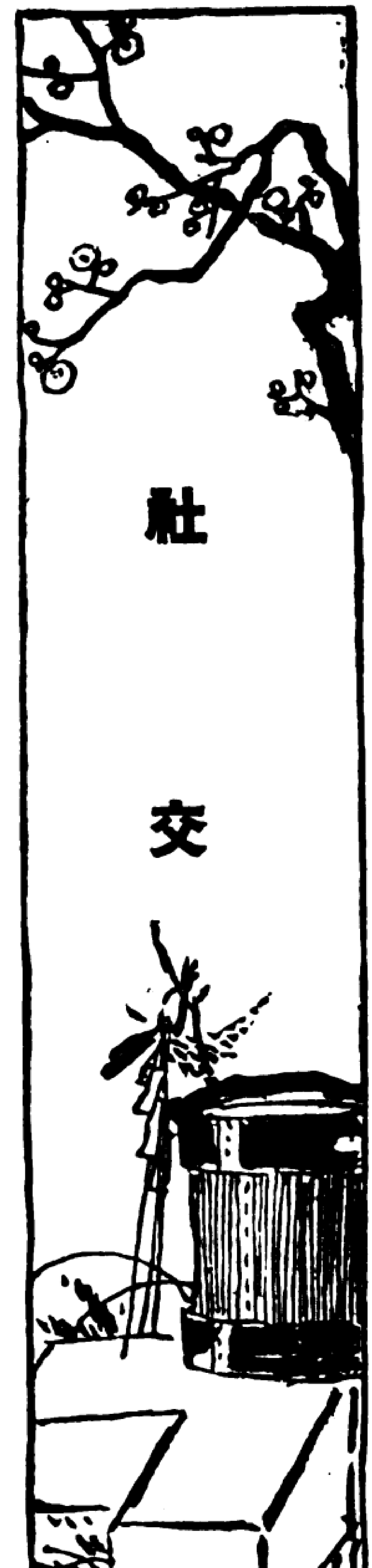
日常の談話にて得たる事柄は學問の一として記錄簿に止むべし而して無益の談話は記臆すべからず、是れ腦漿を濫費せしめざる用意なり。

△妙な豫言者

懷手をして人に對する女は必ず其夫を剋して晩年を不幸に終ると心理學者は語れり。

△外人の觀たる挿花法

英國の一貴婦人曰く日本の活花は第一に自然の花を枉げて人工化し、加之線の配合のみ主として色の配合を無視したるものなり。



新男爵夫人の良人觀幷に社交觀

中村鈴子

似たもの夫婦とは、なか〳〵面白い諺で御座います。身を中央政府に置かれないでも、大臣以上の勢力を有つて居られ、常に快刀亂麻を裁るの觀ありと噂さるゝ後藤南滿洲鐵道總裁の令夫人（夫人は故九州探題安場保和男の息女也）は、多く讀み多く聞いて常識を養ひ、且つ實踐躬行せらるゝ方ですが、話は成可く出して貰ひたくないとの事でしたが有益なる談話を記者一人の專有にするのも惜しい事と存じまして。

▲良人の性格

良人は評判の性急で御座いますから、出立等の際も前日に知らせると云ふ事は無く、任地から歸京する時も、東京の宅から任地へ參る時も、足元から鳥が立つやうなので、サアこれから立たうとか、今晩出掛けやうとかの不意打を喰はせる事が多いので御座います。大抵一箇年に二回位は往復致し、私も其都度必ず同行して任地と東京と半々に住つて居るやうなものですから、急遽の旅立には慣れまして、始終旅支度に油斷致しません。併し豫報のないのにも困るものでして、大方明日あたりの出立であらうと推定致し、大急ぎで親戚や知己へ暇乞に廻り、悉皆仕度を致して居りますと、

『左樣さネエ未だ何時立つか判らんよ』などゝ來客に話して、落着いて居りますので、私は無駄に忙しい思ひを致す時もあるのですが、公用の都合ですから、無理もない次第と存じます。旅の荷物は私よりも良人の方嵩高になりますので、東京を立つ時は冬服でも任地へ着くと夏服に代へねばなりませず、夏冬の背廣、フロツク、禮服は是非揃へて持ち歩く次第ですから、チヨツト厄介で御座います。性急な良人は、食事の際に種種の用事を思ひ出すと見えまして、サアツ彼處へ電話を掛けろ、何處へもと申します。これは御飯の給仕に命ずるのでは無く、書生に言ひ傳へろと云ふ積りなのですけれども、勢ひ給仕のボーイが用を辨せずに居られず、幾度も電話を掛けに玄關へ參るので、何時も給仕人が食卓の側に居なくなつて了ふのです。それで近頃は食卓の眞上の天井から鈴を垂下して、食べながら自分で之を押し、掛りの者を呼ぶことに致しました。大きな事柄に當つては隨分よく恕す方ですが、家内の小さい事は非常に嚴格で、癇癪持ですから、私は如何なる事を命せられても、其場では唯々と極神妙な態度で服從致し、少し申したい事は後日時機を見計らふ樣に致して居ります。

▲任地の情態

臺灣へ赴任した當時、今より六年ほど前には餘程不便でもありました上に、諸商人が眞面目でありませんでした。これは其頃の居留人に獨身の方が多く、金の遣ひ方が不規則であつた故で、獨身の方は少收入でも、風呂錢が無くて困るほど思ひ切つた買物をされるものですから、商人の方も自然相場を亂調子に致したのでせう。近來家庭を持たるゝ方が多くなるに隨ひ、高い罐詰などは賣れ行きが惡いと云ふ具合で、商人も正直に勉强する樣になりました。臺灣婦人の集會で御座いますか、これは皆樣が内地同樣に盡力されて居りますので……。私は不束でもあり、家の用務に追はれるものですから、濟まぬ〳〵と存じ乍ら、六年間一切御斷り致して居りました所、昨年から餘儀なく顏出し致さねばならぬ場合と爲り、二三の會へ出ますやうになり

ました。外國領事の奥様方は時々御出で下さいますが、私が語學が善く出來ません爲めに、如何位失禮致すか知れません。

▲讀書と會話

通譯人を媒として外國人と對話致しますのは、相互に靴を隔てゝ痒きを掻く感じがあるかと存じます。何か際立つた用談なら宜しう御座いますが唯だ親愛を取り交す談話には、心の底からの愛嬌が必要なので、餘程社交に慣れた通譯人でないと、雙方の意思が疏通致しません。愛嬌言葉には何國でも一種の特風がありまして、此方で程よく申した積りの言葉も、通譯人の取次樣で厭に空々しく聞えたりする場合が無いとも言へません。私は啞の癖になまじ耳が少しばかり聞えるものですから、苦しさ殘念さが一層で、嗚呼今少し言葉を練習して置けば宜かつたと感するので御座います。縦令片言でも自身で應答致す方が、先方では餘程嬉しく感ぜられるさうですから、少しでも御出來になる方は、斯樣な言葉では笑はれるだらうなどゝ心配せず、臆面なく談話されて充分に感情を通じ合はれる方が温かい交際を結ばるゝ事と存じます。御承知の通り、會

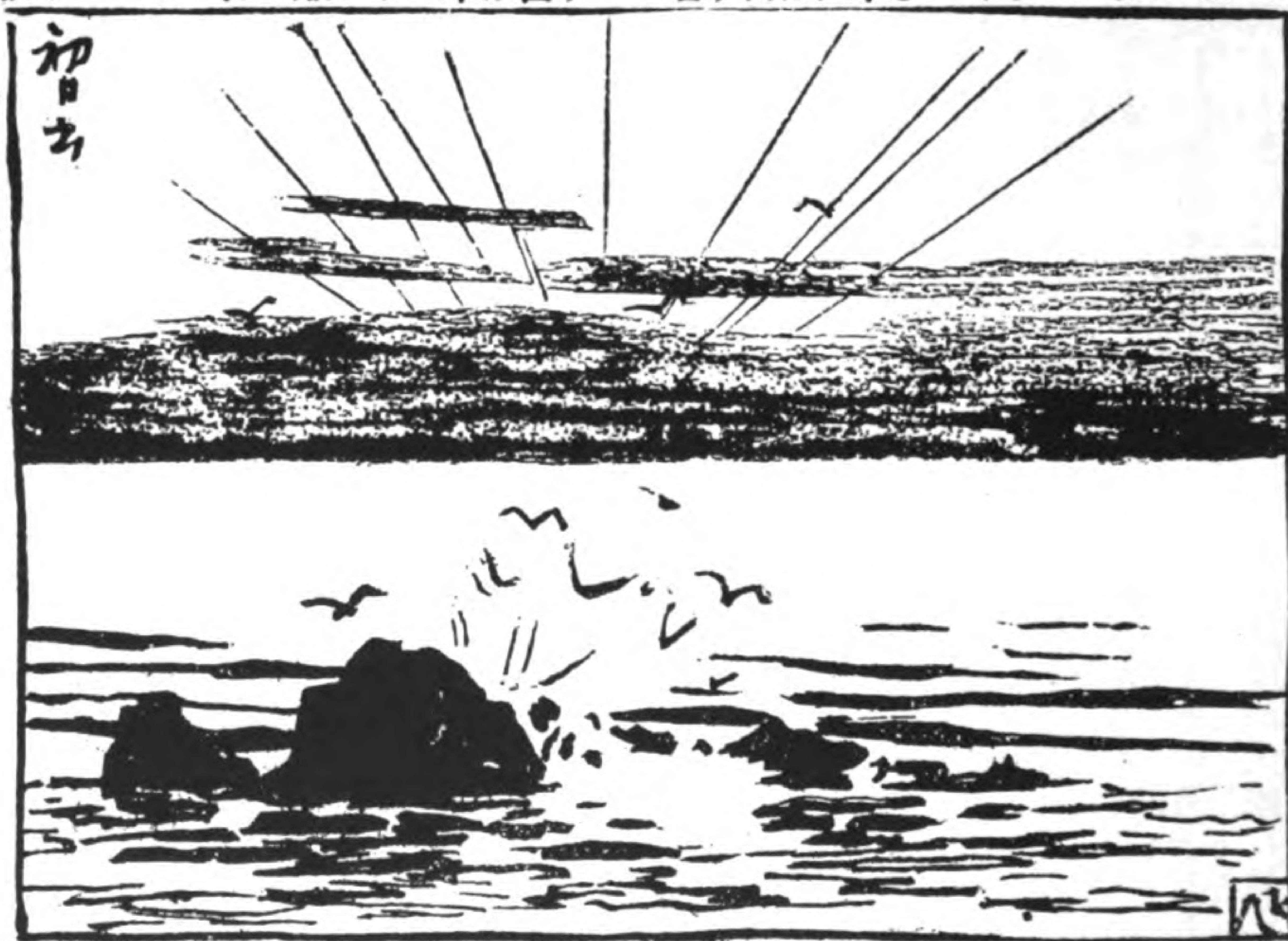


話の練習は、書物を讀むよりも外國人と多く話すのが一番なので、書物の方を多く讀んだ人の談話はチヨツトした言葉も廻り諄くつてサラリと致さぬさうです。而して會話は少し途絶へて居ると直に忘れ、外國に永く居られた方でも、歸朝後暫く外國人と交際しないとサツパリ舌が廻らなくなるさうですから、何でも數多く對話するに越した事は無いでせう。それで書物の方は見なくても宜いかと申すと、外國人は割合に多趣味、博識で談話が多方面に渉りますから、此方でも一から十まで恍けた顏も出來ない場合がありまして、切て昔から有名な英雄とか、著作家とか、美術家とかの名ぐらゐは、頭腦に入れて置かないと、場合に依りましては、隨分困ることも御座いませうから、少しは修養して置かなければならず、却々骨の折れる次第で御座います。

▲質問に對する困難

シエキスピアとかトルストイぐらゐは、英國や獨逸の百姓の婆さんでも喋々するさうですから、萬事推して知らるゝ事と存じます。斯樣な智識は學校教育で養成されるよりも、家庭の御茶話しの間に養成されるので、子供の内から自然耳馴て了ひます。畢竟遺傳の結果でありませう。我國でも追々此風が興りますが、從來は家庭の談話も單調に傾いておりましたから、男女とも此點に就ては先迂遠な方でした。夫で外國人と對話する際、質問の受太刀にまごついて閉口する場合が多いのです。先方では決して困らせる積りでは無い、少しでも多く聞いて修養したい精神から、根掘り葉掘り尋ねるのが、うつかりして居る身に取つては、詰問を受けるやうに感じられるのです。未だ〳〵外國の名高い地名や人名を知らぬ位は可いのですが、自國の歷史の質問に答へるのにチツヨトまごつきます。それもズツト昔しの事なら可いが、目下の事に差支へた私の膝栗毛が御座います。任地から歸りの船中で、或外國婦人から、貴國の軍港は何處々々で方角は如何と尋ねられたのです。知れ切つた軍港の名でさへ唐突に問はれて、チヨツト腹の中で復習しなければ、アヤフヤになつた

位、況して方角と申しては愈々窮して了ひましたが、先方は戰勝國の婦人に對する御世辭であつたらうに、平生うつかりして居る爲めに、背に汗する思ひを致したことを悔ひました。さうしてまた或外國婦人から、宮城は丸ノ内の何番目の大路であるか、海軍省は幾つ目の路に當るかなど〻尋ねられましたが、私は宮城は丸ノ内に在ると平生簡單に呑み込んで居たばかりですから、此答がチョット出來兼ねたのです。定めし皇城の位置さへ精細に知らぬ冷淡な日本婦人と思はれましたらう。斯樣な苦みは、男子方にも偶



には御在りになるさうで、或る御方が壇の浦を通航する時、連れの外國人にチョット指さして彼處が壇の浦と言つたので、後から〳〵質問を受けて閉口されたのです。一體この壇の浦は何方もよく閉口なさる有名な關所だと云ふ事は、御承知でありながら、ツイ御愛想に彼處に見えるのが壇の浦ですと口を辷らされた所、サアそれから質問の緒が開けて、古戰場の由來、源平のいきさつ、其の頃の天皇の御事、西暦何年に當ること、其の近邊の地理などを始めとして、菜種から蕪までの穿鑿を受け、殆ど返答に窮されたのです。外國人と接せねばならぬ婦人は私

共のやうに啞でも無論困りますが、言葉がスラ〳〵と出來る爲めに藪から蛇を出しても困る。隨分面倒なものですけれども、御互樣に成るべく心懸けておいた方がよいと思ひます。此の修養には、如何しても多くの人に接し、多くの事を聞くのが捷徑であらうと考へます。

▲談話の當り障り

我國の婦人は、御互に人前で餘り口を開かぬ風に仕込まれて參つた上に、良人も細君が自分と一緒に來客と談話するのを嫌はれる方が多いのですから、見聞の狹いのは尤もの次第で御座いませう。それですから、外國人と交際が困難なばかりでなく、吾々同志の交際にも、餘程困難があると存じます。極懇意な間柄の者が、差し向ひ位で話す際は、思ひ切つたとも言ひ合つて宜しう御座いますが、多勢の集會となると、餘り自分の考を述べ立てゝは、生意氣と思ふ人がありはせぬかと懸念して差控へますし、旅行の談話を持ち出したところで、餘り旅行せぬ人の居るときには、如何だと思つて控へ、小兒敎育談も小供のない人には、面白くなし、芝居や着物の談話でも、向不向がありはせぬか、斯樣に心配して見ると、先づ多勢の方の感情を害さぬには、沈默して居るか、話せば天氣の好惡ぐらゐな文句かで、何の興味もなく、また得るところもなく、心配して氣取つて閉會を待つやうなことが隨分あり勝ちで御座いましよう。外國婦人の幸福なことには、前申し上げたやうな家庭に育つて見聞の廣い生立である上に嫁しても、良人と共に客に接し慣れて居り、社交に列する位の生活の程度では、旅行も澤山致して居る、各方面の書物も、眼を通して居る、音樂、繪畫、演劇に就ても、趣味が豐富であると云ふ具合ですから、其集會の談話が相互に融和して、安々と面白く參るのは當然で御座いませう。又見聞の狹い支那婦人が案外社交に慣れて見えるのは、家の中で大幅をして頭を抑えられて居ないので、人中へ出ておち〳〵致さぬからでせう。支那の男子でも、西洋人と立ち列ぶと、日本人より態度が大體に見えるさうですが、是等は幾分か大

國に育つた御蔭で御座いませう。其代り支那婦人が寄り集まると日本婦人よりも愼重を缺くの嫌ひあるやうに思ひます。日本の婦人は厳重な抑壓の下に育つたから、支那婦人よりもおしなべて要心深く行儀作法もしとやかの樣におもひます。此美しい婦德に社交の花を粧のふは、各自の修養も肝要でせうが一つは男子方の導きに頼つて、容易く出來るであらうと存じます。

▲子女教育に就ての感

自分の方向さへ判らぬ位ですから、子供の躾方の一定し難いのも當然で御座います。私は十四歳の男兒と十二歳の女子とを有つて居りますが、男兒は兎も角、女子の前途を考へると隨分苦勞になつて參ります。連れ添ふ夫の事業や立場によつては折角の準備も畫餅に屬さぬとも限りません。紳士に連れ添ふても何樣にか體面を保てるだけの教育を與へて置いて、質素な人に添ふた場合に炭薪の儉約が出來ない者になるやら、臺所一方に仕込んだ爲めに、貴婦人となつたとき耻をかく樣な者になるやら、是れは薩張り判りません。縱令一旦定めた身分でも、其夫の轉變で如何に變ずるかも知れないでせう。斯樣に考へた日には、全然雲を攫むやうなものですが、兎に角常識を修養させ、身體も心も忠實に働くことに慣して置けば、變に處して狼狽へぬであらうと存じますから、唯今の中に勉めて家事を手傳はせ、自分は我慢して手を束ね居り、成るべく子供を追ひ使はうと存ずるのです。併し前申し上げた通り旅掛けの親なので、子供は東京宅の老人に預けてありますから、側に居ない時は、兎角緩み勝で困ります。

私は小供にも宅に居らるゝ書生にも此注意を厳しく申すので『世が文明に進むほど、各自の事業が複雜になるから、世と共に進むには心ばかりで無く、身體を忠實に動かさねばなりません。頭腦へ多く詰め込むばかりで、身體の動かないのは、第一健康も保てないし、實際の役に少しも立ちません。何事にもぶしようは、男女に限らず人間の屑で、本當の文明社會に立つ人とは爲れませんよ。』と、斯樣に始終忠告して居るのです。

▲子供の讀物に就て

變に處して狼狽せぬ氣象を子供に與へるには、無論倫理上の教育が肝腎で、節操堅固に仕込むとが第一たることは申す迄もありませんが、年頃になつた子女を無暗に壓制して讀物の範圍までも狹め、小說類は一切見せぬと云ふ躾方は如何なものかと存じます。小說などを如何ほど嚴禁したとて、隱れて讀まぬとも限りませんし、見せても或程度までは差支なからうと考へます。

私は今少し子供が大きくなつたら、自分が一度目を通して大概なものは讀ませやうと存じて居るので、小說中の人物に就て、汝が若し斯樣な場合に臨んだならば、如何樣に決心し如何樣に處置するかと質問して見やうと存じます。餘り一本道を踏まして置くと、他日複雜な境遇に處して、逆せ上るやうな沒常識の御坊樣、御孃樣となりはせぬかと案じられますから、私は小說を讀ませるのも世態人情の表裏を觀察せしむる一方便かと考へて居ります。

▲自分の生ひ立ち

私の育ちます時分は、女學校が不自由で、殊に父の役柄の都合もあり、地方へばかり參つて居ましたから、尙更困りましたが、父は此方には熱心な人でしたので、宅へ教師を迎へ知己の令孃を集めて、私と共に英語を習はせたりなど致して呉れました。東京へ參つてからもチョットの間外國教師に就きましたけれども、早く此家へ嫁した上に大病に罹り、引續き神經衰弱となつて記臆力がとんと無くなり、形なしに忘れて了ひました。書見は一切廢して運動しろと、良人に嚴しく申されましたので、一生懸命家事を働きました御蔭で回復は致しましたが、何樣しても昔の健かな腦になりません。以前は各府縣の知事、代議士、政黨員其他名士の御名前ぐらゐは記臆致しましたが、近來は腦の宜くない爲め一度遇ふた方を忘れるとが御座いまして、素志に戻り、甚だ心苦しいので御座います。

▲結婚に就ての決心

親戚知己に御嫁に行かうと云ふ方があると、下らぬ老婆心と存じながら、チョット御注意申し上げたくな

るのは、理想通りの家庭を作ることの困難なのであります。才氣があつてズン／＼立身する良人を持てば、妻の責任もズン／＼複雜と爲り、隨分骨の折れるもので、場合によりては、面倒なる事故も生じますから、單調な生活でも、平和で安氣な方が幸福だと歎息するやうになるかも知れず。また單調な生活であると、何時までも不如意でグズ／＼に終るのが情なくなるかも知れません。併し連れ添ふ良人の性質に依つて、强ち功名富貴から煩悶を起すとも限りません。單調が必ず安氣とも定められませず、其性質も境遇上如何に變化するかも判りません。家庭の幸不幸は、決して岡目で批評されるものでは無く、夫婦相互の間に複雜な事情が籠つて居るから、雙方に同情すべき點が必ずあるだらうと思ひます。



隨分世間には緣は異なものと感せらるゝ不釣合の細君が、幸福な家庭を作つてるのもあり、缺點のない奧樣が冷遇される不思議も珍らしくはありません。是等を研究するには單だ容貌や性質ばかりで無く、心理的作用を研究せねばなりますまい。女の方から考へると、單だ男子が我儘のやうですが、元來男子は女と全然性情が異つて居て、女は愛が生命で

すが、男子は事業が生命で、愛は附屬物と申しても宜いでせう。父親は子供に成功を望み、母親は子供に優しい氣立を求めるのを見ても判ります。幸福な家庭を以て羨まるゝ西洋でさへ、本當の夫婦の幸福は新婚旅行の間であると聞きましたから、日本のやうに露骨で無いだけで、矢張り理想通りにして居る家庭は極く少なからうと想像されます。斯樣申しますと、お若い方方は女の運命を果敢ないものゝ樣に思はれるでせうが決心一つで縱令如何なる煩悶に出遇ふても難關を切り拔け雨降つて地固まる幸福を得られる場合が澤山あるやうです。結婚する際、只々行末渝らぬ夫婦の幸福のみを想像して樂むよりも、變動に處し之を切り拔ける力を養成することに心を用ひ樂む方が眞の幸福を得る道かと存じます。此の決心が無いと、少しばかりの煩悶に氣を落して、自ら幸福を擲つやうになり易いのです。

▲洋行歸り

永らく洋行して歸られた男子は、婦人を鄭重に取り扱かふ風習に染みて居ますから、其の當座は細君に對する仕向方が以前と異つて優しいでせうが、日本男子の地金は容易に失せるものでは無く、一二年經つ中には矢張洋行前の風になられます。畢竟東洋の地金にハイカラの鍍金して歸られたのですから、直に剝げるのは道理ですよ。斯樣な男子の妻たる人が、良人の西洋風を歡迎し、幸福な家庭の女王となつた嬉しさに夢中になつて、ハイカラ風を吹かして居ると、良人は何時の間にか地金を出して、嗜好も變化して居るので、すとんと失望の淵に落ちることがあらうと存じます。それですから、此の地金と云ふことは、始終用心して居なければなりますまい。

▲鋭利な婦人

英雄豪傑の裏面に案外缺點の見ゆるのと同じで、誰も尊敬するやうな鋭利な婦人に却つて拔目のあるのは、餘り注目されて缺點を見出される故もありませう、平凡で下らないやうな細君が、案外巧く幸福の鍵を握り、鋭利で遣手な細君が悲境に沈む事のあるのは矢張

り斯様な加減があるのか知れません兎に角婦人は常識を養ふのが最も必要で、見るに付け聞くに付け、これを自分の頭脳の中で溶解し、落ち着いて修養するに限ると存じます。

▲糟糠の妻

男女に限らず、共に順境に居るに適する者と、共に逆境に居るに適した者とあるやうで御座いますね糟糠の妻が往々堂



より蹴落される口惜しき消息も、夫たる者の冷酷なばかりで無く、此邊の具合が餘程あらうかと存じます。況して事業を生命とする男子が、一朝榮達を得れば、空腹を凌いだ握飯ばかりで滿足の出來ぬのは當然の次第と考へなければなりません。それで婦人が出來るだけ此不幸を免れやうと致すには、良人の地位の上るに

連れて、自分の智識の程度を良人と平均させるのが肝腎でせう。それには書物も成るべく博く讀み、人にも多く接して修養しなければならず、良人が榮達しても新一本の儉約主義を執るのは、妻たる者の美德に違ひありませんが、新一本の儉約に換へられぬ愛嬌や交際法の必要が起つて參るので、妻たる者の天職も實に複雜なもので御座います。

▲同情と器械的

見聞を廣くして常識を修養すると、總ての同情が解し得らるゝ事と存じます。第一良人の事業、勞苦、これに依つて性情が漸々變化するのを見ることが出來、隨つて其變化する性情に對して同情することが出來ます。例へば良人が妙にソッ氣なく爲つたのは、彼の事業に心を奪はれて居るから家族的趣味にまで心が及ばぬのであらうと解し、良人が此頃無暗にジレるのは彼の事業が思はしく行かぬ故であらうと解し得られるから、無益な怨恨も起らなく爲ります。而して良人の立場に依つては、新聞の重要な記事、知己より來る手紙、出入の客などに油斷なく眼を配つて居ますと、大抵は良人の仕事や意思が判るもので、良人が書齋に居てアレを持つて來いと言へば、品物の名を言はなくても、大方何が入用なのであらうと察し、良人が應接室でアレをと言へば、何々に相違ないと察し、時と場合に依つて自然判りますから、敏活に手助けが出來ます。新聞紙を見ます時にも豫め良人に必要の點を注意して切拔いて置けば、忙しい良人の爲に何の位便利か知れません。單だ器械的に立働くよりも、一體の心となつて手助け致したなら良人の感情が餘程善からうと存じます。又舅姑などに對しても、只管器械的に服從するより、自分が老人の心持になり變つて、忙しい時の優々話、諄々世話燒も、閑暇で困らるゝ老人方には、道理な事と同情して仕へますれば、苦痛なく圓滿を保ち得らるゝでありませう。

▲同鄕人に對する注意

暫く東京住ひを致して居ると、知らず／＼鄕里の訛は脫けて、東京化して了ふものですが、出たての同鄕

人に接した際には、勉めて元の國言葉に歸つて談話するのが宜しいと存じます。些細な事ですが、先方では餘程感情が違いませう。昔の友達で今は身分の違ふ者に對しては、尚更此注意が大切で御座います。古い友達に向つては、階級の離を切り拂つて、昔の儘の交際をするが正當と存じます。

▲文明に伴ふ軟弱

一家の勢運が進んであかぬけ行くのは、實に喜ばしい現象ですが、これに伴ふ軟弱はまた恐ろしいものであります。裸體で冷飯を食べ、成功をあせつて居る間は、勇氣の盛なものですが、志を達して萬事整頓するときは、最早軟弱の病魔が押し寄せて居ります。これは誰も心付いては居ますが、立場の上から自然の勢ひで文明式に化さぬ次第には參りません。但しこれを防ぐには、細君が昔の勸儉を忘れず、文明風の中に蠻勇の家風を保存する心掛が大切で御座いませう。

男女の學生

米國では大學でも中學でも、一の學校へ男女の學生が一緒に通つて居ります。それで男女間の交際が如何にも自由の樣に見えますが實際それは窮窟なものです。我國の男女學生は、歡留多會などの際に、禮を忘れて手を摑み合つたり、肩を叩いたりする事がまたあつて席を亂す樣な事がありますが、米國では彼樣な行跡は絶えて見ません。男子が女子の前で上衣を脫ぎシヤツを現はすさへ、失禮としてある位で、何の弊害も無からうと思はれますが、其一擧一動一言一句に精細な注意を拂ふこと、實に驚くべきものです。總て男女間の對話は、身體に關する事を避けるので、胃が惡いとか、腸の工合が如何したとか、汗が出たとか云ふことは決して言はないのです、畢竟肉體に關す話が野鄙に流れ、終に厭な感情を惹き起すのを防いだのでせう。（某女史）



婦人文藝勃興の新氣運

元祿姐さん

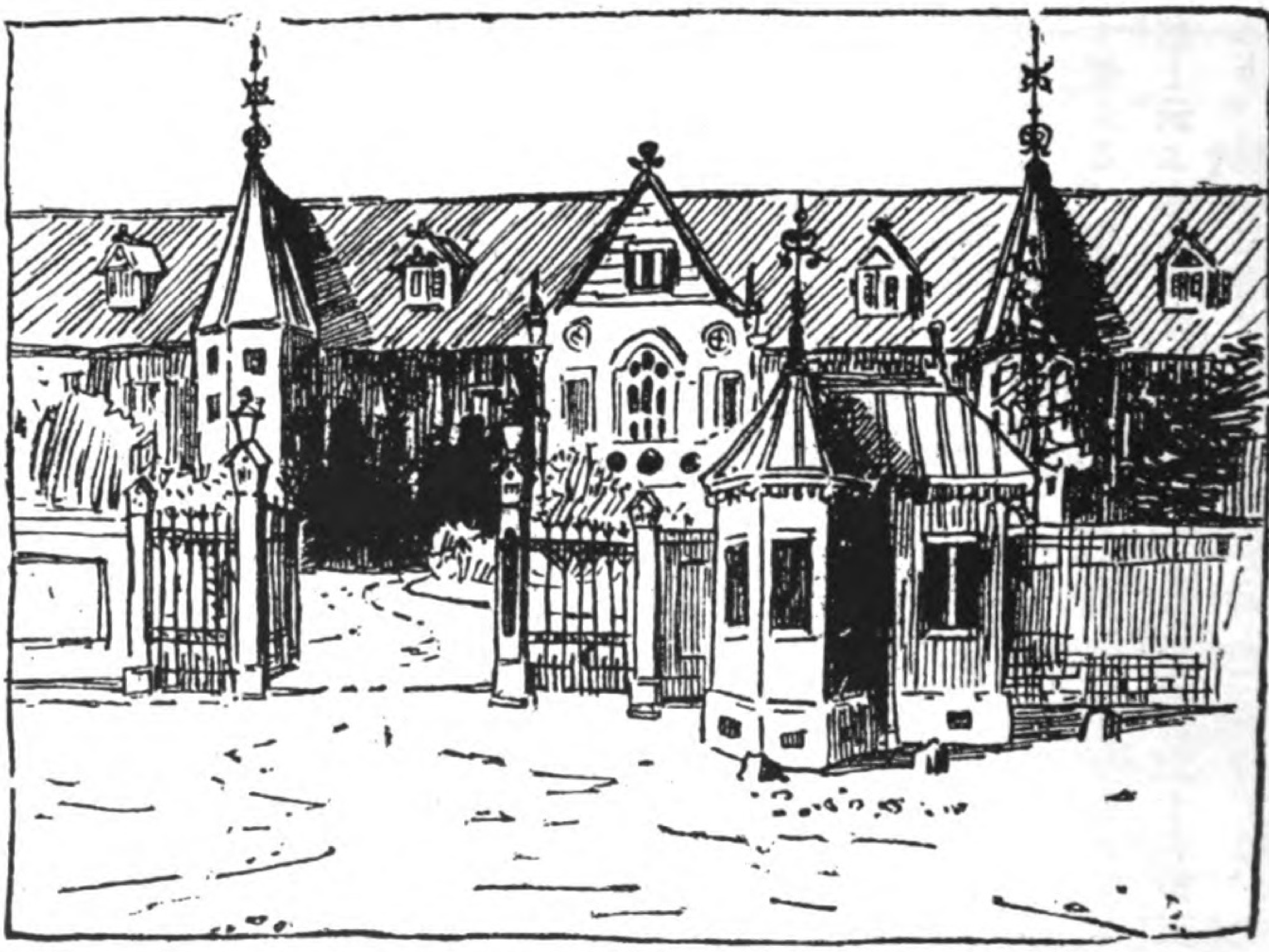
◎敢て告白す

女子も人間である、人間である以上には、何の道人間である處の、男子の行つて居る丈の事は婦人でも行つて見度い、鳶の者が突つ掛け下駄の傳法肌、大工左官木挽き井戸掘り、其れは生理上女子の體力では到底出來難い事は別としても、其れすら歐米諸國の爲に婦人の地位も高く、隨つて婦人の職業の盛んな處にあつては、鐵道の工夫技師、建築師受負師、總べて男子の行つてる程の處へは何處迄も手を延ばして、隨分と巾幗の身を以て六尺の有髯士をして顏色無からしむる底の、際どい活劇をすら演じられる事あるは、間々私共の耳にする處である。

◎去るを況して

黄表紙の一二册も覗けば其れで宜い事にして、御自分では至極目出度う構へさせられて、天晴天才氣取りの近松御坐れ西鶴御坐れ、沙翁のゲーテのと、惜しや青春の男盛りを、詩や文等に憂き身を窶して、金文字入りの西洋綴り、淡茶樺色オリーブ淺綠、扨ても美しう一閑張りの机近く置き排べては、態とらしう筆噛み捨てながら、身構へ宜しくあつてか弱げに青い吐息をほ

つとつく。然ればこそ斯かる仁を青二歳と申上ぐるか知らねど、惡くすると、羅綺にも得堪えまじき蒲柳の飽く迄弱々しく神經質の面貌、血の氣少なく生つ白きを見えにして、突拍子の利己主義の、何でも無い時にほろりと涙を染ませる。有り難い事には、社會は案外未だ寛大で餘裕があるから大丈夫五十年、死ねばとて生くればとて、爲せば爲す可き、其れよりもつともつと重大な必要な大切な事業の幾らでもある世の中に、斯くて若い花の血潮を徒らに散らして仕舞ふ人等をも



學習院女子部

流石に人がましう尊敬を拂つて、相當に珍重がつて、饑ゑもさせず。

◎其れだものを

其れで無くてさへ、女子は虚榮心の強い者だの見え坊のと、毎度男方の御厄介に預かつて居る處へ持つて來て、女は宜しく涙多かれ婦人にして涙無きは花の香氣無きが如く鳥の歌はざるが如く、甚だ飽き足らぬ心地のせらるゝ、寧しろ婦人としては半文の價値も無い者である、唯女は泣け〳〵閑があつたら泣いて居れ、と始終中這麼御註文を頂戴して居る位、今更御念にや

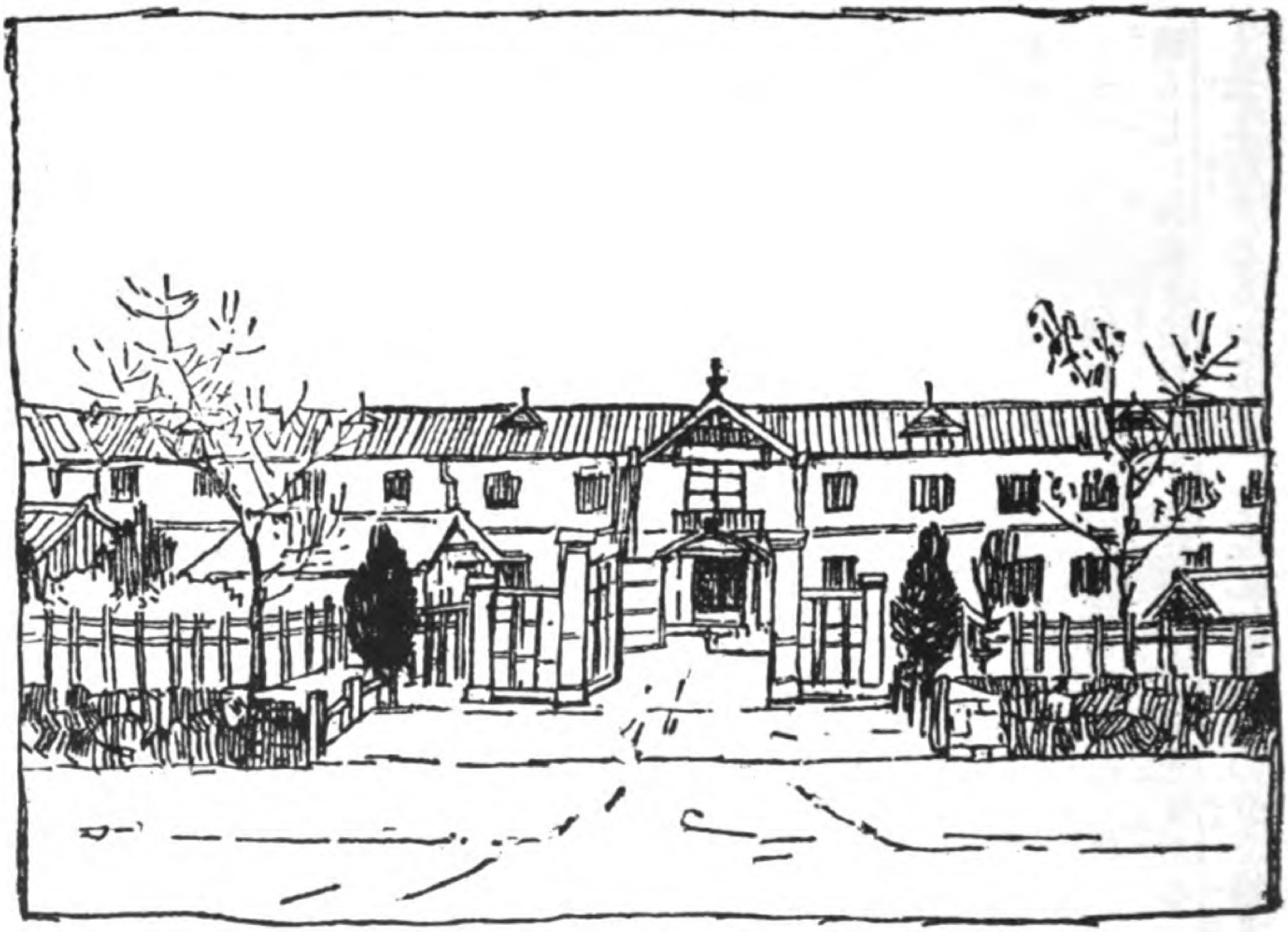
及ぶまい。女は先天的涙脆い者である。自體婦人は感情に趨り易い動物である。弱き者は女だと云ふ事も一昨日ちやんと相場の定つて居る處。だから、婦人の身の撰擧場裡に跳ね廻つたり、冷たい學理を說いたりして、男子を對手に時には口角泡を飛ばして議論するよりは教育ある婦人の職業としても女子自身の趣味を高尙にする爲めにも、文藝は最も女子に適當して居ると云ふ事も、又自ら定評のある處。と云つて自分の爲に恥かしながら、唐辛子戴く時より外に極りの惡い程滅多に涙の飜されぬものは、何方道女子としても、文藝に趣味を持つにしても、資格に於て既に缺けてある筈ではあるが、時には前にも申した樣な優しい男方の御感にも預からうと云ふ果報、御好みとあらば婦人專賣の涙、先づ以て幾らでも飜して御覽に入れる。自分にも理由が分らねど星を見ては哀れになる。菫を見ては悲しくなる。戀も解する。愛も覺える。煩悶もする。懊惱もある。何か知らぬが理想と云ふものには人並に憧憬もする。其處で例のがほろり。思ひに痩せてと云ふ見えで溜め息細う、態とらしうせずとも女は之れだから有り難い。

第一婦人特性の虛榮心が承知して從順しくして居らぬ、運能くば一世の才媛と歌はれても見度い、お色の青白い弱々しい男方の成さる事なら女でも一つ行つて見度いとなる、即ち斯うなる。

◎這麽順序で

女子教育の勃興に連れて、恐ろしく婦人文藝の發達をも促して來た。天皇も出でまさぬみ戰爭に、君なんで死に給ふ事があるものか等と歌つて、將に遠征せんとする骨肉を送つたと云ふ女詩人の表はれた等はまだまだ。去る折早稻田派の文士連が催しにかゝる文藝協會の會塲、坪内逍遙博士一代の心血を濺いで書いた歌劇常闇を演じて大喝采を博せし女神、沙翁が傑作「マーチャントオブベニス」法廷の塲に出演して、觀覽者をして驚嘆せしめしポオシヤ姫の侍女。若し夫れ和强學堂女生徒三十名が天籟の妙香を以て錦上花を添えしと云ふに至つては、文藝會中の文藝會、至理の夜光、

金中の紫磨、實に意外の成功であつたと云ふ事である若し夫れ況んや、歌舞技座邊りの樂屋內、花電氣燦として輝く姿見の前、文士俳優と打ち交りつゝ生暖き空氣を脂粉の香氣艶かしう、緋襦珍の羽織裏するりと披げて脇開け洩れてはさつと雲の如き肉體美、分、寸、柳腰小波打つて進步輕う、微笑の名花鮮明なのを見れば、人元より木石にあらず之れは寧しろ文藝以上、妙技眞に迫つて氣の弱い連中は直ぐに死んで仕舞ふであらう、されぱこそ婦人文藝なるかなとつくゞゝ嘆息された人があつたと云ふ事である。


第一高等女學校

其れかあらぬか、終に身自ら進んで藝術の爲めに、梨園界に投じて仕舞つたと云ふ大膽な、熱心な女天才も其の中にはあつたと云ふ事である。

近くは目白臺なる女子大學校內に行はれた文藝會、不幸にして我れ等微賤の身拜觀の榮を辱うする事が出來なかつたけれど、惠に賢くも　內親王四柱の殿下を始め奉り、各皇族並びに各宮妃殿下の御臺臨を仰いだと云ふ程であるから、定めて盛大な事であつたらう

と思はれる。況して成瀬校長が文藝に對する多年の抱負、着々其の緒について進歩の跡が著しいと云へば、該校女生徒に及ぼせし感化は蓋し莫大なるものであつたらしいと存じます。

◎されば にや

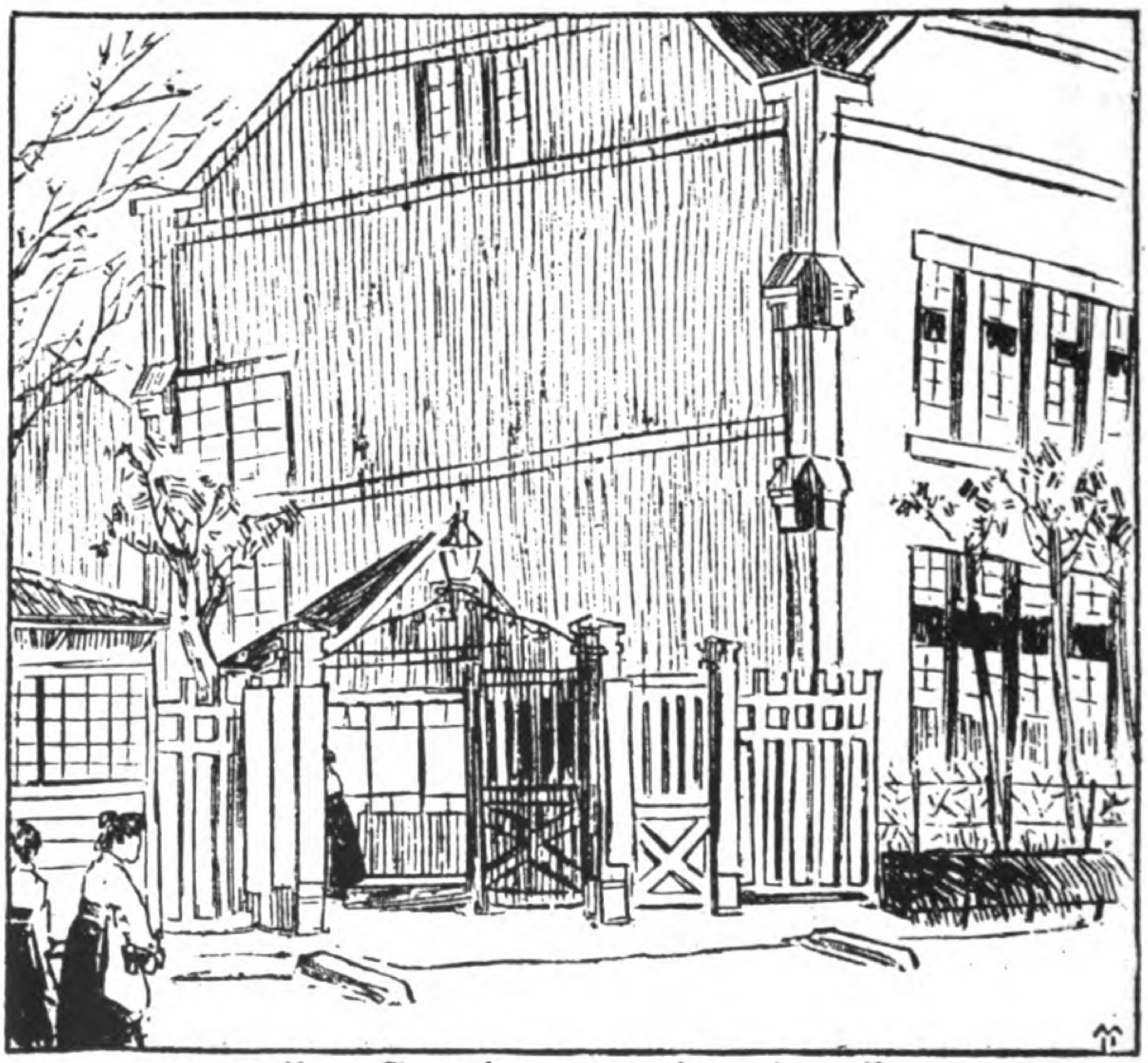
近頃、女子に限らず一般社會の人士の文藝に趣味を持つ樣になつた事は、實に夥しいものである。往昔は河原者と賤しむで人間の仲間にも入れ無かつた俳優すら、今は眞正の美しい名譽ある藝術家として崇拜するのみならず、文學者自ら率先して演劇改良に力を盡さるゝ程である。甚だしきは俳優の鑑札を迄受けて、前の文學者の理想劇は現に明治座の花となつて、社會公衆の爲めに文藝思想の向上を促して居られると云ふ事である。六つかしい理屈は私は知らぬけれど、然る私立大學生が源氏節改良の爲め、斷然其の最愛の妻を去つて迄も斯道の犧牲になられたと云ふと、近頃同日の美談某博士の如きは家の内に素晴らしい舞臺を設けて熱心に子弟を訓育して居られると云ふ程であるから、其の善事たると美事たると元より我れ〳〵の問ふ處にあらず。況んや世の名高い學者先生方は更にも云はず大切な子女の教育を預かる教育家すらも、乃至は音樂會活人畫會、總べて文藝に關する催しには賛成して居らつしやると云へば、斯して世は愈々太平なる可く國家の爲め、青年男女前途の爲め甚だ賀す可き風潮で御座いませう。

◎可笑しきは

之れも文藝勃興の兆か、或る女性は自分の投書した文章が、或る雜誌に掲載されたのを見て嬉しさの餘り氣絕迄したと云ふ。もつと罪の深いのになると、自分の作つた和歌が運能くも一等に當撰して居つたのを見て、其の和歌の掲載されてある雜誌を、終日手元一寸も離さず、夜は夜すがら玉の柔肌暖う添ひ寢のお伽を命じられたと云ふ話しもある。之れも一人、明星一派の歌調に妙を得て居る女學生、學業半ばにして去つて美的半生涯の光榮あるページに筆を染めつゝあると云ふ。だから此の分で婦人文藝の氣運が進んで行つたら

誠に源氏物語の番狂はせ、清少納言裸跣と云ふ非常な才媛が近き將來に於て、必ず輩出する事であらう否現に、先人には未だ甞つて見出し得ぬ空前の天才が、文藝總べての場合に於て、既に發見されつつあるのかも知れないのである。

◎一葉去つて創作界久しく閨秀作家の傑出して居るのを見出す事が出來なかつたが、近頃滅切り賣出した一ノ瀬初子、小山内八千代等は、多少望みを屬されて居る向きもあると云ふことである成る程狹い小さい我が國の文壇では、巾幗小說家としては之れ位の處が程度であらう。だから此處で一番、濱の眞砂も啻ならぬ數ある才媛の中ウンと締まつて掛かつたら、隨分と甞て一葉女史が博せし名聲位は、譯無く得られるであらうと思はれる。少し古顔にはなるが大塚楠緒子、之れは今も猶婦人の創作家として觀迎されて居ると云ふ評判である。


日本女子大學校

◎詩と云へば與謝野晶子、——明星が直ぐに思ひ出される。晶子女史の短詩界に勢力のある事は非常なものだ狀で、例のみだれ髪、扱ては小扇、夢の華の崇拜者は

女學生にばかりか、現に詩壇で相當に名を得て居る男の詩人すらも、御氣の毒な程晶子女史には氣觸れて居られると云ふ事である。昔、若い男女の間に歌垣と云ふ遊戯が盛んに流行して居つた爲めに、一方に於ては之れに伴ふ風俗の淫靡を助長したと云ふ、害があつた樣であるけれど、他方に於ては、男女自然の感情を融合して文藝の進歩を助け、奈良朝より平安朝時代をかけて、彼の萬葉古今の文華の粹を後世に遺す事が出來たと云ふ。されば所謂明星一派の新詩風が、現今青年男女趨勢の風潮を如何に支配するであらうか。云ふ迄も無く雜誌明星の主義目的が、虚僞を避け矯飾を退け神聖の戀愛と天眞の光榮とを要求するにあるとしたら蓋し其勢力の及ぼす處、歌垣以上、古今萬葉以上、明治の文藝界は之に依て燦爛たる異彩を放つ事であらう。

◎幸田姉妹

一度絃に手を觸れて立つてよりは、音樂界又靡然として久しく此の兩天才の風丰を仰ぎ見る者は無かつた某女史天才花子の君、一時中原の鹿となつて公衆の耳目を一身に集めて居つたが、其れは寧しろ珠を轉ばす樣な天授の美聲よりも、沈魚落雁閉月羞花、能く人をチヤームする力のある其の眼其の口元が、天才の令名を博したのだと云ふ評もある。近くは天野初子、

◎要するに

文藝界又決して其の人に乏しからず。文藝が最も女子に適當して居ると云へば、我れ等の大飛躍を試むる餘地は未だ〳〵澤山にあるのである、されば、文藝何にまれ己れの才の向ふ處に從つて、將に年と共に新らしき精氣を養つて驀進して可なりと思ふ。

田舍の正月

餅と芋を併せ煮るを雜煮といふ、元日拂曉二番雞即ち午前四時頃、男起きて若水を酌みこれを用ゐて雜煮を作るなり、雜煮は先づ御年の神に奉り、それより順次神棚佛檀に供へたる上一家席次を正し一齊に箸を取り上げて食す、雜煮とゝもに膳に上るもの鰊、煮豆、花鰹、はゞ(房州の海產物にして海苔の樣に拵へ極めて粗きものなり)また栗の餅と蕪菁とをすまし汁にて煮、これを雜煮と名付くる家あり、其謂れを聞くに栗は黃なるをもて、黃金に比し蕪菁は音株に通ずるを以て、黃金の株にあり附くといふ意なりと。

世界第

○世界第一の(鐵道國)は北米合衆國で、其の敷き延ばしたレールの長さは、十二萬五千百五十二哩である。

○世界第一の(電信國)は是また北米合衆國で、其の張り渡した電線の長さは、七十七萬六千五百哩である。

○世界第一の(大銀行)は、英國の英蘭銀行である。世界各國の要所に出張店ありて取引の大なる實に世界第一。

○世界第一の(大金持)は英國の「ロスチャイルド」家である、財產は約十二億と算せらる。

○世界第一の(金剛石細工場)は和蘭に在り、そこでは金剛石の細工だけに、毎日四百人の職工を使用し居る由。

○世界第一の(大劇場)は佛國巴里の「ニユー、オペラ、ハウス」である、其の總面積は四百二十八萬八千呎平方で、其の敷地は三エーケルを占め、而して其の建築には一億法を費したと云ふ。

○世界第一の(大釣橋)は紐育とブルクリンの間に架設つて居るもので、其の長さは五千九百八十呎ある。

○世界第一の(大火山)は墨斯其のポポカタペトル山である其の、高さは海拔一萬七千七百四十八呎、噴火口の廣さは三哩、そして深さは一千呎である。

○世界第一の長い(隧道)はセント、ゴサードの隧道で、ルーサルンとミランの間に敷設せる鐵道の所屬である、其の穴の口は幅二十六呎半、高さ十八呎十吋で、長さ九哩半に渉る。

○世界第一の(大樹)はカルホルニヤ洲の「マンモツス」と云ふ樹で、殊に大きなものになると、高さ三百七十六呎、直徑三十六呎からあり、凡そ三千四五百年の年數を經たものゝ由。

○世界第一の(圖書館)は佛蘭西巴里の「ビブリオセツク、ナシヨナル」と稱するもので、藏書の數は書籍四百十萬卷、雜誌類三十萬卷、寫本十七萬五千册、地圖三十萬部、貨幣十五萬種である。

○世界第一の(大鐘)は露西亞のモスコー市に在り、其の周圍六十八呎、高さ廿一呎、厚さ廿三吋、重量四十四萬三千七百七十二封度。

○世界第一の(大電燈)は濠洲のシドニー燈臺に建設しあるもので、其の光力八十八燭に當り、能く五十哩四方を照らすと云ふ。

○世界第一の(高山)は印度のヒマラヤ山で高さ二萬九千二呎。

○世界第一の(長流)は米國の「ミツソリー」河で、水源より河尻までは四千哩の距離がある。

○世界第一の(大都會)は倫敦で、人口四百五十萬人と稱す、通例日本の六七箇國の總人數に匹敵す。

一

○世界第一の(公園)は米國費府の「シチー、パーク」である。

○世界第一の(大湖)は米國の「シユーペリオ」湖である、長さ三百八十哩、幅百二十哩。

○世界第一の(大瀑布)は瑞西の「セロソラ、カスケード」瀧で、高さ二千四百呎。

○世界第一の(大沙漠)は亞弗利加の「サハラ」で、東西三千哩に渉り、面積二百萬平方哩を占む。

○世界第一の(郵便切手博物館)は墺國の維納に在り。其の集むる所の切手は三百萬種に上り、就中最も珍奇なのは、一枚で三千餘圓の價打ある。蘇蘭メンザーの郵便切手、及び六百圓の價ある寫眞半郵便切手の二種であると。

○世界第一の(人口)を有する國は支那で、其の人口四億五千萬餘の大多數に上る。

天才畫人榊原蕉園

妙齡にして花鳥山水を描くの人はあり、お孃さん畫をもて間々專門家を壓するの才媛も世に尠らしからず、されど畫家の尤も多難とする美人畫を以て一機軸を出し、種々の手腕よく老大家の壘を摩する蕉園子のごときは當世得易からざる逸才といふべし。

蕉園女史は榊原百合子といふ、芳紀正に二十歲、もと麴町小學校に學び、三十五年卒業して直ちに矢島楫子女史の女子學院に入りここにて普通學を修む、在學中浮世繪の名手水野年方氏に就きその畫風を學びぬ。

抑も女史が繪畫を專攻するに至りしは主として家庭の感化によるものなり、女史の父榊原浩逸氏(岩倉鐵道學校幹事)は風雅の人にして繪畫の嗜好あり、母君あや子も又畫を好み、父母共にこの道の嗜み深く鑑識の眼高くして今古の藏幅書齋に溢るゝほどなりしといふ、女史この間に人となりて幼少より錦樣畫など描きならひて天才の發露をさく〳〵侮り難きところのありしより、父母も又その天眞のある所を察し、その長所に向つて發展せしめんこそよけれと斯くは浮世繪の門に入れしなりと。

女史の處女作とも云ふべきは、一昨々年美術院の展覽會に出品して二等賞杯を得たるものなり、而して一昨年春研精會に出したる「わが鳩」と題するものは妙齡の一處女にして當時既に滿場の出品を壓倒し、雅邦、玉章、玉堂、廣業等の老畫伯をして歎賞措く能はざらしめたるもの實に女史が十八歲の時なりし。

女史平生暇あれば一室に在りて古今の美術書を研究し、時には庭園を逍遙して家人を寫生するなど、專門家との往來などはあまり好まぬ方にて其の風采は何時も高島田にて一見商家の孃さんの如く少しも高ぶる風なしと女史の品藻の高き處又こゝにあるべきが。

社會

黄金征伐の筆頭生活難の新福音

（簡易生活主義の奬勵）

胡　劍

▲驚くべき生活難

吾人は舊臘に於て、文明の進歩と共に社會が益す複雜となり虚飾となり、何れの國を問はず生活難が日に甚だしくなるから、今後は簡易生活主義でなければならぬこと、及び簡易生活の如何なる者であるかと云ふことについて少し述べて置たが、我國目下の生活狀態を見ると、益す斯の主義を鼓吹する必要があるやうだ。昨卅九年十一月中農商務省の統計表で見ると、年々歳々騰貴する一方で、下落すると云ふことのない物價は、戰爭の影響をうけ、茲兩三年中に更に一段騰貴して、十年前、二十年前の生計費用と比較すると、約三倍の差がある、即ち明治二十年には、六疊、四疊半、二疊の三間に雜作附きの家屋の家賃が一ヶ月二圓五十錢、敷金七圓足らずで好かつた、又た飯米は四人暮らしで三斗六升と見積り、一圓に一斗三升替へ貳圓七拾錢、其他一切の經費を合せて、十四五圓あれば足りたのが、三十年には同じ家が家賃四圓五十錢、敷金十五圓になり、之に準じて總ての物價が騰貴した爲め、一ヶ月の經費が二十三圓を要する程になり、夫れから十年後の今日は如何であるかと見れば更に騰貴して、同樣の家が家賃七圓敷金二十一圓、飯米一圓に五升替へで、七圓二十錢となり、一ヶ月少くも三十六七圓無くては、人並の生活が出來なくなつて來た、何と酷い騰貴の仕方ではないか、尙ほ此外に不時の支出がある、和洋服、外套、靴、帽子、手袋、靴下、足袋、手拭、下駄、足駄、洋傘、傘、等の新調又は修繕、ホワイトシャツ、カラー、カフスの西洋洗濯料、臺所品の消耗

補塡、神佛用の燈花、親戚知己への慶弔、盆や正月の贈答、小供の菓子代、女中への心付、不時の旅費、來客時の寢具等の損料、不時の醫藥料、細君の小遣錢、娛樂費、(交際費之は際限がないが、小供の運動會費又は同僚との會合費で月一回位、其他は來客に對して已むを得ず支出する費用、)其他新聞代、雜誌代等一々數へ上げれば、數限りもないが、如何に尠く見積つても人間並の生活をするには、四十五六圓は要する譯である、生活費は如何に嵩んでも、收入が之に伴へば善いが、決して其三割だにも增加して居らない、早い話しが、巡査の俸給である、巡査の俸給は增加されたと云つても、最下か十二圓で最上級が十七圓だ、細君は內職の爲めに、全力を注いでも、女の細腕では高々月に三四圓で、合計してやうやく生計支出の半額しか得られぬ道理である、何と驚くべき生活難の襲來ではない乎、此分で進んで行くと、今後は家庭を作ると云ふことは、最難中の最難事で、今日の青年が好く夢想しては樂しんで居る、スキートホームや理想の家庭などは、容易に實現されさうもない、必ず非常の速力を以て所謂老嬢が增加するに違いない、是は其人のみならず、誠に一國の不祥事である、夫れは何故かと云ふに結婚者が少くなれば人口が減ずる、所が今日のやうに、國と國との競爭が激しい世の中では、其勝敗は殆んど人口の多少で決すからであつて、近頃佛蘭西が益す弱くなるのは、畢竟生活難が加はると共に、家庭を造ると云ふ事が非常に困難となり、從つて結婚の數が減り夫と共に人口が少しも殖えないからである、此人口の殖えないと云ふことは、一國に取りて最も忌むべき現象で其國は必ず衰へる、だから米國の大統領ルーズベルトなどは、能く斯の人種的自殺即ち人口の減少を憂へて、方々の母の會などで演說しては、頻りに結婚を奬勵して居る、何れにしても、生活難の爲めに結婚することが出來ぬとは、人生無上の恨事ではあるまいか。

▲連綿不斷の戰爭

生活難の襲來は以上述べた如くであるが、此の世智辛い今の世の中で、霞を喰ひ、露を吸ふて居ると云ふ仙人にあらざる限りは、又た華厳の瀧や、淺間の噴火坑に安住の地を求める弱蟲にあらざる限りは、厭でも應でも此生活難と云ふ大敵と戰はなければならぬ、東郷大將は一昨年日露の戰塵やうやく跡を斂め目出度凱旋した時に、軍人の一生は連綿不斷の戰爭であるから、油斷してはならぬと云つて部下を戒しめられたが、連綿不斷の戰爭は、何も軍人に限りたことはな



普連土女學校

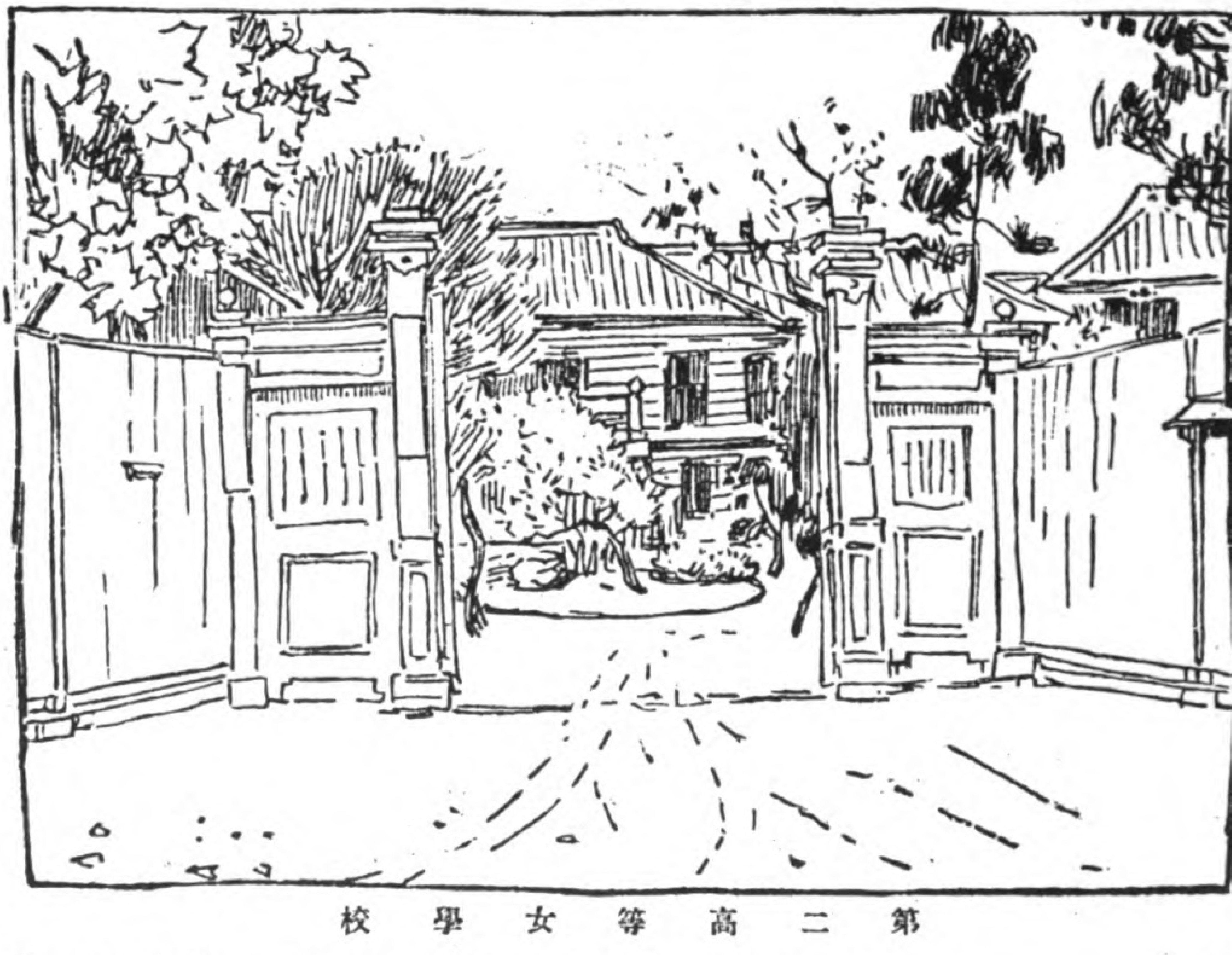
い、人間は一生涯斯の生活難と云ふ大敵と、連綿不斷の戰爭を續けねばならぬのだ、而も此の生活難と云ふ敵は、不斷幕無しだから堪まらない、日曜と大祭日と、晝間と夜間と、春夏秋冬を間はず、二六時中斷へ間なしに、喊の聲凄まじく、旗鼓堂々と吾々に肉迫しつゝあるのだだから、餘程覺悟して懸らぬと、見苦しい敗北を取るのは必定である近年頻々と傳へらるゝ彼の華嚴瀧や淺間山の自殺者は、口では人生不可解とか何とか立派の事を云つて居るが、あれは死後の榮を欲する虚榮心の發動で、其實斯の生活難を云

ふ大敵と戰つて敗れた弱卒の成れの果てに違いないのである、何にしても暮らし難い世の中になつたもので、今の世の中で立派に一戸を立てると云ふことは、却々一通りや二通りの苦勞ではない、就中一家の大藏大臣として家政を鹽梅する主婦たる者は、尋常の作戰計劃では迚も家庭と云ふ城を守りきれるものではないが、偖て其手段としては、前にも云つた通り斯の簡易生活主義より外に妙策がない、いでや天下の主婦諸君の爲め且つは、是れから主婦になられんとする諸孃の爲め、更に今少し詳しく、冗長を厭はず、繰り返して述べて見やう。

簡易生活の唯一の勁敵は、虚榮心で、婦人は特に虚榮心の強い者であるから、先づ第一に虚榮心を打ち敗る必要があることを切言して置たが、此の虚榮心が女性の身を損する一番の曲者だから、更に一大鐵槌を下して置く必要があると思ふ。

總じて女子は、虚榮心が強い者に極まつて居るが、殊に當今の女學生に於て此の弊が甚だしい、と斷言するに憚らない、曾つて地方の高等女學校で、「理想の婦人」の投票をさせたら下田歌子女史が、最高點で當選したことと、又東京の某英學女塾で、「理想の良人」を選定さしたら、外交官夫人が一番多かつたと云ふことは、有名の話しだが、恐らく之れが當今の女學生一般の要望を代表した者であらう、是で見ても、未來の良妻賢母が如何に、儚き虚榮の影に憬がれて居るかゞ判る、想ふに是等女學生諸孃の夢は、夜な〳〵某學士と戀の夢甘く、兩々手を携へて逗子や大磯の濱邊に新婚旅行を爲て居る事であらう、さもなければ則ち某々の夜會に交際塲裡の女王として、天女の粧ひを凝らし、年少貴公子と相擁して翩々胡蝶の如く舞ふて居ることだらうが、斯る夢のやうな妄想は果して其百分の一も實現されるであらうか、覺束なしの限りである、諸孃にして一たび學校の門を出で、社會の生存競爭塲裡の風波に足を入れたならば、必ずや其理想と現實との懸隔の餘りに甚だしいのに、虚榮の夢も敢なく覺め果つるだらうが、思へば誠に氣の毒の次第である。

何も人生の榮耀榮華が、悉く惡いと云ふ譯ではないが、萬人が萬人悉く下田歌子女史や外交官の夫人になつて堪る者ではない、またなれる者でもないから、餘り浮華や虛榮の夢ばかり見て居ずに少しは着實の考へも持つ方がよからう、是れは言葉が少し矯激に過ぎたかも知れないが、簡易生活主義を說く前置として、是非此女子の虛榮心に向つて、痛棒を喫せしめて置く必要があるのだ、否實は此婦人の虛榮心については、簡易生活の著者ワグナーも、よく〱愛想を盡



第二高等女學校

かして居る。

▲流行の奴隷

婦人の虛榮心に富めることは、誠に上述の通りだが、偖々此の旺盛なる虛榮心が、最も多く何れの方面に發揮せらるゝかと云ふに、夫れは衣食住の三個條の中、衣服即ち身の飾りである、良人に反對してまでも、家賃を多く拂ふ家屋に住みたがる位の事は、まだ罪のない方だが身の裝飾に對する慾望の盛なることは、宛で吳服屋か小物間屋の奴隷ではあるまいかと疑はれる、衣服を綺麗にするは云はずもがなで、頭に花束を簪し、

手に金輪を入れ、皮膚には白粉を施すはまだしもなれど、全く流行の奴隷となるに到つては、沙汰の限りだ、一體裝飾は婦人の身に取りて過去の時代に、生存競爭上自衛の唯一の武器であつた、イヤ夫れは過去ばかりでなく、今日でも早い話しが、同じ宿屋へ泊つても、身裝の善い方が待遇が違ふと云ふ情けない世の中だから、服裝に腐心するも一概に咎める譯には行かないが、抑も婦人が過去に於て虛飾を以て唯一の武器としたのは、婦人に敎育を授けない謂はゞ時代の其者の罪で、弱者として誠に據ろない仕儀だが、併し明治聖代の有難さは、男女平等に敎育を授けらるゝ今日の時勢何も虎の威を假る狐のやうに、白粉や綺羅で辛ふじて自分の地位を保つには當らぬ、イヤ地位を保つならまだ好いが、裝飾を粧ふ爲めに身を損ずる者世間滔々皆な然りである、一體婦人の虛榮心を煽り立て、身を誤らせ、家を滅ぼさせる讐敵は、流行と云ふ曲者である、だからワグナーも『流行を衒ふ人は呉服屋の奴隷裁縫師の玩弄物にして、自己の讐敵なり』と云つて居る、

一體流行と云ふ者は、文明の副產物で、世が文明になり、虛飾になるに伴れて、出て來る通弊であるから、文明國程此弊害が甚だしい、だから歐米では、良人の收入の半額を流行品に費すと云ふ手合が尠くない、歐米の婦人が此流行の爲めに苦心し更に煩悶する程度と云ふ者は迚も日本人などに想像の出來る者ではない、一着のエヴニングコートに十萬圓費したの、一個の指輪に何十萬圓投じたのつて、其贅澤さ加減は、先年某宰相の夫人が、一個のブローチに三千圓投じたと云つて大騷ぎを遣つた、日本人などの比較ではない、此通り流行に憂身を窶す結果は、如何であるかと云へば、一家の財政の左り前で次で起るのは家庭の風波、最後に起るのが離婚の裁判である、米國などの新聞を見れば每日出て來る離婚の裁判は、其十中の四迄は大抵是れのやうだ、身の飾りの爲めに離婚沙汰とは如何にも馬鹿の骨頂で、其位なら最初から孔雀に生れて來た方が仕合せだと云ひたくなるが、偖て何うも外國人ばかりも笑はれない、日本でも近來文明の流弊を襲つて

隨分華奢虛飾が流行する、やれ元祿、やれ桃山、やれオリーブ、やれカーキ色と、一波去つて又一波、其流行の變遷は隨分激しい、今茲に一人の令孃があつて、眞つ先に元祿時代の派出な裾模樣の紋付を着て、此に似合つた帶を締め、髮は廂髮のマアガレットリボンの色合掛け樣も年齡に相應して居て、金鎖の時計、珠玉の指環さては格子、縞の蝙蝠傘、びらうど表の厚草履、出來る丈の盛裝を凝して、びらりしやらりと交際塲裡にでも出やう者ならば、忽ち大評判になつて、私もあ



三輪田高等女學校

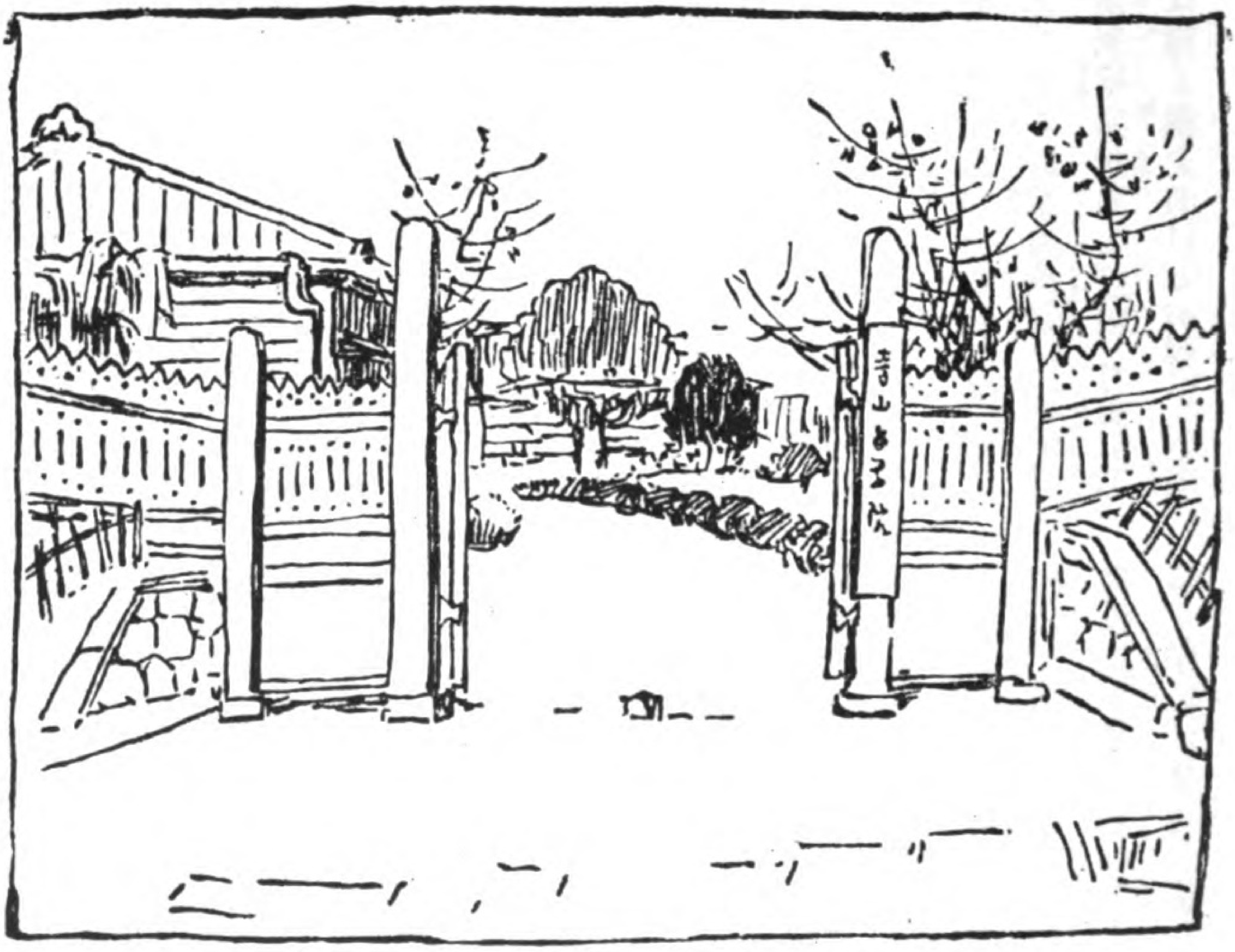
のやうな色合の衣服を新調したい、私はあのやうな帶を買ひたいなどと云ふ、令孃が澤山出て來て、忽ち夫れが流行となるから堪らない、是等の流行は未だ性質が好い方だが我國從來の流行は大抵花柳界から來るから、イキとか粹とか云ふ事ばかりで品位などは少しもない、心ある者は實際嘔吐を催うす位だ、夫れを富豪の夫人令孃、さては貴婦人連まで喜んで眞似をする、而して世間へ見せびらかすから忽ち夫れが流行する、誠に愚の極だが、世間には又金のない爲め其眞似が出來ぬと云ふので煩悶し懊惱し、良人を苦

しめ親を泣かせ一家の平和を攪亂する、婦人連が尠くない、イヤ甚だしいのは其爲めに家を敗り身を敗り果ては、社會にまで迷惑を及ぼす者が決して尠くないのである、兎に角流行に心を動かされるやうでは、迚も簡易生活の實行は六ヅかしい、簡易生活を實行するには流行などに目も呉れぬと云ふ識見を要する。

▲簡易の心を養へ

以上は專ら裝飾の上に現はる、婦人の虚榮心について述べたのであるが、何も衣服の虚飾ばかりが簡易生活の敵ではない、萬般の生活の上に於ける、手輕でない者は總て簡易生活主義の敵であるのだ、一體贅澤と云ふことは、多く人手を借りる事を云ふので世間には好く堂々たる男子が、自分の靴を車夫に脱がせて得意がつて居る者がある、是等は贅澤の極であるが、眞逆婦人は是れ程までゞなくても、隨分片腹痛いのがある、一例を擧げれば、先年某女學校の同窓會で、其會員である某富豪の夫人に出席を促した所が、出席の出來ぬ趣きを執事の名前で斷わつて來たと云ふので、世間の物笑ひとなつたことがあつた、同じ學校で學びたる生徒でありながら、唯だ富豪の妻となつた爲めに、執事に返答させるとは、隨分念の入つた次第である、一體日本の貴族とか富豪とか云ふ社會では、少しも多く人手を借りるのを、何よりの誇りとして居るから堪らない、先づ華族の家庭などを見ると、夫人でも令孃でも、大抵重い者は、箸より外に持つたことがないと云ふが常で、僅か一二間向ふにある者でも、自分で行つて取ると云ふことはしない、直ぐ樣女中を呼ぶ、其用事と云ふは何であるかと思へば、硯に水を注ぐ位の仕事である、夫れで每夜寢る時は、女中に床を敷かせ下から蒲團を着せて貰ふ、朝起きる時には、着物を着せて貰ひ、羽織を被せて貰ふ、宛で病人扱ひだが、夫れを何より得意にし又たかう云ふ仲間に限り婢僕などを會釋視して下等の虚榮心を滿足させては喜んで居る、華族などは昔しからの習慣であるから、聊か恕すべきであるが、成り上りの富豪などが、是等の惡風を眞似て、

御前様、若様、姫様などと僕婢に呼ばせて喜んで居るのは、笑止千萬ではないか、夫れより尚ほ沙汰の限りであるのは、然程富有でもない家庭で、奥様とか坊ちやんとか下女に呼ばせて婢僕をば人間でないやうに卑下して嬉しがつて居る手合で、傍目には『憐れなる虚榮の捕虜』よと云ひたくなるかやうに虚榮の貴族的の家庭に成長した小供は誠に災難であると云はなければならぬ、ワグナーも其『簡易生活』の最後の章に斯う云つて居る。



青山女學院

虚榮に滿ち簡易を知らぬ今の社會の弊は覿面に我等の小供に報ひられたり、主人と僕婢と云ふ階級を設け、劃然二者の區別を分つ結果、一方は手の着けられぬ我儘者となり、又一方は宛で人格のない卑屈者となるなり、上下の差別を嚴格に立つるも善けれど、忘るまじきは、召使ひも吾等も同じ人間なりと云ふ事なり、言葉使ひや態度を召使ひ相當、主人と召使ひとの位置の相違を現はさせるはよけれども、之と共に子女にも召使ひとて人なる事を呑み込ませ、之に對し相當

の尊敬を拂ふ事を敎えるが、何より肝腎なり、此の心を幼少の時より吹き込み置けば、成人の後交際場裡に出でゝも、無慈悲や我儘の所爲少く社會が健全になる基となるより、若し世間の父母が、其身の召使ひに對する日常の行ひに依り、子女の心に召使ひに對する敬意を失はせたる時は、目前に其時其日より災害を受けたりと云ふも過言にはあらず、世の中を見るに大抵の人は、此災害の爲に大骨折を爲せるに似たり、高き卑しきを問はず、今の世の小兒は、互に他を見下すと云ふ風を養なはぬはなく、されどこう衣裳の汚きは卑められ、手仕事する人は侮られ、善い服裝をせぬ者は擯斥せらるゝなれ、此の流儀にて育つ子女は、成人の後も兎角上下の分を言ひ立て、人を好き嫌ひし簡易の心を缺き社會の厄介物となるが常なり」

簡易生活は是非子供の時から敎え込まねばならぬ、有名なるマーカス、オーレリウスは其冥想錄に於て、余は簡易質朴の美德を母より學びたりと、云つて居る、世間の父母殊に母たる者は能く氣をつけるが好い、虛飾や贅澤の生活は、啻に一家の財政を紊亂せしむるのみならず、亦た覿面に子供の上に報ひが來て、其子供は依賴心ばかり强くて、獨立心の少しもない棒にも箸にもかゝらぬ厄介物になるに極まつて居る、一體貴族的の虛飾の生活程人を不具にする者はない、子供には是非共、自分の事は自分で處理するやうに敎え込まねばならぬから小供の玩具や學校道具は、必ず場所を定めてしまひ置き、決して人手を借らぬやうにさせるが肝腎だ、又子供には自分の靴を磨き、ハンケチを洗ふ位の仕事を爲せるは當然の事で、更に生長すれば一層仕事を殖やして遣らせるやうにするが善いのだ、女中は炊事、洗濯、掃除などの大任があるから、小供に女中を使用さする事は嚴禁するがよい、又子供は常に親の行爲を見慣ふ者だから、父母たる者は日常の行爲は餘程注意せなければならぬ、殊に今日此頃愛國婦人會だの、慈善演藝會だのと騷ぎ立てゝ、大會の服裝に、あれでもなしこれでもなしと、人に見せびらかす爲めに、服裝に憂身を窶し、所謂美名の下に己れの虛榮心

を満足させて得意がつて居る婦人連は、注意しないと、諸君の令嬢は屹度、西洋小間物屋の奴隷になつて終まつて、或は萬引を働らくやうな不心得者が、千萬人の中からは出て來ないとも云われぬ、恐れても恐るべきは誠に虚飾の生活と云はなければならぬ、此の簡易の心を養ふことについては、まだ云ふべきことが澤山あるが、餘り長くなつたから、次號に讓ることに致しました。

婦人寸評

▲日本婦人は衣服の爲めに浮身を窶してゐる衣服を修飾するはよいが是れが爲め全力を傾注するに至つては弊と謂つべしだ、是れは衣服を保存する方法が至らぬからであらう、例へば婦人が勝手で働く時でも西洋婦人のやうに胸當などを用ゐない、前掛一つ位で居るから衣服が汚れる女學生は衣服を製する方法を研究すると同時に衣裳を保存する方法にも意を用ゐるが宜らうと思ふ。

▲食物を製へるは家婦の職務で輕からざるものである、料理を甘くするには理科の智識を要する理學の研究は女學生として最も必要である、同じ物を料理しても料理法如何によつて甘くもまずくもなる、日本の奥樣は食物のことなど下婢に一任して顧みない。勝手で働くなどいふとは愧づべきことゝ思つてゐる是の點に於ても西洋婦人は大に異つてゐる、勿論勝手口の機關も進歩してゐるが家婦が主として料理に任ずる、大體自分で肉を買ふと云ふ風である。

▲日本の婦人は極めて家政に拙である、これは時間の觀念に乏しいのも一原因である、西洋婦人などは一週間の月曜は何をする火曜は何をすると豫めちやんと定めて置く、だから一身で交際場裏にも出入し買物もし、遊散もして猶且つ家政を整頓し得る、日本婦人は殆ど整頓整理といふとを知らないと言つても宜い。

▲夫婦は夫婦となつたとによつて互に幸福であらればならぬ、それには婦は夫と趣味を一にする必要がある、趣味を一にするには學問がなければならぬ、夫が學問の話をすれば婦が役者の話すると云ふ風では兩者の幸福は得られない、是の點に於て今日の女學生諸君はさすがに見上げたものである、少くも女學生を妻にしたものは十年の後が幸福である。

贈答の意

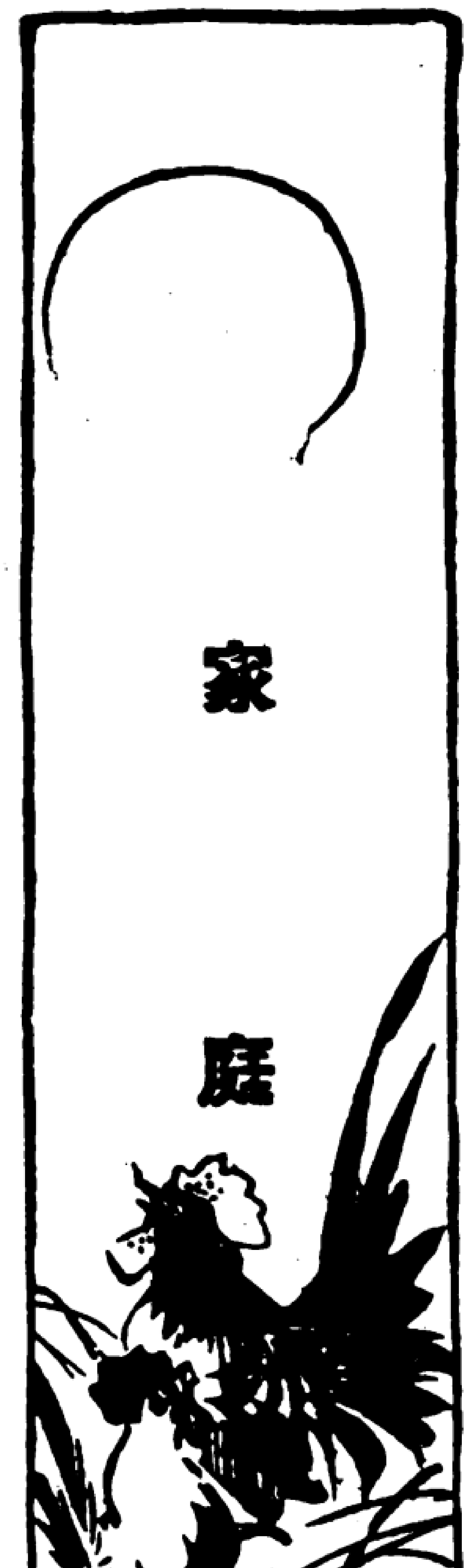
△要旨＝贈物の趣旨に大要四種あり、第一人を敬ふ精神よりするもの第二謝恩の爲めに贈るもの第三親密を表する情よりするもの第四吉凶見舞弔慰の誠意を表するものなり、何れ精神の誠を表する爲めなれば、情を厚ふする點に於て美に美なる業なれども、偖は卑劣の心を有する者少からずして此誠心を表すべき贈物却て諂佞の具に供せらるゝとなきにあらず、故に其方法に注意し其塲合と關係を顧みてすべきなり。

△塲合＝贈品は先方の身分と其家の模様、塲合に由りて異るべし、即ち男女老幼、共に好む所を殊にし、又其家の模様に依りても、其必要とする所同じからず、吉凶それ〴〵その塲合に應じ慶弔の情を表するものを選ぶべし、婚禮の贈物は、通常鏡臺、針箱等の調度類、或は衣服、帶、たゞし片側物は成るべく避くるを可とす、稍下りては帶上げ、帶留、襦袢の襟、袖などもあるべし、其他には鰹節、するめ等多しとす、弔問の贈物は茶、菓子、香、蠟燭の類を用ゐ、香奠として金圓を贈るをよしとす。

△價格＝贈品の價格は、己が身分に應すべし、先方に應ぜんとするときは、富人に對して貧者の及ぶべきにあらず、總て贈物は其分限に從ふを可とす、餘り華麗に流れて身分不相應なるは却りて禮にあらず、さりとて又鄙吝に失するも禮を失ふ、能く其適度を踰えざるをよしとす。

△裝飾＝贈品には相當の裝飾を要す、其方法は塲合、物品、身分等に依りて異り、普通の裝飾は紙に包み、水引を掛くれば足れり、包紙は奉書、杉原、糊入等にて、通例の塲合には二枚紙を用ふるを可とす。水引には紅白及び黑白あり、吉事其他普通の贈物には紅白を用ひ、凶事には黑白を用ゐるなり、結び方には結び切りと返し結びとあり、婚禮及び凶事には結び切りし、其他は總べて返し結びとす、金水引、五色水引等は、地方に依りて用ゐる所あれども、古例にはあらず。

熨斗は、正月或は婚姻の式祝賀の贈物などに用ゐしが、今は弔問を除く外一般に之を添ふることゝなれり、されども魚鳥類には添ふるに及ばず、婚姻其他鄭重なる祝の時には、長熨斗を用ゐ、其他の塲合には、包み物の大小に相當したるものを用ゆべし。



忠實なる主婦

米國宣教師　ホワイト夫人談

勤勉で規則を守り一家の整理に拔目のないのは西洋婦人の特長と申すべきですが、中にも取りわけ親接する人を感歎せしめらるゝは米國宣教師ホワイト氏の夫人で御座いませう。今より十八年前未だ處女であつた夫人は教師として我國に招聘せられ、許嫁の良人も續て傳道の爲に渡來されたので、華燭の典は我國で擧げられたのです。其後の夫人は良人の任務を補佐する事と語學を教授する事に非常な忙しさであるに拘らず、男女二人の御子さんの世話は遺憾なく行き屆き、座敷や家具の整理は隅から隅まで整然として、戸棚の奥に塵一つ殘されぬので御坐います。而して感服と申すより不思議と申したいのは、これほどの繁務を下女一人使はずに、夫人の手一つで切り廻して居られる事です畢竟天稟にも由りませうが、夫人の學歴を伺ひますと尋常一樣の乙女達には迚も切り拔ける事の出來ない辛酸を甞めて來られたのですから、其修養が今日の實行に大きな基礎を作られた事が判ります、夫人は極謙遜家で、雜誌に掲載することを辭退されましたけれども、記者は此好模範を如何しても專有するに忍びません。それで聊か紹介の勞を執りたいと存じます。御話は

▲實際と談話

私は唯だ實地に働いて居るばかりですから、若し貴女方が朝から晩まで私の致す事を見て居て下すつたら御分りに成りませうけれども、私が此處で御話しとして申し上げては、格別皆様の御參考にも成りますまいハイ私が初めて日本の津山へ參りましたのは明治二十一年で、丁度十八個年日本に居るので御座います。東京へ參つたのは明治二十九年ですが、是は子供の教育の都合上良人の許を離れたのであります。明治二十七八年前までは數人の女中を召使ひましたが、田舍では外國人を嫌ふ爲に何様も適當の者を得難う御坐いましたので、其後十餘年間女中を使はずに通しました。近頃私の勤務が追々殖えまして青山學院の女學部へ一週に三度、半日以上出勤致し、模範英語學校へも一週に三度出ます外、宅へ御出の生徒方が男女合せて七人と、波多野承五郎さんの御宅へ出稽古に上り、私の二人の子供にも一日に一時間づゝ教へますので、却々忙しく成りましたから此一箇月前から女中一人頼みました。尤も日本と私の國とは風俗習慣が違ひますから日本の御方が私共のやうに成さる事の困難なのは道理なので御坐います。第一室内の裝置から炊事の手數交際上の用務など私の國では自然時間を多く費やさぬ仕組なので、第一子供に手數が掛りませんから、案外樂に一人手で繰り廻せる次第です。チョット部屋の具合を御覽下さいまし、御話し致すよりも善く御解りに成りませうから……。

夫人は斯く仰しやつて、記者を伴ひ、各部屋の戸棚の中から簞笥の抽匣の中、さては臺所の床下まで、悉皆開け放して見せながら話されたのですが、何處も彼處も官衙の書類箱のやうに規帳面で、又雛段の飾り付けのやうに綺麗でありました。

大小が九室ほどの下座敷に六疊の二階のある日本家屋を借りて居られるのですが、ストーブ其他の裝置の爲めに座敷の趣を變へては、家主が後で迷惑するからとて、種々工夫して住つて居られます。應接室の椽側は、津山から持ち來られた硝子戸を嵌め、二の室との隔ての襖を取り外し、テーブルに椅子を列

べてチヨツト洋風に仕組み、ストーブは肱掛窓の側に据ゑ、窓障子溝へ一尺幅の板を嵌め、其板の上部を刳拔て煙突を外へ出してあり。食堂のストーブは椽側に附けて据ゑ欄間障子の一隅を矢張り前の如くに拵へて煙突を出してあります。それで夫人は『此板さへ取り除ければ元の儘になりますから、家主さんが困りません。私共は何時何地へ引移るかも知れないのですから、家主さんが後で迷惑しては氣の毒です』と語られました。それで御子さんの寢室三疊ほどの室に神棚と佛壇が舊の儘に在ります。記者は不思議に



思つて之を尋ねました所が、夫人は『家主さんが極大切にして居られますから……』と仰しやいました來客に見えない室とは申すもの丶、夫人の立場からは隨分御厭で御坐いませうに、人の感情を傷け玉はぬ周到な御心掛奥ゆかしく、此一事でも常識に富まる丶御方と熟々敬慕に堪へませんのです。食堂の戸棚は茶碗、皿、鉢、茶道具など種類別にして茶碗は茶碗、皿は皿ズラリと竪に列べ、一目で判るやうに爲つて居ります。臺所の戸棚の中も、罐詰、珈琲、料理の原料などが、矢張り器物同樣に區別されて御坐います。而して品物の下へ新聞

紙を菊形やハート形に切つてレースの様に見せたのを敷き詰めてありますから、戸棚の中の汚れる憂がありません。桶や笊など載せてある流元の棚も矢張り同様に新聞紙が敷いて御坐います。成程斯様してあれば、時々掃除して敷紙さへ取替へれば清潔になりませう。夫人が何處までも借家を大切に成さる御注意は、實に感服敬服に堪へません。

▲買物と帳簿

此近邊は牛肉の良いのが無し、西洋野菜も無いので俄に入用の時はチヨツト困ります。平常は一週に一度位づゝ築地まで買物に參りますが、暑くない折は大抵保存が出來ます、馬鈴薯やキヤベツなどは、臺所の椽の下に藏つて置くのです。買物を致すのに、通帳と云ふ物を用ゐますのは、實に恐ろしい事で、僅かづゝだと思つて居ると、月末に澤山の金高になります。それですから、私は現金の外決して買物を致しません。但牛乳代と洗濯代だけは、私が不在の折があつて勘定に都合が惡う御座いますから、月末拂に致して居ります。費用の帳簿ですか、これは毎日分類して精密に記して置き、年末に結算して前年との比較を調べます。子供の分は別口にして、被服、食物、學費等を年々比較します。私の家には、日本へ參つて以來十八箇年間の帳簿が整然と保存してありますので、判然と一家の財政史が分り、餘程面白う御座います。所有金は一切正金銀行へ預けて置きますが、預け入れにも引出しにも皆自身で出掛けるので坐います。

▲寸陰を惜む

前申し上た公務の外、自身の用向は毎土曜日に掃除と買物、それから翌日曜日の來客に備へる料理、及び依賴する洗濯物の取調べなど致し、日曜日には會堂へ參るので御坐います。内外の用向を一人手で繰り廻しますには寸陰も仇には過されません。自宅教授の際、差障りのない限りは靴足袋の繕ひ、衣服の直しなど致しながら御稽古申し、生徒さんが筆記せらるゝ間は、私が附切りで無くとも宜しいので臺所の用事を致すと云ふ風に都合して居ります。私は食麵包及び子供に

與へる菓子等も皆自分で拵へ、一切他から買入れた事は御坐いません。又同じ宣敎師方の御客が時々御泊りになる事が御坐いますが、一週間以上泊られた際にも決してそれが爲に手傳人を雇ふた事は御坐いません、家事を雇人の手に任せませんのは道具類の保存に餘程影響があると存じます。其證據には私が結婚してから十八箇年になり、遠方の引越も致しましたけれども、結婚の際友人から贈られた物品、及び其際用ゐた陶製の食器が一個も毀れずに在るので御坐います。

▲再びすれば直らぬ子供の癖



私が一番大切と思つて居ますのは、子供の習慣で御坐います。再びすれば最早直し難いと諺に申しますが生れ落ちると直に之を實行しなければなりません。先づ乳は生れてから一箇月間、二時間毎に整然と與へます。最初のうち泣いても辛抱して規則的に致しますと、二時間は善く睡り、二時間が少し過ぎるとフン〳〵許へると云ふ風に善く慣れるもので御坐います。寢かす時に抱いて搖すぶつたり抱いて搖ぶつたり、など致す事も、最初から決して致さぬ事に定めれば、おとなしく獨りで眠るものです。夜中に抱へてヨイ〳〵など致すのは、手數ばかりで無

く、軟かい頭腦に極惡いのです。或方は子供の褻褓が何時までも澤山要るので御困り成さる樣ですが。私は六箇月目位には、一週に一枚か二枚で濟ましました。これは三箇月目位から、時間で大小便を致させる習慣を付けましたので、時間が來ると、中央へ孔をあけた小さい椅子に赤兒を載せて押えて居り、排泄するまで我慢させて置くと自然習慣が附き、定つた時にフンフン申して敎へるやうに爲ります。

▲子供の食物

私の子供は男兒が十三歳、女子が十歳になりますが先頃まで菓子類を食べる事を一切許しませんでした。此頃は極少々ぐらゐ與へます。果物は朝食前に可なり澤山與へるので、林檎、蜜柑、柿、バナヽ、無花果、其他何でも果物ならば食べさせます。それで私の子供は身體が實に健全に發育致しつゝあるのです。

▲子供の經濟

毎土曜日の晩に、十三歳の男兒には十三錢、十歳の女兒には十錢づゝ與へます。これはペン、インキ其他の學具を買はせる爲めに、各自年齡の數だけ金を與へて、自分で取扱ふやうに致させるのです。これは無論餘りますから、預けたり又年末に好む物を買ふたり致しますが、出納の帳簿は七歳から整然と付けさせました。彼等が欲しい物があると、私に相談致しますが、若し餘り高い物である時は、『それを買つても宜しいけれども、汝の所有金で足りますか如何でせう』と念を推します。彼等は考へて見て無暗に買ひ度いとは申しません。又如何なる物でも私に斷りなく求めた時は、其罰として次の土曜日には金を與へぬ事に定めて御坐います、子供は自分の所有金だと申して、勝手に買ひますなら、隨分惡い物を求めぬとも申せませんから……。私は總て子供の小事に就て、細かく注意致し、大きい事は放任して置きますが、小事を規帳面に致せば大事は自然過失が無いやうです。

斯く話された部屋には、或時は御客の食卓と爲り、或時は御子さん方の夜分復習されるテーブルが御坐いまして、二の學具を列べ、鐵皿の中に鉛筆が入れ

てありましたが、其鉛筆は漸と摑まるゝ程の短い物ばかりで、大抵の子供なら失して了つたり、母親も掃き棄てゝ了ふ位のものですが、夫人は鉛筆の用ひ殘りを嚴しく仰しやつて御子さんから受取り、綺麗に削つて鐵皿に入れ置き、自宅での復習用にせよと命せらるゝので御座います。『此鉛筆を丹精するのは詰らぬ事のやうですが、物品を終りまで大切に用ゐる手本として、斯樣して置くのです』と語られました。

▲小兒と讀書

男兒の方には可なり種々の書物を讀ませます。亞弗利加の地



理、ナイル河の旅行記、埃及の歷史、豪い人の履歷などを面白く解り易く書いてある本、日本の昔話などを讀ませます。それから動物の解剖、性質などを詳しく書いた本も讀ませますが、これは子供が大層趣味深く讀むもので、例へば澤山な蝶の種類を書物で覺えさせて置きますと實物に對して研究する趣味が深くなるので御座います。私も臨時の用務が無ければ夜分讀書して樂むので御座います。

▲子供の衣服整理

子供の衣類は、各自入れ場所を定めて置きますから子供は獨りで始末する事が出來ます、唯だ冬になると夏服を他の場所へ

藏つて置いて遣るだけです。衣類の簞笥は二階に御座います。

斯くて案内されました二階は、夫人の寢室で、片隅に西洋簞笥を置き、椽側に日本簞笥が置れて、御座いまして、夫人は一々抽斗を見せられましたが、御子さんの着物の折目正しく藏はれてあるのを拜見しますと、如何に始末よく御仕込になつたかを窺ひ知ることが出來ます。記者は見放しの椽側に簞笥を置かれてあるのを無用心と感じて伺ひました所が、「良人は留守勝の上に、母子三人限りですから、盜賊の用心は嚴重に致します」とて左の通り語り續けられました。

椽側の戸は一枚毎に鎹を箝め、戸の裾から敷居へ長い丈夫な釘を差し込んで置きます。窓は悉皆鐵の棒を列べました。此御近所では、盜賊の入つた家が多ふ御座いまして、私の家へも時々狙つて來たやうな音がしましたけれども、未だ入り得ません。從來子供二人は下座敷に寢かしたのですが、夜中に盜賊が戸をゴトゴトと動かすのが恐いと申しますから、此頃は私と同室に寢かします、寢室の窓は鐵柵がありますから、前後二個所は必らず明け放して寢ます。イエ寒中でも終夜明放した儘です。私は締め切つた室に一時間寢ますと顏が眞赤になりますので、汚い空氣の中では如何しても寢られないので御座います。而して冷水摩擦は每朝缺さず實行して居るのです。

▲良人との信書

良人は作州津山で傳道に從事致して居り、時々各地も廻りますので、此家へはクリスマスの休みと、四月と八月と大抵一年に三度參り、二三週間滯留して歸ります。手紙で御座いますか、これは先頃まで每日出しましたが、近頃は稽古が忙しくなりましたので、一週間に三度しか書き得ません。子供は一週間に二度書いて贈つて居ります。ハイ每日實地に見聞した事、行つた事、それに就ての感じなどを單だ御話しする通りに認めるので、定り切つた文言は省きます。ハイ良人からも私や子供の出す通りの回數に手紙を寄越して居り

ますから、離れて居ても、側で話し合ふ如く互に狀況が分るので御座います。

▲結婚に就て

私の鄕國の婦人は、見ず知らずの人や少しも愛さない人と結婚すると云ふ事は、決して御座いませんから、先づ幸福でありませう。其代り青年男女の交際に就ては、親達が娘を取締るのに大層骨を折りまして、毎日嚴しく敎へます。煙草や麥酒を飲む青年とは、決して交つては成らぬ、彼の青年は何々の癖があるから決して朋友とするなと云ふ風な注意を致し、又始終目を配つて居ります、日本の青年男子方は、よく煙草や麥酒を飲ま



れる樣ですが、身體に障るだらうと心配致します。宅の子供が若し煙草や麥酒を飲むやうな事があつたら、寧そ死んだ方が可いと存じます。

▲農業上の智識

私の生れはオハイオ州の農家で御座いまして、子供の時から田畑へ出て働いたり、牧牛の手傳ひを致したり、種々の事を致しましたから、農業は善く存じて居りますそれで岡山の女學校に居りました頃、耕作の事を實地に敎へて居りました。

▲苦學と商法

私の實母は、私が三歳の時に永眠致し、繼母も私が十七歳の時に亡くなりましたのです。父は私が

大學に入りたいと申すのを許しませず、一錢の學資をも與へませんでしたから、私は四年間苦學して卒業致しました、或は掃除役、或は看護婦など〻、種々學校の用務に服しつ〻勉強して居ましたけれども、終りの學期には學課が難かしくなつて、用務に服する餘裕が無くなりました。それで畢竟學校に借金となつたのです。加之妹も弟も無資力で入學致したものですから、彼等の爲めにも私が債務者の位地に立ちました。卒業後この返濟方には、頗る心配致しましたが、私の郷里は林檎の產地で、極々廉價ですから、林檎の少くて高價な學校所在地へ賣つて利潤を得やうと心付き、それから澤山に林檎を商つて、一年ばかりの間に千五百弗ほどの負債を大概返濟致し、日本へ歸る時に五十弗だけ殘つて居りました。日本へ着いて月給を受取りますと直ぐに殘りの五十弗を返しまして、永い間の重荷を卸しましたから、胸が空いたやうに感じました。其後教授用の必要品を赴任地學校の爲めに求めたいと存じましたが、未だ創設の際で氣の毒でしたから、鄕國の友達に頼んで商業の取次をして貰ひました。又た日本の歷史、昔話などの如き面白いものを飜譯して鄕國へ賣りました、固より學校教授及自宅教授の餘暇に致す樣な事でしたから、夜分横になつて寢むとは少く椅子に凭つて書きながら二三時間眠る位でした。私は自分の好きで、若い内から苦學も致しましたが、子供には此眞似をさせ度ないと存じます。苦學は餘程身體を害して、一時に年を取ると云ふ事を私は經驗致しました。

記者はホワイト夫人が苦學して商賣まで成されたと聞いたのみで、深く同情致しました。赴任地の學校の爲めにも亦種々苦勞なされし事を聽ては、胸が一ぱいになつて、鈍い神經も強く打たれて涙が零れたので御座います。夫人の經濟的思想は萬般に行渡り一秒一錢を儉約せられますけれども、義務に對しては時と金とを惜ます、慈善事業の出金など思ひ切つて成されるのです。夫人は實に女性に似氣なき克己沈勇な性を備へて居られますけれども、其溫情は全

身に浸り、生徒を教ゆる懇切周到な事は云ふまでもなく、良人との情交蜜のやうで、偶々歸家される良人と手を携へて運動に出掛られ、毎年夏休みには御夫婦揃ふて轉地靜養される相です。而して芝居や物見遊山などに單獨で出掛られる事は決してなく必らず良人の歸家を待ちて樂みを共にせられるのであります。（婦人記者）

十二ヶ月娯樂の讀込み

三田村楓蔭

御玉章おちなく拜讀仕候。あなた樣には御主人樣御子供方樣の御世話を御一人にて御引き受けなされ候上に姑御樣には御老體の事とて御氣むづかしくおはし候由、さぞ〳〵御心勞の事と、いくへにも御察し申上候。それにつけては、二三年このかた晴着一枚新調した事なく、旨い物を食べるでなく、ほんの寒い目、ひもじい目をせぬまで、髮はいつも、つくね髮、朝早くから起きて、負うた子に髮なぶられながらの立ち働き夏は玉なす汗を絞りて洗濯に手の皮をすりむき、冬はひゞあかぎれの手に着物の破れを繕ひて深更に坐し、年が年中眞黑になつて働けども、それでもまだ母上のお氣に召さず、暮し向きは、できるだけの始末をしてもいつも、月末には足らぬ勝、米屋薪屋に頭を下げて買懸の斷りをいふ切なさつらさ、何時芽の出ることか分らず、何を樂しみに生きて居るやらとの御愁歎。さら〳〵御無理とは思ひ申さず候。大凡そ人は男女の別なく、何なりと樂なくては一日も立ちゆかれる者には候はず、さるをあなた樣今日の御境遇をかくつらい〳〵とのみ御悲觀遊ばされ候ては、それこそ生きて居るかひなしとまで思ひつめたまふは御尤に候へども、さて人と申すものは、心は花になさばなりなむ、心の持ちやう一つにて、現在の境遇は悲しくも面白くも相成候ものにて、樂みは必ず金殿玉樓の上にのみ限り候ものかは、裏長屋の隅、夕顏棚の邊にも、それ相應の樂はこれあるべく候。されば人は其の時其の日の境遇

に安んじ、飽くまで人力を盡して氣永に幸運を待つこそよけれ。幸運は一朝にして來る者にあらず、富貴は一夜にて造り得べきものにあらねば、いかに歎けばとて、いかに焦燥ればとて、御主人が俄に御榮達遊ばさるべきものにも候はず、急に生計に餘裕を生ずるものにも候はず、さるを一家の光明たるべき主婦の心が、常に煩悶の狭霧に蔽はれ、人の榮華を羨み現在の窮乏を悲しむ念の絶間なきやうの事にては、一家の繁榮は決して求め得らるべきものに候はず、却て益々窮境に陥るより外あらじと存じ候。

　或る夏の土用中の事に候ひき。私が要用のため、とある街道を車にて急がせ候ひしに。向うより正午過ぎの炎天を物ともせず、重き荷車曳き來る男の後には、その妻とも見ゆるが、背に二歳ばかりの子を負ひながら、車を推し來るを見候ひき。夫妻ともに、ほと／＼と顔より滴る汗を拭ひもあへぬに、背なる兒は、何を夢むらむ、罪なき顔して、すや／＼と眠り居候ひき。世の中には此の炎天に焦されながら、かくも共稼ぎする夫婦さへあるを、われは急ぐ用とはいひながら、車に乘ることの勿體なさよと思へば消えも入りたきまでに思ひ候ひき。されど苦の後には必ず樂あり。此の夫婦の汗と勞力とは、夕暮には早やそこばくの黄金と代りやせん、その黄金もて買ふは、米か薪かはた醤油か但しは一尾の小魚、二三合の酒か、家に歸りなば、終日、母の背に縛られたる子供は、先づ束縛を解かれて母の乳房に縋りやせん、妻は離外の清流に米を磨ぎ、夫は竈の下を焚きつけて、湯を沸し飯を炊ぐ、やがて一日の垢と塵とを行水の湯に流し了り、氣も伸び／＼と夕餉の膳に向ふ時の樂しさはいかならん。一尾の小魚も一本の澤庵漬も太牢の滋味にまさりやせん。かくてまた明日の快晴を祈りて臥床に入れば、まもなく高鼾き、夢にぞ神や宿るらむなどゝ、それからそれへと想像して、彼等の境遇のそゞろ羨ましく覺え候ひき。

　あなた樣今日の御境遇は、彼の世に時めきたまふ貴婦人令孃方に比ぶればこそ、御不滿にも思召さるべけれど、上には上あり、下には下あり、炎天に荷車の後

押す女の事を思ひたまはゞ、誠に結構なる御身の上に候はずや、あなた樣は何を樂しみにと仰せられ候へども、樂みの多少は、必ずしも金錢の多少、身分の高下に由るものには候はず、流行の衣裝を着飾りて、これ見よがしに芝居見花見に行くのみが、△婦人唯一の樂にも候ふまじ彼の車推す女とても、身に應じたる樂みを樂みとすればこそ、日毎の勞働も苦しとも思はざるなれ。ましてあなた樣などの御家庭には數へ盡くせぬほどの、御樂はこれあるべきを、御氣の持ちやうにて、其の樂みを樂しと意識したまふにはあらじや。いでや婦人にふさはしき四時の娛樂をつぎ〳〵に述べて、聊か御心を慰め奉らん。言長くとも一と通り御聽きあらまほしう候。



○まづ第一に新年は家庭に於ける最大樂事に候はずや。無事に去年を送りて、めでたく新年を迎へたるよろこばしさは、一家皆同じかるべけれど、わきて年の暮の厨に、いそがはしく芋大根を洗ひ、午蒡人參を湯がき、煮豆の砂糖加減に手並を見せ、數の子の漬け工合に心を配り、味噌も摺り、鰹節も削り、雜煮吸物の用意はおろか、鏡餅を三方の上に飾り、三種を重箱の中に詰め、夜深けて燈

下に持つ針に、子供の着物の縫上げまでもおろし、一切萬事おのが手一つに仕果せて、さてめでたく新年を迎へたる主婦の心はいかに成功の誇りと愉快とに充たされ候はんか。一家うち揃うて祝ひの膳に向ひ、まづ取り上る。

△嘉例の大福茶

梅干顔の姑御も、けさはにこ〳〵として、雑煮の加減よきと煑豆の柔らかきとを褒めたまへば、だうしましてと譲り葉の言葉に誇りを現はさねど、心の中の喜びは數の子の數々つきぬなるべし。今日は一人前の膳椀をあてがはれて、うち悦ぶ幼兒が、手つき覺束なくも、口を汚し膳を汚して雑煮食ふさまのをかしさには一座は笑ひ興ずるならむ。操變らぬ松飾り、まめ〳〵しくも何やかや、心を配るかひありて、浮世の風波にかち栗や、さすがは芋の親がしら、子供の髪を先きにして、あとで結はせし丸髷の、まるく治まる一家内、みな〳〵共によろこんぶ、これ皆主婦の腕前と申すものにて、一年の計は元日にありとすれば、元日の計は主婦の方寸にありと申すべく、其の責任の重きだけ之を爲あふせたるときの愉快は此上あるまじと存じ候。あなた様には、しかじか思ひたまはずやいかに。昔しの俳人は、元日やこの心にて世に居たしと、詠み殘し候ひしが、こは獨り男の上のみならで、一家光明の源泉たる主婦の心は、何時も元日のやうにありたきものに候。いかに平素沈みがちに涙多き御婦人にても、元日にはよもや泣き顔は致されまじ。元日の心にてだに居らば、三百六十餘日の間、不足といふ心は起らぬはづと存じ候。

次に新年何よりの娯樂は、かるた遊びにて、都にてすなるやうなる競技こそ、幾多の弊害も伴ふべけれ。娘子持たる〻家庭にて、年の初に親戚知人の子供を集めて此の會を催したまふことは、家庭に缺くべからざる行事と存じ候。もてなしとては、蜜柑に安倍川餅位にて、お客は滿足したまふべし。近ごろ私が少年少女のために物せし作文書の中に、かるた會の記とて、召に應じて馳せ參じたる者すべて十人、やがて兩軍

の部署も定まりければ、疊縁河を境として對陣す。われは北軍に屬し、その左翼の一隊をひき受け、敵のすきまだにあらば突撃を試みんとひそかに敵陣の形勢を伺ふにかしこに、ふじの高根あり、こなたにうべ山峙ち、有明の月は光さやけく、龍田の川には紅葉流る。秋の田の垂穂は刈りつくされ、人目も草も枯れはてたれば展望にはいと便りなし。されどわが陣頭に鵲



のわたせる橋ありて、敵兵不意に襲ひ來んも測られねば、哨兵の任務極めて重し、かくて敵情の偵察も了りければ、兩軍こゝに戰を始む初の程こそ互に守勢を取りつれ、暫し經て後は亂軍の姿となり、わが逢阪の關門先づ奪はれて、敵は我が砲兵陣地なるみかさの山をも拔き取り、あはや本陣なる末の松山をも陥れんとし、伏屍は狼藉としてあなたこなたに散亂し、全軍の形勢既に危く見えけるが、此

の時わが豫備隊は、敵陣に奇襲を試み、打ち出す拳の彈丸に、敵のうへ山を粉碎し、敵陣やゝ色めきて見えける處を、すかさず突貫して終に其の本陣なるふじの高根を占領しければ、今は形勢全く一變し、遂に我軍の勝利となり、どつと揚げたる勝関に、釣らんぷも動かんばかりなりき。この後、敵は屢々逆襲を試みしかども、大勢は既に定まり、敵軍ますく振はず、終に會主の仲裁によりて媾和し、今までの殺氣黯談たりしにひきかへ、互に膝を交へて談笑しやがておのく陣地を引き揚げて家路に急ぎぬ。

など〻書きつけ申候。かくも花の如き少年少女が、うち興ずるさまを見そなはし給ふも、年頭の樂事に候はずや、かく申さばそは若き間の事よ、年とりてはなどといひ給ふべけれど、巧妙なる讀み方に昔しの腕前を示し、一度や二度は仲間入りして、青春の昔を偲びたまはんも、面白くはおはさずや。

春の彌生の雛祭。これまた優にやさしき行事にて、娘子持たる〻御家庭には、こよなき娯樂と存じ候。あたりまばゆき金屏風、燃えた〻むばかりの紅氈などは上つ樣の事として、一と通りの雛壇設くるには、何ほどの費用のかゝり申すべき、日ごろ粗末にして損じ易き玩具などを子達に買ひ與へたまふことをば止めて、其の代を積み置きたまはゞ、雛祭りに必要なる調度を揃へんこと、さまでの難事にも候ふまじ。さて翠簾垂る〻處、緩かに坐を占めたまふ。

△男雛女雛

の相好端麗なるに對しては、夫婦和合の美を悟るべく、三人上戸を見ては賤が身にもまた樂みあることを知るに足るべし。三方に供ふる菱餅は、野人献芹の意にもかよふべく、花瓶に挿したる桃の花は、雛にかしづく乙女子の、ゆくすゑ美はしき實を結べとの教訓にや候はむ。市松人形に武者人形、愛らしくもまた勇まし。人の妻となりては、かゝるよき子を設けよとの心にも候はむか。小さき竈に小さき鍋釜、さては膳椀皿鉢德利水桶庖丁俎までもとりそろへて、こゝに料理の小研究會、あるじまうけの小主婦は、やがて未來の良

妻賢母、いかに樂しき事に候はずや。

さてまた野も山も霞につゝまれ、花笑ひ鳥歌ふ春の最中とも相成候はゞ、いかに忙しき御身にも、などか一日の閑なかるべき、子達めしつれて野邊に逍遙したまふとも、姑の君も夫の君も、よもや贅澤ともいはるまじ、よもや止めはしたまふまじ、かしこの畦、こゝの堤に、すみれたんぽゝを摘み、さて疲れては、天鵞絨の如き若草の上に風呂敷延べて、取り出す割籠の中は、五目飯に、そらまめ燒豆腐の煮染、なまり節を最上の珍味とするも



家に居て食べたまはんよりは、また格別の風味なるべし。かくて入相の鐘の花に響くころ、うちつてれ歸りたまふも、樂みは十分に候はずや。

やがて新樹色深く、野邊の菜種の刈り倒さるる頃とも相成候はゞ、こゝの澤邊、かしこの川端には、飛びかふ螢の影も見え候はむ。御子さまたち召し連れて、夕餉の後のそゞろあるきも、また一興には候はずや。

△端午の節句

これまた樂しき行事の一つにて、勇ましき武者人形は床の間に飾られ、凱旋の鯉幟は翩翻として屋上に飄る。見るだに活氣の家に滿つる心地す、今日は坊のお祭りよと、我物顔にうち仰ぎうち見て、笑みくづれたまふ和子さまの、朝の寢覺めやさぞ早く候はむ。菖蒲の湯に身も心も淨め、一家の慶を粽に包みて親戚知人に配るは、いかにめでたき例に候はずや。

夏はさすがに暑さの酷しくて、黄金に事缺かぬ人々は、避暑よ海水浴よと贅澤の數々を盡すに、さる事は夢にだも見ず、流るゝ汗にしほたれて、洗濯糊付の勞は、さる事に候へども、暮れぬ間にと、晩餐をも行水をも早く濟ませて、打水したる庭の垣根に夕顔の花ほの白く、軒に岐阜提燈の光涼しきあたりに端居して、團々たる明月の東山に上るを眺めたまはゞ、一日の暑さも疲れも忘れやしたまはむ。

△七夕の星祭

に、願の絲のいろ〳〵に染むべきを見たまはゞ庭の敎のよしあしを悟るべく、小笹に結びつくる色紙に歌かく娘子の手跡を見たまはゞ敎育の効果も驗せらるべし。古き机とり出でゝ、瓜に茄子に、芋南瓜、大角豆など、今とりたての畑つ物を供へたる、その數々は靑物店のそれならで、皆わが畑に生ひつるものよと思ひたまはゞさまで貧しきを歎じたまふにも及ぶまじと存じ候。盂蘭盆の魂祭こそ一年一度の祖先祭ともいふべきものに候へば、主婦たる身の勞は一方ならじと存じ候へども、心盡しの飲食を佛壇に供へ、祭ること在すが如き立ち振舞には、祖先の靈もさぞや快く饗けたまはむ、主婦たる者の心の慰安はいかばかりぞや。新調の浴衣の縞柄よく身にふさひ、お白粉厚く塗りて嬉しげなる娘子、まわらぬ舌おぼつかなき足元ながらも人の眞似して踊る幼兒の愛らしさには、自づとうち笑まれやせむ。

やがて小春の日和とも相成候て、垂穗の稻の黄ばみ渡れる頃には、半日の閑を得て蝗取りにゆくも興あることに候はずや。鎭守の祭に天長節、何はなくとも人を招きまた招かれて、赤飯煮染に鼓腹し、大御代の萬

歳をことほぎ、

を祝ふなど、なんぼう樂しき事に候はずや。かくて

△我家の繁昌

年の暮ともなりて、煤掃に一年中の塵と煤とを浄め、天井柱杯のつや〳〵と光るまでに片付きたる餅搗に幾臼の餅を搗き終りて、切餅鏡餅の數々出來上りたるなど。いづれか樂しからぬ事の候べき。凡そ以上に述べたる娯樂の數々は、皆さまでの費用を要せずして、却て趣味の多きものに候へ



ば、これこそ眞の樂みと申す者に候へ、彼の迹腹の痛み候やうの事は、樂みにはあらで却て苦の種かと存じ候。

あなた樣にはまた旨い物一つ食べるでなしと、日ごろの粗食を御不滿のやうに申され候へども、これとて一寸御一考遊ばされ候はゞ直にさあらぬことを御悟りなさるべく候、都會に住める人々の生活の程度は、田舍に比べては、稍高くは候へども、これとて萬人は萬人とも、三度の食事に魚肉

を食べ候にはこれなく、ことに野菜菓物は概ね日數經たるもののみにて、新鮮なるは容易に手に入り申さず候。此の點については却て田舍こそ羨ましう存じ候。まづ試に御考へ遊ばされよ。

△彼岸

には花よりも團子をこしらへて、家族を喜ばせ、自分も食べ候事、極めて安價なる食道樂に候はずや。木の芽はる頃に相成候へば、豆腐田樂は何よりの風味、根芹に嫁菜ほうれん草、浸し物にはこれに上越す者のこれあるべきや、手製の新茶の香り高き、新鮮なる筍の、煮たる和えたる飯に入れたる、いづれか口にかなはざるべき、青そらまめに靑豌豆、こは初夏における何よりの御馳走に候はずや、胡瓜もみの淡白なる、茄子の鴫燒の滋味なる、さては女の好くといふなる南瓜も、心のまゝなるべし。夏は冷素麵に暑さを忘れ、冬は大根のふろふきに身を溫むべし。秋の松茸しめじの佳味なるは申すまでもこれなく候。野菜のみかは、田螺に蜆、泥鰌に、もろこ鮒鯰、さてはうなぎ、四時をりそりの肴に事缺かず。鮎の鹽燒、鯉の洗ひ、都人よりも却て多く口に入り候はむ。雉子山鳥しぎ、さては豬肉などの新鮮なるも、時には廚に上り候はむ。少し心して鷄の二三羽だに飼はゞ、茶碗蒸しの卵には不自由あるまじと存じ候。

春の日永の間食にはかき餠あぶりて澁茶を啜るも、徒然を慰むるに足るべく、即席の五目ずし、またこれ晝寢の夢をさますに足らむ。凡そ此等の料理は常々あなた樣の御口に入り候に違ひあるまじと存じ候。さすれば何一つ旨い物食べずとの愚痴は、自然に消滅致すべきかと相考へ申候。なほ此の外に裏の畑に四季の草花を絶やさず、時としては一輪の椿、一枝の梅を挿んで、御主人の書齋を飾りたまふなど、いとも淸らかなる娛樂に候はずや。

以上長々と書き連ねし事どもは、中流以下の婦人とてもすなる事に候へば、あなた樣には無論これらの御樂しみは享け居られ候事と存じ候。さるを何とて我には樂なしと、かこたれ候にや。まだ其上にあなた樣は

人にも増して、より大なる幸福を御身に備へたまへる事に御氣附かれ申さず候や。そは外の事にてもこれなく、一つはあなた樣の人にすぐれて御健康にわたらせたまふこと〵、一つは玉にも黄金にもましたる子寶を持たせたまふこと〵に御座候かの家富みて何一つ不自由なきあたりの令夫人などは、常に藥餌に親しみたまふが多く、胃病に顏をしかめ、肺病に心を痛め、牛乳よ滋養品よ湯治よ海水浴よと、金にあかして療養したまふかひもなく、とかく捗々しからで、おもしろからぬ月日を送りたまふが多きを、あなた樣には、日ごろの御立ち働きこそ御辛勞にもあれ、御身のすくよかにわたらせ



給ふは、何よりの樂しき事に候はずや、定めて、

△三度の御食事

も、味よく召し上りたまふならむ。これ全くあなた樣の御勞働に對する天與の恩賞と存じ候。また世には子なくして一生を寂しく暮し年老いて養ひを受くる者なき人さへあるを、あなた樣には愛らしき御子さま二人までも持たせたまふこと、大凡そ世の中にこれに増すべき幸福のこれあるべきや。朝顔一つ培養致し候ても、其の日々に成長して芽を出し葉を生じ終に花を開くを見ば、樂しきものに候は、我子の成人を見

る樂しさは、いかばかりに候はむ。あなた樣にはなはそれにても我に幸なし樂なしと、かこたれ候にや。よく〳〵御勘考あらまほしう候。

さはいへ、よき衣着たるは男とても快きものに候へば、かく申しては失禮に候へども、虚榮心の滿々たる御婦人の身として、世帶の苦勞に靑春の色澤は迹を留めず、鏡に映す面影は見かはすまでに窶れたるに、世には綺羅を飾りておもしろをかしく、

△物見遊山

にゆく女もあるよと思ひたまはゞ、嫉ましうも羨ましうも思ふ心のむろ〳〵と湧き出で、はては現在のわが境遇を悲觀して、身も世もあられず思ひ迫りたまふは、千萬無理ならぬことゝ御察し申上候。されど〳〵その嫉ましうも羨ましうも思はれたまふ人々の境遇とて、決して局外より見るほどに樂しきものにはあらじ。そをいかと申すに大凡そ人の慾には限りなく、これにて滿足といふことのなきものに候へば、富めば富むほど煩悶の度を高むるものかと存じ候。現に昨年十月頃の朝日新聞に大阪市の誓文拂に、金滿家の細君が懷に大枚の黃金を持ちながら、呉服店の反物を萬引して縄目の辱を受けし者、三四人もありしとの記事これあり候ひしが、これらは全く其の適例と存じ候。そのうへかゝる筋の御主人は、黃金の多きにまかせて、花柳の巷に歩を枉げたまふが常にて、その婦人が寒閨に一夜を泣き明かしたまふは珍らしからぬことゝ承り候。畢竟苦は色變へると申す下世話の通り、涙は金殿玉樓の中をも見舞ふものに候。これを思へば情深き夫にかしづきて、親を養ひ子を育つる大任をおのが身一つに負ひ、物質上に於てこそ幾多の不自由を忍べ、精神上にこれといふ苦勞のなきは、婦人の身に取りていみじき幸福に候はずや。あなた樣は、しか思さずやいかに。

元來世の中には絕對の樂みといふもののなき代りに、また絕對の苦みといふもなく、却て苦みの多きだけ樂みの多きものに候へば、苦中に樂を求め候心掛こそ處世の要訣ならめと存じ候。あなた樣にも此の邊の道理をお語りなされ候はゞ、昨日までも今日までも、つら

しと思ひたまへる御境遇は、濶然一轉して、

△春風和氣

の天氣と變じ、申すべく、あなた樣だに此の心もて御家政を掌りたまはゞ、御氣むつかしき御老母樣にもなどかあなた樣のまごゝろの通せざるべき、御主人樣も中心より内助の功を感謝したまひて早く我が親我が妻子に安樂させさせんとの勇氣をひき起さるべく、その中に御子樣達は段々、御成人遊ばし、行末いかに御出世遊ばされんも測られず、げに前途の望は洋々として



海の如く、けふの御辛勞を昔し語りにしたまはんは、遠き未來にあるまじと存じ候。だうか以上申述べ候ひし私の卑見をよく／＼御玩味の上なるべく、御氣分を腐らさず、快活に御持ち成され候樣、偏に祈上候。下所の長談義、さぞ御退屈におはしつらむ御免し下されたく候敬白。

會津地方にての正月餅は長さ二寸五六分巾一寸三四分、長方形のものにて、すまし汁に芹、〆豆腐、鮭の腹子、烏賊、牛蒡、ちくわを入れ餅とゝもに煮る。

かるたの取り様

小倉山人

新年が來た、新年が來た、嬉しい樂しい新年が來た家の内は和氣と笑ひ聲で滿ちて居る、門を出れば門松の翠りは、旭旗の紅と映發いて、新しい希望を語り顔で見る者聞く者、悉く新らしく且つ長閑だ、道行く人の顔も昨日と打て變つて、如何にも暢び〱して居る。

新年は新年で、凡そ新年程人の心を新らしくする者はあるまい、新らしくするのみならず、亦た長閑にする、實に新年は、此の目の廻る程忙はしい、生存競爭の激烈な今の世の中で、人間に取りて無上の安息日であるから、此機會を外さず能く命の洗濯をするが好い啻に命の洗濯のみならず、亦新年は一家の和氣を增し、朋友との交誼を厚くすべき絶好の機會であるから、此機會に一家の和合の洗濯、朋友との交誼の洗濯をするが好い、夫れには健全にして趣味多き遊戯などが好からう。

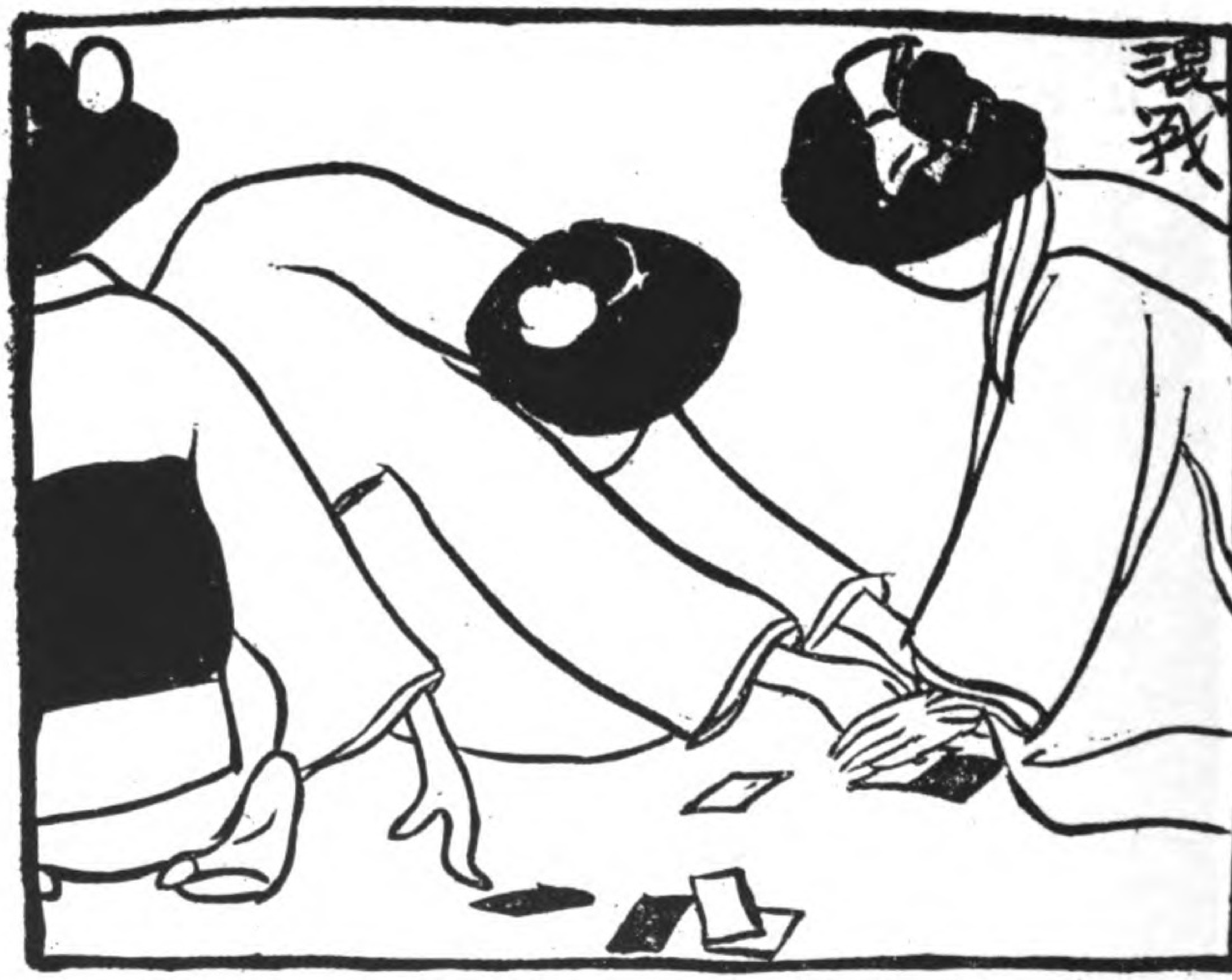
▲歌かるた

新年の遊びとして廣く世に行なはれるものには、雙六とか、福引とか、遣り羽子とか、家族合せとか、其他色々のものがあるが、一番廣く行はれるのは矢張り百人一首の歌かるただ、で此歌がるたが前に述べた命の洗濯にも、一家和合の洗濯にも、さては朋友との交誼の洗濯にも、一番適當で且つ興味が多いらしい、元來百人一首の歌がるたなる者は、定家卿が、嵯峨の小倉の山莊で、襖の色紙に書いた歌で、其百人の詠んだ歌をかるたにした丈であるのに、それが盛んに世の中に行はれやうとは、恐らく定家卿自身も想ひ及ばなかつたであらう、つまりかるたとして、百枚と云ふのが丁度頃合ひであるのと、其歌が一番人の口に誦れ易いのと、今一つ歌其物の調子が如何にも古雅で一種掬すべき趣味があるからであらう。

▲かるたの盛況

一體新年の遊びで、昔から今日まで、上下の區別なく、男女老若を問はず、歌かるた程廣く世に行はれる

者はないが、近年殊に此二三年の歌がるたの流行は非常のものである、取り分け學生間では、此の歌留多取りが、一個の競技となつて來た程で、夫れ〳〵各種の運動のやうに選手が出來て、其景況が新聞に出ると云ふ盛況だから、隨つて其取り方も多くの工夫と熟練とで驚くべき程巧妙になつて、其早さは電光石火も啻ならずだ、元來此の歌るた取りと云ふ遊び否な競技は、最も注意と敏活を要する技だから、人の注意力の集注と云ふことを養成するに餘程功があるさうだ、いでや此の歌るた取りについて、廣く行はれ



て居る方法の概略を述べて見やう。

▲取り方の種類

歌るた取りには色々の方法があるが、今日一番廣く行はれるのは、取り手を二組に分ける、即ち源平と云ふ類であるから、玆には重に此の源平の取り方について述べやう。

一體競技は何に限らず、所謂勝敗は兵家の常であるから綺麗に手際よく遣らなければならぬは勿論であるが、殊に此のかるた取りは、優雅の遊びであるから取り分け綺麗に取らなければならぬ、勝つも負けるも男らしくするがよい、で其取り方には、三通り

ある、第一は其札に觸るゝのみで其位置に殘し置く、第二は其札を他にはね飛ばす、第三は其札を手に持つて來る、近頃の取り方は、第一及び第二の方法で第三は稀れである、第一と第二とは孰れが良いかと云ふに第一の取り方は簡單である、第二の取り方は明瞭して居る、併し札に觸れるのみでは、兩方で取つた時孰れが早かつたか、間髮を容れずと云ふやうな早さの場合には分らなくなつて了ふ、はね飛ばすのであると、少し面倒だが、少しでも早さが違ふと相手が空を打つやうになる、併し此取り方は最初札の多い時には、餘程上手に取らないと、他の札まで搔き廻はす恐れがあるから、最初にはたゞ手を觸れる取り方の方がよいが、終ひに札が少くなり、一枚の札を多勢で狙ふやうになつて來た時には、矢張りはね飛ばす方がよい、夫れから相手の札を取つた時何枚送るが適當かと云ふに、以前は二枚も三枚も送つたが、近來は一枚送るのが普通であるやうだ、又過まつて御手附けさした時は、其札を貰つて來るが適當だと思ふ、尙は又自分の方の御手附けにも一枚貰ふ事にするが善いと思ふ、何故と云ふに貰うしないと無暗に自分の札に手を附けるから取り方が汚くなつていけない。

▲掛け聲と讀み方

かるたを取る時に勢を添へる爲めに、掛け聲を掛けるのが、普通である、是れは氣合上必要の事である、掛け聲がないと何となく氣乘りがしない、掛け聲は品の好い勢のあるものを選ばなければならぬ、下品の掛け聲は、寧ろ用ゐざるに如かずだ、又た讀み方の役は頗る重大なもので、讀み方の巧いと拙いとで、歌るたの興味が異る程であるから、讀み手には聲の好い人を選ばねばならぬが、此讀み方について注意すべき事は上の句の始めの方を殊に注意して明瞭りと讀むことである。適當の速さで、上の句から下の句まで讀み下すが良い、因みにかるたの書體の事を云つて置くが、美的に歌留多を取るのなら、字の上手の人の書いた如何にも歌らしいのが良い、併し此種の歌留多は多くは讀み惡いから、一見して分らない、競技用としては文字が

明亮で字の讀める人なら一寸見て直ぐ分る樣な字體が良いと思ふ。

▲歌るたの排列法

近來歌るたを並べるに、特種の排列法を用ゆるやうになつた、排列法には種々あるが兎に角或る方法によつて札を類別するのである、取り別け最も普通に行はれるのは、上の句の頭字又は下の句の頭字を類別するのである、例へばアカサタナハマヤラワと上の句の頭字を取りて橫に右から順次に並べて同一の頭字の札は縦に並べる、即ち『秋の田のかりほの庵云々』、『天の原ふりさけ見れば云々』、『朝ぼらけ有明の月云々』、『相見ての後の思ひに比ぶれば云



云』と云ふ四枚の札はア行に收容されて縦に四枚列ぶの類であるが、之はホンの一例であるから、必ずしもアイウエオの類別法を取らなくとも、自分の都合の好いやうに何うにでも並べるべしだが、排列法の効果と云ふ者は、札が多ければ、多い程、夫れだけ多大である、又歌るたを並べるには、札の數が如何に多くとも、四列より多く並べない方が好い、且つ餘り場所を廣く取る並べ方は好ましくない、兎に角此排列法と云ふ者は、勝敗に關係する事非常だから、餘程注意するが好い、餘り長くなつたから、此位にして置くとしよう。

蓬萊の緣起

あら玉の年の始の祝ひにとて、家々の床の邊に飾る蓬萊は、芽出度き事の數を盡して、見るも中々心地よきものなり。蓬萊は新年匆々先づ手掛くるを以て手掛臺とも云ふ由、而して之に載せたる祝の品々には種々のめでたき緣起あり。

○橙＝は冬は色づきて美しく、夏は青みて美しく、年月を經ても落ちず、別けて其名さへ床しきをもて、代々替らぬ祝ひにとて用ふる由、言傳へたり。

○海老＝は同穴のむすび、偕老のちぎりに事寄せて、夫婦共々幾久しく世を經んとの意にて用ふとなむ。

○榧實＝は長壽を祈る意、蓋し俗間に榧の實は心氣を壯にし、久しく用ひて病氣を發せずと言ひ傳へたるに因るならむ。

○柑子蜜柑＝は常世の橘をかたどり用ふるなりと云ふ、橘は萬病を除く德ありて、人皇十一代垂仁天皇の皇后の宮の恙なく御降誕あらせ玉ひし言傳へあり。

○昆布＝はヨロコンブなり、是は海草の內にて葉最も大きく、且つ神代の昔魔王退治の折、昆布を屋根に葺かせ玉ひ、御運開けたる吉例さへあるに因るとぞ。

○菰草＝之をたばねて穗俵といふ、年の始より俵を獲るとの祝の意なり。

○野老＝は繁昌を祈る意、蓋し鬚多く老人の姿に似通ひたるをもて、やがて祝壽の意に轉じたるものなるべし。

○栗＝は和笑と勝との二種の意味あり、和笑は熟して外皮裂け、笑を含むをいふ、勝は勝栗にて天武天皇田原の里に於ける故事に因むとあり。

○柿は＝實をかき集むると云ふ意にて用ふ、又た七德ありといふ說もあり。

○熨斗鮑＝は肩怒りて腰細くして神代の人形なり、且つ壽百歲を保つてふ故事によりて祝ふなり、古事記に、天照大神伊勢の國五十鈴川の河上にて神代の人形を造り云々と記しあり。

料理

珍饌田舍料理

齋藤鹿山

料理と小言

近頃は頻りに家庭料理といふことが流行り出して、立派な奥様が、襷をかけるやら、白い前掛を〆めて、お三どんと一處に勝手元を働くといふ風で、中には、鍋を掛けてから急に書物をお調べになる、妙なもので急げば、其見たいと思ふところが見當らない、あつちをめくり、こつちをめくりする中に、鍋が煮こぼれる、灰神樂が立つ、あわてゝ起つて、猫を蹴飛ばす、蹴飛された猫が驚いて、醤油の罎を倒すなど、大きな騒動が始まるなどの珍談もあるさうですが、何は兎もあれ、お手料理といふことは至極結構なことで、第一身體を養ふ爲めの食物でありますから、一から十、皆お三どん任せにして、不味いと云ては、小言を食はせ、鹹いと云つては眼玉を食はせるやうでは、お三どんが助からない斗りか、お旨くないと思つて食べたものは身になりません、それに勝手廻りの事を、奥様たるものが座布團の上にしやんと座り込んで、萬事人手任せでは不經濟此上なしであります、それのみならず、腹の黒い下女などは、それを好いことにして、米や、味噌、醤油を誤魔化すなどの事は往々有勝ちですから、中等以上の奥様が、臺處に重きを置いて親ら手を下すといふことは至極美風でありますが、是も一時の流行かも知れませんが、若し左様であつたならば、其流行の何時までも廢らないことを希望するのであります。

料理と愛情

それから家庭料理の大なる効能は、一家の和樂を得る根本であります、男は多くは外へ出勝ちのもので、隨つて場合によつては料理屋へ這入ることもあれば、

又は餘處で旨いものを御馳走になつて來ることも珍らしくない、それで口が多少食味を解するやうになつて居りますから、其處へ持つて來て、お三どんが赤胼だらけの手で掻廻したお惣菜なんかは、實際感服したものでは無いのですから、懐加減の許す限りは、チヨイチヨイ茶屋這入りをする氣にもなる、いくら教育が高いの何のといつても、男は離れ馬といふ譬言に漏れず、それが嵩ずると餘り好いこと斗りもしないもので、果は二人とない奥樣の顔が、お多福の樣に見えるといふ始末になるものですから、奥樣たるものは、食物の調理法に心を用ゐて、良人を喜ばしめるのは、夫婦間の愛情を増す所以であります。

主人の嗜好

細君たるものは、誰よりも最もよく良人の嗜好を解して居る譯でありますから、其嗜好によつて工風を凝らして、それぐ\調味するといふことになれば、今晩は内のが何樣な御馳走をするだろうか、などと考へながら、急いで歸つて來るやうになるのは必定で、若し玆に「平和」とか「和樂」とかいふ、話題があつたとすれば、如何なる名畫家と雖も、家族團欒して食卓を取るの圖以上を畫することが、恐らくは出來まいと思ふのであります。

おなぐさみ

けれども、中には、冷たい水に手を入れて胼をきらしたり、七輪の火をおこして灰を被つたりするのは厭なのが第一、それに人の妻たるものは、お三どん同樣に勞働までもしなければ、良人を滿足させることが出來ないものでない、外に又種々な方法もあるなどといふ御婦人もありませう、けれども、臺處で働いたからとて必ずしもお三どん同樣だといふ筈がない、趣味といふものは、何事に限らずやり出して、段々と覺え込んで來ると、其間に湧いて來るもので、百姓が朝から晩まで鍬を持つて畑をうねつて居るのも、外からは如何にも難儀さうに見えますけれども、當人は其間に一

種の趣味を以てして居るのと同じことで、タトへばお汁の加減が心通りに出來たとか、又は工風して拵へたものが、思の外うまく遂つたとかいふ場合には、實に何とも云へない愉快を感ずるもので、遂には自ら進んで、あれもして見やう、是もして見やうといふ氣になるものであります。

お惣菜式

家庭に於ての調味は、どんな風にすれば宜からうかといふに、純粹の西洋料理でも、全くの支那料理でもいけない、此節の事であるから生粹の日本流でも又いけない、殊に料理屋式のは、主に酒の肴として出來て居るので、御飯の、、、おかずには向かないのですから、猶更いけない、家庭の料理はお惣菜式を本位として、それに支那、西洋の料理を折衷したものが、最も適することであらうと思ふ。



工風一番

それに其やり方も成るべく凝つたやり方でなく、尋常一樣のものをうまく喰べられる樣に工風すること、タトへば豆腐のお汁を拵へるとしても、今日は醬油仕立の方は可からうか、それとも味噌の方にしやうか、上置の海苔は、靑海苔にしやうか、只のにしやうか、一寸いとしたこと

でも、いろ〳〵と工風をして、うまくたべられる樣にするのが肝要であらうと思ひます。

本來の味

それにつけても味のことですが、肉類でも、貝類でも、又は野菜物でも、それ〳〵一種特有の自然の味がありますが、斯んなことは今更言ふまでもありませんけれども、人によつては、其味を自然に味はへることを知らないで、外の味を附加へて、主たるべきものゝ本來の味を害して了ふやうなことが、素人料理には免れない短處で、此本來の味を味はへるといふことが、中中肝腎な、且趣味深きやり方であります。

味の死活

元來外から別に味をつけるといふことは、原料の稍古くなつて、自然の味の變じた場合にすべきことで、本當の事を言つたら、何によらず新らしいもの程うまいものは無いのです、斯ういふと、それでは酢も醬油も要らないかといふと、それはいけない、固より酢も要るし醬油も入る、味淋も要れば砂糖も要り、場合によつていろ〳〵であるけれども、やり方の上手下手によつて、味を殺すと活かすとの算段があるのです、悉しくいふと、例を擧げて說明しなければなりませんが、それでは長くなりますから、茲には省きますが、味の死活といふことは、よく〳〵考へなければいけません。

料理は理屈にあらず

此節は種々な料理の本も出て居りますから、それを買つて、いろ〳〵ためして見ると、兎に角似寄つたものが出來ますさうですが、中には數字の誤植を其儘にやつて、舌のつむやうな鹹いものを拵へたり、鼻が彈けさうな辛いものを拵へたりする奧樣もあるといふことを聞きましたが、料理といふものは、理屈斗りで通るものでないから、一通りは稽古を積まなければ可けません、一通りの稽古をさへすれば、あとは、其人の

才覺によつて種々活用の餘地がありますので、新しい工風はいくらも出來るものでありますが、此活用といふことは、婦人には餘り得意の方のないやうです、併し其得意でないといふのは、一一先生から斯う敎はつたから何處までも其通りにやらなければならぬといふやうなことに頭を支配されて居るからであらうと思はれます、或學校を卒業した夫人は、學校に居つた頃は、瓦斯で煮燒をしたので、內には瓦斯がないから、煮燒が出來ないと云つたといふ話のやうな話がありましたが、料理は拘泥せず、何でも活用が主です。



活用が第一

それで活用といふになると兎に角種々な例を調べ、いろ〳〵のものを喰べて見る必要がありますから、二ッ三ッ御參考に東京で見たことのない料理を御紹介することにします、尤も最も本當の料理ではない、ツマり田舍のお總菜であります。

味噌の味

是は主に東北地方の料理でありますが、あちらには、味噌は一種しかありません、丁度東京の赤味噌の様な今少し鹽分の多いので、それで、汁にもなれば、物も漬けるといふ有様である、味噌料理の色々ある中に、或るものを擂交せて、其儘におかずにすることがある、是は一寸他には珍らしい、尤も、鐵火味噌などは此地にもあるけれども、

▲胡麻味噌、是は六ケしい事は無い、黒胡麻を煎つて、よく擂り、砂糖を適宜に加へて、味噌へ擂交せるので、但し緩める爲めに味淋を少し加へますが、此胡麻味噌は、風呂吹大根を喰べるに附けたり、又は御飯のおかずに甞めるのです。

▲葱味噌、是は葱の白いところを細く刻んでから、擂鉢でよく擂り、酒で緩めて味噌へ擂込むので、是には砂糖を加へません、風呂吹大根、又は湯豆腐をたべるの料とします、因に云ひますが、此節は東京風に醤油で湯豆腐を喰べる向もありますが、多くは、葱味噌で喰べます、それで豆腐の方も白湯でなく、少し斗り鹽を加減して、昆布で出しを取ります。

▲柚子味噌、蜜柑味噌、是は其皮を擂潰して味噌へ擂交せ、味淋で緩めますが、是も甞めものにして居ります。

▲胡桃味噌は、胡桃の仁を擂交せるので、是と胡麻味噌とは、物を和へるにも用ゐます、其和物はといふと、大根か菊で、大根は千六本に刻んで、湯煮をして、それから水へ取り、よく絞つてから和へます、菊は、料理菊を茹でゝ、矢張り水を切つて和へます、春季には獨活なども、茹でゝ、是で和へます。

併しこんな味噌料理は、他の地方にも或は爲ませうが、一種特有のは「タンポ」といふもので。

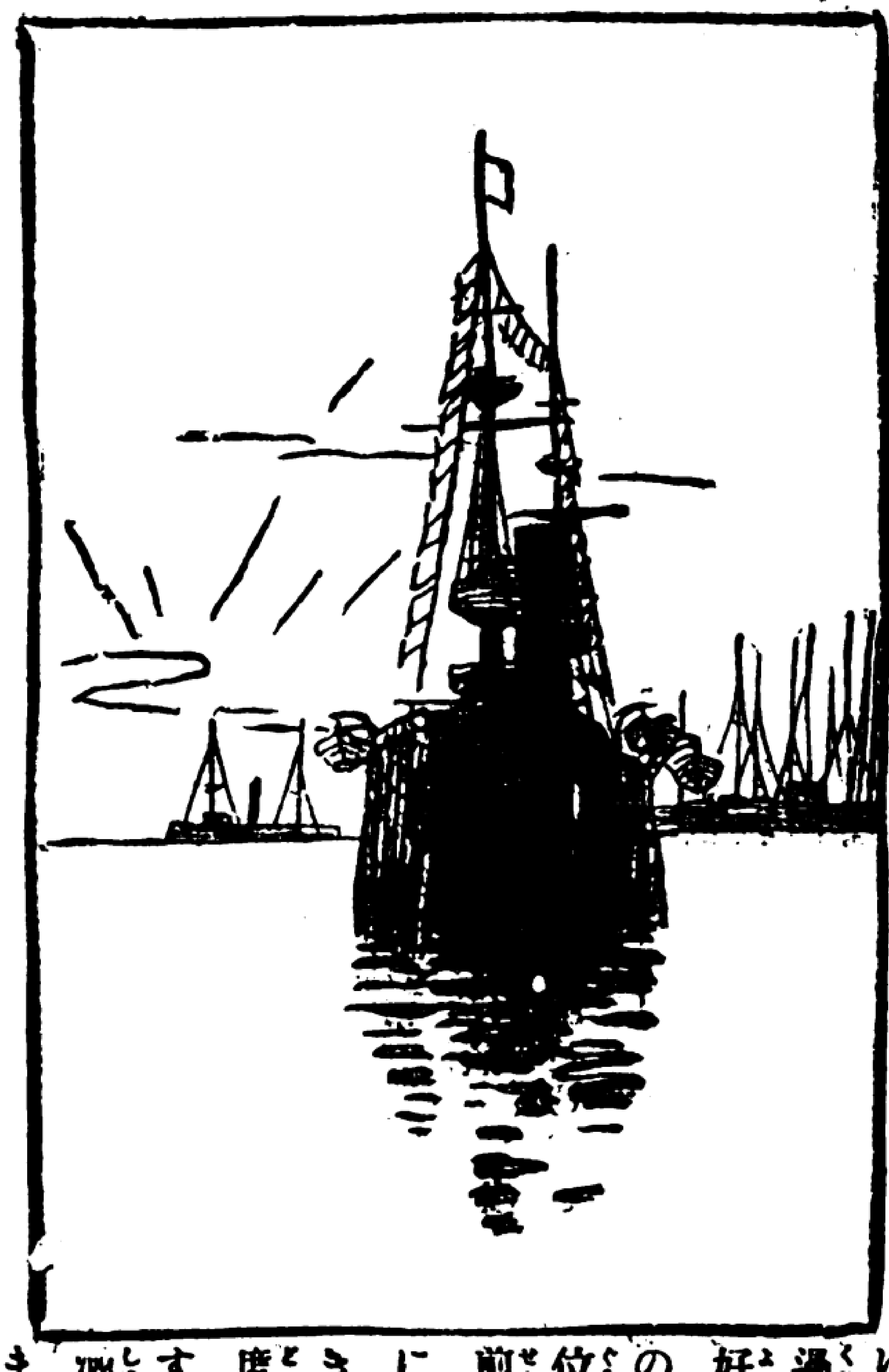
一種の握り飯

是は或は味噌料理といふよりも飯料理といつた方が近いかも知れませんが、先づ飯をザッと擂鉢で擂りつぶして、平たく削つた串へさして、三寸斗りの長さの手頭の太さに握ります、出來たところは、何の事は無

い蕾の穗のやうなものになります、それを爐へ炭火をおこして、ザット燒いてから、味噌を塗るのですが、味噌は、前に述べた胡麻味噌を水で一層ゆるめたのとか、又は砂糖で甘みを附けて摺つてゆるめたのですが、是は外には餘り聞いたことの無い料理。

魚漿

味噌は是位にして他へ移りますが、彼地では醬油は刺身とか、浸し物へかける外、餘り多く用ゐません、汁などは多くは味噌汁ですが、其代り一種の醬油がある、それは魚類の鹽漬の液で、と斯ういふと、如何にも汚ならしいやうだが、決して左樣でない。



それに用ゐる魚類は、鰯、鰊、又は「はた〳〵」などですが、それを鹽と麹とで漬込んで置くので長くなると澤山に液が出ます、新らしいのは一寸腥味がひどいけれども、五七年も經過したのになると中々好い味になります、念の入つた家では三年目位になると液を漉して煎じて瓶へ入れ、嚴重に封をして蓄へて置き、年々入梅上りに一度煎じて布袋で漉しますから、古くなると古酒の樣な琥珀色になります。

是は所謂魚醬ですが、あちらでは「しよつちう」と稱して、是で鹽加減して、鯛とか鱈とかを煮ますと、一見潮煮の樣で、而して一種珍妙な味です、又此液の昆

布出しで豆腐を煮て喰べますと、普通の湯豆腐よりも一層輕く可なりおつなものです。
此外、家庭料理に參酌し得るだらうと思ふ田舍式料理も澤山ありますが、餘り長くなりますから此邊で止めて、更に次號に書くことにします。

春の花 秋の紅葉 料理の組合

大日本割烹學會長
割烹學校創立者　石井泰次郎

料理の流行は、料理の批評に由て、進歩するのである、料理を習ふ者は、料理の批評を學ぶ必要がある、料理を食する者も、又同じ事である、料理を習ひ、料理を調へ、料理を食するに、まづ其可否をいふのは、料理に進歩をあたへる近道である、然るに、今眼前に料理流行の聲が聞えたり、聞え無くならんとしつゝ有るのは、即ち此批評を試むる人の、批評眼なく、たゞ出來れば食し、見れば出來たりといふばかりにて、何も云はずに口腹をみたすに過ぬに起因つたので、實に料理流行の時勢は、まだ〳〵現今の有様では見る事が成らぬので有る、料理店の洗方が化して、割烹大家となつたり、料理店の女中が變じて、女學校の教師となつたりして、割烹する所の料理を、出來たりと云ひ、食し得たりといふ、斯の如くにして料理を以て自ら任じて居る者があるのは、誠に可笑い事である、と云つても、割烹の批評の仕方に附ての例證を云はれば、如何にして料理の可否を斷定すべきかを知るに苦しむ、わけで有るから、春の料理の組合せと、秋の料理の採合とを舉て、つゞけて其批評の仕方の一例を示す事としよう。

春の料理の組合と批評

○吸物――若布、煮込かつを、三州岡崎味噌仕立。
○口取――うに蒸鯛、鹽蒸うづら、煮染蕗の薹。
○刺身――掻鯛、めじまぐろ、おろし東芋、山葵。
○鉢肴――ロースヤキ、にしめポテート。
○茶碗むし――金銀玉子、貝の柱、薄葛餡掛、海苔。
○酢浸――生蛽、みぢん生薑、橙酢。
○中皿――湯引烏賊、ふくめ嫁菜、土筆。
夜食として、次に進むる品々。
○向皿――さより魚、サラダせん切、紅防風。
○椀盛――小鴨しんじよ、火取はせ、筍、柚子。

○飯　○香物　○湯　○菓子　以上。

右拵方の覺書(但し略がきなり)

吸物 は三州みそを、擂盆ですり、うらごしゝて、かつを煎汁にてとかし仕立るなり。實は若布を摘て入るゝ、かつを削りたるを入れて煮こむなり。

鹽むし鶉 は鶉の羽根と臓を去り身を卸して、醬油につけおき、さて豆腐を布にて包み水をしぼりて、炒どうふの如く鍋にて、味淋酒、醬油を加へて味をつけ、又木茸せん切、味をつけて共に入れ、玉子をつなぎにませて、竹の皮へ鳥の身をのせ、中へ豆腐をくるみ、竹の皮にてぐるりと包み、四ヶ所ほど糸にてくゝり、蒸籠に入れむすなり。



海膽むし鯛 は魚の身をおろして、薄鹽をあておき、又うにゝ玉子の黄味ばかりを合せて、擂盆にてすりませて、魚を竹の皮の上にのせおきて、其上より、馬尾篩をかぶせ、右のうにを漉て(木杓子で)魚にかけて、蒸籠に入れてむすなり。

ふきの薹 は、上皮を去りて、鍋に入れ湯煮して、煮上りたる時、水へとり暫く漬おき、又湯煮する、かく四五度して、あくぬけたるを味淋酒、砂糖にて煮あげるなり。

かき鯛は、鯛のおろし身を、皮を板につけて、肉ばかりを、庖丁の刄にてこきてとるなり。

おろしいもは、佛掌藷皮をむき、おろし金にておろし、擂盆にてすり、堅魚煎汁、醤油、鹽を加へて加減したる汁を冷して、いもへ加へて、ときて食す。

ロース肉は、うすく切て、味淋酒、醤油にて煮る、煮上る時に、粉山椒を入れかきまぜるなり。

茶碗は、玉子及び、きぬごし豆腐をすり合せ、堅魚煎汁、醤油、みりん酒にて鹽梅し、組合せかきの品々を茶わんに入れむすなり、むし上る時、餡かけ、又もみのりをかけて出す。

生がきは、貝の形よきをみがきて、其貝の中へ大きなる蠣を入れて、酢をかけ生薑をちらして出す。(湯引いか以下のこしらへ方あれど略す)

右は組合せと拵方を示したるもの次は、採合と批評を記したるものなり、○菓子　鶴の子餅

○吸物――雲丹つみいれ、あられうど。

○口取――鳥かまぼこ、土佐煮きんこ、雪中いも。

○刺身――大炮魚、貝はしらよせ、星鰈、海素麪、山葵、煎酒、土佐醤油。

○鉢肴――フライモドキ。

○茶碗――たひら貝せん、莫大海、魚素麪。

○向皿――鱠、短冊うど、白ぬたあへ。

○椀盛――けんちん袱包、○香物　花まる、菜。

うにつみいれ、土佐煮きんこ、雪中いも、フライもどき、魚素麪、袱包等のこしらへ方(畧之)

○酒の前に、菓子を出したるは、食味を損する物なれば、後に出すをよしとす。

○吸物には別に評なし。

○口取數品は、申分なくことに煎海鼠の煮方は最もよし。

○刺身は、造り方、手際あしく、又煎酒に味淋酒を加へたるは惡し、是は上古酒のみを可とす。

○フライもどきは、仕立方最も惡く、第一海老及び蠣を揚げるに、胡麻の油にてあげるよりは寧ろ豚

の油にてあげる方可とす、又胡麻の油にてあげる時はブローチングペーパ（俗に吸取紙或は押紙といふ）に載せ、上下の油氣を去るべし、又青みの添には葱のあげたるを出したれど、反て生葱を一寸五分位に切り、二三本そへたる方よかるべし。

○右の外、酒のかんの仕方及び、乾かれひの代に平目を用ひたる如き、客の最も非難する所、刺身に大實魚の尾鰭をかざりつけたるは、鰭をさしてかざる美味の意にかなへり。

秋の料理の採合と批評

○向皿━鮒、燒がしらかけ、橙酢。

○汁━ひこつみ入れ、しらげ卯の花、さらし葱。

○口取━子持串海鼠、よせ鶉山椒燒、松茸粕漬。

○刺身━めじ重ねつくり、鯛霜降さえがた切、雪おろし、花わさび、土佐醤油。

○茶碗━かぶら蒸、鴫、車海老、榎茸、紅あん、わさび。（忍び穴子）

○小丼━養老肉、嫁菜からし和へ。

○椀盛━ひげだら、ふきの薹。

○鉢肴━鰈ころも蒸、生薑。

○香物━新たくわん、菜漬。

○菓子━いそ萩　○湯　○煎茶。

○向━燒頭、是は昔より正式の料理にも、茶席料理にも鯉鮒の鱠には、專ら用ふる物ながら云々魚骨を燒からし揉潰ぎ篩ひあげて鱠の上に盛り、或は鱠にまずるものなり、其燒ざま、度を得ざれば、魚腥の氣去らずして、却々鱠味を傷ふ、又燒過さば灰の樣に成て用ふるにたらず、其度を得るは最かたき物なり、今夕の製は、まめやかに其度にかなひ一種の雅味を呈したる物と云べし、傳演味玄集には燒骨とあり、其製は次のごとし。

「燒骨は魚の腹藻薄身を串にさし炙りてこげぬ樣次第に遠火に立て燒き薄色になりて、こげめなく、から〳〵となりたるを、如何にも細かにきざみ篩ころの篩にてふるひて用ゆるなり」

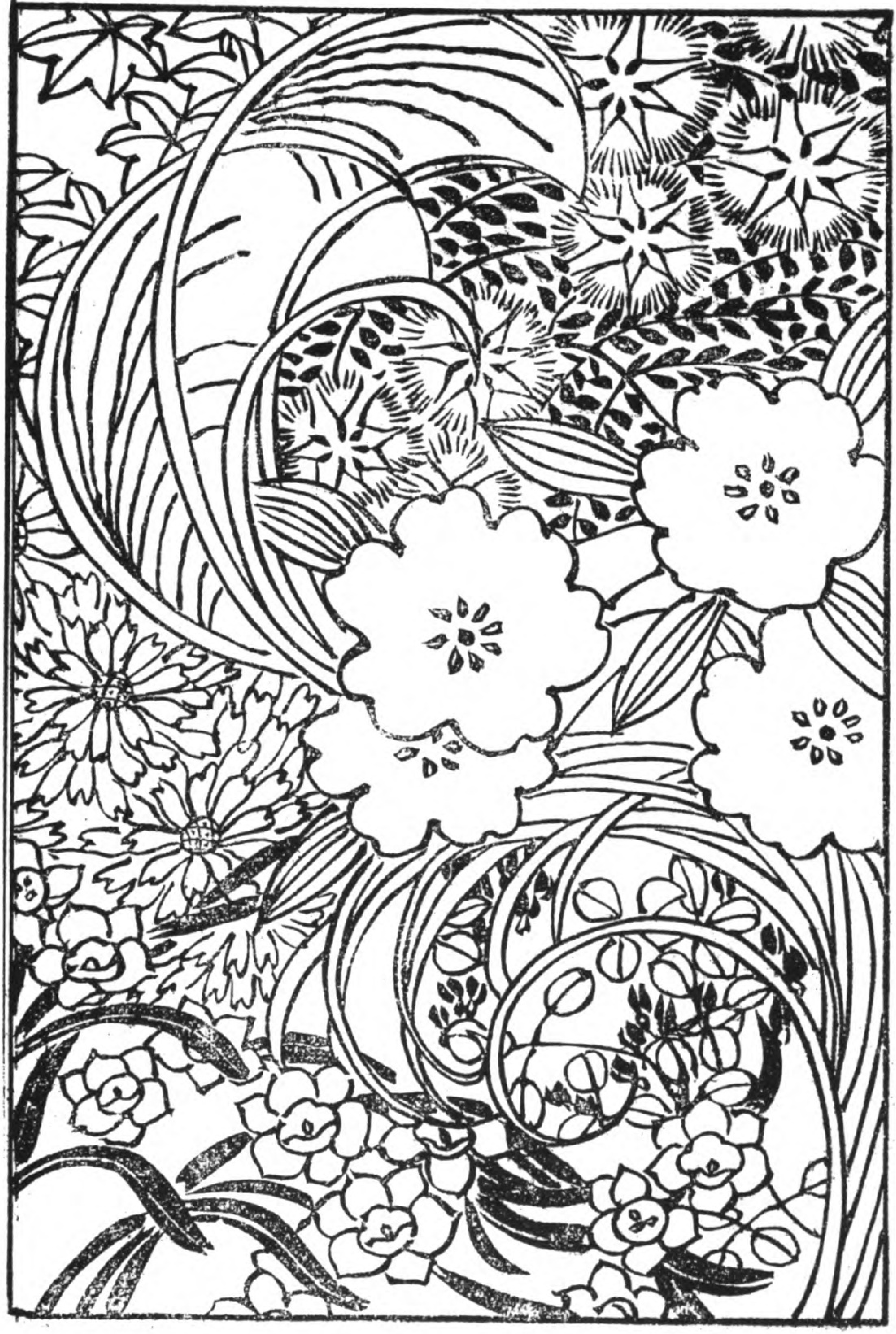
橙酢、これも又いと能く心を用ひられたり、鮒は酢のきゝかぬる物ゆゑ、生酢をこし加へたるが最よけれど昔人も云れたり、實にさもありぬべし、三盃酢などならで、橙酢を用ひたるは調味に富める趣向ともいふべし、其劑製酸に過ずして苦みうすく味此上なかりけり、鮒の性質も又切かたも、評する所なし云々。

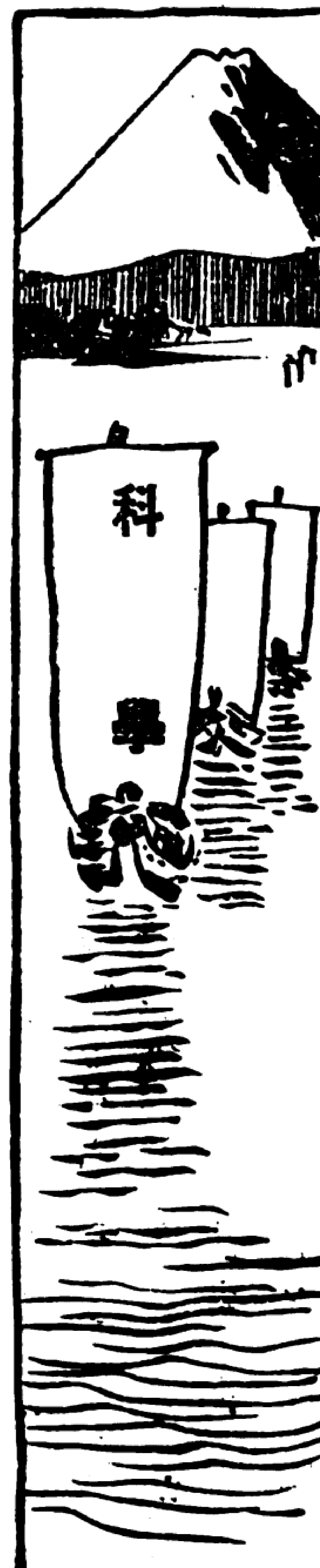
○口取、糟漬松茸を黃色に、其松といふ名を綠色に寄鶉を赤に、子持くしこを白黑に見立て、三種をして五色をふくませたる趣向いと巧にして風味ことによし、是も又少し論ふべし▲子持くしこ、魚糕のねり方、全くとゝのひ、海參の物性よく泡し方も又よし、されど半環形に作りたるは稍つたなく、子持の名に心を止ずなん有ける、此は根室產の純黑の小海參を原料と爲し、能く泡して後、首尾を切すて腸を除き、蛋黃魚糕を詰め煮あげて車切に切たらんには一際めでたかるべき▲よせ鶉は、よせ方といひ燒方といひ切方といひ、少も難ずる處なく、口のみか目鼻をも歡せたり、此寄鶉の下に魚糕を添て、紅葉の名所なる通天橋となんいふ名をつけ云々古人か青紅黃三層に色取たる、寄物を宇治橋と名付けたるにもとつけるなり、何故宇治橋と云ふにやと問へば、青の部はかすかに茶園の見え渡るかと、中央の紅は橋姬など云ふ事の有れば、朱の橋にかたどり、下なる黃の部は、名にしおふ山吹の瀨になぞらへ自ら宇治の風景を見せたる趣向なるよしきゝ侍つ、今夕の食單に憎からず思ふも數々あれど、別て此寄鶉の佳良なるに心とまり、思の外なる筆をもはしらせたり▲松茸糟漬、漬ざまは評する處なし、されど關東產の香もなく味もなく瘦おとろへたる松蕈にて笠ばかりは食ひたれど莖はすてにき云々西京なる稻荷山、播磨なる書寫の山の產などを取よせて、かくは製しませて紅葉色なる心(赤心と云ふ義)には云はでやむべきやは

○汁、刺身、蕪蒸、小丼、椀盛、鉢肴、香物、菓子までの批評くはしけれど、此に略しつ。

以上の組合せは料理店の料理にして、批評は、料理通の批評である、此批評の如き批評をくだす者が多く出ぬうちは料理の進步はまだ〳〵見ることが出來ない、本年は料理流行の聲を高からしむると共に、かかる批評家の養成をつとむる豫定である。







新年の飾物

考古博士

正直にいへば、人間には誰にも慾があります。さてその慾にも色々ですが、つまり幸福を得んとするのである先づ體が丈夫で、長生をして、財産があつて、安心が出來て、それで子孫が繁榮すれば、此上なしといつてよい。それでお正月は年の始めであるから、芽出度物を飾つたり、縁起のよい物を喰べたりして、幸福を祈るのは、人情の常として、無理のない處です。で昔時から新年に飾る祝物につき、雜書によつて少しく說明してみましよう。

今日にあけて昨日に似ぬは皆人の
　心に春の立ちにけらしな　　紀貫之

出づる日の同じ光に渡つ海の
　浪にも今日や春は立つらん　　藤原定家

朝日さす影ものどかに冬かたの
　空より春の色や見ゆらん　　常盤井

◎門松

門松は、飾松とも立松ともいひ、家々の門前の左右に一對に緑松を立て、それに竹を添へ、更に注連を張り、猶丁寧なところでは、注連の中間に橙、橘、交讓木、格注草、鯛、蝦などを懸けます。

山がつのそもとの松も立ちにけり
　千歳を祝ふ春の迎へに

因にいふ。門松を立てる時に附添ゆる竹は、葉の附いてるまゝなのを用ゐるが、中には太い青竹をハスッパに切り去つたのを立てる所があります。これは昔武田信玄が德川家康と戰つたとき、元旦の發句として、武田の方から濱松城中に送つた

　松枯れて竹たぐひなき旦かな。

と、大に其威を誇つた。松とは德川氏が松平といつてゐたからである、すると德川の方でも酒井忠次といふ人が、早速筆をとり

　松枯れで、竹たぐひなき旦かな

と、シャレをよんで武田方に返報した。蓋しタケ、タグヒ、ナキとは、タケダ、クビ、ナキと讀まれるのです。果して德川の松は、枯れることなく、武運益隆になつたのに、武田の竹は、其後いく程もなく滅亡してしまつた。そこで之を吉例として、竹の首を切つて門松に添へるのであるといふ傳説があります、然し、其眞否は分りません。

▲松は、何人でも知れる如く、古から百木の長と稱へ常盤の色は、數百年の後まで、いや增しに增して來るので、松は千歳を契るといはれ、我日本では最も芽出度木としてあります、迷信ではあるが、お正月の祝日に、男は七つ女は二つの松の枝を折つて藥にした所もあつたそうです。松は實に日本の名木で、幹に鱗があるので、龍が天に登る樣にも見えます。黒松は男松とも呼び、海岸に近き、即ち潮風の吹き來る所に繁茂して、大木となります、赤松は女松とも呼び、縱令潮風の吹き來ない所でも、地味のわるい所でも、よく生育します。松茸は赤松の樹の下に生え、茯苓は黒松の樹の下に出來ます。そうして單葉松、シダレマツ、シモフリマツなどは黒松の變種で、ジャノメマツ、シヲガマツ、千歳松、黄金松などは、赤松の變種であります。それから五葉松、ハヒマツ、梅松、姫小松などは、松の變種でなく、一種であります。

常盤なる松の緑も春來れば
　今ひとしほの色まさりけり　　古今集

千はやふる平野の松の枝しげみ　　拾遺集

千世も八千世も色は變らじ

位山木だかくならん松にのみ
八百よろづ代と春風ぞ吹く　　金槐集

▲竹は、禾本科植物に屬し、節高きゆゑ、節操正しき例とせられ、松梅と共に松竹梅ともいはれ、昔から貴ばれました。竹には苦竹、孟宗竹、淡竹、ヤノダケ、琉球竹、業平竹など六十種以上もあり、いづれも暖地を好み、臺灣、印度地方には、非常によく繁茂してるけれども、西洋諸國には産しないので、竹を知らないものは、珍らしくなかつたそうです。

同じくは八百萬代をゆつらなん　　後二條院
わが九重の庭の吳竹



吳竹は千世のもと末みどりにて　　香川景樹
枝さへ葉さへ變らざりけり

◎注連

注連は、七五三ともかき、端出之繩(尻久米繩)の略で、標繩といつたのを、更に略して注連となつたのです。注連は藁の端を結ばず、七五三の數で、繩に絢り合はせ、ザラザラと垂らすのである。傳ふる所によれば、神代の昔、手力雄神が、天照皇太神の御手を引いて、天岩窟をお出しになつた時、中臣神と忌部神が、尻久米繩を太神の御後に張り、これより再び御還り給ぞと、請ひまつッたが、抑も注連の

始めであるといふことです。或る説には、シメは標のことで、引延ばして内外の標とし、多く神事に用ゐて、不淨ものを入れないことにしてあるといふ。所がまたある説に、注連の繩は、必ず左綯である。繩は眞直で、左は淸淨、藁の端の結ばず、ザラ〳〵となつてるのは、物を飾らぬの意義、注連は即ち、眞直と、淸淨と、質素の三德を具えたものであるといふことです。

▲橙は、一にアベタケバナといひ、柑橘類の一種であるが、味酸くて苦味あり食用に適しない、此木の果實は、冬になると熟して黃色になるが、夏になると、不思議にも變色して、再び靑くなります。故に回靑橙と書き、代々と呼び、家運の代々繁昌するやうにとて、お正月の飾物とするのです。

▲交讓木は、楪とも書き、一に親子草といひ、大戟科(アカメガシ、アブラギリの類)に屬する喬木で、葉厚くて廣い、常盤木ゆゑ、新葉生ずるに隨ひ舊葉が枯れ落つるを以て、親より子に讓り傳へるとみなし、讓葉と呼び、橙と共に、代々福德を讓り傳へる意義で、お正月の祝物としてあります、此木は暖地に適し、我邦では主に西南地方にあります。支那では旗の上に附けて、飾りにしたそうです。

▲格注草は、羊齒類の一種で單に齒朶或はヤマクサ又はホナガといひ、葉の形鳳凰の尾に似てるので、一に鳳尾とも稱へ、數本の枝が一本の根を貫いてるので、又貫衆ともいひ。葉は柔にして薄く、其名の如く表は靑けれども裏は白色であります。此草は蕨、薇と異り、冬になるも枯れない、性暖地を好み、靜岡以西に多けれども東北地方には少ない、東京に見えるのは、主に上總、房州、伊豆などの山地から出るのです。格注草は單に齒朶といひ、齒は年齒、朶は枝で延びるものである故、年齒の延びる意義から新年に用ゐる物といひ。又裏白は裏に城あるにより、家運の最も堅固なる意義から用ゐるとの説であります。

▲鯛は、魚類中最も美味で、料理には最も上等としてあります。のみならず、タヒはメデタヒに通じてるから祝の時には、大概用ゐられる果報者であります、お

正月注連の上からさげるのを「懸鯛」といひ、陰曆六月一日に喰べると、諸々の病を去るといふ說であります。

▲龍蝦は、鎌倉蝦ともいひ、蝦類中最も大くて最も美味であります。伊勢の海や鎌倉の海から漁れるので、伊勢蝦或は鎌倉蝦と呼ばれるのです。一たい蝦は、腰が曲つてるので、海老と書かれ、年老ひたる意義から、祝儀に用ゐられるのであります。

◎蓬萊臺

お正月には、三方臺に、米、熨斗、鮑、龍蝦、昆布、馬尾藻橙、橘、榧などを載せ、新年を祝ひます、之を蓬萊臺と稱へ、支那の春盤と同じものです。昔



支那人の說に、東海に蓬萊といふ神山あり、其山にある果物は、何れも滋養に富んでて、それを喰べると、老ひもしなければ死にもしない、所謂不死不老であつて、其山に居る人は、皆仙人の子孫であるとしてあつた。そこで蓬萊は祝賀の時に用られる例となつたのです。で蓬萊臺に積むものは、總べて食品であるから一に「喰積み」ともいひます。

▲米は、稻の實で、人世には缺くべからざるものである、故に稻のことを、一に富草と稱へ、百穀の王としてあります。新年の祝物に米を飾るのは、當然のことであります。昔蓬萊臺に飾

ツたのは粰といひ、糯米を籾のまゝ炒つて爆せ脹らませると、殻がとれて雪の如き白い實が出ます。故に爆葩煎、米花、白花米などの字があります。昔時は攝津國天王寺の民家では、之を造つて賣りに出たといふことですが、今はたゞ米を用ゐます。

▲熨斗鮑は、鮑の肉をカンペウの如く細長く剝いて乾かしたるもので、祝儀の時の贈物に添へて飾りとします。抑も熨斗とは、神代の人の狀で、肩の方がいかつてて腰が細くなつてる。傳ふる所によれば、天照皇太神が、伊勢國五十鈴川で始めてお作りであつたといふことです。神代の人は長壽をしたといふので、祝儀に用ゐられるといふ說です。

▲昆布は、海藻の一種で、海中の岩石に附着し、大なるものは、幅一尺長さ數十尺に達し、ザワ／＼と浪に搖られてゐます。我邦では、北海道に多く產し、年々切昆布に製し支那に輸出します。昆布は、たれも知る如く喜ぶの音に通じてるから、祝ひの場所に用ゐられるのです。

▲馬尾藻は、又神馬藻或は莫鳴菜といひ、神馬は、駒ること莫きゆゑ、ナノリソと名けたといふ。海藻の一種で、長さ三四尺、形昆布とは大違ひで、多く枝を分ち、所々に俵の形をしてる小さな浮囊があるので、いつも水中に立つて居ります。日本では、どこの海にも產しますが、主に西南の海に多く、若い葉を食れば、ポキ／＼して味が佳い、けれども古くなつた葉は駄目です。冬月之を採つて來て、藁で米俵の樣な狀に束ばねて置くので、穂俵と呼び、後ホンダワラと訛り、古から蓬萊臺に供へられます。

▲橘は、古は蜜柑類の總稱で果物の長としてあつた。昔天子樣が、正月の初二日に橘を群臣に賜つたといふので、祝の果物となりました。此果樹は、垂仁天皇の御世に田道間守が常世國から齎らして來たので。初め田道間花といひ、後ち橘となつたと云ふことです。それから神武天皇の御世に、葛城王が、百果の王たる橘の姓を賜はつたので、葛城王の子孫、即ち橘姓のものは、橘の實を貴んで、祝物として置いたそうで

す。今タチバナといへば柑子蜜柑の一種、盧橘のことで、形金柑より少しく大く、往々庭園に植ゑて、蓬萊臺の飾り物にいたします。

▲榧は、古名を栢といひ、樅に似たる喬木で、松と合せ、松柏は百木の長といはれ、我邦の名木であります。此木は雌雄異株で、雌木は枝垂れて實を結びますが、雄木は、枝が斜に上りて實はならないのです。木は堅いから碁盤などに作られ、實は銀杏に似て細長く、多く油があるから榧の油をしぼりとり、實の中にある仁は小兒の食用となり、大和國吉野から佳い品が出ます葉は香氣ありて、燃すと、よく蚊を驅ることが出來ます。○○カヤと云ふ名は蚊遣りから轉訛したといふことです。○○昔の人は、松柏の膏をのむと、壽命が延びるといふたので、蓬萊臺に飾つて祝はれるのだといふ說であります。

△飾羽子　宮中の御局にて御用となる羽根は民間ものと製作を異にし飾羽根と稱し原料の羽根は鴨の嚢羽を用ゐ形は蕪形、奴形、鶴形、松形、花蝶形等で玉には椋を用ゆ蕪形とは鴨の白羽根を蕪の形に切り葉を青く染めて作り、奴形は奴の形として彩色し、鶴形は鶴の形に造り、松形は松樹に象り葉を綠色に染む、花蝶形は牡丹の花形との句より蝶の出たるもの等の優美なるものなりと。

海老の話

赤龍子

蝦には川蝦と海蝦とがあり、海蝦に伊勢蝦、車蝦、芝蝦などの種類があります。

お正月の注連飾に挿し、又は鏡餅の上に載せる所の蝦は、伊勢蝦ですが、是は色が赤くて美麗で、鬚が長くて數が多くて、刺が澤山で威嚴しくて、腰のカツキり曲つた處が、九十歳にも百歳にもなる老人の腰の樣に見える所から、海老と書いて（えび）と訓ませるのだ相です、其故にお正月ばかりでなく御老人の賀の祝や、御婚禮などの目出度い席にも飾られるのであります。

扨て是より蝦の形に就て研究致して見ませう。

先づ一匹の伊勢蝦を皿の上に載せて、丁寧に檢査して見ると、蝦の身體は、堅い甲を被た頭や胸に當る部分と、六つに切れた腹の部分との二部より成立て居ります、而して甲の先の方にはエラ〳〵とした刺が澤山

に突出て居て、其蔭から柄のついた眼を出して、あたりを見廻し、恐ろしい者でも來ると急に刺の奥に引込ませるのであります。

それから眼より先に四本の髯がありますが、其内の二本は餘り長くはありませんで、先端が二つに割れて居り、其の一方の毛が澤山に生えて居て、臭をかぐ鼻の役目を勤めます、餘の二本の髯は、長さに於て身體の長さよりも遙かに長く、本の處が太く刺だらけであります。そこで蝦は是等の髯を動かして物を探りますから、眼で見ないでも觸つてみて分ります。

蝦の足は澤山にあります、甲の下にある足には、地の上を歩む用をするのが十本ありまして皆な十分に折れ曲つて居ります、足は未だ是丈ではなく、歩み足の前に六本の足がありますが、是は短い上に縮まつて口の下に重り合つて居りますから一つ宛取つては皿に載せて見なければ見えませぬ、此の足は顎足と申して口の邊に生え、食物を口中に取込む用をする道具であります。

そこで此の顎足の六本を取つて了ふと、口が出ますが、そこには右左から嚙む爲めに齒の樣に堅い一組の大顎と、其より小さくて食物を口中に入れる二組の小顎とがあります。

蝦に足の多い事は恐ろしい程で、腹にも初めの二節を除いて、一對づゝの足が澤山にありますが、是は團扇の樣に擴がつて水の中を游ぐ用を致します、故に是等を蝦の游足と申します、又た時々ピン／＼はねる樣にして動き、大層急速の運動をするのを見ますが、是は腹を腰の部で前へ曲げ、擴がつた尾で水を打つて後の方に跳るのであります、で、能く調べて見ると、蝦の尾は五枚合せの扇の形をなし、左右の四枚は全く腹の六節目の游足の大きく成つたのであるといふ事が見附ります。而して尙ほ能く見ると、游足は一節に一對宛あるのですけれど、其の一つが又た内外の二枚に分れて居ります、斯樣に同じ足でありながら、其の使ひ途に由て、顎足の如く食物を口へ入れる用をもすれば、歩足の樣に長くもなれば、游足の如く平たくもなると

は何と妙なものではありませんか。

次に甲の後に指を入れて離して見ると、足の附根に白い鳥の羽の様なものがあつて、一見肉の様でもあるが、噛めばヂヤり〳〵して喰べられない部分があります、是は顋と申して、蝦に取つては一番大切な呼吸器であります、先に甲を離す時に指を入れた邊りには隙間が在つて、其處から水が這入つて顋を洗つて前の方、口の兩側の隙間から外へ出します。



甲の下には俗に味噌など言つて黄色なベタ〳〵した部がありますが、是は肝臓で、其下に胃の腑がります、蝦には胃の腑の中にも堅い歯があつて、此處で又た能く噛みこなすのですが、胃の腑に歯のある者は蝦や蟹の類に限ります。

人の食用に供する部分は、腹の厚い肉と、足の中の肉とでありますが、何れも堅い甲を割らなければ取出すことは出來ません、此の肉は伸縮して身體や足を動かすもので堅い甲の皮に着いて居ります、腹や足に節の多いのも全く堅い甲を被つてゐるので節がないと動かすことが出來ぬからであります、なほ足を取つて一つ一つの節を曲

げて見ると分りますが、蝦の足は不思議に其の動き方が皆異つて居ります。

蝦の雌は卵を産むと、腹の游足の內方の枝の細かく割れた處に附着けて其の卵を抱いて居ります、蝦は斯樣に大切に卵を抱いて游いで居ますから、卵は能く保護られて他の魚類に食はれる恐が少いのであります。是れ實に蝦が子供に對する愛情の深いことを證するもので、形ばかりか心までが斯くも美しければ、御目出度い時の飾り物として昔しも今も珍重されるのであります。

裝飾の工夫

室內の裝飾は其家屋と身分に相應したるこそよけれ、又裝飾は建築上の美點を發揮し其の短所を匿すを目的とするをよしとす、斯くして來客の眼を樂ましむべし、裝飾はいづれの座敷も床の間を主として飾り、床には掛物をかけ置物、花瓶などを据らるを普通とす花は置物と共に掛物を助けてその室の光彩を添ふるものなれば花と掛物との關係はよく考ふべきなり、若し掛物が書ならば何の花にても差支なけれど、繪なる時は取合せてよく計ふべし、又掛物は床の壁との色合を考へ、調和を保たせざるべからず、又花瓶は銅器陶器などを正とし、竹又は籠などを略とす、床側の棚には料紙、硯箱、繪卷物、書籍、法帖、香爐など時にあひたるを置くべし、若し袋戸棚のみにて違棚なくば置棚、三角棚に飾るもよし、柱には短册かけ、扇面などかくべし、又鴨居、欄間等には橫額をかけ、いづれも壁の色、襖の模樣など、相配さゝるやう工夫すべし。


西洋菓子
●年始御進物品の御撰擇には
森永の西洋菓子に限ります
●新意匠にして優美なる包裝は
品質の精良と喫味の秀絶と相俟つて
御進物界の隨一との評判であります
◎市内及全國到る處の洋酒食料品店及菓子舖にあります◎
フレンチ
バナナ
チヨコレート
製造元 東京 森永商店

女(わの二)

女（わの二）



女（わの三）

女（わの四）



新年笑話 浮世の旅

楓蔭逸人

須磨の避寒、有馬の湯治。さぞや愉快ならむとは思へども、そは黄金に事かゝぬ紳士淑女のすなる事にて、われら貧措大の及ばず。さりとて都門も俗氣多し可惜新年を塵の中に過さんも智慧なきわざなり。いでやことしは浮世の郷を周遊して、その實況を視察せんものと、旅裝蕭然一枝の筆を友として、烏有の森の僑居をいでたつ。

もとより汽車電車の設あるにあらねば、膝栗毛に鞭ちて人の道を辿りゆき、ほどなく浮世の郷に着く。前面に山容いとも穠秀なる山あり。親脊山といふ。頂上に父母二柱の神を祀れり。社殿壯嚴にして、敬虔の情自ら起る。拜殿には親の光り石といふを安置す。煌々として七ひかりに光る。いとありがたし。祠の傍に一の老榎あり。老幹翠葉欝蒼として天日を遮る。これを二恩惠の木といふ。人のこの山に登る者は皆この神木の蔭に憩はざるはなしとぞ。またその側に靈泉あり。子種石の邊より迸出す。これを陰陽水といふ。祠のうしろに出れば、遙におとつ山、おつか山、高恩山などの雲際に峨々たるを望み、眺望絶佳なり。此の邊の山には夜な／＼鶴の集まり來て啼くとかや。やがて祠を辭し裏道より山を下らんとするに、一老松の路傍に蟠屈せるあり、十月を松といふ。少しく進めば一の洞門あり。胎内潜といふ。極めて難所なり、昔し鄭の莊公とやらむが、其の母と會合せし大隧といへるも、かくやあらむと思はる。洞門を出れば、光景忽ち開け、一泓の綠水、鏡面を磨ぐに似たり。産湯の地といふ。池畔に一の小さやかなる茶店ありければ、入りて憩ひけるに、一老嫗、年七十にも餘りたらんが出でゝ澁茶を勸む。此のさびしき山中に、さても一人住ひの心强さよといへば、嫗いひけるやう、今こそ此の胎内潜りも、いと平坦になりつれ、昔しはなか／＼の嶮路にて之を過ぐる旅人は、やゝもすれば命を失ふことさへあり、さなくとも、あまりの苦しさに氣を失ふも、いと多かり。かゝる人皆、妾が店に入りて憩

ひ、此の池の水にて五體を清め、妾が家傳の五香湯といふを勧むるに、氣分忽ちに爽快ならぬといふことなし。されば妾がこの年までに人を助けしこと幾人といふを知らず。多くの人を助けしかひにや、何一つの障りもなく、かくは長生し侍るといふに、余はほと〳〵感じ入り、なほも行くさきの道など尋ね、やがて此處を辭し。肥立峠を下り、麓なる赤子村といふに着く。

村の入口に産神の社あり、後ろの森には乳房の瀧あり。いかなる旱天にも涸るゝことなく彼の養老の瀧ならねど、奇効神の如く、いかに虚弱なる子供にも、絶えず此の水を飲ますれば、日に日に發育して無病健全の人となるとかや。總じて此の村の住民は、皆常識を闕き劍のするどきことを知らず火の熱きことを思はず、心にかなへば、にこ〳〵と笑へど、少し氣に入らねば、忽ち火のつく如くに泣き叫び、晝寢れて夜覺むるを常とすとかや。さてもめづらしき村なりけり。村の流行歌といふを聞くに

れんれかお守りは何處へいた、あの山越えて里へいた、里アとのみやげに何もろた、でん〳〵太鼓に笙の笛。

こは村民鍾愛の歌にて、其の調極めて優美穏雅にして、聞く者をして恍惚として夢境にまよはしむ。此の村はづれに、捨子の藪、親不知子不知などの名所ありと聞きしかど、わき道なれば立ち寄らず。

なほも本道を進むに、老樹鬱蒼として枝を交へ、晝尙ほ暗き處に出づ子ゆゑのやみ路といふ。こゝを過ぐれば慈愛谷なり。その前岸にはおやのよくめ村あり。立ちよりて其の人情を觀んと思ひつれど、ゆくての道ければ、なほも歩を急ぐほどに、あまやかし村に着きにけり。此村には、みたものほし井といふ井あり。その水、極めて甘美にして口にかなへども、子供には極めて害ありといふ。此の村の名産は各種の菓物にて、柿栗、林檎、桃、蜜柑、枇杷、西瓜、甜瓜など累々として店頭に堆く、菓子、干菓子など賣る店も多く、近頃はまた夏時、氷見世を出すもの多し、そを子供のいふがまゝに買ひ與ふる故に、此の村の小兒は概ね皆腸胃病に罹らぬはなしとぞ。

此の村を過ぐれば、わがまゝ峠あり、峠を越えて少し下りたる處に、わんぱく堂あり。その側に、手の內の玉姫稲荷を祀る。此の日は恰も祭日なりければ、お乳母日傘の參詣者ひきも知らず。脚下には、ぼん池あり前面にはおぼう山、おぢやう山あり、風景絶佳なれども、雄偉闊大の致に乏し。峠を下り盡せば、即ち光陰の渡。

この渡し船の早きこと矢の如く。ゆきては戻らざるを掟とす。かくて前岸に着き。進むこと幾ばくならずして、成人の森を過ぐれば、勤學の辻あり、路は岐れて二條となる。いづれが本道なりやと問ふべき人も居れば、余は其の左の坦々たる大道を取りて進みけり。

都は方に三伏炎暑の最中なるに、こゝは恰も艶陽三月。路の兩側は柳さくらをこきまぜて春の錦を織り出し、樹間に歌ふ鶯の音は宛轉として人の心を蕩かす。樹下には一面の道草、青々として繁茂し、茶店にてすしてんぷらなどを鬻ぎて客を待つ。余は此の好景に心を奪はれ、われを忘れて進むほどに、道幅狹く、四邊の光景も亦た何となう物寂しくな

りゆき、前途甚だ心もとなし。ゆくてに一の村落ありければ、ともかくも、たどりつき、何といふ村ぞと問へば、不敎村なりといふ。此の村より、前に過ぎつるわがまゝ峠に出づる間道ありて、往來常に頻繁なりとぞ、名所古蹟はなきやと問ふに、いざ案内せんといふ村人の好意もだしがたければ其の後に跟きゆくほどに、村には似つかはしからぬいとも壯大なる伽藍ありこは無學文盲寺とて、村民の信仰ことに篤く、香華絕ゆる時なし。境内には無華の杉、鬱蒼として天日を蔽ひ、身びい木、不行木で杉、いき杉などの奇木亦多く繁茂す。寺門を出でゝ少しく進めば、路傍に一の洞窟あり、深窅にして其の奥を知らず。これなむ不理窟とて村民修行の靈場なりとぞ。かくてまた畔道を傳ひ行くに、田の中に一むらの森あり。村の鎭守にて祭神は、いたづら大明神なり。玉垣の代りに買杭といふを繞らす。いと珍らし。總



じて此の村の畑は少しも耕作することなく、自然のまゝなれば、雜草はところ得顏に生ひ茂り、よしあしは、あなたこなたに猖鋪し、荒蕪いはんかたなし。なほ此の外に、鼻たらしの池、木のぼり坂、生れたまゝ田など見るべき者多しと聞きしかど、さまではと思ひて村人に謝し、次の村へと急ぎぬ。

これより山向り水轉すること幾たびにして終に遊藝谷に達す。抑も此の谷は彼の有名なる豐後の耶馬溪にも劣らぬ勝地にて、淨瑠璃坂の眺望最も佳なり。前には河東山、峨々として聳え、長唄の瀧は翠崖の間に一大素練を懸け。其音經絡として遠近に響く、脚下には粹屋川の淸流藍を流すが如く碁盤石、將棋岩、かしこ、こゝに橫はる野澤の邊には節おもしろきゑんじゆ陸をなし。綠深き修竹猗々として茂る。げに眺もあかぬ風景なり。かくて少しく步を移せば、峽稍々開け流漸く緩く、終にふしあはせ村に

遊す、此の村は遊蕩谷の風景に心醉して返るを忘れし者が永住せしところにて、人口戸數頗る多しいと賑かなる町にて何れの家にも、笛、太鼓さては三味線の音す。音曲の名人多き所なりとぞ。その次には芝居村ありすこし隔たりて茶屋數あり。某富豪の別莊なりしを、今は四民遊樂の處とし、花朝月夕來り遊ぶ者頗る多し。總じて此の附近諸村の民は、生計裕かなるにあらねど、之を苦にする者は極めて鮮く、綺羅を纏ひ外觀を飾るを名譽とし、貧窮の窮を持つを耻じ、常に陽氣に日を送るとぞ。げに人間の別世界なりといふべし。

こゝより橫道へそれて進めば、みえの森あり、自惚大明神を祀る男女の來り賽する者常に絶えず。

進むこと數町にして、前面に人目の關あり。番所にはいかめしく、文のとり槍を立て列ぬ。余は恐る〱此處を通過し、のぼせ坂にかゝる。坂を登り盡せば、更に高峻なる山あり。夢中山といふ。此の邊には嫉情の犬、ふる狐など多く棲み、よりより出でゝ人を惱ますとぞ、恐るべし恐るべし。進みて戀知峠に至れば、路はます〱險しく、處々に丸木橋を架す。下は千仞の懸崖にして一歩を誤らば五體忽ち粉韲とならん。此の街道第一の難所なり。さるを此のあたりの人はよく重荷を負ひながら此の橋をゆきかひして、毫も恐るゝ色なしとかや。

到る處、擯斥侮辱を受けて席暖かなるに遑あらず。終に此の村に逃れ來て永住しぬ。その後、一族漸く繁殖して、遂に此の一村をなすに至りしとか。村民の氣質は一般に勤勞を厭ひて安逸を好み。暇あれば睡眠を貪り、毫も活氣なし。されども其の極めて無邪氣にして間ま滑稽の趣味を解する者あるを以て、狂歌川柳を愛する人は、此村に、杖を曳き、村民の性情を寫すことを樂しむといふ。

されど此の一帶の地は、まよひの霧、常にたちこめて路に迷ひ易く、常人の行くべき處にあらずと聞きたれば、道を右に取りて進みけるに、やがてまてし橋のほとりに出づ。橋を渡れば異見の關あり。その役人はいづれも白髮の老人のみにて、少しも權威を笠に着るなどのことなく、言葉穩かに旅人の身元を糺すのみか、行くての事まで、ねんごろに說き諭すにぞ、旅人は皆平身低頭して其の慈愛に感ぜぬはなく中には涙さへ落すもあり。されどまたこれを空吹く風と聞き流す者もなきにあらず。

かくて關所を過ぎ少しく進めば路傍に大伽藍あり。後悔寺といふ。此の寺には毎年、後の祭といふ有名なる祭典あり。境内に醒が井といへるいとも清冽なる泉あり。滾々として絶えず湧出す。此の道を通過する旅人が、必ず立ち寄りて心膽を洗ひ疲勞を癒す靈泉なり。此の寺を過ぎて後は、道路坦々として砥の如く、足の進みも思ひの外に早く、わづか一時にもならじと思ふ間にゆくりなくも再び勸懲の辻へと出でぬ。

予は何心なく足にまかせて進みに進み、終には幾多の危險を踏み、あはや迷の雲に閉ぢられ自滅の谷に陷りて、身を果さんとしき。さはいへ異見の關の訓戒身にしみ、醒が井の靈泉に心膽を洗ひ、勸懲の辻へ引き返したり、いでやこれより左なる街道の跡を探らんものと、勇氣を鼓して進みけるに。路傍に、いとも美はしき花園あり。百花亂れ咲きて、あ

またの童男童女戯れ遊ぶ。これなむ幼稚園にぞある。少しく進めば、手習の道なり。此處にゆだん坂といふ坂あり。まゝで喰組ならねど、車を推し登るに、少し油断せば忽ち後へ戻るといふ。又小學寺といふ伽藍あり。四面に讀垣を結び繞らし、門前の池にはそろばん橋を架す。抑も此の寺は智德大師の開基にて。本尊は三育如來なり。幼少の者、此寺に詣でゝ祈願を籠むれば、眼あかるく耳さとく、生涯、難病に罹ることなしといふ。こゝを過ぎて五常の道にかゝれば、禮智の社、忠孝塚。涙の森などあり。正じ木じん木。など繁茂す。かくて歩むほどに、正面に巍々たる楼門あり。扁して學門といふ。門を入れば三教の衢なり。尚も眞直に本街道を進みて



先生山教觀寺に擬す。楼門あり扁して德に入るの門といふ。寺内には文字堂、博學堂などあり。故事諺典の美を極む。寺の後には廣才山あり、此に登れば遂に知惠の海を俯瞰し、眺望極めて佳なり。山下に増町といへる一簇の町あり。多くまん木を產すとぞ。寺を辭して尚も進めば、思案坂にかゝる路傍に分別堂あり。赤子村より此處まで四十里なりといふ。余はいつの間に、かほどの路を歩しかと訝りながらも歩を進め、辛抱峠を越えて、終にあさおき村に達しぬ此の村の居法は他に異なりて一月は三十五日、一年は十四ヶ月なりとぞ。此の邊、一體にかせ木、しんぼうつゝ木、かんにんつゝ木などの名木を路の兩側に植う。少しく進めば篤實村なり。知足

の神社あり。右方遥かに白雪の皚々たる高嶺を望む、これ則ち潔白山にして其の麓に無欲村あり、左は則ち欲の境にして、よくの川に沿ひて行けば終につひあひなし村に達すといふ。尚ほ奥深く進めば、くはずに溜池、金がなし井無慾坂、どうよく橋、非義非道などの名所あり。名物には、人で梨、なま爪などありと聞きしかど、余は前途を急ぎて立寄らず。なほも倹約の道をたどりて、終に節倹山に登る、此の山は奢侈が嶺と吝嗇嶽との中間に聳え坂路極て嶮峻なれども、此難路より外に捷路なしと聞たれば、勇を鼓して登りけるが、思の外に疲労を覚えず。登に随ひ眺望益々開け、脚自ら軽く、何の苦もなく麗なる五常村に着きぬ。村民何れも禮譲を重んじ風俗敦厚にして閭村よく和睦す。これより陰徳の宮、孝心塚などを左右に眺めつゝ、出世の道をたどりて。終に身の城廓に達しぬ。築造極めて堅固なり。其の後に巍然として天に聳ゆるは慎独が嶽なり。君子に非ずば登る能はずといふ。尚も進みて初老の坂にかゝれば、左方には立身山青雲寺あり。右方少し隔りて独楽村あり。風流隠士の棲む所なりといふ。かくて、うきよの峠、四十八瀬越などを経て、終に気楽の浦に出づ。極波千里白帆往来し、風光の明媚なること得もいはず、余は此の光景に見とれて今までの疲労も皆うち忘れ、暫しは恍惚として佇みしが、折しも前岸への便船ありければ、之にうち乗りて渡るに、順風帆を吹いて舟脚軽く、一時にして陰徳の浦に着く。此処より先きは、安楽世界にして、坦々たる一條の大道あり。之を天の道とぞいふ。余は足も地につかぬばかりの夢心地しながら、此の大道を進みけるに、正面にいと壮麗なる大門あり、仰ぎ見れば題して極楽門といふ。門を入りて進めばいとも繁華なる都會あり、長者町といふ。其の家の構へ人のたゝずまひ皆世の常ならず。町内に養生の宮、和合の社福禄寿星の社などあり。町に接して子孫繁昌村あり、世継大明神の鎮座したまふ所なり。遥に南方に峙つは知命が嶽にして山中にめで瀧といふ大瀑布あり。町はづれより足跡漸く仰ぎて老の坂にかゝる。此の坂を越ゆれば隠居山安楽寺あり。境内清潔高雅にして一點の俗塵なし。眞に神仙の境といふべし。門前に名物、賀の餅を賣る。少しく進めば積善の郷に入る。見上ぐるばかりに壮麗なる家蔵打ち続き、雑大婦々として門に戯れ、人は皆怡々として憂愁の何物たるを知らざるものゝ如し。金山、銀山、蓬莱山は郷の四面を圍繞して群雲靉靆、鶴翔り亀遊ぶ。天堂極楽の光景もこれには越ゆまじと覚えたり。余は人界にもまたかゝる仙窟あるかと疑ひ、恍然として足に任せて進みけるが、怪しむべし再びとある海邊の渚に出でにけり。こは彼の陰徳が浦の後に方る餘慶の渚なり、埠頭には金銀寶玉堆積し海上には寶船幾艘ともなく浮ぶ。自ら顧みれば孑然たる一介の書生、傍の見る目も恥しければ、急ぎて前路へ引き返さんとしけるとき、したゝか石に躓きて、ふと目を覚せば、身は依然として有無有の僑居にあり。嗚呼これなむ全く南柯の夢にてありけるよ。(完)



をなごの喜び

――如何にして美貌となるか――

糸左近

令孃と夫人とを問はず、お爨と乳母とに論無く、女が千人集れば千人、萬人集れば萬人、誰にでも共通の欲望がある、而して人の喜びは種々様々なれど、女の方が此の欲望を遂げられる程の喜びは恐らく世に有りますまい、然らば其の欲望は何であらうか、余は一つ今日の目出度い日に其れを悉皆占つて、而も其れを遂げられる御手引を致しませう、併し其の占は當るか當らぬかは知らねども、若し當つたら余が爲に、否諸姉の爲に、實に此上無き目出度いお正月である。

美しい顔になりたい

其れは御尤です、之れには從來色々の説が有りますけれど、最も單簡なる最も嶄新なる最も確實なる最も無害なるは純粹なる倔里設林を清水に入れて顏を洗ふのです、即ち普通の金盥に清水を入れ顏や手を能く能く洗ひたる後其水を捨てゝ更に清水を汲み、これに倔里設林約二十瓦を落し、手にて能く攪拌せ、然る後其水を兩手に掬ふやうにして顏に灌ぎ、指先を以て顏中殘る隈無く、幾度も〳〵擦り洗ひ、洗ひ終らば清潔なる乾いた手拭で壓へるやうに拭き取るのである、之

を今日より三百六十五日の間、必ず毎日御続になれば、來春までには、第一色艶が宜くなつて、諸種の皮膚病を防ぎ、大さう色が白くなる。(色の白くなるといふ事だけは間接と心得べし)

▲純粋と清水の義は如何　倔里設林は比較的高價であるから之を買ひに行くと水を和せて稀釋したのを賣る、故に一磅入の封緘をしたる即ち衞生局の檢査證を貼つたのが純粋の倔里設林である、次に清水とは毒分の含まぬ濁りの無い極めて清潔なる水をいふので、東京の水道の水などは粗これに近いものである、故に水道の設無き地方は井水又は河水を能々濾過して使はねばならぬ。

▲水は天然の化粧品　口にさへ入れねば何んな水でも差支無いかと云ふに、決してさうでは無い、何時もドロ〱の濁水で洗つて居れば、長くの間には皮膚其の影響を受けて、或は寄生物の屯所となり、或は皮膚の質を粗くし、從つて色艶も惡くなり、白き顏も次第に黑くなる道理、人跡到らぬ山の谷間より流れ出づる岩清水を而も獨逸式の濾過法に依て濾したる水と、有機物を含む汚穢なる井水とは、其の皮膚に及ぼす結果の相違あるのみならず、之を飲料とすれば身體一般に其害を蒙むること一通りで無い、然れば何人も能々水に注意せねばなりません。

▲顏を幾度洗ふ可きか　顏は朝一度洗へばそれで可いものと心得てる人も多く有るやうだが、其れは大間違である、何となれば他の部分は衣服を以て掩ふてるから、塵垢も左程にかゝらぬけれど、顏は常に露出してる所である爲に、種々なる不潔物の附着し易きばかりで無く、汗脂の流れ出づることも、身體中で最も多く、隨つて最も不潔なる塲所である、故に一日中には少くも朝、日中、晩の三度は洗はねばなりませぬ。

▲油は不用か　例の倔里設林を混じたる水で洗つてる人には不用だが、さうで無い方には時に依て中々必要がある、人間は約二十五歳までが成長期で、其れまでは身體次第に脂肪を増し、人工的の油を塗けざるも、皮膚自ら滑澤で、動もすれ

ば脂肪が沈着し、面皰を生ずる位なれど、二十五歳以上になると、人に依り大いに脂肪の足らぬ者もある、斯る場合には人工的に油を少し塗けて、之を補ふことも大必要である。

▲如何なる油が宜きか　此の種類は澤山あつて一々數へきれぬ程あるが、阿列布油、杏仁油、豚脂熊脂、猪脂華撕林刺納林などが可い、而して是等は極めて新しいので無くてはならぬ、若し舊いと其中に脂肪酸といふ物が出來、却て皮膚を刺戟する處の惡物に變化するものである。



立教女學校（築地）

▲然らば倔里設林は若き女に不必要で無いか　然らず倔里設林は他の油と趣きを異にし、皮膚を柔かにし、それで日に燒ける事や、寒さに荒される事を防ぎ、且つ若き女の面皰即ち皮脂の溢出を防ぐ功があるから、前申した通りの分量を清水に入れて洗ひなさいといふのです。併し餘り澤山用ゐればベタ〱して得も言へぬ不快がある。

▲色を白くする法は他に無きか　これは先天的に色素の多いので、俄かに之を何

うするといふ譯にも參らぬが、併し忠實なる醫士の監督を受けて、變質劑即ち法列兒水又は亞砒酸を服めば、多少の効を奏することもある、雖然極めて毒藥で、體質に依ては、大害を受けるのみならず、却つて變な色になることとあれば、返す〲も醫士の監督上ならでは宜しく無い。

▲內諸事を醫士は洩らさぬか　醫士は事の是非善惡に拘らず、患者より依賴されたる事柄を、令ひ患者の父母兄弟に洩しても『十一日以上三ケ月以下の重禁錮に處せられ、三圓以上三十圓以下の罰金を取られる』といふ法律になつてるから、此事に限らず生殖器の諸病等を醫士だけには打明けて速かに治療を乞はれたい。

▲外用の色白藥は無きか　古來絲瓜の水、牛乳に胡瓜の汁を加へたるもの、密陀僧（酸化鉛とも云ふ）、薔薇油、檸檬の汁などを塗布すれば、色が白くなるといふが、余には經驗無し、けれど是等は害無きものなれば、試みたとて差支ありませぬ。（但し密陀僧だけは餘り感心せぬ）

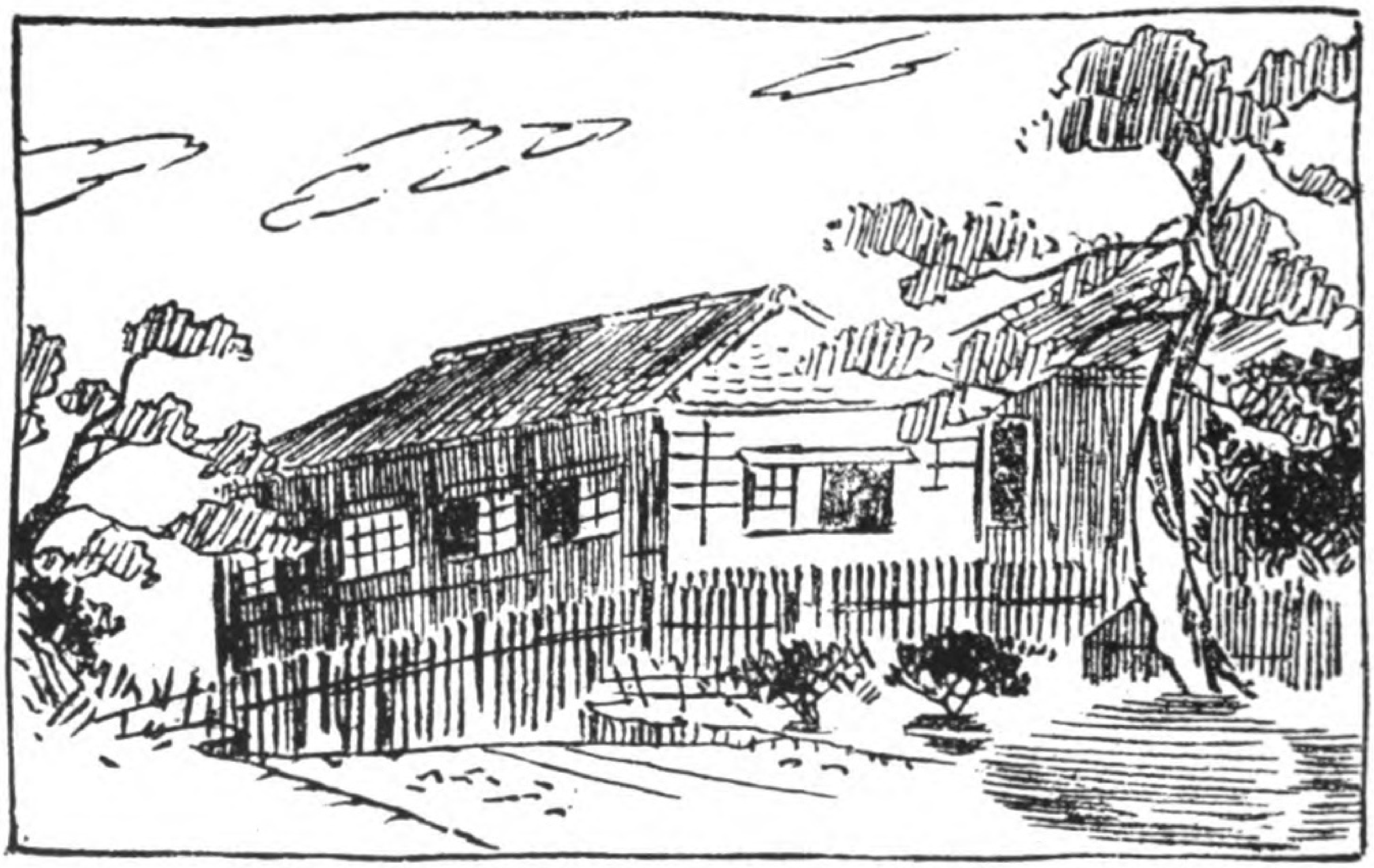
髮を宜くしたい

これも御尤です、大方諸姉の欲望は濃くて、黑くて、軟か過ぎず、硬過ぎず、縮れを除き、白きを直し、これより外に有りますまい、けれど之を申す前に髮毛の衞生を述べてからにせねばなりませぬ。

▲髮毛の衞生　髮毛は約五日間每に刷子を以て其の根膚なる雲脂を能々掃ひ落し、それより石鹼を塗け、微温湯を濺ぎて洗ひ、更に冷水を以て幾度も〱洗はねばならぬ、斯くして乾くを待ち、其の毛先を五分乃至一寸許薙ぎ取るが宜い（これは一ケ月に一度でも可い毛の發生を促がすものである）次に適當なる油或は梳油を少量に塗けて、然る後廂なり島田なりそれは御勝手である。序に今一つの衞生は洗つてから、其の乾くまでの間、可成散歩でもして髮毛の間へ日光や空氣を入れて、腐敗物の生せぬやうにせねばなりませぬ、支那婦人の如く深窓の許に閉ぢ籠つて、而もコテ〱油を塗り、年中洗つたことの無いのは、非常に髮毛の發育を妨げ、早

く白髪或は癖毛が出來ます、但し日光に當てると言つても、赫赫たる天日に曝すのでは無いことを、前以て御承知おき下されたい。

▲薄き髪毛を濃くする法　前の衛生中に述べた通りに守つても、濃くならずば、已むを得ず薬液を塗布せねばなりませぬ、薬液は種々あれど、其中最も有力なのは、高價ではあるが、鹽酸必魯加兒比涅〇、五（〇、五は僅に一分五厘程であるが價は約三圓也）レゾルチン五、〇　芫菁丁幾一〇、〇ペルカモット油三、〇酒精二五〇、〇の混合液である。之を塗ける法は髪毛を洗つて乾いた時は毛筆の尖を挾刀でチョン切つて、之



新築せる成女學校（市ヶ谷富久町）

に薬液を浸しては、根膚を擦るやうに、幾度も〳〵塗けるのである。

▲赤毛を黒くする法　髪毛の赤き人は常に食鹽水（水一升に食鹽一合を入れたもの）にて度々洗ひ、黒色コスメチックを塗ければ、長の間に黒くなる、但し前述の衛生は勿論守らねばならぬ。

▲白髪を黒くする法　これも赤毛を黒くすると同一の法で宜いけれど、早く確實なる功を奏したいと思ふ人は、已むを得ず染薬を用ゐるのです、染薬ですか、それは硝酸銀二、〇蒸餾水一六〇、〇アンモニウム液三、〇の混合液です、併し其の使用法を心得て居らねば

ならぬ、即ち毛髮を石鹼を塗けて能く洗ひ、微溫湯を濺いで又洗ひ、乾いてから沒食子酸一、〇蒸餾水五〇、〇の混合水を齒楊子に塗けて毛髮の根本から毛尖まで殘らず塗布し、一旦之を乾かし、然る後前の藥液を塗けるのです、若しも該藥が過つて皮膚に塗き、皮膚まで黑くなつた塲合には直ちに沃度加里十瓦を水三十瓦に溶かした液を塗けて之を除かねばなりませぬ。但し一度で黑くならぬ時は、二週間或は三週間日に幾度でも行うて御覽遊ばせ。又最も單簡なるは、番茶を濃く煎じて、それで洗へば黑くなると云ふが、余には經驗なけれど、大方赤くなりはせぬかと思ふ、御參考の爲に一寸。

▲硬き髮を軟かにする法　パンドレンといふ物を毎日塗れば治る。

▲軟か過ぎる髮を硬くする法　度々石鹼を以て能く洗ひ、油類を更に塗けずに、又結はずに、幾月も其儘にしておけば自然と硬くなる。

▲髮の拔けるを止める法　これも前述の毛髮衛生法を守れば自然と止まるが、尙古法なれど、木槿子を打ち碎きて煎じたる汁を塗ければ功ありとの事、兎に角試みられよ。

▲縮毛及び癖毛を治す法　縮毛は一種の黴菌が毛根に寄生し、それが爲に毛の榮養を惡くし、而して此の黴菌は攝氏五十度の温湯で死ぬとの說が近來醫學社會に起つてるけれど、五十度の温湯は中々熱くて堪へられぬのみならず、腦充血を起す所の害がある、されば二千倍位の昇汞水を塗布して治るや否やを試すも可からう、但し昔人は鐵瓶の湯氣で、ドン〱蒸し、然る後手拭で縛り、又蒸すこと毎日怠らずば、大いに治るとか、或は甘草根五匁を水五合にて二合に煎じ詰め、之で度々洗へば、縮毛癖毛何れも直ること妙なりとか言つてるが、說の眞僞は余は保證出來ねど、害無きことは保證す。

▲髮毛に塗ける油　其の種類は澤山あれど、先づ其の大要を言へば、椿油、黑色コスメ

チック、梅花香、櫻香、井筒油等である。

眉毛を宜くしたい

此の御望みも御尤なれど一つ私の理想を言はせて下さい、それに就いては西洋の人相家某氏名は忘れた曰く、『眉毛の亂れて生えてるは自制力の乏しい相で、其の薄きは虚榮心の盛んなる人、濃きは勢力の充滿せるを表はす代りに、野心勃勃たるの相、眉毛の優しく所謂三日月形と云ふやうなのは親切で愛情の濃かなること溢るゝが如し、故に眉毛の矯正法は、薄かつたら虚榮心を去るやうにし、餘り濃過る者は



女子高等師範學校

優しき情緒を有つやうに心懸け、亂生してる人は極めて自制心を養へよ、心一つで眉は何うにでもなるものだ云々』と、余は心一つで眉は何うにでもなるや否やは知らねども、其の人相法だけは從來の經驗上大いに賛成するのである、又我國でも昔人なれど、安倍晴明といふ占者は『眉毛が年を經るに從ひ長く且つ白くなるは長命の相で、其の眉根の上れるは豪邁なるを表はし、其の下れるは懦弱なる性質の人である』と、これも經驗上虚言で無いやうだ、して見ると女の眉毛は薄からず濃過ぎず、其根の餘り上らず、

去りとて下らず、コンモリと優しさうなのが上等であると、斯う定義を下して然る後申さん。

▲美き眉毛にする法　眉毛も即ち毛なれば髮毛と同じき衛生を守り、而も第一に之を濃くしてかゝらねばならぬ、濃くするには矢張髮毛と同樣の藥液を塗け、同樣の油を幾分塗り、時々齒磨の刷子を以て、其の根膚を掃除せねばならぬ、斯くして亂生或は其形の惡しきは理想の通りに剃つて、餘計な毛は硫化加爾曳謨にクエン油數滴を落したる物を、小心翼翼として、甚だ僅か塗けて、之を除き取るが可い、併し若しも過つて拔かずとも可き大切な毛にまで塗くと、其こそ大變、生兵法大疵の基となれば、可成は屢々剃つてる位に止めておきたい。序に申しますが唾を塗けながら指先で撫でてる人も往々有るやうなれど、實に汚い話だ、汚いばかりで無くそれが爲に黴菌の發生を促し、從つて毛色を惡くするやうになる、愼しむ可しだ、然れど人に欺されぬ爲だと言はるゝに至つては、余の與り知らぬことである。

鼻の形を宜くしたい

これにも面白い人相談は澤山あれど、其れは他日に讓り、兎に角諸姉の御望を占つて見ると鼻筋徹つて比較的高く、餘り幅廣で無いのが宜いのでせう。

▲低き鼻を高くする法　鼻は大部分軟骨より出來てるものなれば、例の隆鼻器を用ゐたら或は幾分矯正するを得るやうになるでせう。

▲赤鼻を治す法　度々水蛭を附けて鼻上の血を吸はしめ然る後イヒチオール一〇、〇酒精一〇〇、〇依的兒五〇、〇の混合溶液を屢々塗布するのである。

全身を立派にしたい

それでは餘り漠然としてるから、矢張個々別々に言はねばならぬ、然らば、

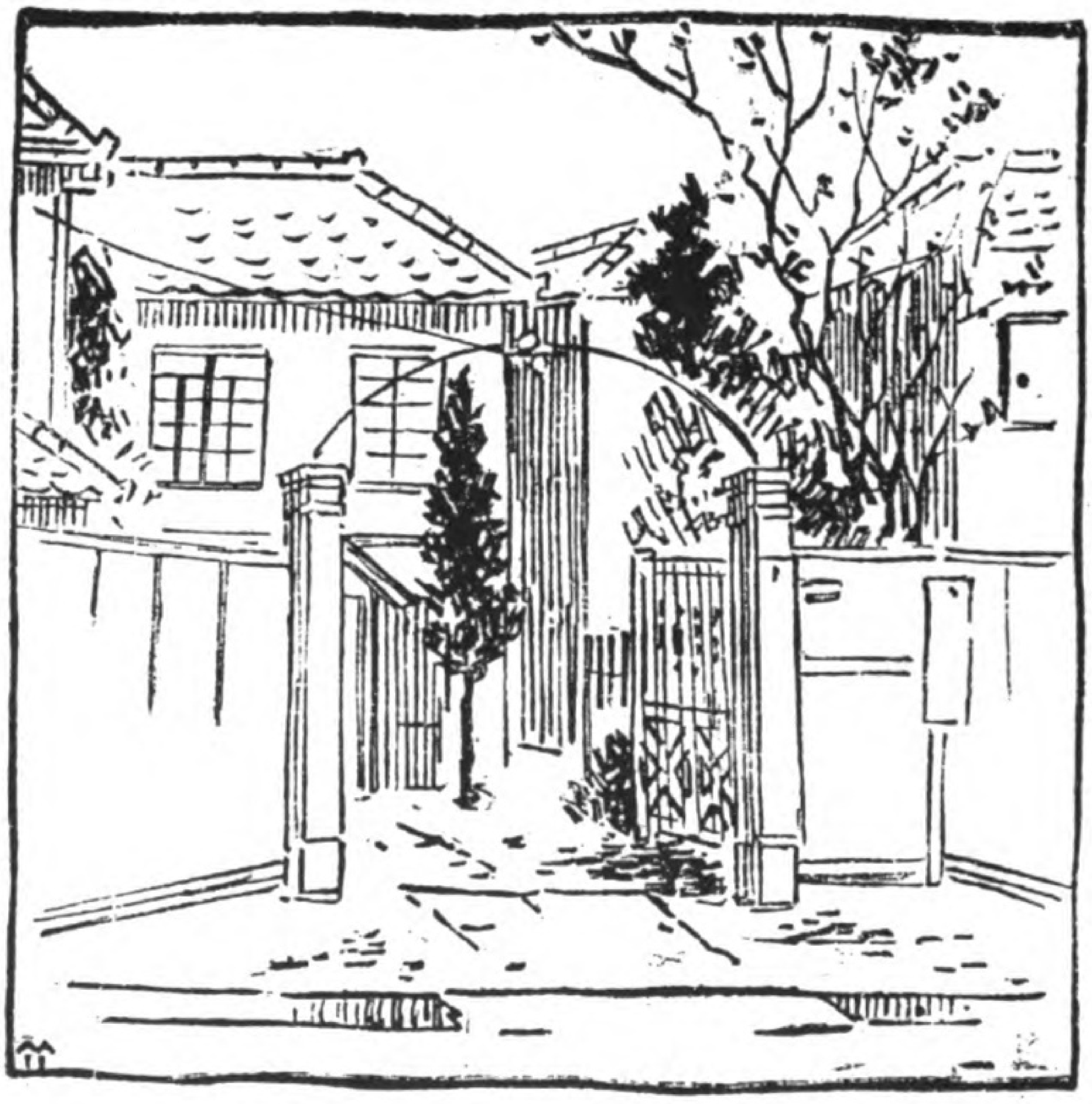
▲頰の赤きを治す法　釜で蒸さるゝやうな夏の夜も、吹雪烈しき冬の夜も、毎晩續けて滿

一年の間臨臥に必ず腰湯をするのである、頬の赤きを治すばかりで無く、月經不順便秘の習慣迄が何時の間にか取れて精神も亦快活になるものである。

▲歯を白くする法

良好なる石鹸を歯の根本に擦り塗け、然る後左の處方に依りたる歯磨粉で磨くが可い、某博士曰く『普通の人は刷子を横に磨くけれど、これは竪に磨く方が宜い』と、實に一理有る事である、雖然余は又これに附加して曰く『横にも竪にも磨く可し』と、

沈降性炭酸加爾曳謨　三匁　炭酸麻偪涅曳謨　七匁　食鹽　二匁



東洋女醫學校（市ケ谷河田町）

▲丈を高くする法

佛國のスプランジー氏の説に『大麥小麥燕麥裸麥乾甘蕉及び糠の六品各三十瓦を水六合にて三時間煎じ詰め、之を篩にて濾し、更に水を加へて三合になし、毎日服用すれば小兒は勿論大人でも其身長を八分乃至二三寸伸すことが出來る』と、又エルビール氏は『羊或は小牛などの頭の前部に當る淋巴線を生の儘食すれば身長を伸すの良法なり』と、余は是等の説を確信することは出來ねども、兎に角坐る習慣を可成廢して運動を盛んになし、燐酸石灰を含む所の魚鳥獸の肉を取つて骨質を強固ならしめ、其他適當なる果物を取るといふ一事は身

長を伸す上に於て甚だ肝要であらうと思ふ、就いては西洋の諺に『朝の果物は金、午の果物は銀、夜の果物は鉛』と、これも覺えておかねばならぬ。

▲痩せたる人の肥ゆる法　これも前者と粗、同じと知る可し。

▲肥えたる人の痩せる法　當分の中は脂肪に富める食物及び飲料を可成取らぬやうにし、可成粗食をなして三食以外には何物も食はず、斯くして運動を殆んど過度的に行はゞ必ず痩せることを得るものなれど、これも醫士監督の許に行はぬと飛でも無い衰弱を來すことがある、注意せねばなりませぬ。

▲果物は何か宜きか　林檎、桃、梨子、葡萄、枇杷、梅、西瓜などの類である。

▲果物の無き冬は如何するか　生葱大根おろし等最も妙である。

▲髪を洗ひたる後悪寒を催す時の心得　常に髪毛を洗ふ習慣にしてる方は差支無れど、これに慣れぬ人が寒中に髪を洗ふと、悪寒を催して、ガタ〳〵顫へるやうなことの有るものだ、然る場合には酒精又は火酒少許を髪の根膚に擦り塗けて刺戟すれば、次第に暖かさを感じ、其の不愉快を治すことの出來るものである。

▲如何なる石鹸宜きか　之を鑑定する方法は色々あれど、素人の方は、其色白くて輕く、舌尖で少し味はつても刺戟の無いのが先づ粗悪ならぬと心得られたし。

▲白粉は如何なる物を撰ぶべきか　言ふまでも無く無鉛白粉が宜い、それには水晶おしろい、大和錦、御園の雪などは無害だと衞生試驗所の報告がある、兎に角白粉を銀の匙に載せ火の上に熱し、冷めてから其匙に錆の出るのは鉛を含んでる證據、然らざる物は大抵安全なりと化學者は言つてゐる。

▲糠は害無き物か　害無きのみならず、皮膚を滑らかにし且つ垢を落す所の特質あるものなれば石鹸ばかりを用ゐずに、此の廉價なる結構なる品を活用させたいものである、之は啻に妙齢の女は

かりで無く、男も小兒も乃至はお婆さんも、イヤ年寄は尚更必要である。

右にて五欲三十法を述べたが、これは主に How to be prety（若向にして美貌となるか）といふ書中から拔萃したのに、日本的の衛生を附加したのである、文章は雜駁なれど頗る有益なる事が多からうと思ふ、何卒此の一冊を大切に保存致されんことを乞ふ。

「衛生顧問」「季節衛生」等は元日から述ぶるも如何かと存じ、代りに目出度物を掲げたのです來月よりは又々「女代診」と共に諸姉の御滿足を得らるゝやう致します。



東京高等女學校

△叱られた時

人が恐しい見幕でかみつく樣に叱る時に、たとへ夫れに理が有つても無くても口返答は決してしない方がいゝ、すれば却つて薪に油をかける樣なものでいよ〳〵其人の怒りを増さしむるばかりで何の効能もない、自分が惡るければ猶の事、自分に理由が有つても猶一層恐れ入つて謝るべしです。

心が常態を失つて怒り叫んで來たもの丶、相手に斯う下から出られると張合が拔けて、自分のはしたない怒りの聲が我耳に聞え、すさまじい怒の形相が目に見えて我ながら餘り云ひ過ぎたと云ふ事に氣がつく、即ち相手の腰を折て置いて、夫れから徐に云ひ譯にかゝるのが一番の得策である。

室內清潔法

附り簡便なる黴菌の驅除法

遠山醫學博士

帚、拂塵の使用に就て

室內を掃除するには通常帚や拂塵を用ゐてゐるが、此の方法は塵と共に室內に潛める種々なる傳染病の黴菌を飛散せしむる爲に、其の黴菌が掃除する者や其の後へ這入る者の鼻口を侵して容易に傳染する恐があるので、衞生上甚だ危險な方法である。窓の少き室、風通しの惡き室、或は閉ぢ籠めた室を掃除する際は別けて此の危險が多いから、餘程注意爲なければならぬ西洋諸國に於ても室內掃除には矢張り帚や拂塵を用ゐるので、學者は結核の勢ひを逞うするのは全く此の爲であると迄に言つてゐる、今日此の掃除道具を廢すると云ふヿは或は出來ぬヿかも知れぬが、成るべくは之を使はぬ樣に致したいと思ふ。

最も安全なる掃除法

そこで箒や拂塵を用ゐる代りに雜巾を用ゐて塵を除くヿにすれば右の危險も無く至極安全であるから、室內掃除は出來得る限りは之れに依りたいと思ふのであるが、勿論掛物、花瓶、彫刻物等の裝飾品は實際雜巾を掛ける事が出來ぬから、之れに拂塵を掛けるは止むを得ない事として、若し其れが移動される物ならば、成るべく之を室外へ持ち出して拂塵くやうにしたいものである。之れは些と面倒な話かも知れぬが、併し此種の物は每日掃除爲なくとも二日或は三日に一度づゝ塵を拂ふヿに爲れば可からうと思ふ。疊の如きに至つても之れに濡れ雜巾を掛けると云ふヿは是れ亦忍びぬヿであるから、まづ箒を用ゐるヿとして、室の四方を開放ちて空氣の流通を好くして置くが肝要である。

食パンにて掃除する法

尙ほ茲に食パンで掃除すると云ふ便利な方法がある

食パンは値段も安く、家庭に於ける掃除道具としては頗る重寶なものであるが、之を用ゐれば眼に見える塵は勿論、眼に見えぬ黴菌に至る迄も綺麗に除くとが出來るので、之れは掃除法とのみでなく寧ろ消毒法に近いものである。素より貴重な金唐紙などの掃除に食パンを用ゐるとも出來ないが、其他のもので拂塵を掛けても塵の除れぬやうな場合にはこの麪を用ゐると大なる効能がある。諸君が試に黒の帽子にブラッシュを掛けても



清潔法に用ゐる藥品

塵の除れない場合に食パンをお用ゐになれば其の効能は著しいことが分ります。さて其の使用法はどうかといふのにナイフを以て麪包を削り其の綺麗な處で目的物を摩擦るのである、段々にやつて其れが汚れたら又削り取て其の新しい處を使用する、斯う爲れば小さな臺所などは食パンの一斤位もあれば十分清潔に掃除が出來て黴菌を驅逐する事も出來る。

以上は器械的清潔法とも言ふべきもので、主として器物を以つて眼に見える塵を除く方法に就て述べたのであるが、清潔法の本旨は單だ眼に見える塵を除くのみに止らず、一面には又室内に於ける黴菌を除くことにも力めなければなりません。之を除くには箒や雜巾で不可ないから玆に理化學的の作用を應用する必要が起つて來る。就ては先づ化學的の清潔法から述べて見ると、此の方法は藥品の力に依つて清潔を保たせるので此れには從來種々なるものが用ゐられてゐたが、今日普通に用ゐられるものは、灰汁を以つて柱や塀を洗ふと、曹達を以つて洗濯すると、ナフタリンで下等動物を驅除することなどであります。着物や掛物には從來樟腦を用ゐたものなれど、其れよりもナフタリンの方が一層利目があるので、西洋人などは大概之れを用ゐて居る。

熱と光線との乾燥

理學的清潔法の第一は熱の力を借りることで、これは祖先傳來の清潔法といつてよろしい。設令之れが爲に黴菌を殺すに至らぬ迄も熱は物を溶解する力がある故同じく雜巾を使ふにも冷水で拭ふと熱湯で拭ふとは其の効力に大なる差異がある。

次は光線を利用することで、黴菌を驅除するには之れが最も便利であります。他の清潔法では室の隅々迄も清潔にすることは餘程困難ですが、光線利用は左程困難でない、今若し室の戸障子を開放つて、十分光線を取り入れるならば其れが全然消毒されるので實に石炭酸以上の効力があると言つてよい。蓋し普通の動物は日光が無くては生活することは出來ぬが、黴菌に至つては全く例外で日光に當つては生活することが出來ないのであるから、光線の利用は即ち此の弱點に乘ずるのである。これを祖先傳來の清潔法といふので……。

それから今一つは室を乾燥せしめて清潔を保つことで其の手段として、火鉢や暖爐を普通に用ゐて居る。此れも黴菌を除くに最も有効な方法で、水氣を去ると云ふことは即ち黴菌の糧道を斷つことに爲る、即ち黴菌を兵糧攻にするのである。

月の手鏡——一月

遲塚麗水

▲一日　羊の歳は、狗の初日の門松くゞりて、徐かに我が世を訪れ來りぬ、朝まだき、神代も斯やと靜かなり、あはれ今年も、吾が邦、吾が同胞、吾が眷屬に幸多かれ。

海邊に、山に、高樓に初日を賓して、「かつらぎの山の姿に打なびき、起てりともなき春霞かな」の景樹の歌を口吟めば、一夜の年と改まりたる人心こそ、微妙くもおかしけれ、多摩の若水、掬ふ指の爪先より新たなる生命を傳へて、骨を換へたるごとき心地す、いざ勤勉めよ、屠蘇、雜煮、其の太箸の太くして而も健かに、今年の人の務めに入れよ、玄關先の螺鈿盆上、雪を欺きたる賀正の名刺を點檢すれば、時に紅箋紺字のものあり、高麗、唐國の友の來しなり、又た蟹行文字の記せるものあり、西洋の友の訪れしなり、身貧なれども年々交遊の人多し、是れ最も喜ぶべし、郵吏投じ去る幾打の年賀狀、先づ眼を惹くは繪葉書なり、羊に因めるもの最も多く、新年御歌會の勅題に因めるもの之れに次ぐ、中に一葉、繪くところの羊の髯の、余が幼時孝經の句讀を受けたる師の君の其れに似たるを憶ひ起して、鑠々たる温顏、眼の前に彷彿す。

畏き邊に執り行はせらるゝ四方拜の御式は、申すも恐れ多し、晴の御膳を濟ませられし東宮、皇族、内外の臣僚の拜賀を受けさせたまふ、丸の内、金鵄を佩べるの人、容姿最も颯爽たり、余にして若し賴ひに三兒あらしめば、一兒は當に軍人となして國に捧ぐべし。

惠方詣、今年の惠方は亥子の間にありとかや、新年の第一行樂、都の賑を下瞰して、空高く風箏あり。

▲二日　士人には讀始の日なり、商賈には初荷の日なり、而して都ての人には初夢の夜なり、寶船は船底枕ならでは調和せず、夢も護るの有明、灑くして海のごとし、高く錦帆を掛けたる聚寶船、風に颯す、七福神、何の吉夢をか載せ得て過ぐるぞ。

▲三日　子の日なり、「初春の初子の今日の玉箒、手

にとるからにゆらぐ玉の緒」の家持の歌を思へば、坐ろ昔の春ぞ偲ばるゝ、今日は宮中に元始祭執行はせらる、歳首に皇位の元始を祝し、祖宗皇靈を祭らせたまふ祭典なり、いと畏し。

▲四日　政始、　年賀の客も稍や稀れに、春らしく長閑になれり、横町の此方彼方、黄昏るゝまで追羽子の音す。

　誰が家の子の手より翔れたる羽子一個垣根を踰へて椽の端の盆梅の枝に落ちたり、蕾まだ堅かりしに、遽かに紅蕊白葩の大花を着けるに似たり、若し羽子の行方を索むる人の、振袖に羽子板抱え、羞を含んで娉婷として垣間見ゐたりし時、羽子を取つて輕く抛うち還へさんには、何等の風流ぞや。

▲五日　新年宴會、聖上、豐明殿に出御、皇族、大臣、外國使臣、勅任官に宴を賜ふ、草莽の民、亦た多く此の日をもつて會飲す、春風東より吹いて、沖繩、高砂の島は更なり、韓の國、關東州、熙々たり、洋々たり。

▲六日　御講書始なり、此の日より寒に入る、忽ち起る高低参差の警鐘聲は、寒さを怕れて蒲團の春にゆめ心地なる懶兒が耳を驚かす、始めて覺りぬ、今朝はしも、助六、長兵衞が衣鉢を今に傳へたる遊俠兒、勇みの鳶が水火も辭せぬ魂を研くといふなる消防出初の式ありとこそ、揃ひの半天、氣遣節、江戸紫に澄み渡れる空を衝いて、立て連ねたる梯子の上に、富士と筑波を見渡して、吹き流し邯鄲の夢の枕、鯱鉾、下り藤、仰ぎ看る人掌に汗にぎる危うさを、晴に環を繪く我が名と同じ鳥の背を下瞰して、冷々然として風に御すさま、式罷んで錫ざかなに檜杓酒、江戸去つて四十年、面影を獨り此の日に留めぬ。

　初卯とて、龜井戸天神社内の妙義社詣。

▲七日　は若菜の佳節、七草を拍つ爼の音の、遠近に聞ゆなり。

　門の松、取り去られて、新らしき年の衞は翠の衣を脫ぎ捨てたり、人も屠蘇の醉より醒めて、都大路、埃立ちぬ。

されど流石は初春なり、夜毎の團欒に百人一首の歌留多すなり、星と菫の逢ふ宵とかや、むべ山に百指集まる紅園紛陣、お宮あるべし、間あるべし、抑も亦た富山あるべし、ボーアの君、心したまへ、霜柱立つ闇の小路に、角帽の送狼ありとし聞けば。

▲八日　陸軍始、聖上親から兵を青山の練兵場に閲したまふ。

▲十五日　上元の佳節なり、小豆粥、一月の行事中、詩趣あるは七草、俳味あるは小豆粥なり。

▲十六日　今日は地獄の釜の蓋の開くといふ日なり明日より今日にかけては、商家の若者丁稚、お爨、待婢、乳母、僕の身儘氣儘に遊べる日なり、何時は勝手口、露路の隱にて竊かに會へる雙親に、怯氣晴れて逢へる日なり、威張て車に乗れる日なり、看んと欲するもの、食はんと欲するもの、これも寝言に訴ふを須ひずも、擅まゝに看且つ食らふことを得る日なり、皆な欣々然たり、滿面作るは獨り隨處の閻魔堂の主人のみ、誰か一服の催笑藥を作りて、寧に似たる大王の長廣舌頭に進めて、峨冠搖落、笏を折つて獅子吼の大笑を發せしむるものぞ。

▲二十五日　は龜井戸天神の鷽替神事、舊年の鷽は煤けて黄に、新年の鷽は鮮かにして白し、鷽の皮とは黄なるものにや、白々しき鷽を人は言ふなる、をかしき神事なり、鷽の形、古拙にして又たをかし。

▲三十日　孝明天皇祭。

床頭の福壽草、瓦盆の梅花、下に寒菊の憐れに咲けるあり、水仙花、余は此の花に對する毎に、一歳の春の初、相摸の海の初島に遊びて、人のたけより高き水仙の、花の大いさ盃の如きを着けて叢生せるを、推排け行いて蜑士が宿を訪れしことも憶はざるなし。

南喧の窓、一枝斜めに横ふ早梅の、午に近うして、兩輪三輪、相次いで開くを見る。

●駒迺舎歌塾の開設

國學歌道に志深き安藤直方氏は今回新道に熱心なる世の婦女子の爲駒廼舎歌塾を牛込區納戸町八番地の自邸に開き多年の蘊蓄を傾注して斯道の爲大に盡す處あるべしと云ふ猶同塾には特に地方部の設もある由授業日は毎週月水金の午前中束脩一圓月謝一圓の由

新案福引　並に運命の占

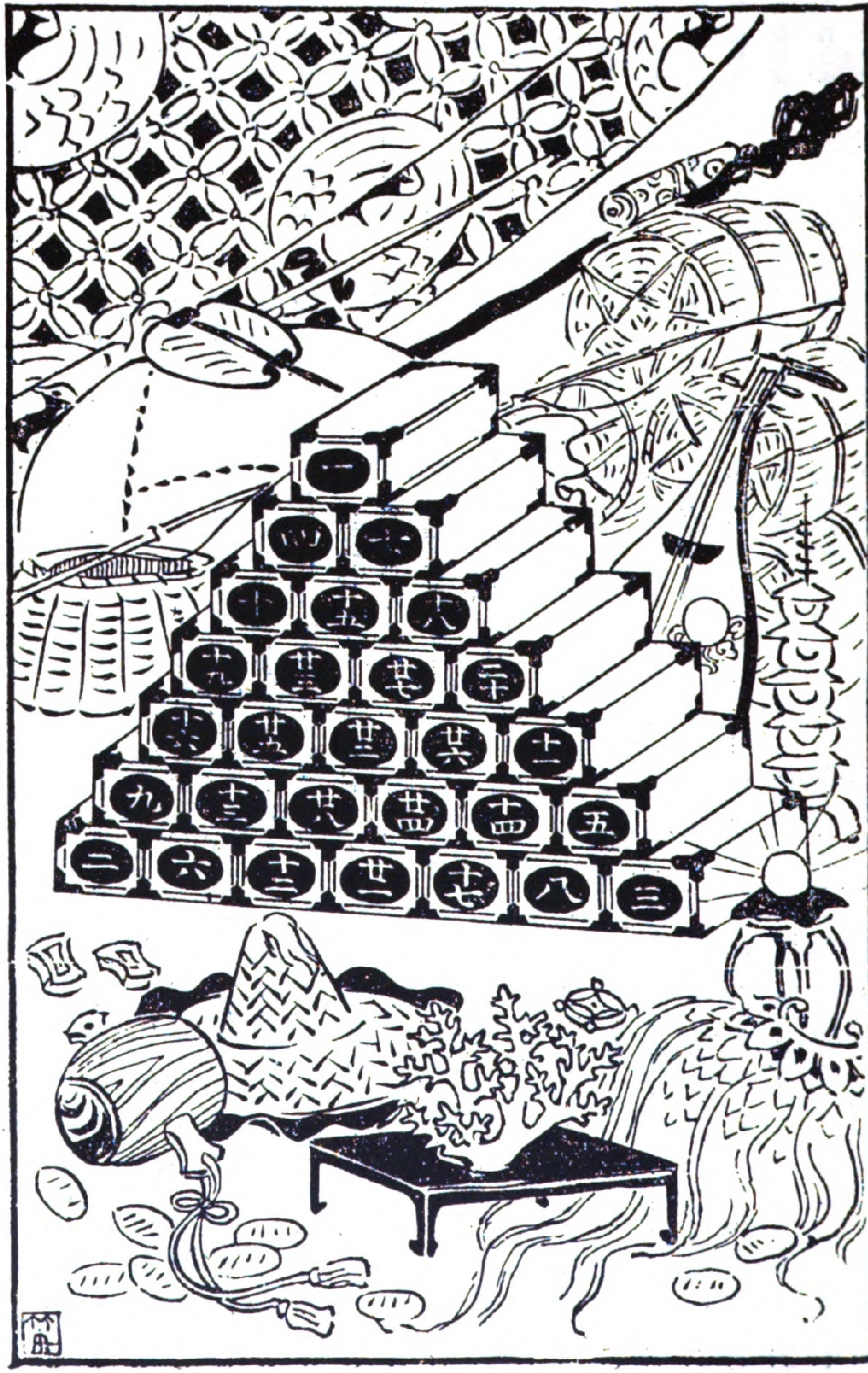
△特色――一體福引といふものは大勢と一緒にやらなければ興味のない性質のものですが、この福引は縦令一人でも自分の福運を試してみるのに興味があるやう組立たのであります。

△引様――その引様は先づ題の部に記してある七福神の名を別々に書き記した七本の籤を拵へてそれを能くまぜ置き、その中から一本を抜き取つて自分に福運を授け給ふは何神なるかを第一に知るのです、それが知れたらば次の圖にある千兩箱に就て自分の好むまゝの數を撰り採るのでございます、尤もその數の撰み方は自分の齢の數とか、又福を引く日の數とか亦はその時間の數とか、或は目を閉ぢて指の頭で千兩箱を指し當てた數を採るとか、何れとも御隨意です。

△興味――斯くてその數が極まれば、前に引當てた福神の部を見て題を得、解の部を見て、景品を知るのです、そこで引主を假りに女學生として、若し景品に臺所道具を引當てたとすれば近き將來に「世帯を持つ」との謎、又書物とか文房具を得れば「今暫くは女學生を續け」ねばならぬことを知り、栗を引當つれば勝栗とて今年の運動會には競爭に「勝利」を得るとの前兆、又鼻眼鏡を得れば「高慢を警め」られたのだと反省する等の類です、斯の如く活用し行かば新案福引の興味は無盡藏です、何方も一度試めして今年の福運をお引當てなさい、永當々々御喝采を給へかしと。

立案者菅原倭翁申す

福引寶の山



題之部

辨財天

辨1 睦じき夫婦……（器物一個）
2 早取寫眞……（化粧道具一）
3 處女の初戀……（日用品一）
4 往きは二人、復りは一人……（同上）
5 明日まで匿かれぬ……（食品一）
6 日記帖……（藥品一）
7 仁王門……（臺所道具一）
8 オールドミス……（食品一）
9 亂暴な子供……（化粧品一）
10 女の內仕事……（器物一）
11 不孝ものへ與へたきもの……（植物一）
12 波風……（同上）
13 向ふの寺に空屋札がある……（食品一）
14 相愚の岡惚……（植物一）
15 伊邪諾、伊邪册の神……（果品二）
16 貯金玉……（器物一）
17 千年萬年……（臺所用品二）
辨18 口約束……（藥品一）
19 僧侶……（刄物一）
20 七日の月……（通貨一）
21 役人の出勤……（食品一）
22 新發明辻占……（同上）
23 出雲の御利益……（手工品一）
24 一間の中で君を抱く……（食料品一）
25 元の鞘……（書物一卷）
26 速戰速捷……（同上）
27 無頓着……（臺所用品二）
28 新婚旅行……（雜貨品二）

毘沙門天

毘1 良人の留守……（雜品一）
2 秋の夕ぐれ……（消耗品一）
3 大忠臣……（食器一）
4 宣教師の採點……（食品一）
5 花の王……（雜品一）
6 支那人の健康……（食品一）
7 生首入つ……（野菜一）
8 暗夜の美人……（消耗品一）
毘9 禿頭病……（什器一）
10 浮氣の病氣……（動物一）
11 金魚の餌……（文具二）
12 御寺の住職……（野菜一）
13 獨學……（弄具一）
14 親の定めた夫婦……（食品一）
15 嫉妬深き夫婦……（野菜一）
16 讒言……（器物一）
17 曾我五郎、十郎……（化粧道具一）
18 雜踏の中……（消耗品一）
19 貞婦……（雜品三個）
20 津々浦々の眺め……（日用品一）
21 武士の魂……（飲食物一）
22 天の岩戸……（什器一）
23 法螺先生……（日用品一）
24 夕立……（食品一）
25 御寺の臺所……（果物一）
26 伊勢の濱荻……（翫具一）
27 御階の櫻……（反物一）
28 當世紳士……（化粧品）

恵比壽

大黑天

布袋

福祿壽

壽老人

解之部（下方は景品）

辨財天

毘沙門天

毘五　牡丹……釦
六　南京まめ……南京豆
七　入ッ頭……字
八　眞ッ黒……炭團
九　毛が拔ける……毛拔
十　戀……鯉一尾
十一　紙で、すみ……筆、墨
十二　御坊……牛蒡
十三　退校……太鼓
十四　いひなづけ……漬菜
十五　生涯逸話……生姜一把
十六　水さし……水盆
十七　兄弟……鏡臺
十八　掏見つける……寸燐
十九　みさほ……竿三本
二十　海中に月……懐中日記
廿一　名刀(正宗)……酒正宗
廿二　恥入ります……紙入
廿三　大風呂敷をひろげる……大風呂敷
廿四　大きな[illegible]……[illegible]飴
廿五　[illegible]……栗
毘廿六　声(足)がない……達磨
廿七　右近……鬱金木綿
廿八　こすい……香水

恵比壽

恵一　切手なければ通行出來ない……繪葉書
二　京師[illegible]狀……[illegible]紙三帖
三　頬づき……酸漿
四　洋館……日光羊羹
五　黒坐頭……黒砂糖
六　解れにくい……もつれ糸
七　なし……梨
八　焚付くれば燃え上る……薪
九　水に菊(見ずに聞く)……楠公の唱歌
十　内輪……團扇
十一　桑……鍬
十二　人の來(音)を知らす……磁石
十三　花にかゝる……眼鏡
十四　無道主……葡萄酒
十五　勝負なし……せうふ糊と栗
十六　養子……洋紙
恵十七　中よく見える……硝子徳利
十八　子立つ……炬燵
十九　鬼〳〵め……お煮しめ
二十　足る……樽
廿一　走(柱)らにゃならぬ……薪
廿二　手は見せぬ……手袋
廿三　鼻合せ……花札
廿四　しめて飾る……帶
廿五　帽仕かけ……帽子掛
廿六　だしが出る……鰹節
廿七　ミシン……洋燈心三個
廿八　一坪……壺一個

大黒天

大一　あふぐ……扇
二　筋を引く……定木
三　河津の子……お玉杓子
四　ニャ、ワン……玩具の猫、犬
五　よきなり……上等の折詰
六　紙幣(さつ)が焼ける……焼芋
七　眠くまい……白米

布袋

福祿壽

福十一　かゆい處へ手が屆く……孫の手
十二　きゝめがない……糠に釘
十三　名付け……菜漬
十四　砲彈……寶丹
十五　毎朝開く……郵便受函
十六　大風吹く……大福餅
十七　宰府……財布
十八　小間……獨樂
十九　四本柱……巨燵櫓
二十　無利(藤)に卷く……藤卷
廿一　秩父……秩父裏地
廿二　氣(木)くばりなか〳〵……寄木細工
廿三　艶筆……鉛筆
廿四　陸あり海もあり……硯
廿五　金をする……鑢
廿六　高利座頭……氷砂糖
福廿七　正宗……正宗ビンの熨斗付き
廿八　……罫

壽老人

壽一　葉(齒)が美しくなる……煉齒磨
二　はたき……塵拂
三　萬事ひかへる……日記帳
四　花をふく……塵紙
五　胸のやけるを消す……ラム子
六　甘いおふくろ……砂糖袋
七　何點……南天
八　水を入れる……水入
九　頭を打たればならぬ……釘又ヒン
十　未開……貝三個
十一　私……綿、櫛
十二　モシ〳〵……四書の内 孟子
壽十三　濡れ硝子……ぬれがらす
十四　大阪着き……大杯
十五　推薦……水仙
十六　安賣り……やすり
十七　一生壯健(まめ)……豆一升
十八　火のある方よりふくらむ……炭棒
十九　戰功にて爵を賜ふ……線香、抄
二十　諸のかみ集る……紙屑籠
廿一　ちよしがよい……上等銚子
廿二　二郡……二子縞
廿三　聞いて涙がでる……芥子
廿四　寢物は貝……蛤のから〳〵
廿五　月見……月見蕎麥
廿六　花の籃……花籃
廿七　カラ……洋服襟
廿八　氣(木)をもむ爲め……錐

(完)

景品の買物

福引の景品は田舍ならばよろづ屋に行けば大抵は調ふものなり、都會ならば、荒物屋、唐物屋、玩具屋、學校用品店等にて大概は間に合ふものなり。



王朝の詩美人

藤葉

山邊の赤人、柿本の人麿去りて萬葉集の跡絶へ、文の林空しく寂寞を告げたる折しも、落葉の梢風寒き木の間に一本の色も芽出度き紅葉見出されぬ。

頃は嵯峨天皇の弘仁十二年、行末は一代の人心を惱殺すべきまだうら若き十二の乙女小町姫は父に伴はれて都にこそは登り來たりぬ。

花の蕾か、田鶴の雛か、草深き出羽の片田舍に生ひ立ちにける一本の若櫻、まだ色も香もかたけれ共、父の良實は早くも我子の類稀なる容姿と歌才とを見ぬき斯る片田舍に空しく一生を終らしめん事のいと口惜しくや思ひけむ、都に名高き、君寵あつき祖父の參議篁をたのみて、いでや九重の霞の内にはな〴〵しく咲き匂はせてと斯くは遙々、遠く住みなれし出羽の故郷をあとにして都をさして來つるなりけり。

流石に花の都なれば、濃き、淡き、花色々の亂れ咲きて眼もあやなる九重の內、此度小町姫の登り來ぬと聞きて、人々皆眼をそばたてゝぞ相見てと待ちにける花ならば今漸くに綻びそめし愛らしの乙女、緑の黑髪房々と肩にすべりて、人なれぬ初々しさ、斯る乙女が世にもいみじき歌道の才ありと聞きては誰か愛慕の情

を起さぬ者やある、早くも雲の上の貴人の間に其名高くぞなりにける。

　月日に關守なくて早くも移り過ぎ行く昨日、今日、明日と、年とは此愛らしの乙女子を次第に美しく磨き上げぬ。

　旭に匂ふ櫻花か、燃え出でし若葉の間に露も滴らん許りなる姫が十五の春の年終に大内山の御庭に移し植ゑられて采女にこそはなりにける。

　今は俗世を高く離れて九重の上に、綾の衣を身に重ね綾羅の裳長く引きて、宮仕への暇日を、朱塗の欄に身を寄せて星の眼に何をか眺むる、斯くて其妙なる容姿と、稀世の歌才とに幾多の人を惱殺せしめ、三千の寵姫爲めに色なく、世は獨り只姫あるが爲めに光り輝きけるぞ目出度かりける。

　時しも淳和の帝御位に即きまして、世はいよ〳〵靜けく治まるべき天長元年の六月半すぎ、あいにくや旱魃打續きて、一滴の雨も降らず、野にも山にも水涸れて、地は裂け、草も木も萎みて色なく、垂穗祈りし稻はまだ花も咲かずして早や、今日は萎まん、明日は枯れん、あはれなる有樣となりにければ、帝は最く叡慮を惱まし給ひ、いかで神佛の御加護仰ぎて其御力を借らばやと、雨乞の御祈禱をぞ命じ給ひぬ。

　神の御心に適ふべき巫女には誰をか撰ぶべき、群臣は額を集めて評定なしける程に、人の心は皆小町姫に集まりて終に今の世に名高き姫こそ其撰にあたりけりやんごとなき君の仰せをかしこみて、姫は夫れより七日七夜の潔齋に身を清め、曇りなき心の誠を神に誓ひて、さていよ〳〵當日となれば、白麻の衣、白麻の裳のいでたちして神泉苑にと赴きぬ。

　緑の黑髮、光り輝く花の顔に、一心こめたる星の瞳の清くすみて、池の眞中に舟浮かせ、荒莚の上に靜に立てる有樣は、只之れ天女の茲に天降りましけんか、水を出でたる白蓮か、並み居る群臣は只其神々しきにアッと感じ入りて誰一人頭もたぐる者も無かりけり、黑鐵も溶かさんばかりの日を浴びて姫は一心に水の面を見つめつゝ、花の蕾の脣の綻びしと見る程に玉を

囀ばす聲涼しく、よどみもなく讀み出でたる和歌一首

千早振る神も見まさば立ちさいぎ
　あまのとかはのひぐちあけ給へ

あはれ古より和歌の德は鬼神の心をも和らげ、泣かしむるとこそ傳へ聞くを、今茲に花の乙女が清き眞心込めたる請願をいかで神の受納ましまさぬ事やあるべき、八大龍王の御心忽ちとけて、姫が言葉の終るよと見る間に、あら不思議やな。

さしも照りに照りたる日の神は其御姿を雲に隠して、北山おろし、サッと吹くよと見る程に黑雲うづまきて一天四海をたち被ひ、池の漣々波立ちさはぐ折しもあれ、盆を覆すが如き大雨は車軸の如くに降り來りぬ、其の靈驗の今更に著しきに畏れまどへる群臣は急ぎ姫を擁して内裏にと歸りぬ。



四方の民草の悦びは云はずもがな、帝は姫がいみじき祈禱の成就に叡感斜ならず、雨悅びの勅使は直に姫の許に下りぬ。

あはれ草深き片田舍に咲き出でたる野の花の雲の上に召し使はるるさへ身に餘る仕合せなるに今又斯る厚き君の御惠みを、姫が譽れは抑何にかたとふべき

之れ姫が二八の年も十六半すぎの事なりき。

小町姫の名は之れに依りていよ〳〵高く今は世の賤

が民草に至る迄誰知らぬ者も無きに至れり、實に姫が歌の徳に依りてこそ明日は死すべかりし心なき草木迄深き惠みにうるほひぬる程に、早稻田の面も靑々と昨日に違るよろこびの色見えにけるこそ有り難けれ。

さる程に姫は年を經るまゝに益々立ちまさり行くあで姿にかてゝ加へて神の御心をさへ和ぐる程の歌の才いみじければ内裏に仕へ奉る群臣達は皆之れに心を寄せて云ひ寄るものは引きも切らず、歌を以て、或は其居に忍び行きて、様々に切なる思ひを云寄れど如何にせむ姫の心は中々に堅くして解けず、玉を胸に宿せる深き秘密の一筋をかたく守りて、貴人が憂身やつして通ひ來るをも只そよ吹く風と眺めけるぞ奇怪なれ。

抑此優しき姫が胸の秘事とは何なりけむ、到底地上のものならぬ姫の餘人は終に知らずともいかで。

其昔藥子が帝の寵を得て終に后妃に立てられし例にならひて、あはれ已れも女と生れたる甲斐にとは、姫の心に終に去らざりし願事なりけむ。

如何に身は美しく生れたりとも、才人に秀でたりともやんごとなき一天萬乘の君の寵を得んと願ふは優しき姫が身には余りに大それたらずや。

さもあらばあれ一度決したる姫が望みは容易ならずとも夫れ故にいかであだし人と苟の契りを結ぶべき、さればこそ終には思ひ餘りて人の怨みを受けたる事も少からず。

うき事を忍ぶるあめのしこしくて
　　わがぬれ衣はほせどかわかず

と怨じけむも深き望みのあればぞ是非もなき、あらぬ浮名は姫に取りて此上なき仇なりけむ、しかも姫が深き望みは終に空しくなりぬ。

鎌足が藤原の姓をたまはりて仕へまつりしより歴代に傳はりて、藤氏の勢力日に盛になり后妃にはいつも藤氏より立てられしかば、藤原の一族ならぬ姫のいかに才色如何に勝れたりとて、君の御覺えめで度くともいかで其大望の此折に達せらるべき。

時は早くも過ぎ去りて、花の色は次第にうつろひ行くぞうたてき、空しき望みにあくがれて過ぎにし我世

恨めしや。

今は床しき蕾は開きて觸らば散らん艶なる風情なか〳〵に人の思ひの種子となりて戀の忍び路いよ〳〵しげくなり行ける内に名も高き深草の少將と云ふがありけり。

少將は仁明の帝の御側近く仕へ奉りて美男の聞え高く和歌の道にも堪能なりければ君の御寵愛殊に深くして帝を世に深草の君と呼び奉りける程にやがて此人をも深草の少將とは呼びなしけるとぞ。



小町姫より七歳の年弱なりしも、姫が美はしの姿にいかで心の動かされざるべき、青春の血汐一度湧きては又抑ふべくもあらず人目忍びては夜々姫の許にそ通ひける、空しき高根の花と知りつつも、何時かは己が心も靡かせんとて男心の一筋に思ひつめたるこそいじらしき飽迄心堅き姫も、今の世に美男の聞え高き少將の、殊に君寵深しと知れるまゝに、流石に心や動きけむか將知らず。

今宵も亦忍び來し少將に向ひて、數ならぬ我身を斯程迄に思ひ給はるは世にも嬉しき事ながら、如何に君よ玆に榻の立てゝあれば此榻の上に百夜の間臥し給へ世の常ならぬ戀と宣ふ程にいかで我云ふ事聞き入れ給ふや、やがて百夜のすぎけむ折にこそ我身は君にまかせまゐらさんと云へば、

少將聞いてそはいと易き事なり、今宵より百夜を此處に忍び寢のそのあかつきにこそ神かけて我言の葉にはそむき給はじなと、少將は世にも嬉しげに、

さて夫れよりは雨も降れ、風も吹け、戀の暗路の闇もものかは、日の西山に沈むを待ちかねて今宵過せば又明日の夜のまたれて通ふ幾夜々々、通ひし日數かきつけて今日は幾夜になりしかと日數繰りつゝ數ふれば嬉しや今宵は早くも九十九夜とぞなりにける、後に餘すは只一夜のみ。

あら嬉しやな我大願の明日は首尾よく成就して、姫は我言葉に從ふべき、あはれ明日待たるゝ嬉しさよ、疾く日の暮れよと心も空にあくがれて待ち暮したる其朝うたてやな、折も折とて親人の俄に病にかゝりて失せにければ、通ひつめたる大事の一夜も親の屍をふりすてゝ行かん力もなくて終に空しく止まりぬ。雨風の寒さも、辛さも忍び〳〵て通ひにし其辛苦も水の泡、力落して消え入る計りに歎きたるこそ道理なれ。

姫も流石にあはれとや思ひけむ、

あかつきのしぢのはしがき百夜がき
君が來ぬ夜は我ぞ數かく

とぞ讀みて送る。

めぐり行き、行きてはかへる小車や、送り迎ふる春と秋、數重なればいつしかにうつろいにけり我色の、無情の風に今や散るべき花の名殘かな。

世にときめきて高き榮譽を身に負ひて羨まれぬる小町姫も亦浮世の數にはもれぬを如何にせむ、父母も早く失せて、たよりたりし兄弟も亦世を去りにければ、今は誰をか頼むべき、姫が光る容姿を以ては如何なる榮華もまゝになるべきに、世にすね、人にそむきて徒に花の盛を過しけるこそ口惜しき。

年久しく仕へ、馴れまつれる四つの宮さへ近江なる相生の濱の離宮こそ隱れさせ給ひければ、夫れよりは又一しほたよりなき身とぞなりにける。

夫れさへあるに藤氏の勢は日に盛に時めきて、雲の上のうすかすみ、ゆかりの色のみまざりゆけば散りそめにける櫻花いつか其影にかくされて、今はなかなかに人うらやましき身となりにけるこそあじきなき。



さはれあじきなきは只姫のみにはあらず、藤氏の擅横は終に皇太子の廢立をさへ己か儘にして、世を憂きものに思召し小野の宮にと退き給ひし恒貞親王の御上痛はしきは申すも愚、此宮に年久しく親しみ仕へまつれる在原の業平、身は貴き内に生れながら世の權勢に打もれて年猶若けれ共、日々にうつりかはり行く世の有樣をいたくも憤りて面白からぬ日を送りたりしが、夫れとは云はねど同氣相求むる人心、世に美しき業平と、小町は終に深き交りを結びけるとかや、業平は此頃まだ十八九、小町は已に三十を越したる姥櫻なりけれ共、天の成せる麗質は此頃にも猶失せ去らで有りし

も入日まばゆき夕榮か、わびしき浮世に同志の戀人を得たる亦是非もなき事なりき。

小町が戀歌の多くは業平を歌ひしものとかや。

いとせめて戀しき時はうば玉の
夜の衣をかへしてぞきる

おもひつゝぬればや人の見えつらめ
ゆめと知りせばさめざらましを

などを初めとして姫が優しくも後の世迄殘したる歌の主が心こめたる裝ひに、思ひにもゆる顔は如何にあでやかなりけむ、年こそいたく離れたれどまだうら若き業平が仇に契りを結びしも實に道理とこそ思はるれ

嘉祥三年六月の月半、仁明天皇、淸涼殿にて歌の會をぞ開かせ給ふ、小町も亦同じ仰せを被りければ、今は早や四十二の色も香も影寒き身を畏みて殿上にぞまかり出にける。

其日の御題は水邊の草とありければ、小町は早くも前日に讀み置きけるを、其昔かなわざりし戀の恨みいかで一度は返さむものぞと、云ひ合さねど、思ひこがれて空しくながめ來たりける朝臣共打寄りて、折よき御歌會の席上にて耻しめんと、其内の一人、小町の歌を盜み見て、人知れず萬葉の雙紙の内に書きつけ置きぬ。

斯くとも知らぬ小町は殘りの色香花やかに着飾りて並み居る月卿雲客の間に並びつゝ、短冊取り出して御前にぞ進めける、御前に侍る人々は君の左右に居流れて御宣を待つ程に、小町の歌をまづ讀み上げよとの御諚をかしこみて。

まかなくに何を種とて浮草の
波のうね〳〵生ひ茂るらむ

とぞ讀み上げける、君は御感斜ならず、いしくも申たるものかな、之れに勝れる歌やあると、稱賛し給へば、折しも進み出でたる朝臣、しばらく待たせ給へ、小町の歌ひしは、其昔萬葉に乘せられたる古歌こそ候とて、寫し入れたる雙紙取り寄せもの〳〵しげに今や聲高く讀み上げむとす、御前に侍る人々は意外の事に何れも心苦しく控えたり、まして小町は安からぬ胸の

内漸くに押かくして頭垂るれば、大臣を初め多くの女房達の瞳は一斉に小町一人の上にぞ集まりける。姫は夢見る心地して打震ふ手を彼の雙紙取り上げて見れば不思議や、行と行との間も狭くして文字の墨色さへいと新しげなりければ小町は漸くに力を得て、之は由なき人の戯れ事、よく〳〵見れば古りし昔に書きたりとも見えず、墨の色さへ新しければ洗ひ落してや見候はむと、奏しける程に君にも之れに同じ給ひて疾く〳〵せよと宣り給ふ。君の仰せに嬉しやと姫は襷甲斐〳〵しく、清き流れの水汲みて洗ひ流せば、不思議やな入筆せしと云ひし歌のみ、跡方もなく消え失せにけるうたてき人の戯事、清き心は神ぞ見ますと、小町はいそいそ流ひ上げたる双紙を奉り危き恥をぞ逃れける。



百夜通ひて一夜を缺きて空しく戀々たる想ひを捨てし彼の深草の少將は、さても寵愛深かりし、深草の帝隠れさせ給ひけるより世を果なみて己も又出家なし世を捨て、僧正遍照とはなりにける。

もゑ出づるも枯るゝも
同じ野邊の草
いつかは秋に
あはではつべき

今は漸くに人に忘れられて寄邊なき捨小舟のわびしきは小町が上にぞありける。

やよやまて山ほと
とぎすことつてむ
われ世の中に住みわびぬとよ

實に花の色の時めく頃は、やさしかりける人々の切

なる戀もすげなくふり捨てゝ我世空しく眺むる間に、今はなか〳〵に人の上のみぞとなつかしくて、

　秋風にあふたのみこそかなしけれ
　　我身空しくなりぬと思へば

と怨じぬるも實にあはれなれ、今は嵯峨野の奥にささやかなる庵結びて世をわびしくぞ過しける、花の櫻は一度散りて又咲く春の來べき望みあれど、人世の花は枯木の枝に返り咲く事もなくて、只後の世の冥福をのみ願ふより外にすべもなき、小町は或日長谷寺に詣でて、日も暮れければ、明日の朝歸らんものと其夜を寺に泊りしに、はしなくも同じ日に遍照も此處に在りと聞きければ、つれなく過ぎし昔のなつかしくて

　岩の上に旅寢をすればいとさむく
　　苔の衣を我に借さなむ

とぞ云ひ送る、一度胸にきざみし小町の面影の、世を捨てたればとてなど忘れらるべき、つれなくすぎし女なれど斯く優しく云ひ來ればいかで其まゝに止むべしや。

　世をそむく苔の衣はたゞひとへ
　　かさねばうとしいざふたりねむ

今は青春の血も枯れにし二人の、はからず今茲に落合ひて、たのみ少なき身に和しき歌の返しを得たる小町の心の内や如何なりけむ。

　ひくらしのなく山里の夕ぐれは
　　風より外にとふ人ぞなき

荒れにし里のわび住ゐに、世に忘られ、人に捨てられて小町は老の身の、折々は好める道の筆とりて、思ひのたけを枯れ〳〵に覺束なくも餘命を送りにける。之れも昔の戀人とや忍びて通ひし文屋の康秀の三河の椽に任ぜられしとて通りがけに立ち寄りける時の小町が歌に。

　わびぬれば身を浮草の根をたへて
　　さそふ水あらばいなんとぞおもふ

と老の身の心も弱くて其昔さそひし水にいなんともせざりしを、捨てられては中々に憂しと見し世ぞ今は戀しく、康秀が戲の慰めてもすがり寄らんとするぞ是

非なき。

今は昔に引きかへて、頭には霜を頂き、花はづかしき肌は垢じみて皺をたゝへ、遠山の色美はしかりし蛾眉も消へ、星と見まがふ瞳さへ力なく衰へて、腰には弓を張り、あかざの杖にすがりつゝ、今にも絶へん命なれ共脊にかけたる袋には明日の飢を凌ぐべき粟の乾飯を入れ、雨露をしのぐ簑笠は破れはてゝ、塵うち拂ふ袂もなく、路頭に物を乞ひつゝ、其處とも知らずさまよひ行く、枯木の如き足瘠せて、脛もあらはに土をふみつゝ、日々に弱り衰へて、あれぞ小町のなれの果よと賤の童にさへ笑はれて、終に野山にのたれ死の世を果てしこそあはれなりける、年六十六、將に貞觀十五年にぞあたりける。

越えて貞觀十六年、唐の宮居となぞらへて造り給ひし大極殿も火の爲めに烏有に歸す、あはれ壯嚴を極めし王朝時代の遺物と、一世の人心を奪ひたる美人とは年を追ふて世になき者となりにける。



大橋圖書館の婦人閲覧室

坪谷水哉

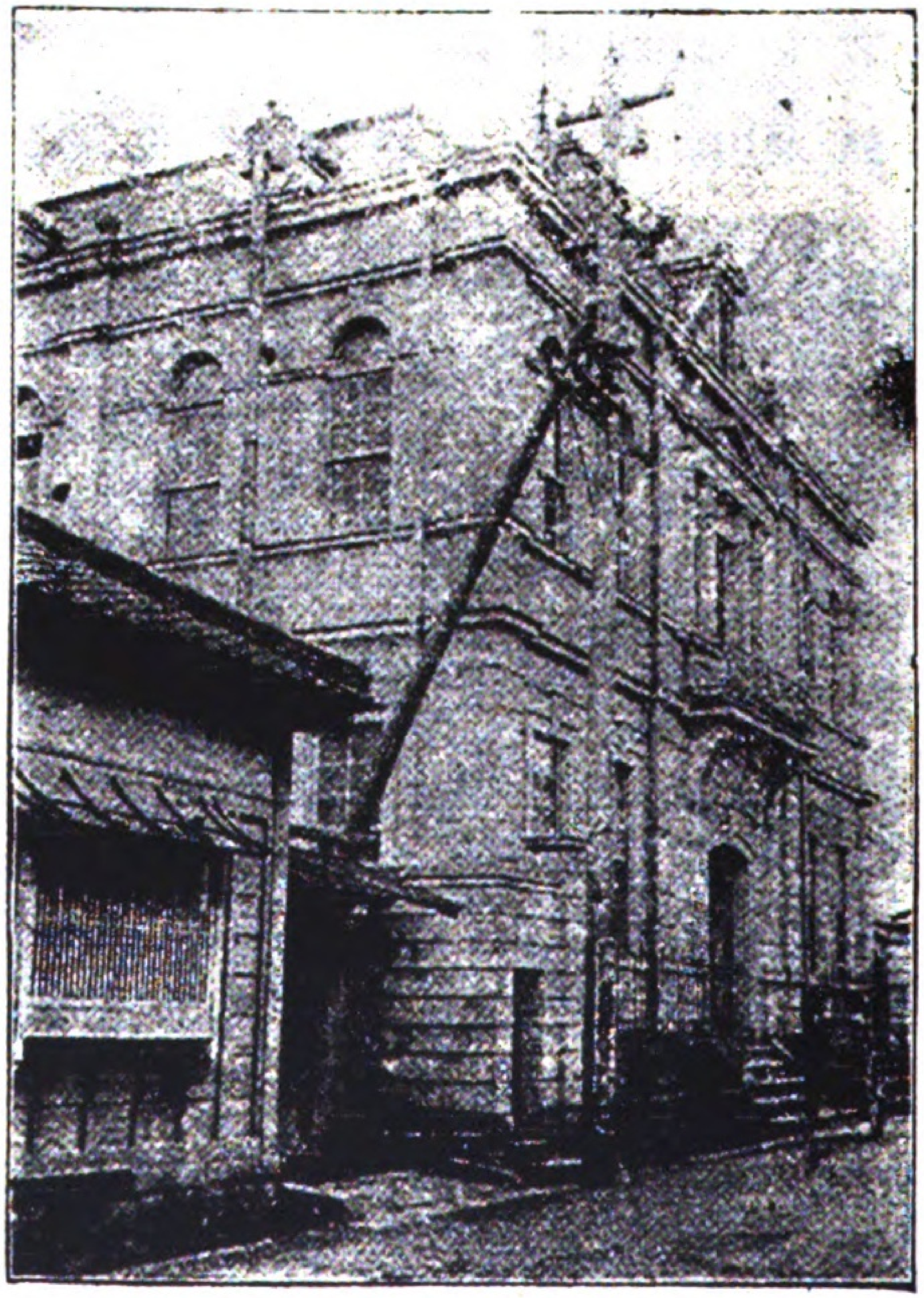
「今日は、貸本の御用は御座いませんか、先日のが御明きになりましたら、頂戴して參りませう」と、低い聲で呼びながら、客間々々を廻るのは、温泉場などで常に見る所で、退屈凌ぎには甚だ重寶であるが、呼び込で其の携ふる所の圖書を見ると、何れも陳腐なる昔時の小説や、軍書類、然らざれば數年前に流行して、東京邊りでは最早顧りみる者の少ない物ばかりで、オヤ〳〵是はと失望し、ア、此んな時に近所に圖書館があつたら、毎日往て、何でも面白い本や有益の本を思ふ存分に繙き見るべきものをと思ふとが數々ある。

然るに此の貸本屋は、實際東京などでも、例の通り高く積だ風呂敷包の圖書を背に負ふて、下宿屋の女學生達や、閑靜な屋敷町の夫人方の許を廻つて、仲々重寶がられて居る相である。ソコで其の貸本屋が持て廻る圖書の種類はと云ふと、大部分は小説で、中には隨分風敎に害ある樣なものもあるが、女流の性質として書籍雜誌屋の店頭を、男子の樣に、矢鱈に搔き廻すことも六ケしいので、僅かの見料で、先方から持て來て貸すのが、便利だから、甚だ重寶がらるゝのは無理も無い。然ども其の持て來る圖書の種類が、僅に一個の風呂敷包では、撰擇の區域が甚だ狹く、トテも滿足に圖書を得られないことは言ふまでも無いから、斯かる女流の人々に對しては、切に書圖館の利用を御勸め申す。

圖書館と呼ぶ者は、當時東京市中でも澤山あるが、其中で、特に婦人閲覧室を備へて、和漢洋古今を通じて、總ての圖書を備へ何人にも往て讀まるゝ樣に整頓して居るのは、上野の帝國圖書館と、私立大橋圖書館とである。中にも大橋圖書館は、場所が東京の眞ン中九段坂上、靖國神社の近傍で、婦人達の往て見るには恰好の土地だ。殊に婦人閲覧室は、全たく男子と隔離して、其の室内に婦人に適する圖書の目錄をも備へて在る。室は二階の上で、近くは靖國神社境内を望み、

遠くは神田、日本橋、京橋の各區から、芝浦、品川沖まで、窓の外に眺められ、夏は風通りが極めて好く、冬も煖爐の傍で、滿都の雪景を眺めながら、毫も寒さを知らず、極めて閑靜な一室で、何でも望む所の圖書でも雜誌でも借り出して讀む事が出來るのだから、研究の爲にも、娯樂の爲にも、之に勝さる場所は無いだらう。

斯樣に婦人達の讀書の爲にも、深き用意を以て設立せられてある大橋圖書館の由來に就て、少しく語れば是れは故博文館主大橋佐平君が、歐米漫遊のとき、彼國では、都市、村落を問はず、到る所に圖書館が建てられて、多くの圖書を備へ、公開して何人にも自由に讀ませるので、男子は勿論、婦人でも、暇あれば圖書館に行き、殊に感心なるは、下女までも、自分の其日の仕事を濟ましてから、圖書館に行て勉強し、産婆や小學校教師、または幼稚園の保姆などの試驗を受ける準備をする者も少なくないといふ事實を見て來て、自分は出版業で成功した者であるから、ドウか出版物を以て社會の公益に貢獻したいといふ冀望で、今の大橋圖書館の設立を企



大橋圖書館

て、其場所には、成るべく公衆の集まり易い便利の地をと選んで、終に其頃買入れられたる故川上陸軍大將の舊邸、乃ち麹町區上六番町四十八番地の自邸が、東京の眞ン中で三番町の通りには電車も引けるから、四方から閲覧者の來り集まるに便利であらうと云ふので、愈いよ此所と選定し、其の建築工事に着手せられたスルと不幸にして同氏は工事の中途で死去せられ、今の博文館主大橋新太郎君が、父君の遺志を繼で之を完成し、始めて開館したのが明治三十六年の六月十五日であつた。で大橋家から此の館の建築費や



同圖書室

圖書費、並に維持の費用として寄附した金額が十二萬五千圓と其外に博文館出版の圖書は、總て其外に寄贈せられてある。で、現在の藏書が、和漢書四萬七千三百餘冊、洋書が三千五百餘冊で、最近一ヶ年に約八萬人の閲覧者があるから、此館が世の讀書家に與ふる利益は甚はだ多い。

　大橋圖書館が、男子の爲に與ふる利益は以上の通りであるが婦人が如何に之を利用するかといふと、未だ男子の五十分の一ほどしかない。是は畢竟まだ大橋圖書館の事情が知られて居ないからと思ふ。前に言ふ様に、同館では、殊更に婦人閲覧室を

設け、婦人の爲に便利を供へ、圖書も、注意して婦人向きのものを多く集め、古今の文學書、美術書、家庭、技藝などに關するもの、または清新なる娛樂書、即ち品の好き小說やお伽話の類は、盡く集めて備ひ附け、閲覽者は、靜かな別室で讀むことが出來る。また其等の圖書は、一日の中に何回でも取り替へ引替へて借ることも出來る。それで食事時には麵麭や牛乳を館內で買ふことも出來る。また開館は每日午前九時から午後四時までゝ、日曜でも祭日でも休みなく、唯だ每月の卅日だけ館內掃除の爲に休むばかりだ。



同　婦人閲覽室

斯樣にして、館の入場料は、僅に一日一人金三錢である。

僅に三錢の入場劵を求めて這入れば、一日の中に何圓何十圓の圖書も借りて讀まれ、しかも東西古今の總ての圖書が、盡とく備はつて、それで閲覽室が、清潔で、閑靜で、夏は涼しく、冬は煖かで、誰に遠慮もなく氣樂に本を見らるゝのであるから讀書家の爲には無上の樂園である。また斯くして此の館が一般公衆の爲に利用せらるゝのが設立者の希望である。然るに未だ其の事情を知らずして、他の男子ばかりで雜沓し、婦人は片隅に小さくなつて居らねばならぬかと信じられて、之を利用する

者少なく、却て不十分なる貸本などに依頼せらるゝ人は、此館の性質も次第に世に知られて、日曜や祭日には人が多い様では、甚だ氣の毒である。が、幸ひに近來多數の婦人閲覧者ある様になつたのは喜ばしい事だ。

喫茶十則

茶は咽喉の渇を醫し、精神を爽かにする効あればか、日常の飲料として最も人の嗜好に適せる好飲料なり、されど之を用ゆるに度を過ごし、時を誤れば却て害あり、今喫茶十則なるものを或書にて見たれば、喫茶家の參考までに茲に摘載す。

一 濃く煮たる茶は害ありて益なきものなれば用ゆべからず、殊に神經薄弱なる人は之を避けざる可からず。

一 茶を喫して不快を覺ゆる時は決して飲むべからず。

一 食事の前または空腹の時などに喫するは宜しからず、故に俗に茶腹も一時と云ふが如きは大禁物なり。

一 睡り易からざる人は早朝を除くの外、濫りに喫せざるを可とす。

一 氣倦み神疲れたる時は、濃茶を喫して精神を一新し、其の既に活潑に復せし時、再び事物を思考する人あれども、こは甚だ健全を害するものなり。

一 小兒に茶を與ふるは宜しからず。

一 過勞したる時又は食物の不十分なる時は、多量の茶を喫するは害ありと知るべし。

一 茶を喫するに最も宜しき時は、凡て食事の後と知るべし。

一 茶の中に牛乳又は砂糖を和して喫すれば、其味ひ美にして且つ健康に裨益あり。

一 凡て喫茶は適度に用ゆべし。若し度を過せば終に病を醸すものなれば、成べくは節するやうにすべし。

都人士の田舍觀

銀月



▲予嘗つて、四ッ木の吉野園に至る、亭上の扁額に、所謂月並流の俳句を列記せるを見る、中に一句の予が眼を引けるあり、曰く『掛稻に村のよごれも隱れけり』と、予、誦詠再三、妙と稱してやまざりき。

▲なほ記すべき事を遺せり、其句の下に『江戸子』と署せるを。

▲何故に、予が此句を妙となしゝかを怪むこと勿れ。江戸子即ち都人の田舍觀が、此間に全幅を露呈せるを認め得たれば也。

▲『村のよごれ』とは面白からずや、彼等は、先づ根本的に、都を綺麗なる所、田舍をきたなき所と確定しつゝある也、何故に田舍のきたなきかは、其肥溜多きが故なるのみにあらず、其馬臭く泥臭く肥臭きが故なるのみにあらず、否寧ろ是等の點を問題となすよりも、都人は先づ、田舍の煤けたる茅屋をきたなしとなし、田舍人の日に燒けたる呑氣なる顏をきたなしとなし、其衣服の粗末にして焚火に燻りたるをきたなしとなし其樹木の植木屋的に拈くれざるをきたなしとなし。其草花――例令ば菊の如きの、花壇的に頭重からざるをきたなしとなし、稻の穗、粟の房、若くは菜屑などの花散りて、小鳥の之を啄むをもきたなしとなす也、此

眼孔を以て觀察する故、田舍の事々物々は、彼等の眼にきたなく映ずるを免れざる也、『村のよごれ』とは是等のきたなき物事を意味するものにて、田を苅り稻を掛け渡したれば、之が爲めに田舍のきたなさが蔽はれて、辛うじて都人の眼を引くに足ると云ふ也、稻は日本人の生命の親なる米の飯の原料を供給するものなれば、甚だ目出度き物也、目出度き物なればこそ、村のよごれを隱して、都人の眼に美觀を與ふるなれ、稻にして若し米の飯の原料を含まざる藁屑ならば、縱令黃金の光を放つとも、決して、彼等の眼中に於て『村のよごれ』を隱すに足らざる也。

▲田舍の風致は即ち都人の所謂『村のよごれ』也。

▲亦半可通なる都人無きにあらず、彼等は、强ゐて『乙でごす』的筆法を振り廻はして、『これも奇妙』『あれも素敵』と叫ぶ、而も、彼等に『奇妙』なるは、眞の田舍の風致にあらずして、之に俗惡なる意匠を加へたる點のみ、彼等に『素敵』なるは、正しき田舍の趣味にあらずして、之れをハイカラに變形せしめたる部分なるのみ。

▲彼等は、石垣を築き、土塀を繞らし、白堊の倉庫、甍瓦の樓屋、巍々として山に倚り谷に臨む、と云つたやうな豪家の構へを見て、故らに趣味を感ぜずとなし、必ず、苔蒸せる茅屋の壁少しく破れ柱やゝ傾きたるに逢はずんば、『奇妙』を唱ふること能はずとなす、又、萬顆の朱丸、枝も撓むばかりに生りたる柿の木を見て實に美觀と思ふ心を、喉迄出だして無理に呑み込み、强いて、半ば枯れたる老樹の、鴉に食み殘されたる一二顆を『素敵』となさんことを要する也。

▲彼等は、型に依りたる或る消極美にあらざれば、田舍の美にあらずとなす者にして、田舍にも亦積極消極兩様の美あるを知らざる不具者也。

▲こゝに、田舍出にして都人化したる厄介物あり、此都類は、田舍者と呼ばるゝが首を切らるゝよりも辛く、爲めに、一より十迄盡く都を揚げて田舍を抑ふ。

▲眞に蟲唾の走る氣障は、純然たる都人の半可通よりも、田舍出の都人に多し。

▲之に反して、都人化したる田舎者にして、都門に於ける境遇の不如意なるより、若しくは繁忙にして田舎趣味に遠ざかりたる憧憬の餘り、其空想中に田舎を美化し、濫りに田園を是認して都府を否定する者少なからず、大抵の文學雜誌は此種に屬する文字を揭ぐることを喜ぶもの丶如し。



▲卒然として之を見れば、田舎の物事の外裝無くして露骨なる、平生見馴れぬ都人の眼に、厭ふべく卑むべき感を與ふれど、一段進んで、細かに之を味ふるに至れば、厭ふべく卑むべき點即ち喜ぶべく尊ぶべき點なるを知るべし、然れども、更にこれより歩を進めて、喜ぶべく尊ぶべき點の底を極むるに至らんか、還元して再び厭ふべき卑むべき點に復するを免れざらん。

▲田舎人の禮に嫺はずして、人を見て直ちに所思を吐露し、他の感觸を害するや否やを問はざる、是れ厭ふべきが如しと雖も姑く之を寛容して、其形式に包まる丶内容を看取せば、眞情充溢して、都人の口厚く腹薄きに比し、却つて大に賴もしき所あるを覺るべし、然れども、若し更に其内容を剖ひて中心に至らんか對手の都合を問

はずして、飽迄も好意を押賣するの弊に撞着せん。

▲喉迄閊へて、モウ食へぬと云ふを、更に山の如く盛り上げて、口を割らぬばかりに强いられ、歸つて後、之が爲めに胃腸を病むこと一週間ばかり、懲り〳〵して再び行くまじと云ふは、田舍の馳走になりし都人也。

▲手足も衣服も泥土と穀物の塵と野菜の汁とに塗れ、家は充分に掃除せずして、焚火の燻ぶるに任せ、器具調度の配置亂雜に、其品質粗野なる、一見すれば、不潔にして觸るべからざるが如しと雖も、反つて、都府の生活の、外淸潔なるが如くにして、其實、種々の病菌毒素に圍まるゝに優ること萬々也。然れども、田舍人は此の如く衞生の必要を感ずるの刺戟少なきより、一旦其地方に疫病の來襲するあらんか、防禦の術疎にして、之に斃さるゝの率遙に都府に過ぐるあるを免れざる也。

▲徒らに半面のみを見ること勿れ。

▲田舍に遊びて第一に感ずるの困難は何ぞと問はゞ、都人は萬口一齊に答へて曰はん、食物の粗惡なるに在りと、然れども、是れ最も愚劣の言也。

▲都の食物は、肉類菜蔬の別無く、すべて原料の新鮮ならざるを常とす、たゞ之を調理するの方法に依つて味ひを生ずる也、故に、都人は物の眞味を解せずして、附加せられたる人爲的風味を尙ぶのみ、之に反して、田舍の調理法は巧みならずと雖も、原料は直ちに其地其水より採りて用ふるを以て、新鮮なること此上無し、物の眞味を問はんとする研究的態度を以て之を食はゞ亦別樣の興趣あらん。

▲されば、田舍人も亦心して、他より來るの者には、其地の調理法を以て、其地の產物を食はしむるを主とすべし、都人の狹隘淺薄なる、田舍に似合はず都風の調理を能くすと云つて稱揚せんことを要すれど、之に乘ずるは馬鹿の骨頂也。

▲多摩川上流に鳩の巣と名づくる奇景あり、巖迫り水激して、春は藤の花房亂れ搖ち、秋は紅葉倒まに空を吹く、されど今は風景を說くが目的にあらず、鳩の巣遊覽の客を案內する土地の人が、巖の間に於て奇妙な

る調理を試むるを語らんとするのみ。

▲先づ手頃の凹なる石を拾ひて、炎々たる焚火の中に投じ、殆んど紅になる迄之を燒く也、而して後、火を除き水を打ちて淸らかになし、餘熱なほ騰々たる上に水を注ぎ、味噌、砂糖、酒を和し、川にて捕へし鮎或は鰷の生けるを、附近の谷より採りたる芹と混じて、其中にたゝき潰し、石より發する火氣にて、適宜に烹熟せしめ、箸を加へて直ちに食ふ、其美味八百膳も何もあつたものにあらず。

▲因州鳥取の市中を流るゝ



袋川を遡りて、郊外に出づること一里ばかり、菜の花方に黃なるの頃、一二寸の小鮎を釣る者多し、此所に一丼の醋味噌を携へて遊ぶは天下の奇也、釣りたる小鮎を買ひて、生の儘箸にて挾み、ピチ〳〵するを醋味噌に潜らしては口に運ぶ也。

▲予の故鄕秋田にても、亦此類の田舍料理あり、白魚を網する所に行きて、大皿に生薑醬油を湛へたるものに、其水を出でしばかりのを泳がせ、ズル〳〵と饂飩の如く啜り込む、亦妙ならずとせず。

▲竹林に入りて、大いなる竹の子の周圍を掘り、之に炭の火を充たし、頭を攫んで皮を左右に引きめくり、醬油をかけては、庖刀にて横に批ぎ取り、食つては再た醬油をかく。

▲獵夫に随つて秩父山中に入り、夜、枯枝枯葉を焚いて岩窟に宿す。銃し獲たるの鹿を割きて肉塊を取り、枝を削り串となし、炙つて之を食ふ、帝國ホテルと雖も此佳味を供する能はず。

▲以上は、予が實驗せし所の一端を擧げたるに過ぎず、予が實驗せし所のみにても、此外頗る多し、予が實驗せざる所に至つては、更に甚だ多からん。

▲予の說く所に從はゞ、獨り田舍に遊びて物の眞味を知るの利あるのみならず。同時に地方特殊の風俗を知りて、住民の性癖嗜好を研究するの手掛りとなすことを得ん、田舍に遊びて、食物の都に近きを喜び、且つ之を求むるは、實に痴人の標本也。

▲されど、田舍料理の態とらしく蠻的にしたる物には、以上の如き天眞の風味を存せずして、却つて下劣口にすべからざる多し、一概に云ふべからざる也。

▲菊花は、稍遲く頃に咲くものにあらずば、花の一片づゝに生氣充ち渡りて、其特色を發揮するの段に至らず、是れ、我等素人の推測說にあらで、栽培者の常に語る所也、都人の愛玩する花壇菊の、徒らに早と大と奇とを競ひて、生氣に乏しく、傘に護られ、障子に圍まれ、恰も、病んで顏の腫れたる女が、重い頭を强いて擡ぐるが如くなるは、殆んど菊花の特色を沒却するに近きもの也、生花よりも寧ろ造花に似たるもの也。

▲櫻と牡丹とは豐軟を尙ぶが如く、梅と菊とは瘦勁を好しとす、されはとて、野人籬落の間、雜草同様にヒヨロ〳〵と生え出でたる貧乏臭き菊が、必ずしも花壇菊に優れりと云ふにあらず、顏腫れたる女の如きに至らしむるは過度なれど、瘦勁の特色を失はざる限りに於て、適宜に栽培したるものこそよけれ。

▲都の人は菊を唯だ美しき花と見る。是れ抑も間違ひの本也。故に、菊人形と花壇菊とは別系統のものにあらず、都人一般の眼よりすれば、菊人形は花壇菊の更

に進歩したるものなる也、此眼を移して他を見る、痩勁の特色を發揮したる菊と、貧乏臭き菊との區別を、判知し得ざるも尤も也。

▲田舍人が、なまじ都の風を學びて、畸形の花擅菊を作り、得々として誇示するは、其淺墓なること更に都人の之を爲すに過ぎたり、されど、路傍に種ゑ棄てられたるヒヨロ〳〵菊の貧乏臭きを、菊は之に限れりと自負するも、亦片腹痛しとなす。

▲都の人が偶に田舍に行き此路傍のヒヨロ〳〵菊を見て田舍の菊の全部となし之を嘲罵するは粗忽の至りなれど、『乙でごす』的に之を稱美するの義理も亦無用也。

▲總括して云へば、都人の田舍觀は槪して誤謬に陥りつゝあり、甚だしき誤謬に陥らざるものと雖も、槪して淺薄なるを免れざる也。

毛髪の衛生

婦人は髪形といつて總々とした黒髪の長く匂ひやかなほど凛々しい者はない、處で此黒髪といふ者は何んなものかといふに、丁度植木の様なもので毛囊と云ふ根に依つて生て居るのである、それで髪毛から云へば頭地は畑で此畑に肥料が不足になれば直に色澤を失ひ、或は灰白色となり、或は棕梠の様になり、終に枯野の薄其儘の見難い髪毛となるのみならず段々と全身の毛部に及ぼして頭髪から眉毛、睫毛、腋窩陰毛まで脱落ることさへある。

婦人の髪には常に油を附けるから、垢が付き易くて掃除がし難い、そこで自然「フケ」や垢が腐敗れて粘液性なり途に一種の忌やらしき臭氣を放つ者であるが是を能く掃除をせぬと毛が抜ける様になり、色澤も悪しくなる、殊に小兒の時分には「シラクモ」「メムシ」などが出來る者であるから、始終藥石鹼で洗はねばならぬ、そして洗つた後には椿油の如き者を塗けて、毛を軟かに保たせねばならぬ、椿油は八丈島の産で、頭毛には屈強の養となる様である、此油を始終塗布れば只髪毛を美麗にならしむるばかりでなく、非常に長く延ばしめるもので、八丈島の婦人などに往々髪毛の地を延くものあるは、此油を用ゆるせいである、此油は一升一圓位だが眞の椿油は素人では、見分けが付かぬから確かな商店で買はねばならぬ。

遊戯

家庭遊戯　新花かるた

松浦政泰

此遊戯は原名を「新遊戯花骨牌」(The New game of Flawer Cards)と申しガゾー・ブァオデー氏の新案で、西洋骨牌トラムプと我が花骨牌を折衷したやうなものであるが余が更に更訂を加へて大に日本化させたものである。

札は七組に分れ、一組が八枚宛で、倘特別の札一枚を加へ合計五十七枚である、特別の一枚は中央に日英國旗交叉の圖を描き、上には爛熳たる櫻花あり、下には馥郁たる薔薇があつて、暗に日英同盟天下に敵無き意味をほのめかせたもので、此札の點數は外のよりズツト飛拔けて三百點である。

第一組

第一組は梅で、其一等札は菅公の肖像の畫があつてこれが百點、第二等は梅に鶯の畫で五十點、第三等は梅花滿開で四十點、第四等は蕾の梅で三十點、第五等は花瓶に生けた梅の枝で二十五點、第六等は散りかゝりの梅で二十點、第七等は葉繁り實を結んだ梅で十點第八等は皿に梅干でこれは零點。點數はいづれも札の上の隅の方に書き記すので、札の大さは三寸に二寸位で、板紙で拵へて可い倘第二組の櫻以下の畫と點數は左の通り。

第二組　櫻

(一)旭に匂ふ櫻の蔭に鎧きた武士(百點)(二)花見幕に櫻(五十點)(三)櫻花滿開(四十點)(四)蕾の櫻(三十點)(五)花瓶の櫻(二十五點)(六)散かゝりの櫻(二十點)(七)葉櫻(十點)(八)洋食の皿に櫻んぼう(零點)

第三組　薔薇

(薔薇は英國の國花である)

(一)薔薇を手に持つヴイクトリアの像(百點)(二)薔薇に蝶(五十點)(三)薔薇滿開(四十點)(四)蕾の薔薇(三十點)(五)花瓶の薔薇(二十五點)(六)散かゝりの薔薇(二十點)(七)葉ばかりの薔薇(十點)(八)薔薇香水(零點)

第四組　牡丹

(一)牡丹圖に於ける楊貴妃(百點)(二)牡丹の蔭に猫(三十點)(三)より(七)迄は別に變られば略す(八)紙に押した牡丹の植物標本(零點)

第五組　藤

(一)鎌足公の像と藤原家の定紋(百點)(二)藤の蔭の池に鯉(三十點)

（三）より（七）迄は前例の通り（八）藤豆（零點）

第六組　百合

（百合は佛國の國花である）

（一）百合を胸にかざしたナポレオンの像（百點）（二）百合に蜻蜓（三十點）（三）より（七）迄は前に同じ（八）百合根（零點）

第七組　蓮

（一）釋迦の像と眞鍮製の蓮花（百點）（二）蓮花に蛙（三十點）（三）より（七）迄は前に同じ（八）蓮根（零點）

數は偶數なら何人でも可い先づ人數だけの札を取出し、（其中には必ず特別札を入れて置き）之を一同に配り、特別札の當つた者から打出すことゝする、次に再び一切の札を能く混交せ、銘々に四枚宛を配り、別に五枚だけを疊又机の上に表向けに並べ（之を「溜り」（Pool）といふ）後は裏向けて重ねた儘眞中に出



して置く偖打出し役は己のが手の札と溜りの札とを見合はせ、例せば櫻の百點と櫻の十點の如き同じ組の札があれば我手のと机のとを合はせて我が所得とし、重ねた札の一枚を表向け、若し同種のものが溜りにあれば此二枚をも取ることが出來るが、若し又手の札と机の札とに一つも同じ種類がなければ手の札を一枚机に出し置くので夫から重ねた札を一枚取出すことは前と同樣である、かく順々に廻はして居て札が無くなる時を終りとするのであるが、特別札が手の札にあればいつでも勝手のよい時何の札でも取る權利があり、又重ねた札から出た時も同じく、溜りの何の札でも取つて宜しい、若し

始めに机の上へ出す五枚の中に出たなら、外の札と取變へねばならぬ規則である、其回の勝負は自分の取つた札の點數の合計の多少で定まるのであるが、大抵は回數を重ねていつて早く二千點に達した者を勝とするのである。

隨感

新年の婦人美

秋劍

△正月の花

元日や己が女房も何とやら、と俳諧子はやさしく戯むれ、正月は我女房にもちよいと惚れ、と川流子は正直なり、いづれにもせよ、婦人は正月の花ぞかし、門松の翠にほふといへども、其黒髪の艶々しきに及ばず、福壽草の花西洋種のいろ／＼咲けど、其麗しき粧に如かず、遠山に立ち初むる霞の匂やかなる富士額、靨裏に笑ふ紅梅のうつくしき唇、えもいはれず、あはれ形のかくもめでたく、心の操正しく温かき愛は冷めずもあらば、實に婦人は正月の花ぞかし。

△羽子あそび

羽子あそび、樂しきものなり、花の粧凝らせる子が、裳ほら／＼袖ひら／＼、すこしはぬるむ春の風に、燕子の行來の定め難きをうらみ、やがてはとい竹にとゞまりて、落ち來らぬ恨誰に訴へん方もなく、蛾眉を顰めて鈴入の下駄踏みならす西施の卵の美しくもあるかな、其姉なるべし、相手せし、これも美しきが、廂髪ゆら／＼、被布さら／＼、年長だけに智慧袋しぼり、いづこより持ち來れる、長き竹さし伸べて、いろ／＼の工夫を凝らせども、燕子は頑にして飽まで降り來ず、今はせんすべ涙ぐみし可厭さを、見るに見かねて角帽の青年、戀にはあらぬ義俠の本性、學校にて習ひ覺えし機械體操の奧義を顯はし、もろ手を屋根裏に掛るゝと見るや、ひらりとばかり電光石火、人は屋根に在り燕子は手に在り、姉妹目懸けて抛げ與ふれば、感謝は目に口にいはず語らず、袖に裹むに餘あるべし。

△かるた會

春の夜の夢ばかりとはまだいひがたき太陽暦の正月ながく\／し夜を獨にあらぬ友どち幾人、男さへ交りてかるた會、からくれなゐに水くゞる緋縮緬の袖口より、富士の高根の雪ならで、玉手の群るゝ青疊あさぼらけ、有明の月と見るまでに、ふれる白雪、散らす歌牌あれかこれかと目もあやに潮干に見えぬ沖の石の、人といふ字に手が三ツ、四ツ目のある名人は、五ツ六ツを續けざま、何の苦もなく造作なく、たくみも七重八重櫻、今日この席のチャンピオンとぞ聞こえし、さるにても其姿さへ心さへ、美しう勝逃の、あまりに妾の運よくては、皆様の御興も盡くる道理、まだ宵ながら、明けて出た家も氣がゝり、御免遊ばせと立たまくするを、みな\／許さず、雲の通路吹き閉ぢよ、しばし止めて又更に、男女と立ち別れ、稲葉の山のいなとは云はさず、源平咲分けの亂れそめにし戰ひ、會稽の耻雪がんと云ひし男方、またもや美しきチャンピオンの爲に駈煩まされ、さん\／の敗北チックに光る髪といはず、顔といはず、團炭の皮膚へ白粉の、白きを見ればば夜ぞ吹けて、上野の山の鐘の聲、しづ心なく人の散るらん。



△鞠あそび

一の木、二の木、三の木さくら、五葉松やなぎ、柳に鞠はつきものゝ、春の遊ぞ長閑なれ、昔に蹴鞠の技あり、今に庭球野球しな〳〵あれど、彩る鞠の鞠遊び鞠歌てふ古雅なる唱歌を、玉をまろばす如き乙女の咽喉にて歌ひつゝ、いと面白く突き馴らし、ちよと百ついては渡す手の、まづ〳〵一貫御借し申す御目出度さ、おんどら〳〵どら猫の、戀にはあらぬ立ふるまひ、雄子猫の蛇喰ふ恐ろしさもなく、たゞどこまでもまアろくまろく、まろく治まる御代ぞめでたき。

子供の癖

竹貫直人

僕は育兒の方法に就ては、常に、油断なく、注意を拂つて研究して居るが、仲々容易のものでは無い。

一體兒育には皆癖がある、其癖は智識が發達せず、觀念はまた成立たず、只だ小さい心のまゝに立ち働いて居るのであるから、無論自分自身はそれが善いか惡いか知らないのであらふ。強情など一種の癖で、之は特に矯め直して遣らねばならぬ。

で、僕は、此強情を矯めるに就いて、種々なる手段をとつて研究して見たが、一番好結果を奏したのは、兒童が強情で、云ふことをきかぬ場合には、餘り理屈のやうなことは言はず、只だ斯樣なさい、彼樣なさいと命ずる、それでも猶は兒童かせぬ時は、猶ほ繰返す、折に觸れ、時に觸れ、いろ〳〵なことを言附けて、素直に云ふことをきかすやうにする、と云ふやうな工合に優しく、根氣よく遣ると、結局耐忍力の競爭で、何處までも、此方針を轉せず、打ち勝ちさいすれば、兒童の強情は直つて仕舞ふやうに思ふ。

それから、何んな惡癖のある兒童でも、必ず一の美點があるものであるから、僕は常に、此美點を探し出して培養する事を怠たらない、此美點を大切に、育て、大きくして遣ると、他の惡癖は何時か侵食せられて、少さくなつて、遂には確に無くなつて仕舞ふと僕は信

じて居る。

能く世の親たる人は、兒童は、躾け方が、第一だと云ふ、成程躾方も第一であらうが嚴重な矯め方は、餘程注意せなければならぬ。

假令ば、此處に美くしい植樹があるとする、持主は此培養に全力を注いで、殆んど寢食を忘るゝ程であるが、偖て彼の枝振りが惡いとか、此枝が長いとかで、無理な手入をすると云ふと、植樹其物の特質を失つて、遂には枯れるやうなことがあらう、之等は骨折り甲斐がないので、躾方も同樣で餘り嚴しすぎると、兒童を却つていじけさして仕舞はふ。



又た或る親などは、兒童の泣くのを嫌ふやうであるが、泣くのは決して差支へない、寧ろ十分に泣かすべしである。手段をとつて、無理に慰さめると云ふことは考へものであらうと思ふ。

我儘で泣くにもせよ、急にだまれと云ふたとて、直とヒタとだまれるものでないから、構はず泣かして置くが好い、兒童は泣いて行く内に遂には、自分は何の爲に泣くのであらふと感付いて來る、自然と感情が薄らいで來て泣きやむやうにならう、之を強制的に止むることは考へものである。

大人が悲哀などを十分に表情しないのはつまり感情

を押えて置くので、其結果、感情の麻痺して仕舞つて居る人もあらふ。充分に發輝せしむべき兒童の感情を强制的に止めると云ふ事は實に注意を要することであらう。

故に僕は或る程度までは泣くまゝに捨てゝ置いて好いと思ふ。

總て兒童は、感情を直接に表はして、泣くとか、笑ふとか云ふことが、誠に愛らしいもので、且つ兒童其者の美點でもあるのだから、可成兒童の感情は十分に發達させて、自由な心を、持たしむるやうにしたい。

頭から叱り飛ばして、强制的に感情を麻痺させると、何も大人となつてから、殘酷の性格となりはしまいかと思ふ、感情の發表を損ねて居る爲め、智覺神經は鈍くなつて、常識の完全なる人物とはなれないであらふ。

概括して言ふと、小學校に出るまでの兒童敎育に就ては、僕は放任主義で、育つるのが好くはないかと思ふ、併し兒童の其日々々の身邊に就て起る、惡癖惡慣は、能く注意して、充分矯めて遣つて居るのである。

▲羽子の話

羽根に色の種類あり、相並といふのは家鴨の羽根、鳥重とは雞の羽根、先白とは眞鴨の羽根、上白とは家鴨の上等羽根、五色とは雞の羽根を赤、黄、青、紫、桃の五色に染め。芥子とは家鴨の少なき羽根を撰みて小形に作り、[illegible]とは椋の代りに薏苡を玉とするの名にして羽根は芥子と同じ、質は北海道產の鷲の羽根で作り直段は九種のうち最上のものなり原料の羽根は市内にて蒐集するものと千葉その他の近縣より輸入するものとありて玉に用ゆる椋は房、總または埼玉地方より輸入し來るなり。

又右羽子に就て華族の令孃が用ゆる飾羽根は上白の羽根で形は櫻花、梅花、菊花、蝶形などで一種の製作を施したるものなり普通に使用するは上白、先白等が重なるものにて五色は進物用の羽子板に添へるなりとぞ。

叢話

鴨の眞味

京橋　伊勢喜主人談

都下屈指の鳥問屋京橋五郎兵衛町の伊勢喜を訪問して、冬季食用として珍重さるゝ鴨の種類、其捕獲場所及び眞味の季節等を、詳しく店主に聞きました。左に記すは即ち其談話の儘であります。(ことふ)

▲眞味の季節▲

鴨の一番美味い季節と云ひますは、冬至前後から一月頭で、初めの間はまだ脂肪が乘つて居ないから、極美味いと云ふところにまゐりません。また一月を過ぎて二月三月となると、體量は段々増加て、一月頃には三百目あつたものなら、三百五十目ぐらゐにもなりますが、味は漸次に落ちるものです。ですから、鴨の眞味の季節とまをせば、十二月下旬から一月一杯であります。

▲最も美味き鴨▲

眞鴨は、青首とも云つて、首の青い大きな綺麗な鴨で、歳暮や年始のお贈物には、誠に立派で宜しうございますが、其味は如何かと云ふに、眞鴨〳〵と稱美される程のものでありません。然かも一種の香を帶びて居るので、第一之れが厭だと云ふ人があります。故人團十郎などは、それを嫌つて居たさうで、長鳴の方を何時も買つて與れました。また店の得意先の料理店の中でも、芝の見晴しなどは、主に長鳴を使つて居ります。味の點になると、實際長鳴の方が優つて居るのです。

併し鴨類の中で、最も美味いのはタカブです。タカブと申しますと、小鴨のことで、我々營業者の方でも、何う云ふ意味か知りませんが、昔から斯う云つて居ります。小鴨ですと、他の鴨と異つて、少しも癖がありませんで、非常に美味ですから、鴨通となると、大きな鴨よりも却つて小鴨の方を稱美します。

それからカルと云ふ鴨も、頗る美味を有つて居ります。此鴨は内地産の鳥で、俗に夏鴨とも云ひまして、聞けば夏時分中川邊でも、葭の間などに卵を産つけて居るのを、往々見ることがあるとか申します。羽毛は眞鴨の雌に黒味を帶びた樣な色で、肉の色までが黒味を帶びて居るものですから、それを厭がる人がありますが、喰べて見ると、少しも癖が無くして、中々美味いです。

▲鴨の本場所▼

鴨は本場所と場所ちがひとでは、實際味が非常に異ひます。東京で鴨の本場所と申しまするは、千葉縣の手賀沼ですが、手賀沼の中にも、場所に依つて、鴨の味に優劣があります。手賀沼では、何處で捕れるのが一番美味いかと申すに、布施、柴崎附近で捕れるのが最も上等でして、其邊を總稱して上川と云ひます。此處が實際の鴨の本場所です。

また、鹿島方面で、十六島と云ふ邊でも捕ります。其處を下川と呼びまして、同じ手賀沼ですが、下川の方で捕獲した鴨は、上川で捕つたのと較べると、味が少し落ちて居ります。

毎年手賀沼で、鴨獵に着手する時期は、九月十五日からです。が初めは夫々準備を要するので、愈よ網を下すのは、五日目からです。手賀沼で捕る鴨は、皆な罠か網獵かですから、其捕へた鴨の中には、イケと稱して、生かした儘のを東京に送り出すのも澤山あります。手賀沼で大獵と云ふ年には、全村で一萬羽内外も捕るのですが、然う云ふ大獵の年は續くものではありません。先づ大抵が毎年二三千羽ぐらゐで、以前から見ますと、近年は餘程捕獲高が減じて居ります。

▲場所ちがひ▼

場所ちがひの鴨と云ふのは手賀沼以外の場所で捕つたものは、北は仙臺のクセン沼からも送つて來ますし、南は美濃地方からも、毎年相當に荷が入つてまゐります。此北や南から送つて來ます鴨は、場所ちがひと云ふくらゐですから、無論手賀沼の鴨よりも餘程味が劣つて居ります。

大阪邊には、毎年朝鮮から鴨や雁を澤山送つてまゐります、何らも內地で捕れたものに較べると、體は稍大きいやうですが、味は如何かと云ふに、內地で捕れるものよりも一層劣つて居ります。

▲イケと野ジメ▼

イケと云ひまするは、前にも一寸お咄し申しましたが、網で捕らへたのを、活かした儘で送つて來て、それを鳥屋に飼つて置きますので、お贈物には、之れを雌雄一番として、靑籠に入れると、誠に體裁が宜しうございます。が野で絞めて來たのと、其味を較べて見



ると少し劣ちます。野ジメと申すと、捕獲すると直ぐ其處で絞めて了ひますから、それで然う云ふのです。素人方は、多くが野ジメよりもイケの方を望むと云ふ風がありますが、味の點から云ふとイケよりも野ジメの方が今も申す如く優つて居ります。それは何故かと云ふに、野ジメは何しろ自由に遊んで居た鴨ですから、脂肪も乘つて居れば、肉も充分に附いて居る。ですから實際喰べて美味い。イケとなると、成程素人了簡では、生きて居るから、それを絞めると、肉が新鮮で美味であら

う、と斯う思はれるのは一應道理ですが、實際イケの鴨のことをお話し申しますと、鳥屋の椽の下に飼つて置くので、怖氣切つて居ますから、餌を與つても碌にそれを喰はないで、追々と元氣を失つて了つて、肉は落ちる、脂肪は拔ける。それゆゑ喰べて見ると、味は野ジメよりも落ちます。

處で、一寸御注意に申して置きます。素人方が野ジメの鴨よりも、イケをお望みになると云ふのは第一が古い鴨であらう、或ひは數日を經て腐敗しかゝつては居ないか、と云ふ懸念からに違ひないですが、信用すべき鳥屋でお求めになれば、決して然う云ふ心配はありません。

併し鳥屋の中には、往々不正なことをする者もあるさうですが、若しお求めになる場合に、之れは疑はしいと思召す鴨がありましたら、尻尾の毛を二三本拔いて御覽になれば、古いか新しいかは能く分ります。それは如何して分るかと云ふに、毛を拔いて見ると、其處が青くなつて居たら、それこそ餘程時日を經たものです。素人には之れが一番能く分ります。

▲ナキと眞鴨▼

それから、不正な鳥屋となると、ナキを眞鴨と稱して、それを賣附けるものもあるさうです。ナキと申しまする鳥は、一名を仙臺鴨と稱へて、元は眞鴨と家鴨との雜種だと云ふことで、能く啼く鳥ですから、それで俗にナキと云ふので、鴨場では何處でも之れを囮に使つて居ります。之れは仙臺から出廻るものですから、仙臺鴨とも云ふのです。

此鴨は眞鴨と克く似て居ります。それは我々鳥屋すらも、迂濶りすると間違へる位ですから、素人方が不正な鳥屋に、場違ひだとか、何だとか云つて摑まされる筈です。實際中々鑑別が難かしうございます。が双方の異なる點を申しますると、眞鴨の嘴は、ナキのよりも少し細く、脚も亦細そりとして、全體の格好が、何處となくスラツとして居りますが、ナキは之れを眞鴨と較べて見ると、少々形が惡いです。だが、其鑑別は今も申した如く、中々難かしいです。

▲銃獵の鴨▼

銃獵の鴨の味は如何かと云ふに、之れは野較同樣ですから、無論結構です。それは全く味が佳いです。我々鳥屋の店にも隨分出廻りますが、何分にも銃の創があつて、血が附いて居るので、贈物などにするには體裁が惡いから、主に料理屋向になつて居ります。それで我々鳥屋社會では、之を潰しと云つて居るのです、

▲鴨と家鴨の味▼

鴨も小鴨となると、前にも申しました如く、實際喰べて見て、大きな鴨よりも卻つて味が宜しうございます。家鴨となると、大抵な人が今でも味が劣等の樣に思つて居りますが、全くの



所、今の家鴨は飼養法が昔とは異つて居りますから、泥臭いの何のと云ふ樣なことはありませんで、鳥に依つては、寧ろ眞鴨よりも優つて居る位のがあります。

▲鴨の料理▼

鴨は先づ大抵が吸物種にするのですが、それは團子にして使ふので、小鴨ですと、肉は骨ごと叩いて團子にします。之れが全く非常に美味いです。肉の剖き方は、人に依つて夫々流儀もありませうが、最初毛を挘つてからは、手羽の處から庖丁を入れて、胸から股の處まで切り目を附けて剖くのです。然うすると、雑作もなく剖けます。それが鶏となると、胸がズッと出ッ張つて居るから、股の方は

股の方で割き、一方は手羽の處から胸へかけて庖丁を入れる。そこが鴨類と雞と割き方の異なる點です。鳥屋では少しの肉でも廢りのない樣に取りますが、素人の方では何うしたつて然うはまゐりません。また、手ツ取り早い料理で、美味く鴨を喰べるには、オバ煮とか云ふのが一番でせう。これは極淺い燒肉で、ヂリ〳〵と炙いて喰ふので、先づ脂肪肉を入れて、それから肉を投じ、例の一方の凹んだ處に汁を入れて置いて、それを附けて喰べるのです。家鴨も猶且斯うして喰べると非常に美味いものであります。

△流行の指環

純金製にて匁方の掛ると云ふが特長なる延での平打又は彫刻澤山の平打ものなどは沒趣味、殺風景なりとて排斥せられ二十金製の臺にて目方も一匁五分二匁止まり位にして極く細く輕く出來上りたるもの體裁よしとて賣れ行き良く珠はダイヤモンドと眞珠に限られたり彫刻の趣味は華美好の向きは寫生風の繪畫を喜び上流社會には摸樣風のもの歡迎せらる而して圖は草花、小鳥、古代模樣の類を彫りくづしとなしたるなど最も面白かるべし是等の相場は珠の大小良否に依て一定し難きも普通用ゐらるゝ品は二三十圓位の者なるべし。

人は誉るべし

人を諂つて害の我身に報ゐて來る事は有るが、人を誉めて己れに損の行く事はまあ無い、徳あり眞に敬すべき人ならば勿論、無學文盲の人は猶ほ更である。

田舎からポット出のお三は毎日よく失敗をする、しかし人は名誉心に富んだものであるから小言が度重なれば自分の悪い事は忘れて終には主人を怨む樣になる。

毎朝炊く御飯が同じ樣に出來ないがさて今朝の御飯はほんとにぐちや〳〵して居る、こんな飯は食べられないとがみ〳〵と怒鳴つけるよりもいつか上手に炊けた折を見て、今日の御飯は誠によく出來た斯う云ふ風によく炊けると宜いと誉めてやる。

お三に取つては前に叱られたのと、今日ほめられたのと何方がよいか、それは誰にもわかる話で誉められて悪い氣はしないから、明日も亦上手に炊かうと云ふ氣になる、何事でも悪く出來た時に叱るよりはよく出來た時に賞める方が効能が多い、自分もやかましやの誹りを受けないですむ、之れも一つの人を使用する呼吸で、併し極端になつてはつけ上つて却つて害があるから中々むづかしい。



和歌

（天）逸題　下總　岩瀬不二野

嫁送る一むれこゝにとゞまりぬ梅さくさとの春のおぼろ夜

評。田舍婚禮の光景見るが如し。

（地）新年松　尾張　井口豐子

にぎはしきしめかざりしてわか松に年たつひかりみゆる門かな

評。和樂の光景躍如たり。

（人）松上鶴　名古屋　清水みさを

千代よはふたつが音高くきこゆなり名も高砂のまつのこずえに

評。流暢。

秀逸

○○○初雪　兵庫　柳田白百合子

なんてんのあかきがわきて榮えにけり今朝めづらしふ初雪ふりて

○○○題知らず　姫路　高橋緑子

埋火に雪なも知らぬ夜の室やしづかにかほる水仙の花

○○橋上霜　筑前　木村こま子

朝戸出の衣手さむし見渡さば霜にましろな野路の棚はし

○○○失題　岩代　横山楢子

愛神の吐きます息吹野に凝りて二人なつゝむ夕もやの衣

○○○新年風　三重　服部かつ子

新玉の年の御神のゝりて來ます御舟かとおもふけさの初風

、○○失題　牛込　平塚いと子

夕まぐれ小雨そぼふるそでかきのはぎに小がさなさしかけて見る

○○○題しらず　牛込　窪田幸子

花にくれ月にあかしてぃたづらにかしらの雪とならんとすらん

○○○逸題　足尾　森照野

鳥つどりうたひそめたるはつこゑに千代もとむすぶ年のわか水

○○鳳知らず　筑後　梧桐露子

詩神を胸に描きて讀よべば我があしもとに虹あらはれぬ

、○○妹を失ひて　下野　三森可都子

あれといはれ妹と呼び十四年汝はやさしかりし姉きつかりし

○○失題　新居濱　山崎くま子

三日月もはや名残りなく入りにけりたゞ白波の音ばかりして

、○○新年松　常陸　菊地峰子

あら玉の晴の衣と見ゆるかな雪に粧ひし庭の松が枝

○○水鳥　備後　重政喜久子

水鳥のうきねの池や氷るらん夜とこはなるゝ聲のきこゆる

○○雪吹　築地　堤いく子

ふゞきする外面さむげに語り行く聲たえ〴〵のみちのくの夜や

○○鳳知らず　滋賀　京極文子

をさな子にゆひをおらせてあら玉のとしを敎ふる母もある哉

○○新年軍艦　能登　栗倉一子

美しき初日うかべし海の上を新潮けりて軍さぶれゆく

○○誠　河内　田中八須子

あめつちのよろづの神の御をしへも誠ひとつのほかなかりけり

○○富士の白雪　三河　佐野さい子

大御代の光をみせてつもるらんふじの高ねの千代のしらゆき

○○秋風　能代　泣虫女

古袷つくろふ姿もなき人にこゝろして吹け夜半の秋風

新年松　伊勢　松本しげ子

九重の雲井にたかき若松は幾十返りの花やさくらん

佳調

歳暮情　信濃　松尾節子

今更にすぎし月日をおしめどもかひなく年の暮れんとすらん

柳　岩代　岸野常子

玉しまや岸の青柳めもはるにかすみこめたり雨の夕ぐれ

新年　香川　吉田ます子

鶏のなくねもまたずおきいでて祝ふもうれし屠蘇のさかもり

燈　備前　駒井文子

いびきのみ高く聞ゆるまとのうちに殘るもあはれ夜半の灯火

逸題　熊本　大野君子

あまの子が得物の籠に紅葉のましろも多き頃となりしか

梅　前橋　宮内りき子

朧月風のゆく手はわかれとも我立かたに梅かほるなり

新年鶴　大阪　沖ふく子

あらたまるとしの初空仰ぎ見れば雲井にたかく田鶴なきわたる

富士山　同

あふぎ見れば扇に似たるふじの山秋津島根のかなめなるらむ

友を思ふ　福岡　峰谷親子

逢ひがたき君の姿のしのばれて夢そのまゝに往かむとぞ思ふ

名所新年のまつ　築地　堤いく子

近江がた年たつ川波の初風にさゝなりすへり滋賀の松が枝

新年の松　大阪　木郡久枝

初日さす大内山の松にこそさかゆく御代のかげはみえけれ

栗拾ひ　京都　みどり子
野に山に栗の實ひろふおとめ子のかしらにやどる紅葉一ひら

○　本郷　甲斐なり子
巖頭のかけに鈴の音ほそりゆく松原一里しぐれするなり

紅葉　周防　貞弘八千代
村雨はこずえに露をおき去りて夕日きらめく岡の紅葉

○　信濃　松尾節子
伯母君と歸る渡頭にたそがれて川風寒く千鳥なくなり

冬　秋田　はな子
冬かれの淋しき野辺にさをしかの妻こう聲のいとかすかなり

乞食　京都　千葉女史
親と共に軒に物こふをさな子の姿あわれや末ながき身を

川霧　美濃　田中久代子
唄のせて下すいかだもなかりけり霧の花ちる川づらの里

新年の松　大阪　吉野ます子
このうえの齢千代も經て岩松の根かたもかたう年をむかへて

同　同人
浪たかき磯の崎松岩の上に根かたもかたへとしをむかへて

○　遠江　宮城修子
古城は芒野の末にほの見えて此のゆふぐれを冬の雨ふる

時雨　上總　安西琴子
夕日かげ峯にのこして時雨ふる麓の家にさつを歸れり

元日鶯　三重　佐々木らく子
新年をことほく人におくれじとのきはに來なく谷のうぐひす

野家　備中　高草まい子
片われの月にきつれの聲さむく一しほすごき野分するやど

新年雜題　肥前　篠野金子
こぞの春はたのしかりしよ歌がるた双六とりも君とのみして

○　芝區　新野壽枝子
白百合に夢あたゝかき蛺蝶の露にもだえの夜風冷たき

冬の日川のほとりに立て思ふ所あり　伊豫　鈴谷友枝子
行水は氷るひまさへなかりける學びの道もかくやあるらん

寒菊　群馬　秋乃子
蟲の音も千草もかれて霜ふれる荒れ野にかほる菊のたふとき

わびずまい　上總　平井靜子
おとづれし人だにもなき我やどになぐさめがほの木葉舞けり

霧　尾道　中尾みつる子
欄干にうき身を凭せて眺むれば見る〳〵庭の白うなり行く

庭落葉　東京　仁子
庭も世に散りし紅葉をふきかけて窓をさわがす木枯の風

折にふれて　上總　平井靜子
しばしとて松の根がたにやすらいて濱ばらとはきしらほ數へつ

○　姫路　町田英子
むらさきの瑞雲ひらき浮出る初日にあけし大御代の春

○　尾張　かなへ女史
嚴島濱にうかぶと聞しかと春は藍のそこにしづめり

雪中梅花　備後　立神峰子
かほらずば梅の初花いかで知る梢の雪にまがひるければ

菊　岩代　関野てつ子

露霜をしのぎて匂ふ白菊を學びの道にうつしめでなん

冬のあさ　岩代　佐藤里子

あれ果てし庭の小笹に風たちて霜にこゑある冬の朝かな

行秋　讃岐　寺尾育子

小山田に何を焚くらむほのみゆるけぶりにつれて秋はゆきけり

○　下野　栗原くに子

落葉掻く子等は歸りて夕暮の木立淋しうふくろふの鳴く

○　越前　白菊

草も木も霜かれはてゝ山里はあはれをそふる秋の蟲の聲

○　長野　白梅女史

寒き夜に筧の水の凍りけりりいたつきませるはゝぎみいかに

雪中鶯　岡山　田上濱子

六つの花とうべもいひけり白雪のかゝる枝にも鶯のなく

○　青森　三浦愛子

君送る川添野道しも見えてかたみに摘まん花草もなき

初春　東京　田中千賀子

老たるも若きもともにさゞめきてゆたけき春をむかふ嬉しさ

○　愛知　ますみ子

氷魚引くうたも凍えるばかりにて霧にふけ行く滋賀の浦かな

新年の松　本郷　堀江花子

改まる御代を壽く門松のみどり深めて立つかすみかな

折にふれて　肥前　嬉野益子

ふり返りまたふり返りみつるらむ船出する夜の故郷の月

○　兵庫　柳田白百合子

回禮の人もまじりてつくはれの音もときめく初春のそら

海上月　本所　捨小舟

あらしふく天城の山は雲はれて月影清し伊豆の海原

新年松　名古屋　服部雅光

君が代と萬世までも榮ゆらむ年の始めに植えし若松

老松　姬路　松下嵐子

千代八千代色かわらじと老松はとしの始に世をしめすなり

山中の元旦　茨城　高須雪子

天狗すむみ山の奥の山小屋に杣人つとひ曆祝ふなり

題しらず　能代　濱紅子

古寺の榎の梢月おちて夜もふけぬらし日暮里のさと

冬鳥　足尾　森照野

冬さればもちの木の實もあからみて軒端になるゝひえ鳥の聲

冬月　東京　仁子

野狐の聲ふけわたる小夜風に月かけさゆるなすの篠原

新年　山城　古川よれ子

門松にさはらぬ程の風吹きて年たつ今朝の閑けくもあるかな

鞠　京都　四辻まさ

歌ひつゝ鞠つきかはす小女らに老もましりて遊ぶけさかな

冬野　神戸　島屋とみ子

霜になく狐もすがたあらはして冬かれすごし野邊の草村

題しらず　京都　四辻清子

追羽子をとりおとさしと思はすもさわりし袖に匂ふ梅が香

新年松　姬路　松下嵐

常盤木の松のみどりになぞらへて變らぬ年の立つぞ嬉しき

短文

◎印は入賞

◎新年の我ホーム

能登　栗倉一子

大廣間の床の上には古代から傳つてきた兜と鎧それに兄様に賜つた金鵄勲章とが恭しく飾られて有ます。やがて七十七のみ齢を重ね給ふた祖母君を上座に七人の家族は靜かに列びました。誰の顔を見ても皆ニコニコと樂しさうである、舊臘新たにお出でなすつに姉さんは少し斜めになつていなさる、かくて我等は芽出度お雜煮を祝ふので有ます。爐のほとりには歌がるただのすごろくだの、それから新刊の雜誌や新聞などが散らかつている、外には追羽子の音がきぬずれの音と相和して優しくも又のどかにきこゆる。

（評）芽出度一家の規模見えてゆかし

◎母の心

上總　平井靜子

四歳になる我子が小さきたこを持來り、かあさん高く上てといはれ其の庭へ降りて幾度上ても風なき爲上らぬに、子供はじれてなき出聲にびつくりして目さむれば、聲と思しは終列車の汽笛、あゝいまのは夢で有しか、たとへ遊ばせてやり度もいたづきのため此海岸へ來て居る身なればと夜の更るまでも。

（評）愛情溢るゝごとし

◎初涙

下野　白澤きく子

お目出たいお元日の日に、私はお母さんと鎮守様へ參詣しやうと思つて鳥居の處まで行くと、ふとお宮の前に二人の人が見えました、軈て近寄つて見るとまあ、一昨年の戰爭に御國の爲めに兩の眼を捧げた字内の廢兵田中さんがいとし幼兒に手を引かれて、お宮の鈴繩にすがつて居たのでございました、私はお母さんとそれを見て實に實に同情の涙に咽んだのでございます。

（評）眞に同情

◎お正月

相摸　廣守千能子

大尉に昇進した兄、歸省せる女子大學の義姉、中學の弟、友人の誰彼、炬燵取圍き、百人一首かるたの大合戰末妹の敏ちやん、兄様の堅い義足が丁度、自分の前にのそり横はつて、曖昧が、ちつとも來ない焦燥つてつれつたが、一向きゝ目がない、遂に火中へ、ほうり出したの以後らが大戰爭と、皆眼を見張つた時突然!!!　兄さん足がこげくさいよ!

（評）奇警

◎手塚のながめ

土山ふみ子

青松の間から見える湖の藻採船や山々の錦を飾つてゐたのは、昨の様だつたに早や錦林緑樹千山一白の別世界、白い肌の緑葉と鏡の様にすみきつた水とで、けふはなんとなく治まる御代の氣高さがまのあたり。

（評）叙景畫のごとし

◎お正月の仕度

岩代　岸野常子

待ち切た對の春着（妹と）が今朝やう／＼仕立屋から出來てきた、祖母上

はそを興味深にじつと見入て獨り何やら微笑まれた、父上は門松の枝振など眺めて居られ、弟は試筆の下習ひだと云つて顔も手も眞黒にして騒いで居ます、奥には母上の優しいお聲がして「さあ、早くお起きよ、敏ちやん、お正月は枕元まで來ましたよ。」

（評）　叙事巧妙

◎鶯

下野　柴山たけ子

逝きし祖父の植えし臥龍梅、早くも南枝に一輪二輪笑み初めしを、何處より尋れ來しか黄鳥一羽、初音聞かまほしく眺むる折柄、東風が誘ひし叔子風、舞ひ狂ひつ梅の枝に落ちぬ、あ、殘り惜し飛び去りし鶯、

（評）　春意浮動

音樂會

京都　幽子

ピヤノ獨奏ピートベン、ソナタの曲はいましなかば、興味を見渡せば、耳傾むけて感に入りたる、はや退屈して欠伸たからなかる、降り出でんとする空を窓ごしにながめやれる、奏者の顔見んとのびあがりつゝもがける隣席の人と語り興ぜる、嘲笑一番きこえよがしにせきばらひせる、おのが襲衣紋をつくろへる、はたまたわが如くきよとと周圍を見まはせるー

たそがれ

尾張　小栗喜登子

赤いお日様が西の山へ舞込と、遠い寺の鐘が殷々と聞える、烏が三羽鎮守の森さして急ぐ、何處かで牛の鳴く聲が、牧童の歌も聞える面白い節だ、前の小路を夫婦連の農夫が歸つて行く、夫は鍬を肩に籠を提げて、妻は背に泣く兒をすかしつゝ、やがて夕靄に包まれてしまつた。牧童の歌と幼兒の泣聲とが交るへ暮の鐘を破て聞えるのである。

流行

鳥取　紅梅

十年一昔空の高等小學時代には袴はなくて紺足袋が歡迎され、白いのはクラスに一人か二人、それは澁け者でした。ダーツと並んだ教室内の顔どれもこれも鋼を被むつた束髪點々また點々と、アラ膝なる乳兒が笑つてゐますあゝこの當才の女兒又どんな風で登校しますやら。

御父様

芝區　新野壽枝子

日露戰爭で御父様を亡くした御隣の正子ちやん、先頃轉任の爲上京して滯在中の伯父に未だ御馴染も淺いのに、ひどくお懐きなさるので、正子ちやんは親の伯父さん御好きと云ひましたら、言葉らしう笑くぼを見せてでも御父様に似ているんですもの、とおつしやつた御顔あどけない様でしたが淋しうございました。

君が代の音

羽前　谷山たに子

琴の音の奥床しき、三味の音の生めかしきは、取りわけ云はずもがな、幽情なる琵琶と、雄大なる喇叭とは、聽く者を起たしむ、尺八の亡國を歌へる、晩鐘の厭世を喝ける、可ながら世になかれかし、闇に流る按摩の笛、月に響く銅鑼の曲、孰れがあはれならざる、ア、眞古典へに莊嚴なるは、獨「オルガン」の君が代の音。

暁

和歌山　植木操子

時を告ぐる鐘の音、耳もとにひゞけば、何時かは知られども、ふと、頭もたぐるに、寮戸のすきましらみにけり。いそぎおしあけしに、屋の上に、いと白う霜の置き、有明の月、なかば山の端に入り、今や光を失はんとす。

いづこの山に

栃木　玉野とし子

おめでたい元日は來ました、若水も汲みました、お雑煮も頂戴しました、學校の式にはまだ時間があるものですから、愛誦歌集を繙きました某女史の詠み給ひし、

兵士に召し出されしわが背子はいづこの山に年迎ふらん

にいたりました。深き感、今ごろ女史は背の君とお屠蘇を酌むで、そのかみの物語りに、嘸かし思出の多いことだらうと!!!

門松の運命

下野　澤田かつ子

數多き小松林よりえり出されて門に樹てられ、朝な夕なに初飯捧げられ可愛がられし門松も、今日は下男に引き拔かれ、群がる村兒に鎮守の庭へと引づられて、やがては火あぶりの刑、あゝ、松は如何なる罪を犯せしか？　此の運命!!!

○

上總　平井靜子

ようく此頃ではやりかけた電車唱歌を愛らしい聲で、かた言まじりで歌ひながら、姉達を姉さんらしい人につれられて行く、五ツ位の男の子を思はずしらず見送た時は何とも云いはれぬ氣がして、あゝ今頃は何なして遊んで居るやらあゝなつかしい。

鶯

下野　川連たか子

「鶯は夜はなかぬものなり」と作文への御評……今し學校から歸つた妹は不思議そうに「姉樣でも家の鶯は夜でもなきますわれー」……と父樣が夜飼遊ばすものを、それと氣づかず、作文へ、夜なくものと書きし妹のおかしさ、無邪氣さ、西思へば、可憐なりしよ。

歳暮

芝區　新野壽枝子

昨日伯父樣が歸朝の御土産に頂きし銘仙のかすり、御前には定めし似合ふであらうとの母上の御言葉が、是非とも春に着て見たく、數へ日のきのふ今日、先月あたり仕立物の看板を出した御向の家へ持つて參りますと、美事な模樣物を縫ふて居られる、傍に母樣それ誰の姿にも好いべと買つて頂戴な、御顏をそむけて笑ひにまぎらす母御の御心、縁側にはこの寒空に干かぬマッチの箱が山の樣に………

小春日

牛込　平塚いと子

暖かい小春日和の日影を一ぱいに浴びながら、椽に長々と四つ足をのばしてねむそうにして居る玉に、からかいながら編物をして居ると、小さい黄金の小扇をかざつた公孫樹の頂上に、百鳥がしきりとないて、木樵の斧の音ものびやうに。あゝその一音ごとに日は西山に居るのである。

皆打ち揃ふて

下野　野尻よし子

待ちに待ちきつて居た冬季休業も來たので、早く歸省して母上に安心させやう、喜ばせやう……と歸つて見れば、こは如何に母上は病氣なので姉は袖に涙をしぼりつゝ頭をさすつてやつてなる始末、妾も母上の枕もとで……しかし姉と共に看護をしたが、嬉しいことには四五日の内に全快の運びに至つた、のみならずお目出たいお元日に皆打ち揃ふてお祝の雜煮を食べた時は……………

あゝ憐れ

徳島　若槻淑子

寒さ次第に烈しくなり行くに、年老て風雨を凌ぐ家もなく、見る影もなき襤褸を身に纏ひ、人の戸口に食を乞ひて僅かに露の命をつなぎ、人には賤蔑せられ、此所彼所の森神社の拜殿などにはかなき夢結ぶ心の内やそも如何に、あゝ同じ萬物の長たる尊き人と生れながら。

御笑草に

滋賀　岩崎操子

門には萬歳の鼓の音賑はしく、少女は羽子突に餘念なく、往來の男女老若、何れも合ふごとにお目度〳〵の聲たえず、祝禮に來れる人々の服裝とり〳〵に家には祖父母を初め親愛なる友に至るまで、歌かるたとりに勝負を爭ふ聲がしさ云はん方なし、實に目出度と云うも理にこそ。

寂寞

徳島　若槻淑子

家人寢靜まりてより妾一人讀書なす、さらでも寂しき片田舍、夜更け行くにしたがい益り寂として聲なく、聞ゆるは只チックトク〳〵の聲石油を汲ひ上ぐる机上の燈し火、時流るは犬の遠吠み、颯々たる松風の聲のみ。

落葉

岩代　阿部つき子

燃ゆが如き庭の紅葉も、夜中の霜に培へかれて、ヒユーと枝を鳴らす木風に、もろくも散る二葉三葉を、私等は光滑き初冬の日を受けながら根元にはきよせて、やがて來る春をば靜かに待つて居るのであります。

冬の朝

越前　濱子

隣の赤ン坊のオギヤ〳〵と泣く聲に目をさまし、オヤ〳〵早や夜が明けたんかしらと、あはてゝ時計を眺むればはや六時にもなり、びつくりして、たゞちにかまどにとりつき茶をわかしつゝ、何となく耆へ居ればチユウ〳〵、カア、カア〳〵と雀やら烏の鳴く聲あちこちにきこへ、隣のポンプの水を上ぐる音ギク〳〵ときこへ、已がわかし居る茶も、シユ〳〵とわきだしたから店の方へ立ち出で、上なる戸を一枚上ぐればどこもかも寒むそうに、戸もあけずたゞかまどの方にて、パチ〳〵と火をたく音のみ、犬は元氣よく雪の中を面白そうにかけめぐる樣を見れば、實に愛らしくよれんなく眺め居れば、かまどの方にて茶はプープーと煮え上りし故、家内の者をよびおこし、朝食の座を造り居れば、あちもこちも、ガラガラ〳〵と雨戸を明ける音きこゆ。

紅葉狩

京都　吉田こう子

愁嘆瀬時に鎖しき月日を送り給へる花子の君よ、今日は待ちに待たる日

曙にて候よ、天氣も誠に麗はしく候よ、懐かしき故郷の秋は今如何に、妾は又なき此好き日を案内に暮さんも心なきまゝ、洛外なる通天橋へと杖を曳き申候、下を流るゝ溪川の水清ふして、楓樹は一面紅に彩られし風情は實に一幅の好畵題、愛らしき小鳥は樹々の間に囀りて、美しき秋野の草花は時を得顔に咲き亂れ誠にのどかなる秋の眺め、只憾むらくは自然を樂しむ風流の嗜みあらんには一入興も深からんものを、さあれ皆これ妾にこよなき慰籍を與ふる自然の神の御惠み!! 噫妾はこの美しき自然の景色を唯一の樂しき慰籍の友となさんかな。

友の面影

赤坂 沖山ふみ子

春とはなりぬ、思ひ出づるは七年昔の今日にこそ、姉妹なき身の他人ならず睦みし多賀子の君、まりつきに遣羽子に、さては歌留多に二人離るる事はなかりしか、樂しかりしは昔の夢、あはれ今はしもいづこの里にか此初日に逢ひませし、あらば妾より二つ上の十八よいと〳〵美しうまさむを文箱にひめし寫眞の面影笑みてませど、物いひ給はぬぞ怨めしけれ。

團欒

薫子

夕食かすみました、後かたづけをすましてお座敷へ出ますと、お祖父樣を上座に火鉢を中にお茶が出てゐます。今夕は妾の番ですから因幡の兎のお話をしました、すると今年六つの靜ちやんは思ひだしたように、

これは瘦すぎたしくじつた――ピョン〳〵ピョン〳〵ピョン。

とフサ〳〵した切りさげ髪に、黒目がちのパッチりした目を見はつてふつくりと輪廓の好い頰にえくぼをかすかに見せて、首をかたけ、兎と亀を踊つて見せるのであります。

平和な夜

南總 とよ子

西の刻さがる頃にやあらむ、三日月も西なる松部の山に、片足かけて、愈々片輪の御月樣となりぬ。殘はたゞ大白の入江に映じて金波銀波をつくるのみ!!! 入江には小舟の四つ二つ棹ををさめて浮寢の夢を結び居る。噫、靜かなる夜や平和なる宵。かゝる夜こそ石も育つならめ。

みーちやん

日出子

あつ姉ちやん〳〵お歸り、と私の足音がすると毎日玄關まで來て喜びおどつてゐたかはいゝみーちやん、今日はいッこう出て來ない、どつかへ行つたのかと思つて居間へはいると、みーちやんはさも殘念そうな顔で首のはづれた人形をながめながら、くす〳〵泣いて居た時は、ほんとうにかはいそうでした。

雪の朝の弟

大和 井上正子

氷の刄の樣なものが顔にひやり、私はぎよつとなつて、樂しき夢破ぶれ雙眸を睜むると、また驚ろきました。日常朝寢坊の弟が枕許に姉さんお早う、雪が降つて」と、凍えた片手に雪のおむすび。(握飯)のと挨く、起きて見ますと、世は一面の銀世界、塀の上には、小さい顔の型が、五つ、六つ、門には、濡れ草履一足、傍らに大きな雪達磨、それにへのへのもへのが面白いのよ。

ものはづくし

◎印入賞

●目出度もの

天長節の男の出產　小樽　大杉久子
◎日本の皇室　大阪　はな子
苦學生の成功祝ひ　上毛　田所きよし
だばれのし　青森　佳美野枝
三夫婦揃ひし家庭　大阪　中西琴枝
老舖の奥に鼓の音　小樽　伊庭たけ子
◎安產の婦人　下野　飯塚米子
初夢に富士　伊勢　久松よし子
元日の男子出產　長野　鈴子喜子
新年の福壽草　大和　杉井吟子
◎家族揃ふて曾孫を抱く金婚式　盛岡　富地いく子

●わづらはしきもの

◎込み合ふ停車塲の切符買ひ　羽前　谷山たに子
嫁と姑の間柄　岐阜　酒井登美子
税金滯納の處分　長野　鈴木喜子
盲人に道を聞かれし時　長野　鈴木喜子
惡友の同居頼み　尾張　津田こと子

年の暮れの人世　秋田　しらゆき
さいげんなく結婚を申込まれた時　羽後　はつしき
客の前で自分のうはさ　松山　日出子
◎急ぎの道中に物を尋ねられた時　下總　谷口こま子
年末の贈答　松山　越智香鳳女
氣の進まぬ人の長話をきく　常陸　松木ゆき子
危篤の病人　甲斐　名執とよ子
賞勳局　伊豫　多けもと
◎寐床に入りてから人の來る　大阪　名郡久能

●くだくしきもの

◎借金延滯の言ひ別け　上毛　田所きよし
老婆の手紙の注文　羽前　谷山たに子
◎おちぶれし人のくり言　大阪　俵文子
老人の愚痴　札幌　みと子
京の舞子　北海道　丁ちーよ子
忙はしい時にいやな客の來る　大阪　青木たけよ
女のぐち　信濃　小澤茂子
◎十五世紀頃の女の手紙　大阪　たづ子
三三九度の盃　岐阜　酒井登美子

茶の湯の法式　小樽　伊庭たけ子
不快の時に他人の來訪　瀧の川　戸田やす
田舍の結婚式　仙臺　大森やし子
しつこき人の小言　大阪　竹木靜枝
年よりの昔がたり　秋田　しらゆき
せわしい時の小言　加賀　土山ふみ子
形容詞の手紙　能登　栗倉茲子
◎不信用の商店へ金拂　尾張　津田こと子
下手な手紙の長文句　小樽　門の倉信子
未熟な戀人の書翰　大阪　磯まさ子

▲來月の新題

◎古いもの
◎待たるゝもの
◎あきれたもの

謎々

◎印は入賞

▲遊獵家▲汽車のレール▲冷水浴　とかけて
▲汽車……佛前の燈明臺と解く、心は眞鍮（心中）の道具　いさ子
▲汽車……近郷の出來事と解く、心は記者（汽車）を走らす　仙臺　西常子

▲盗賊……山崎の軍勢と解く、心は木の下にすくむ　下野　永井　きく
▲冷水……水仙の花と解く、心は厳寒に堪へる　豊前　伊東ふみ子
▲盗賊……間者と解く、心は打ち棄で生かしたり死なしたりする　下野　藤崎みな子
▲盗賊……上流婦人の衣服と解く、心は狆犬を飼養す（絹綢を使用す）　美作　西江　具
▲汽車……英吉利国と解く、心は二本（日本）並んで進む　滋賀　貞　子
▲汽車……慈深寺と解く、心は重荷を負ふ　下野　谷口こま子
◎▲冷水……殺人犯の自首と解く、心は驚て飛び込む　尾張　津田こと子
▲盗賊……西郷の銅像と解く、心は犬が附てゐます　大阪　まさ子
▲汽車……漢文科の試験問題と解く、心は折々歴史（轢死）も出る　羽前　谷山たに子

▲来月の新題

◎すみれとかけて
◎後見人とかけて
◎長火鉢とかけて

一口はなし

○　横浜　波南子

母が兄に向ひ「坊や兄ちやんに、たつた一ッだけれど……とあげておいで……」と言て煎餅を二枚出した
兄「だつて母アちやん二ッぢやアないか……」

○焼芋　越中　杉山喜代子

姪「お母さんお隣りの奥さんは、焼芋屋から来ていらつしやるのでせう
母「馬鹿なことおいゝでない、アンナ大家へ焼芋屋なんかの娘を貰はるゝものですか、アレハ矢張りお隣のような大家さんから来ていらつしやるのですよ
姪「ソレデモ旦那が余所からお帰りになるのが遅いと、いつでも、焼かるゝさうですもの。

○投書　尾張　ろく子

「私の投書したのが五句載つてゐましたよ」「何て云ふの」「販売員数五百七十二句ッて……あのうちに……」

○切抜　名古屋　わきは

田舎新聞の補助記者「編輯長（不許転載）の小説を抜いてはひどいンでないンですか……」編輯長「なナに（不許転載）丈は載せないもの……」

◎他人のめし　奈良　かめの

先生「なぜあなたは人の弁当をとつて食ふていな卑しいとをなさるのですか」生徒平気で「でもうちのお父さんは他人の飯を食はれば人間になれないと仰しやつたもの」

◎森永商店の洋菓子

赤坂田町五丁目の森永商店主太一郎氏は先年米国に渡航し滞米十年間彼地大工場にて専ら菓子の製法の技術を修得し、帰朝以来其製造販売に着手し、製品の風味と実質とを専へ邦人の好食に投ずる様種々工風をなして遂に江湖の称賛を博するに至れり、其製品の重なるものはマシマロー、バナヽ、チヨコレート、クリーム、スメー等なるが、いづれも滋養ありて風味も高尚に、且つ精神の興奮に益ある種になる植物性の材料を以て製出したれば上流社会の常用品、旅行宴会等には缺くべからざる嗜好品にして進物用として最適品なり。

新刊紹介

日本家庭百科字彙

國家の榮榮膨脹すると同時に、家庭生活の勢力範圍の擴張するは自然の勢ひなり、之に就て在來我が家庭生活の趣味の涵養に供されたる、節用集、佛家寶、三才圖繪、女大學、重寶記等いろ〳〵ありしも、いづれも不完全且つ舊式のものにて、到底現時代の要求に應ずるに足らず、最に芳賀博士歐州に遊びて、各國の家庭に用ゐらるゝ百科字典の種類に就いていろ〳〵取調ぶる處あり、歸朝後下田文學士と圖り、數名の專門學士科を分ちて擔當し、始て此百科字彙編纂に着手し、稿を起してより五ヶ年にして始て開版の運びに至りしといふ、編纂者の苦心と書肆の勞亦多とするに足るべし、紙數約千五百頁、内外百般の事項を網羅して餘蘊なく、殊に本書の挿畫に至つては從來の字書に例なき和洋の花卉、食獸、魚介、器具、金石、古代衣服、並びに各國地圖、衣裳の模樣等美麗にして鮮明なる彩畫二十餘枚を挿入して、智識の開發を助くると共に讀者の心眼を樂しましむるの工風又備はれりといふべし。(定價金拾圓冨山房出版)

箏うた通解

井上友吉氏著

箏は日本固有の樂器にして、其の歌は實に國音の精粹ともいふべき者なり、優美にして婉曲、幽妙にして玲瓏なるは誠に箏うたの特色といふべし、この書は古來世に傳はれる箏歌の有名なるもの數十番を撰びて一一歌の由來出所を明かにして、丁寧に通解を加へたるものなれば、箏の歌曲を知るに於て極めてよき手引となるのみならず、卷末に附したる名家の苦心談は音曲界に名ある人々の立志篇ともいふべく、其人々が修業中に得たる技術上の經驗を語りて、初學者の爲に益する處ろ鮮からざるべし。(定價上製壹圓參拾錢並製壹圓今川小路明倫館發兌)

復習問答 簡明產婆學

產は婦人の大厄なり、產婆にあらずとも其の大意は知らざるべからず、而して又婦人の職業中にありて、產婆の學問は比較的精密を要し、專門一切の智識は心得ざるべからず、本書は醫科大學產科婦人科の主任として多年の經驗ある伊庭醫學士の著にして、產婆學に關する一切の智識を問答體をもつて通俗に解されたるものにて、何人にも了解し易き良書なり。(定價五拾錢博文館發行)

油繪階梯

日本のやうな山水明媚の國に在つても、また油繪をもつて巧みに風物を描き出したるものは極めて少い、從てそれが手引となる書にも乏しいのである、著者は此の缺點を補はんとして畫を描く時の心得、並にそれに必要なる道具と繪畫に關する一切の事を記述し、更に美麗なる標本畫を添へて、一册子となせるもの初學者の爲めに缺くべからざる良書である。(印藤眞楯著　冨山房發行)

姑

大塚楠緒子

氷る霜夜の一時頃までも姑の腰を按摩せられた、手が疲れても膝が竦縮でも姑の許の出ぬ内は立つ事は出來ぬ、立つことの出來ぬのみか何か斯か晝の失策を當てこすられる、私もよく姑の腰を按摩だ、嫁といふものは左樣して姑に仕へねばならぬ、と因果を含ませられる、口惜しさに淚が頰をつたふても堪えてゐねばならなかつた、それで自分の臥所へ入つてからは何時も思つた、あゝ、自分が姑に成る日が有つたら、此樣な辛い思を爲せて必定嫁を苛める樣な事は爲ますまい、何に限らず嫁を苛めるやうな事は爲ますまい、必然爲ますまいと骨身に刻んで思つたが、今現在其日が來てゐる、去年の暮、伜に嫁を迎へて自分は姑で有る。

伜夫婦は氣が合ふて中が好い、然れどもその好い中の邪魔はせぬ、今夜も二人を他所の歌留多會へ遣つてある、若い夫婦が二人して、然も夜遊をするなどゝいふ事は昔は家の不取締、外聞のよく無いことゝ爲てあつたが、私は時世といふものを知つて居る、電車が道を走つて廂髮といふ髮が流行する時節であつて見れば親を留守居にして若夫婦が出步行を爲るのも强ち異な事とは思はぬ、往きたがるものなら隨分何處へでも往



かして遣らうと思つて居る。
四疊半の一間に炬燵にあたりながら、世の中に二人と無い寛大な姑の積で、姑は斯う考へた。
正月なれば、何れの家でも遊びに夜深しを爲てゐると見えて、距離の近くもない向三軒兩隣の何家からともなく、笑聲が聞えては絶え、絶えては聞える。
姑は猶考へ續ける、今度は若かつた五十年の娘の昔を思ひ出す、好い容色であつたので其方此方に慕はれて諸方から懇望された、中から撰り拔いて縁付いたは當家であるが、早く良人に死別れたから若い盛を味氣なく詰らなく暮してしまつた、昔だとて今だとて夫婦の情に變りはない、彼樣して二人で遊びに出たら昔だとて面白いに違はなかつたらう、世間の風が左樣で無かつたから手を引いて二人で出歩く樣な事はせぬにしても、せめて最少し長く連れ添ふてゐたら、樂しいことも多かつたらうに、直に死なれて仕舞つたから自分はろくに樂しい味は覺えずにしまつた、思へば自分は詰らなかつた、比べて見れば嫁などは幸福である、嫁なんぞに聴かせたとて迚も察しることは出來ないやうに難義をして、氣むづかしい姑の機嫌をとり〳〵、寡婦の手一つに育てあげたは彼の忰である、二十八とは有つても親の身には未だ付紐が後に下がつてゐるやうな氣がして身に代へても可愛い、身に代へても大切に、彼の兒も又自分を思つて居て呉れるであらうと思ふ、寡婦の育てた子は母一人へ兩親の恩を報ひねばならぬ、母一つの手で兩親の責任を負ふて育てゝある、其位の事は我忰は能う心得てゐる。
さても其忰の歸宅の遲いこと、もう十時を過ぎた。
ぬく〳〵と火燵に肩までも入れて身の暖まる程所在がなくなる、女中に爲せては粗略になるとて繼物も綴物も嫁に講釋を爲てきかせては、眼の疎くないを自慢に、晝も夜も手づからさんざ歳暮のうちに爲て仕舞つたので、何處を何う探しても何の葛籠の底にも最う有るべき筈は無い、新聞も今朝讀んだし雜誌の口繪も見盡した、さて時が經つ、忰夫婦は歸宅りさうなもの。
何うも遲い、獨身のつひきのふ迄は、たとへ宴會が

あつても九時よりは遲く歸らず、歸宅には必定好きな土產物を買つて來ては我前へ出して吳れたものであるを、嫁を貰つてからは二人で出ると何時も歸途が遲い運動に出ても妙に遲い、其上以前には何でも先づ自分へ相談したものであるを此頃は眞先に嫁へ相談するらしい、何うも以前とは樣子が違つて來た、倅に限つてはと思つてゐたが、やつぱり何うも違つたに相違ない、と不意と胸の中が掻き廻されるやうになると、彼樣いふ事も有つた此樣いふ事も有つたと俄に數へ立てては、えゝ倅も倅、嫁も嫁と思ふ。二人が留守だと女中までも寄り付かぬと、火鉢の鐵瓶へ手を當てゝ見る



と温くなつてゐるので炭をつぎ添へ、茶盆を引き寄せて茶罐を開けて見ると、あいにく茶が切れて居る、ええ、是れだ、嫁、嫁、嫁が倅を引つ張り出して夜遊をする、留守にしても一向女中に氣を付けても置かぬと見えて此通り。

えゝ、嫁、嫁、と氣が苛苛する癇癪が起る。折柄何處の寺のか寺の鐘が、ゆつくりと氣が長さうに十一時を知らせる、靜かな暗に浪のやうにうねつては響き波のやうに波動つては消えるのを思はず氣を取られて數へてゆく、九つ十、十一と數へ終ると、不圖日頃信ずる佛法の光明が姑の胸の暗を螢火程に照す。

あゝ腹を立るではなかつた、と手簞笥の上に置いてあつた禪門法語集を取つて炬燵の上へ擱げて、眼鏡をかけた。

善きにつけても惡しきにつけても人間のわざは苦多く樂少し、今の苦は後の世の地獄、餓鬼、畜生修羅、諸の惡道業と成りて我が身をきりさく劍なるべし、總て〳〵他人の仕出したる禍にはあらず只我が心遣ひも身のふるまひも惡しきによりて、かゝる苦をうけて生々世々惡道に浮き沈むなり、とある月庵禪師のありがたい法語が目に入る、成程左樣じや、自分は隨分と人も羨む樂隱居である、樂隱居でありながら何時に成つても樂は少なく苦が多い、その苦の多いは我心遣も身のふるまひも惡いに依つて氣が樂々とせぬのである、と殊勝な心がけになつて悴と嫁とを暫時忘れてゐると。

忽ち、じやん、じやん、と半鐘が鳴り出した、遠くではあるが切りに打つ、板戸の元の南天の上を、さらさらと寒さうな風が傳ふ、火事が有るさうな、一月早早、附火か疎匆火か延喜の惡い、家でも火の元はいゝかしら、火の元のことも考へずに他所で夜深しをしてゐる悴も悴、嫁も嫁、と又思ふ。

禪門法語集をぴしやりと閉ぢると姑の胸は再び暗にかへる、眼鏡を外して手燭をつけた、家中を見廻りに出たのである。客間の暖爐から臺所の火消壺まで覗いて、序に泥棒の用心はいゝかしら、と雨戸や窓の棧を動かしてみる、女中共も知らぬとみえて出て來ぬ、鼠がこと〳〵と其方此方で荒れまはる、玄關で佇んで耳を澄ましたが、音もせぬので、悴も悴、嫁も嫁、とつぶやく。

部屋へかへると近處の笑聲が、どつ、と聽える、やつぱり歌留多でもとつて居るらしい、其處にも必定客が來てゐやう、親を留守居にして連れ立つて若夫婦が來てゐて歸る時刻も忘れて居るのであらう、不埒じやと他所のことまでも氣にして腹を立てる、鐵瓶の湯が煮え立ち始める、姑の胸もぶす〳〵と沸くのである。

折柄、りゝん、と門の鈴が暗に響く、かた〳〵、と

敷石に下駄の音がする、格子が鳴る障子が開く、快濶な悴の聲がすると調子の高い嫁の聲が爲る、と思ふと出迎へた女中共が、どつ、と笑ふ。

何を歸り早々わめいて居ると、火燵にのせてあつた禪門法語集も何も側へ掻い遣つて、寒さうに肩を縮めて澁い顏をしてゐると、やがて隱居の部屋へ女中までも後に從いて、どや〳〵と入つて來た。

悴は擂粉木を持ち込む、嫁は大きな龜の子笊を持ち込んで、

『御母樣、福引で此樣なものを引いて參りました。』



と好い土産の積で出して、一同に笑ふ、姑は莞爾ともせず、

『福引はいゝが何時だとお思ひだ、もう十二時ですよ。』

と然も不機嫌らしく言つて少し胸をさめる。

『あんまり面白かつたので、つひ遲くなりました。』

と悴がいふ。

『ねえ所天、今夜は面白う御座いましたねえ。』

と、嫁は賑かであつた座敷の樣子を思ひ浮べながら、蜜柑や菓子の包みを姑の前へ併べる、悴は横から其顏を見て、

『おい、お前の顏には未だ白粉が附いとるぞ。』

「おや、さうで御座いますか。」と手巾で額の邊を拭く。
「己なんぞは一度も負けんから、白粉なんぞ塗られはせん。」
「あら、所天は運よく勝つ方へばかり組んでいらしつたから。」
「なにお前よりは上手さ。」
「あら。」姑は苦々しげに見てゐたが、
「お前等は何を戯けるのですよ、親の前で……早く彼方へお出でなさい。」
強く機嫌が悪いな、と悴は母の顔を熟と見る、嫁は時の間に歌留多の興の名殘も醒めてしまつてひやりとする。
「それじやあ、お休みなさい御母様。」
「おやすみ遊ばせ。」と二人は退かうとすると、
「お鶴さん。」と呼び止める。
「お前、少し腰を按摩でお呉れ。」
「はい。」
嫁は、そこに未だ立つて居る良人の顔を見ると、悴は何とも言はず自分の部屋の方へ往つてしまふ。
女中は隠居の床を延べて、別に此處では面目もほどこさなかつた擂粉木と鉢の子供とを抱えながら、挨拶をしてさつさと退いてしまふ。姑は布團の上へ横になる、其處にも湯たんぽが暖かい、嫁は腰を按摩み始める、力を入れねばならぬので、歌留多を取るには早かつた柔かい小さい指先が直に疲れ始める、膝が竦縮む
姑はやつと氣が濟んだといふ鹽梅な聲で、
「私も能く御母様の腰を揉んであげたことであつた、嫁の勤は樂なもんでは無い、先刻往つて見れば女中共は皆居眠を為てゐるやうで有つたが不行儀じや、よく言つて聴かせて夜は何か各自の縫物でもさせるがよい
女中じやとて餘り追ひつかうては體がたまらぬ。」
とよく／＼晝間追ひつかふので、夜ゐねぶりを為る
といふやうなことを言はれる。」
「それに火事が有りましたよ、寒中は家に火の氣が多いから火の元が肝腎じや、私も最う年を老つては大儀じやから、お前これから夜中に一度づゝ火の元を見廻

りなさい。」

指のさきが折れるやうに痛い、膝が自分の膝では無いやうに痺れる、默つてしまつたので姑は眠つたのかと思へば左樣ではない。

「お鶴さん。」

「はい。」

「私の言つた事が分つたかへ。」

「はい。」

苦しい時刻は經つのが長い、かるたを取つてゐた時の十分二十分は、腰を揉んでゐる一時間にも二時間にも當る、とう〳〵一時が鳴る、一時といへばもう翌日に成つてゐるのである。

「最うよろしい。」と、やつと許しが出た。

涙を零しながら自分の臥所へ入つてから熟々思つたあゝ、自分が姑に成る日があつたら、此樣な辛い思を爲せて必然嫁を苛めるやうなことは爲ますまい、必定爲ますまいと、此姑が嫁の日に思つた通りに骨身に刻んで思つたのである。

此嫁が再び姑に成る日は今に來るであらう、その姑は次の嫁に又斯うして腰を揉まして、その嫁が又此嫁のやうに歎くのではあるまいか。（了）

泊り客

泊子

甚うまあ恐ろしい何と云ふ今日の寒氣と、會釋も無く淺黃木綿の小風呂敷包み椽の上に投り出して、勞れました、山路は馴れて居つても格別ぢや、女中衆大きに憚りだが足を洗ひます盥など頼みませうと、男らしう無造作に膝やり違へて、どつかと腰打ち卸しながら今更の樣に四邊見廻せし其の時から、變な女だとは思つたけれど。

打ち見た處三十の上を一つか二つか、後れ毛一筋も無く器用に櫛卷きと云ふに束ねて、むつちりと肉付き可い頰のかゝり、光澤も無く色青ざめたればか、何處やらうら寂しい陰氣にも見ゆれど、去りとては沈んでも居らず、物云ふ聲音の明了として、若い女中共を捉まへて時には女にも似げ無き味な口の利き振り、其れかと云つてともすれば、浮いた調子の高笑ひも消え行

く樣に哀れに細りて、果ては泣き出し度い樣な面相して急に物云はず、俯いて何か考へ込んで仕舞ふと云ふ、眞個に可怪しい宛然氣違ひ見た樣な變な人と、薄氣味惡くも思つたけれど、御客樣となれば何處迄も御客樣、厭やだと云つて其の儘搆はずに投つても置けず、大急ぎに四疊半の障子小八寸。

若し彼のお客樣何か御用で……と呼ばれた儘に、靜かに片膝つきて愛想能く云へば、ハイよと別に氣にも止めては居らぬらしく返事ばかりして、人の顏まじまじと眺めながら、宿の主婦さんが御前さんはと、惡くらしき迄鷹揚に聞いて置いて、

ほーお若い、否や眞個にお若い、幾つにお成りなさるかの？　御亭主さんがおありなさるかの？

人をまあ何と思つて居るのであらう、用があるから主婦さんを呼んで呉れと女中に賴んで置きながら、何處の世界に一寸顏合はしたばつかりの他人に、其麼事を聞く人があるものか、餘つ程此の女は怎うかして居るのに相違は無からう、這麼人には始めから相手にならぬ方が穩と、

御笑談ばつかり、一向もう意氣地が御座いませんので、御恥かしいんで、御座いますよと笑ひながら、つと立ち上がらうとすれば、ま、ま、待つて下さい、其處だて主婦さん。

だから困る、宿屋と云やあ職業が違はふ、も些つと確乎御行りで無いと、其れやお前さん、ほろりと袖口の奥の奥が能う見えますぞよ、怎うだ、儂が目で白眼んだら最後、違ひますまいがな。

ハッハッくどい樣だが主婦さん、眞個に御亭主がおありなさるかの、

はてね、有つたら什麼すると、

お待ちなさい、主婦さん、忙しからうが山家の心安さ、世は誠に靜寂で御座いませう、明日の一番は京行きの大阪行きのと人の壽命を縮める樣な汽車と云ふ物のあるではなし、此處ら四方幾里海には遠し、御覽じろ、山には眞つ白い雪も積つて居る、川には靜かに水も流れて居る、環る月日は早いもの、去ればこそ放つ

矢の梓弓春さり來てふ、春としなれば、花も咲かうに若草も萠え様に、其れでも、朝立ちし時の峠路、此の頃の寒さじやあ、ざぐり〳〵と霜柱踏む一足毎の草鞋跡を小判だつたら宜からう等と云ふ飛んだ無叛氣を起こす人は、彌勒の世迄三千世界には御座りますまいわ、屹度迂詐は申さぬ、笑つたら儂が怒ります。

昔、百舌鳥が子規の聲の美いのに懸想して、終に野越え山越え、厭やと云ふのを無理に遠い〳〵何處かの森へ迄連れ出して、夫婦になりましたとさ、さあ串戲じやない、百舌鳥は百舌鳥、郭鳥は郭鳥、其れが何時迄も満足に添ひ遂げられませうか主婦さん、況して其の間に兒供でも出來たら、第一其の兒供が怎うしやうと思ひなさる？　矢つ張り華族のお姫樣には細襟の半纏姿よりお振り袖の方が似合ひますとな。



斯う見えても私は今年で漸つと三十、四國中國出羽奥州、二十五の秋から、此の旅行で御座りまするが、未だに儂が志す方には尋ね當てられませぬわ、と云つて、私が人に云うたら定めて可笑しからう、話したらお前さん屹度腹を抱へて失笑さう、儂の志す方は親でも無いのや、兄弟でも御座りませぬわ、捨てられた憎

い男の跡を追ふのでも御座りませぬのや、ハヽ……眞の事主婦さん、可笑しからう〳〵此れから長い旅行の行く先には、川があつたら渡りますよ、山があつたら登りますよ、登つたら下ります、日が暮れたら又泊りませうぞ。

例へば、儂が若い時に這麼不思議な夢を見ました。

何でも廣々とした美しい海岸、空には鰯雲が處々に擴がつて、風の無い穏和な初夏頃の香ばしい長閑な太陽が、どんよりと薄曇りして其れは心から溶け相な美い氣持ち、小さな浪がひちやり〳〵と岸を洗うては、見て居る間に其れがずうつと沖の方へ退いて行く、すると又其の代りの浪が靜かに悠然、ひちやりと行つて來て、又ずうつと見て居る間に沖の方へ退いて行く、這麼風な極く詰まらぬありふれた海の景色ではありましたけれど、元と〳〵山國に育つた儂だもの、臍の緒切つて海と云ふたら其の時始めて。

甚う珍らしう御座りましたわ、

ぽつり〳〵波打ち際を添うて儂が歩行いて見ました、然うや彼れ此れ一二町も歩行いた頃だせうぞ、右手の方から漸々と山が迫つて來て、斯う丁度杯の形の樣に磯が斜に細く狹くなつて行く樣な具合、妙だなと思ひ返して、今度は路を反對に山の懸崖に從いて、小淀りのして居る眞砂原の上をわざと左の方に折れて行くと、其處ら一面晝顔の花が目の覺める樣に綺麗に咲いて居りました、其れが眞の未だ磯側なんだから少し大きな浪にでも來られると、何の事は無い、海の水にひたひたに濡れて仕舞つて、而して其の浪がざあつと退くと同時に、鹽氣のある深沈とした重い浪の水滴に震摺えた樣に戰慄え上がると、其の都度淡桃色が一層艶艶しい。

儂も何とやら變な氣分になつて來て、惘然と氣拔けのした樣に、何かしら大きな聲を出して歌を歌ひながら、凝然其處に立つた儘で美しい藍色の海を眺めて居ると、若し〳〵、若し〳〵〳〵つて續け樣に後から頻りと儂を呼びますのや誰れかいな、ふつと何の氣無しに振り返つて見ると若い男、十七八——二十位な……

息急き儂の側へ駈けつて來てずん／＼寄り添ひながら、姉さんじやないの？　と懐かし相に馴れ／＼しく云ふじや御座りませぬか、儂眞個に吃驚して仕舞ひました、私には一人の泥醉漢の父親があるけれど、儂が四つの時能う未だ顏も記えぬ中に阿母に別れた切りだもの、ハイ阿母は儂は知らぬが死んだと云ふ事で御座ります。

其れを主婦さん、知らぬ男が儂を捉まへて姉さんやの弟やのつて、偉うもう腹が立つて腹が立つて其の男を衝き退けて、私無暗と急いでさつさと歩行き出しました、すると又其の男が後の方からすた／＼と走つて來て、今度は何にも云はず、默つて私の横顏を恨めし狀に見詰めて、ほろりと涙を翻しながら、すうつと通



り過ぎて仕舞うた、妙に斯う悲しい樣な淋しい樣な何とも云はれぬ氣持ちがして、儂もう一度其の男に逢ひ度くなつて來て、後を大急ぎで追ひました、處がね、主婦さん、彼方に大きな川があつて橋がない。

丁度山は其の川でもつて切れて、漸々と浪の音が遠くなつて仕舞ふ、道も平坦になる、栗の林もあるし杉の森もあるし、ちらほらと處々に白屋も見える。

不圖儂が川彼方の方を眺めると、先刻の男が今度は四十ばかりの女の人と何か睦まじ狀に笑ひながら話しをして行く、川原柳か何か一二本枝の細い……其處へ行くと偶然其の女の人が儂の方を向いたのや、似て居りました眞個に、私の阿母さんにな其れは酷似、幼少時だつたから、顏は記えて

居やう筈が御座りませぬけれど、什麼したものか儂怎うしても、母さんに相違ないと專一に然う思ひ込んで仕舞つたんだもの。

突然大きな聲で、母さん！　と呼んで見ました、返事が無い。

けれど主婦さん、儂之れ位嬉しかつた事は御座りませんでしたわ、生れてから物心着く樣になつて、「母さんなんて、人の事を呼んで見た事は此の時始めてじや無いか、嬉しくつてな儂、又

母さんと呼んで見ました、けれど矢つ張り返事が無い。

間隔が遠くて聞こえぬのか、聞こえても人が違つて居るのか、つるりと今度は向ふへ向き直つて、けら〱と何か先の男と笑ひながら蕎麥畑の中へ消えて仕舞うた、すると儂急にもう胸が一杯になつて悲しくなつて來て、母さん〱母さんつて續け樣に、自暴に怒鳴りましたのさ。

ハヽ……大きに骨が折れた冷汗がびつしより、夢、矢つ張り夢、目が覺めました。

とまあ御覧じろ、

全體母樣も惡いが父樣は猶の事惡い、ねえ主婦さん、百舌鳥は百舌鳥だ、時鳥は時鳥だ、幾ら山越え谷越えて生れ故鄉を飛び出して、知らぬ里で世帶を持たうと、ちよろ〱流れの末も海には續いて居る、誠明せば九州由布の山麓、豐前の浦浪は靜かで御座いましたが、北越の海は荒う〱御座ります、眞實に早や親も知らぬ兄弟も知らぬ氣樂な藥賣り老婆と云へば儂の事、古里は此處より山一つ越えて二十里、ハイ根木の里と申しまするで。

疝癪血の道諸病の靈丹、別けては夫婦和合の妙藥、御亭主があつたら試しても御覧じろ、生死の瀨戸際一つ間違へば主婦さん百舌鳥になります、ハヽ……ねえ主婦さん子供衆の爲めだ、確乎頼みますよ。

大きに儂饒舌り疲勞れました、早い話しが、土釜の炭でも櫻炭でも、枯れ木の花は二度の歸り咲き燃せば其れや、ばつ〱と美しい火花も散りませうわ、けれ

どお終にや眞つ白い灰や、花咲爺なら儂にも眞似が出來るが、枯れ木の花も三度は駄目なこつた、間違ひは無い、泡沫の夢なら、夢で、其れも一時、消えて仕舞へば後はさつぱりとして虚々空々、ならば五年十年、百年千年、儂や此の儘に土の中に埋つて藥賣りをして居りますのさ。

ハヽ……死んだら灰にならう、生きて居つたら埋れ木、なあ主婦さん、耳を澄ましてお聞き召され外は嵐が吹きますぞよ!!とけろりとした顔



明日もまた雪ならむ、冬の夜は嵐に更て一輪挿しの寒菊冷めたう身に迫りて、我れ知らずはろりとなつた。

＊　＊　＊

奇しきは冬の一夜現とも無く夢とも無く朧氣ながらも今に其の人の俤が偲ばるる、自分は嘗つてにも近頃にも、這麼泊り客のあつた事は決して記憶しては居らぬけれど、椽側續き四疊半の突き當り、今も彼の灰色の壁を見るとあり〳〵と其の時の事が思ひ出さるゝ、況して夜寒むの廊を寒菊の香冷めたう蒸す樣に漂ふ時には、今にも四疊半の腰高障子細目に開けて、

ハア藥賣りだ、藥を召されと、云ひながら出て來はしまいか、而して小供の樣に罪の無い笑ひ方して、主婦さん、小供衆の爲めだ確乎頼みますよ……と委頓した樣に物思はしげに俯く其の横顔迄が目に浮んで來て、何故か冷やりとして心の底から熱い涙が込み上げて來るので御座います。

桃が咲いて櫻が散つて萩が枯れて、楓が枝ばかりになつて而して山にも雪が降る樣になつたら、屹度又彼の藥賣りは自分の宿に泊つて與れるであらう、而したら又彼の四疊半に案内して、彼の優しい聲で自分の悲しい運命の行衛を占つて貰はう!!!

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

桃が二度咲いた、櫻が二度散つた、萩が二度枯れた、今年も峰の楓が紅葉して雪が降つた、今度こそは屹度來て與れるに違ひ無いと、今も四疊半、寒菊寒う、盥打ち拂ふのを自分の日課にして待つて居るのである。

薄志

柳雨散人

其一

「川村、今日は那女は什麼爲たのか。」

荒々しく六疊の室へ入つて、更紗の座蒲團へ胡座を搔きながら、恁う言つたのは松田と呼ぶ、色の黑い、眉の太い、書生風の、二十四五の倔強な漢。

差對に座つた川村は、二つばかり年紀下で、色の白い、鼻筋の通つた細面、油は塗らないが艷澤な、黑髮を左から綺麗に分けて、絣の袷に、黑の紬か何ぞの羽織を着て居る。

餘り唐突に問はれたので、些と面喰いながら、

「え、文枝？　小川町まで遣つたよ。」と慌てゝ言つて清しい目を眩しさうにした、唇の色くつきりと紅く、眉も濃く凛々しいが、頰がやゝ削けて居るので、何となくうら寂しい。

「然うか。」と快活に、蟠もなく言つたが、
「君も酷いぜ、黙つて弓町の下宿を出て、昨日までさ一月餘の間居處も知らせずに置くなんぞは、」と半ば調戯ふ如き口振だが、此方は正直に頭を掻き、
「失敬した、實に申譯もないが、色々事情があつたもんだから、それでつい……君、何卒惡からず、改めてお詫をする。」
「然う眞面目になつちや困るよ、誰も惡くなんぞ思やせん、何れ深い事情があつたんだらうと思つてたのだ。昨夜端書が着いたから、直ぐと來たのだが、文枝さんが居たから何も言はずに歸つたのさ、事情つて勿論那女に關してだらう？」と袂から巻煙草を取出して、旨さうに煙を吹く。
「然矣！」と深く頷いて、
「其が最早困ッ了ふんだよ。」
「困るッて什麼？」と熱心に言つて膝を乗出すと、川村は遽かに伏目になつて、今更らしく躊躇ふ。
秋も末で三時頃、古びた障子に薄く射して居た、西日が灰色の雲に隱れると、室は急に暗うなつて、窓に近い梧の枯葉を吹く風の音が身に浸みる。
言怯れた川村は、寂しげに肩を揺ぶると、思ひ出したやうに傍の炭取を引寄せた。
「那麼に無沙汰を爲て置いて、困る時ばかり相談するなんつて、餘り勝手過ぎるけれど………。」
「何だ、遠慮なぞして。」と叱する如く言ふ。其に力を得たやうに、
「聞いてくれ給へ、僕が這麼にしてる事が、什麼したのか、全然故郷へ知れ了つたんだ、父親が甚く立腹して、那麼事を爲る奴なら、修業さしても見込がないから、直ぐ歸れ！ 最早一文も學資は送らぬ、と手紙で言つて寄越したんだよ、それでもね、親類の者が仲へ入つて、色々と執成してくれたもんだから、文枝と別れて、元町に居る秋山ッて父親の懇意な者の許へ行く事にして、向後屹と愼さへすりや、今迄通學資も送つて遣らうッて事になつたんだが、それにしても文枝と………。」と辛らさうに俛れて、

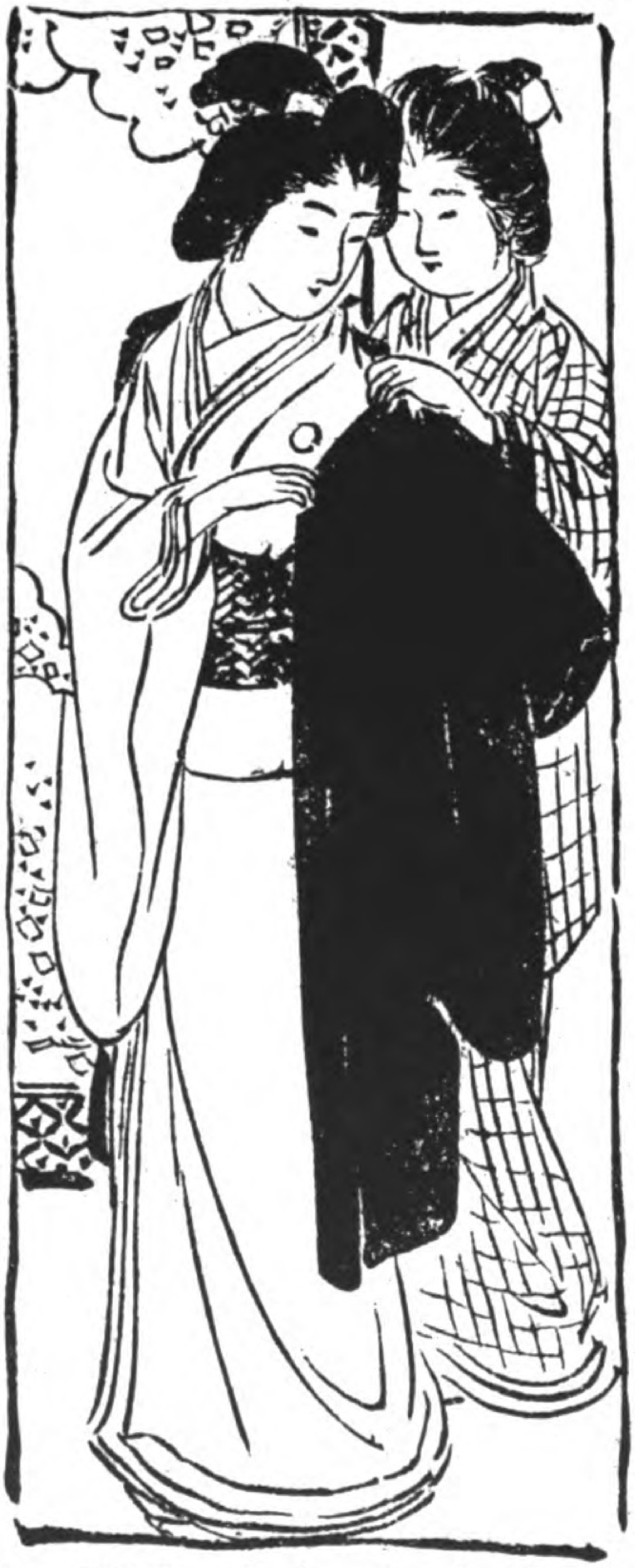
『別れて了ふ事なんだが。』
『うむ、だが、君は一體什麼いふ氣で那女を連れて來たのかい？』と松田は對人の容子を打目守る。
『什麼ッて、實の處をいふと、別に深い考へもなかつたんで、勿論、僕は、最初から弄ばうといふ氣ぢや決してなかつたが、到頭這麼事になつて、今更後悔して居るやうな次第だ！』と流石に慚愧の色を現はす、
『那女は元靜岡の者で、疾うに孤兒になつて困つてたのを、島野ッて、大塚に住んでる僕の友人の家へ引取られて、其家に厄介になつてたんでね、島野は養子だから何でもないが、其義母に取つては緣續だつて事だ。些と遠かつたが、一寸々々日曜なんぞに島野を尋ねて行くと、乾度文枝がお茶の給仕に出たんだ、でね、何時か心易くなつて、話して見ると、然うお轉婆らしくも見えないが、今迄苦勞爲て來た所爲か、何處か慥う慥りした處があつて、メクバリが瞭然して、田舎で育つたやうぢやない、勝氣で、一寸面白い女なんだよ。で、何かの話の序だつた、僕の下宿を敎へてね、些とお遊びにッて言つたんだ、勿論、是は唯のお愛想の意、又如何に文枝だからッて、人目があるのに、一人で若い男の許へなんか、何の來るもんかと思つてると實に意外！　突然に遣つて來たぢやないか。』と語乍ら渠は其時の光景を目に浮べた。

其二

『實際極が惡かつたが、素氣なく追歸す事も出來ず、左も右も座敷に通すと、毎もと變つて甚く鬱いで居る容子。什麼か爲たんですかッて聞いて見ると、私、最早眞個に困つて了つたの、と其時萎れた顏を上げた。
君の前だが、僕も憎いと思ふ女ぢやない、然う聞きや氣になるから、自分の力で及ぶ事なら扶けて遣らうと、甚麼譯かッて聞くと、究り恁うなんだ。
其義母が文枝を引取つた下心は、島野の氣にさへ入つたら、其妻にさせやうてんで、其となく島野の氣を引いて見ると、異存のない處か、寧ろ望む容子、文枝の方は女だけに、然うなつたら、何うなりとも叔母さ

んの宜しいやうに、と來るぐらゐのもんだからと、昔質氣の女だから、一も二もなく自分で決めて居た處が、さて愈々となつて見ると、文枝が厭だつて言ふぢやないか。

それぢや何故厭かッてえと、別に厭な點はないッていふんだ。長い間同一家に居て、氣心の穩かなのは知拔いてるし、相當の學問もあつて、見られないッて方でもないのだから、決して嫌ふ處はないが、其換些とも好いても居ず、良人として一生仕へるのは、何となく物足らないやうに思はれて、獨身で通すまでも、那麼結婚は爲たくないッてのだ、一寸聞くと、如何樣呑氣な、我儘なやうだけれど、畢竟少許も愛情がないからなので、能く能く考へて見れば、決して那麼浮いた氣ぢやないと僕は感じたんだ。



以前から嫌ふ容子もなかつたのに、此意外の返事を聞くと、義母が一時甚く怒つたが、年紀効もないと思つたか、此頃ぢや幼兒を扱ふやうに、叱つて見たり賺して見たりして、色々將來の利害を說き、他へ嫁した女の苦痛をも聞かせて、赤心から文枝の身を案じて、其我儘な、頑な心を飜へせと強ひるんで、此方の胸は、些とも義母には解らないッてえんだよ。

長い間恩になつた叔母さんの命令なら、自分の眞情

を殺して迄も、反いては惡いんでせうか、貴方は、什麼思召すッて、文枝は僕の顏を見て、ほろ〳〵涙を落すんだよ。

　何方とも定めかねて、僕のやうな者をも便つて來たんだらう、些ながらず動かされた僕は、些とも躊躇しないで、何處迄も反抗し給へッて……。今から思ふと實に輕卒の極だつたが……。

　然う言ふと、頬へ流れる涙を、白い絹手帕で拭つて瞼に露の未だ乾かない、情の籠つた目元に、昵と僕を見て、貴方、眞個に……ッて嬉しさうに言ふんだ。

　僕は最早恍惚して、意氣地はない、前後不覺。ですけれど、何時迄も反抗して、萬一叔母さんと衝突したら、什麼しませうッて、氣遣はしさうに憐愍を乞ふ容子なんだ、僕は殆ど我を忘れて、愛のない結婚を強いるなんぞは、叔母さんの方が間違つてるんだから、決して屈從するには及ばない、貴方が困るやうになれば僕は必らず他所に見ては居ないッて、情に任せて、言ふまじき事を言つて、確く誓つたんだ。

　文枝は心から感謝して、嬉々として歸つて行つたが其から十日許經つと、又萎れて來たぢやないか、能く見ると顏色も尋常でないから、氣遣はしくて、什麼したつて訊くと、最早辛抱爲切れないから、叔母さんと口論して、逃げて來ましたッて言ふんだ。はつと思つたけれど、靜岡へは歸られない仔細があり、他に行く處の無いのは知れ切つてるし、前の約束があるんだから、奉公へ遣るのも可哀想で、關ふもんかと、僕はつい引受ける氣になつた。然うすると、弓町に居ちや金錢が懸つて、何程儉約しくしたつて、一人の學資で二人喰つちや行かれないし、第一友達が來て見附つちや雙方のために良くないから、誰にも知らせずに、此家の二階へ引越して、自炊したりしたんだが、最早故郷へ知れて了つて、學資を斷たれるつて事になつて見ると僕も實に途方に暮るんだ、文枝と別れるのは薄情のやうだし、然うかッて此儘ぢや居られず、松田君、僕は什麼したら可いんだらう。」と力なく吐息を洩らした。

我さへ何時と知らぬ間に、渠は文枝に戀して居たと

思つたが、其は腹に燃ゆる炎の、憂き身を焦す底のものではなく、極めて淡々しく且つ力ないのであつたらう。

然れば、其美き酔の未だ醒果てぬのに、今此障碍に逢ふと、俄かに盟の誓も忘れて、苦き智の聲を聞かうとするのだ。

其三

松田は吸殻を火鉢へ投げて、

「為方がない、文枝さんと別れて、元町の秋山とかいふのへ行くのさ。」

「……。」無言で俯向いて了ふ。

「其が最も得策だぜ、今父に突放されて見給へ、失敬だが君の體ぢや自活して勉強するなんつて事は、到底不可能だから、什麼したつて、此儘埋れッ了はればならない事になるよ。

然うなりや、折角望んでた事も、皆な水の泡だ、こゝで一歩を過つたら、終生恢復は能ないんだ、餘程氣を注けて確りしてなくちや不可ないぜ、可いかい、殊に君の父は實のぢやなからう、中間に立つ、母の氣持も考へてやれ！」と松田はやゝ聲高に、情を籠めて深りと言つた。

川村は幽かに頷いて、

「其は僕も知つてるから、然う為やうかとも思ふが……、文枝が什麼も……」と言淀む。

「馬鹿な！　一目見りや知れるぢやないか、那麼風の女だ、君が心配する程ではない、什麼とか為るよ。」

「ぢや、別れるつて事にしたら、什麼したら可いんだらう。」と氣も漫ろ。

「什麼つて、空手で行けつてのは情として忍びまいから、何とかして金錢を拵へて、這麼譯で、最早一所に居られないから、是で一先づ何處かへ移つてくれつて言や、其先は、叔母の家へ詫びて戻るなり、其が不可きや奉公でも為るさ。」

鼓動の次第に高まる胸に、雙の腕を犇と組み、悄然として聞いて居た川村は沈んだ顔を上げて、手を解くと顫へるやうに、

「那、那麼事は什麼しても、那女の前で、僕は言へない、第一可愛想ぢやないか。」

松田は鋭く叱して、

「何だ！　意氣地のない、此際、何時迄那麼事を言つてるんだ、ぢや仕方がないや、默つて逃げるんだ。」

「逃げるつて僕が……！」と聲も稍戰く。

「叱！」

同時に階子段を踏む音がしたが其が止ると、靜かにすらりと襖が開いた。

二人は齊しく顧みたのである。

留守に這麼恐しき相談があつたらうとは、神ならぬ身の夢にも知らず

紅の花かとも見ゆ、口元に莞爾笑んで、艶なる姿を見せたのは、今年二十の文枝であつた。

其四

高く澄んで居た濃い瑠璃色の大空も、暮近く稍白々と、日は彼方の棟に落ちて、吹捲く風の身に泌む頃、三崎町も濠に向つた、微な莨店の、未だ灯も點けぬ内へ、衝と入つて、ずつと上にあがりながら、

「お女房さん、只今。」と聲を掛けたのは、今朝川村と二人で出て、瀧の川へ遊びに行つた、彼の文枝である。

「おや、お歸んなさいまし、お樂みでしたねえ。」と勝手の方で言ふのを聞流して、馴れたれば躊躇はず、薄暗き階子を昇つて、座敷へ入ると、直ぐに机の上のランプに灯を點じた。菊の花の摸様ある、背後の押入の襖には、薄墨の影が映つた、文枝は艶澤な前髪をふつくりと取つた束髪に結つて、雪のやうなリボン、色は拔上るほど白く、眉を開いて、涼しい眼を、うつとりと、然も疲れたやう、水にも紛ふ薄紫に秋草を縫つた半襟の衣紋を繕く、鼠と紺と、矢絣の銘仙の袷に、薩摩縞のお召の羽織、繻子と繻珍の腹合をきりゝと締めて、裳を淺う座つたが、薄い膝をづらしたので、オリーヴの裏が飜り、襦袢の花の紅がこぼれる、左の手を靭やかに、疊に支いて打傾いた、小造なれば二つ三つ若く見え、帶の摸様の蝶々さへ、色香を慕ふて寄つたかと、露を帶びたる花の風情。

間もなく入つて來た女房さんは、持つて來た臺十の火種を火鉢に移しながら、愛想好く笑顔して、

「御一所かと思つたら、貴方お一人なんですね。」

「えゝ、川村は湯島の友達の處へ寄つたの。最早追付歸るんでせう。」と懶さうに炭を繼ぐ。

「只今お湯を持つて來ますよ。」と湯沸を持つて立つ。

「濟みませんことね。」

女房さんが去つた後で、渠は火鉢を引寄せて、手を翳した、晝間は然程でもないけれど、夜は早寒さを覺ゆるのである。

と心着いて座蒲團を敷かうとして、顧みたが見當ら

ない。けれども、大方女房さんが仕舞つたのであらうと氣にも留めず。

着更へやうと、羽織の紐を解きながら、衝と立つて押入を開けると、中は薄暗く、有る筈の行李が無かつた。

餘りの訝かしさに、直ぐにランプを片手に持つて、再び見ると這は如何に、荷物の半は失はれて居る。

「一寸、お女房さん、お女房さん！」と文枝は凛とした聲で、慌しく呼立てた。

「はい、はい。」と返事も急に、女房さんは階子段を駈上つて、

「何か御用⁉」

文枝は火鉢の前に丁と座つて、

「まあ此方へ入つて下さいな、あの、今日私達の留守にね、誰か被來りやしなかつたの？」

「被來いましたよ！」女房さんもヅッと火鉢の傍へ寄り、

「あの松田さんとか被仰る方が、貴方々に預けてあつた荷物を受取つて被行いましたよ。」

「松田さんが⁉」と思はず目を瞬つた。

「えゝ、貴方御存じぢやないんですか。」と此方も意外だといふ顔で、

「まあ、什麼したつてんでせう、昨夜ね、尤も貴方は被居らなかつたが、川村さんが私にね、明日松田てッて朋友が、預けてつた荷物を受取りに來る筈だが、其人は親類の端だし、兄弟のやうにして居る中だから、留守でも管はない、心配なしに渡してくれッて被仰いましたもんですから、私も其意で、貴方も御承知の事とばかり思つてましたのに、變ですねえ。あの、今日貴方々が被行ると、間もなく見えてね、行李を一個と風呂敷包を二個、それに本箱と、俥に載けて行きましたよ。」

「ぢや川村は知つてるんですね？」

渠には什麼いふ意やら、一向解らなかつたが、川村が承知とあれば、何事も歸つて來た上と、

「然うですか、それなら川村に聞けば解りますのに、

態々お呼立申しまして、何うも濟みません。』
『否、何う致しまして、』と女房さんは匆々降りて行く。
文枝は其方を見送つたが、立ちもやらず、もの思はしげに火鉢に凭ると、撫肩の右を落して、悄乎と寂しい姿で俯向いた。
少時して顏を上げると、頰にはらりと亂髪る、後れ毛を搔上げて、見るともなき目の遣端、旋て机の上の水色の封書に移したのである。

其五

取上げて見ると、宛名は北島文枝様、裏には川村新之助と、見覺えの手跡で認めてあつた。不覺悄として封を切つた。
ランプの心をぐいと出して、前髪笄に觸るゝばかり、机に凭つて、俯向いて、渠は其懐るべき人からの文を繰擴げたのである。
見馴れれば讀憎い、淡墨の走書を苦もなくすら〳〵と、五六行讀むと見る〳〵瞳が輝いて、ほんのりとして居た顏の色。急に寂しく、蒼白めて、持つた手先が顫々震へ出したが、旋て讀終ると、氣色を變へて、手紙を寸斷々々に引裂き〳〵、揉潰して火鉢の火へ投入れ、身を顫はして、
「私は欺された！」

然も口惜氣に獨言つと、苛々しく立つて、蹌めくやうに窓際に寄り、颯と障子を開けた、外は全然夜の光景、月も未だ出ぬ大空は眞暗で、銀砂子を撒いたやうな星の輝き、銀漢幽白う流れて、夜の氣冷く面を打ち、身も屹と引締るやう。
窓に肱を懸けて、強いて紛らさうとして、其空を仰いだが、瞼を溢る熱き涙は、雲のやうな鬢を傳ひ、動悸激しく高まつて、胸の思ひは燃ゆるばかり。
「這麼事なら、最初から然う言つてくれたが可いぢやないか、今となつて……餘りだ。」と再び無念さうに呟いて、亂落つる涙を拭はうともしない、謂ふまでもなく、渠は川村から見放されたので、机の抽斗には若干の紙幣が入れてあつた。
夙く父母に逝かれて、冷き他人の中に成育つた渠は、譬へば雪に傷みし若芽の如きものであつたが、旋て情の雨暖き、叔母の家に引取られてからは世の明るみへ出た心地がして、今日迄三年暮す間に、一種妙に僻んだやうな、厭な素振も見えなくなつたが……………。
萩、桔梗、女郎花撫子と咲揃つて、目も覺めるやうな花壇に向つた座敷に叔母と差對ひ、甥子の島野が妻にと言はれた時も、文枝は決して諾はなかつた、渠は明らかに自分といふものを認めて居ると共に、愛のない結婚の到底無意味なるを知つて居たから。
果ては叔母の意に反いて泣、恚を買うとして、川村に身を寄せたのだが……。其時、二人は言知らぬ歡樂に酔うて、多感の胸には若き血

をも靡らせたのであるが、其さへ長くは續かず、愁くて別れて見ると、殘るのは唯悔と悲嘆と、汚れた……身體！

「あゝ、這麼で……私は什麼爲よう。」と身を悶えて、慟哭ぐれば、黑髮は冷く搖らいで、おくれ毛のこぼれかゝる、雪の頸に夜の色、消えて行くかと哀れであつた。

暗き空からは風一陣、窓に音づれて、ランプの灯がフツと消えると、障子の影が仄白う浮んで、廂を流るゝ露冷く、枯れた梧の葉か、がさりと落ちて鳴出した蚯蚓の聲が途斷れて了ふ。

「川村さんも困るなら困ると、打明けて言つてくれたが可いぢやないか這麼卑怯な眞似を爲なくつたつて。

然うすりや私も綺麗に別れるものを、私が馬鹿なんだから爲方がないが、愍う好いやうに僞されたと思へば、腹が立つ。」と自分の輕擧を悔ゆると共に、這麼怨をも胸の裡で言つて、涙に濡浸れて顔を揚げた。

自己を何處迄も殺すまいと、健氣にも心を決して、杖柱と身を寄せて居る、その人に逃げられた渠の思ひは、恰度、寒い、嶮しい、夜の深山路を踏迷ふ、餓え疲れた旅人が、便にして居る美しい星に落ちられた時の心にも似やう、這の失望と、僞されだる怨と、癒ゆるへうもない猜とに、胸は裂かるゝ心地である。

「是から……。」と行末を想ふと、言ふべくもなく恐ろしい、眞暗の罪の淵へ、落ちて行くやうな氣がして、覺えず身中が戰かれる。而して僅かの間でも連を得て居たゞけに、前にも增した孤獨の寂寥を覺えて、勝氣といひながら底には流石に弱い處も潛んで居る、石よりも堅しと自ら信じた、然しもの決心も、愍る際には、稍動かむとするのであつた。

やがて多時して、太く激した情が、毎の如く鎭ると、渠は漸う心着いて、紅の花も暗く曇れる、糯袢の袖で流れる涙を堅く拭つて、瞳を轉じて、外の方を打覗めながら、冷いおくれ毛を搔上げた、其烏羽玉の澤は見えねが、鬢の端に偲ばれ、顔の雪廂の暗をほのかに透いて夏ならねども螢呼ぶ、暗の戸に夕顔を見る風情。

大空は薄明るくなつた、早月が出るのであらう、向ふの屋根には露か流れ、街燈の光が淡く、川緣に積んだ材木は、ものゝ影が映つたやう、暗い水の面には、幾艘の荷船が靄はれ、狹霧幽白う立迷ひ、新飯田橋は墨繪の幻かと誤まれて、遠方の灯がぼんやり赤い。

文枝は呪と視むる中に、我にもなく大塚の今時分の光景を思出して、懷かしさに胸を躍らした。

と時も時、地尻の差配の座敷の邊で、未だうら若い聲で、「……やがで休らふ逢阪……。」と彼の熊野の一節を謠ひ出したのである。

島野は謠を好み、然も熊野が得意で、敢へて巧いといふ程ではなかつたが、能く好い聲で謠つたので……。

嘸今宵もと思ふと、戀ならねども逢見たく、我を忘れて衝と立つたがあゝ、あはれ、覺悟の上といひながら、渠は再び島野に見え得べき身ではないのである。

ふる／＼と身を顫はすと、冷い袖を顔に押當て、覺えずよろ／＼蹌め

いたが、僅かに柱に身を凭せて、忍音に泣きながら、

「せめて叔母さんだけにでも、一目逢いたいわ―」

其六

「……花を見捨つる雁の、其は越路我はまた、東へ歸る名殘かな、東へ歸る名殘かな。」謠ひ終つた時、護國寺の鐘が鳴つた。往來から引込んで、生垣を遶らした別莊造、二階は未だ雨戸を鎖さず、障子に燈火明う射したが、内は寂として、話聲も洩れない。今歇んだ身に泌むやうな聲は、言ふ迄もなく島野の養子秋夫であつた。

大塚も外れの、夜靜かに轍も響かず、間近く流るゝ小川の呟と、遠い水車の音とが聞えるばかり、星の影疎らに、月は今墨のやうなむら雲に呑まれて、滿地の露に光消え、屋敷に隣つた雜木林が眞黑くなつて、怪しきものゝ潜むやう、骨に徹る如き風は、肅颯として梢を吹いた。

突然其下を離れた、墨繪のやうな人影があつた、其は正しく女で、生垣に添つて少時動いて見えたが、旋て門の前を過ぎつて、垣の外れの、葉の散つた櫻の下迄來た時、頓と足を止めると、身を片寄せ、暗を透し見て、

「一寸、お富さんぢやないの、」と滑しい低聲で、懐かしさうに呼懸けた。

買物に出ての戻、急足で來た富は、不意に呼ばれて恟としたが、更に其聲に驚かされて、

「まあ！　お嬢樣ですか！」と同じ木蔭に立ち止つた。

「最つと靜かに……、聞えると惡いから。」

と制しながら寄添つたのは文枝である。

富も懐かしさうな狀で、

「眞個にしばらくぢやございませんか、お變もなくて何より嬉しく存じます、那から後は每日案じ暮らして居りましたよ。」

「然う、有難うよ、私も逢いたかつたけれど、那麼事で逃げだしたんだから、甚麼事にも閾が高くて來られなかつたの。お前さんにや取分け世話になつたのに、

一言禮も言はないで、出て行くのは如何にも本意なかつたんだけれど、那麼譯だつたから、何つて挨拶の爲やうもなかつたの、惡く思つておくれでないよ。』

と言ふ聲も涙に曇り、切ない胸の意が籠つて、哀れ深く力ない。此家に居た頃は、那麼にハキ〳〵した人であつたのに、僅かの間に甚麼苦勞を爲たのかと、以前を知るだけ猶可憫しく、富は覺えず涙含むで、

『私の事なんぞは什麼でも宜うございますが、お嬢樣、貴方家をお出なすつてからは、甚麼にして被居つたんですか。』



打明けても言はれぬやうな、今の境遇を思ふと、渠は道傍の草に、潛々と熱涙を溢したのである。

『後生だから那麼事を訊いておくれでない、那麼にして出た果は大抵知れてるわね、餘り人の深切を無にした罰なんでせう。』

『貴方家へはお寄なさらなかつたんでございますか。』

『だつて寄れないんだもの。でも、實はね、あの、叔母さんだけにでも可いから、染々お詫がしたいと思つて、來たには來たのだけれど……、今更叔母さんも逢つちや下さるまいから……。』

富は聲を出して泣いた。

「貴方は未だ何も御存じないのですねえ、那して居らしつたのですから、御無理はございませんが……。」

何かは知らず氣遣はしくて、文枝は忍音を震はした。

「え、知らないつて、何を、什麼したのよ。」

「貴方、御隱居様がね、貴方が出て十日計經つてから急にお亡り遊ばしましたよ。」

「叔母さんが！」と覺えず顏色を變へた。

「寂しい雨の晩、曉方息をお引取なさいましたよ、誰が何と申しましても、お居でなさるお處さへ知れてれば、直ぐに私がお知らせ申しますのに、甚麼に氣を揉みましても、什麼する事も出來なかつたのでございますよ。」

途端に間近で落葉を踏む如き音がしたので、文枝は四邊を眴はしたが、人の影も目に入らなかつた。

「私は、私は悉しく聞きたいけれど、何だか、此處ぢや誰か來さうで氣が落着かないから、彼方の木の陰まで來ておくれでないか。」

「えゝ、參りますとも。」

うら枯の力ない、露置く草の葉を分けて、二人は足音を竊んで、先刻文枝が彳んで居た、雜木林の下迄來た。

其邊の叢で、たゞ一つ、死殘つて哀れに鳴いて居たきり〴〵すの聲が、糸の切れたやうにフト絕えると林の奧では氣疎く梟が鳴いたのである。

其七

富といふのは最早可い年增で、十六で此島野の家へ奉公に來て、二十三の春迄好く勤めて居た。其時暇を取ると直ぐに緣附いたが、夫婦間は好かつたのに、姑に憎まれて離緣となり、再び嫁入つたが今度は亭主に死なれて了つた。で、渠自身もよく〳〵緣の薄い性だと諦め、最早夫は持たぬといつて、今も寡で、島野の家で立働いて居る。初めから女隱居の氣に入り、隨分御贔屓にもなつたもので、有難い御主人だと口癖のやうに言つて、奉公人根性を捨てゝ、忠實に仕へて居たから、養子の島野には話さぬ事まで、隱居から聞かされたこともあつた。

「包まずに申しますが、御隱居様は那の通の御氣性ですから、貴方の家出なすつたのを、大變お腹立でございましたよ。」

「然うだらうとも—」私も然う思つてたの、」
と情然として涙を拂つた。
「お亡り遊ばす直ぐ前の晩でございますよ、若旦那をお呼びなさいまして、御隠居様が然う仰つしやいました。
私や斯うして不足なく、お前達に介抱して貰つて死んで行きや、最う言ふ事はないけれど、唯一つ心殘なのは、お前に好いお嫁を取らずに逝く事だよつて、仰つしやいましたが、甚く息が切れて、見て居ても切なさうでございました。えゝ、お床は那の下の六疊へ取つたのです。若旦那様が氣遣はしさうに、義母さん那麼御心配をなさらないで、何卒早く御全快なすつて下さいましつて言ひますとね。
げつそり肉の落ちた頰へ、寂しい笑を浮べなさいましたが、御隠居様は、最早充分覺悟して居らつしやいました。
私に力を落させまいと、然う言つておくれなのは嬉しいが、最早能く諦めて居ますよ。其に就いて那して呼んだんだが——お嬢様貴方を——お前は面倒を見て遣らうといふのに、我儘な厭だつて、未だ其ばかりか大それた家迄飛出して——あの、今頃は何處で何を爲て居るのか、否、遇ひたくはない、思へば冷汗が出る、お前にも面目ないが、それでも那麼者を妻に持たなくて仕合せだつた。
當もなく世間へ出て、何れ好い事はあるまいが、縱令甚麼に困つて來たつて、最早決して庇つて遣る事はない、此家の閾も跨がしてくれるなお前は他から立派な妻を取つておくれ、此事はくれぐ＼も頼みましたよ可いだらうねつて被仰いました。
若旦那様は、俯向いて考へて被居いましたが、少時して、はいつて被仰いました、ですけれど、私は能く知つて居ります、泣いて被居つたんですよ。
貴方が家をお出なすつてからは、若旦那様は、何時も何か考へて被居るやうでしたが、御隠居様がお亡り遊ばしてからは、一層滅入つてお了ひなすつて、私を見ると時々、寂しいなつて被仰つちや、密と貴方のお寫眞を御覧なさるばかりでございます。
那程御好な謠だつて、其からは些とも遊ばさず、今夜初めてお謠ひなすつたのですよ。其も、氣を紛らすやうになすつたのでございませう。」
宜こそ、文枝は胸を刺される心地で聞いた。
「其晩然うして被來つたのも、御緣がございませう、左も右も若旦那様に一度お逢ひなさいまし。」
「……、」ともの言はで、文枝は幽かに身を顫はして、紅淡き唇を噛んだ、あはれ、見ゆべうもない、悲しき今の身と知らずや。
「さあ被行いまし、及ばずながら、私がお執成致します。」と富は向直つて前へ出た。
「……。」
「あれ、什麼なすつたのでございます、お孃様。」
「否—　私、私は逢はないから……。」と遮つた聲は震を帶びて、異様に富の胸に響いた、漸やう擧げた顔は眞蒼で、一夜の内に太くも面窶れ

して、媚も消えた目には涙が溢れ、鬢の毛が冷く亂れて、乳の邊を押へた手がわな〳〵と、扮裝も昨日のまゝの、縞のお召の羽織の袖が、露に濕つて重たく靡いた。

月は朧雲がくれ、梢は疎られ透いたれど、木陰とて暗濃やかに、富には其狀も見えなかつたが。

秋風一陣颯と音して、ほろ〳〵の木の葉がこぼれた。

其八

ほろ〳〵と木の葉がこぼれた。

すらりと二階の障子が開くと、椽へ出てすらりと立つたは、一幅撥と赤う射す、灯を背後にして、二十五六の中背の男、丸顔で色淺黒く、眉柔和に、唇はやゝ厚く、薄髯があるが、何處か未だ無邪氣な狀の見える、島野秋夫。

『何處へ行くとも言はなかつたのか!?』といつて、文枝がイんで居た木蔭を、懐かしさうに打視めた。

『はい、甚麼に伺ひましても被仰らないのでございます。それなら一寸家迄お寄下さいましッもて、這麼體になつちや最早お目にも懸れないから、秋夫さんに何卒宜しくツて、泣いてばかり被居つたのでございます。』と傍で答へたのは富である。

『文枝は那麼に僕に逢ふのが厭だつたのかな。』

『いゝえ、決して然うぢやございませんよ。那麼氣性の方ですから、乾度甚く身を恥じて被居つたのでございますよ。』と氣色を伺ひながら執成顔に言つた。

『何方へ行つたんだらう。』と沈んだ聲で、半ば獨言つやうに訊いて、悵然として打仰いだ目は涙に曇つた。

富も其胸を思遣つて涙含み、

『はい、あの、私が門を入る時は、未だ木の陰に被居つたやうですが……、何れお歸りなすつたんでせう、道は大方知られてます。女の足ですもの未だ護國寺の前迄行きやしますまい、然ういつて、誰かに追掛けさせませうか。』

けれども、實際、歸ると言つた文枝は歸らなかつたのである。渠は強ひて立去らしめた富の姿が、門に入るのを見ると、張詰めた氣が一時に弛んで、危く頽折れむとして、傍の松に身を倚せたが、泣音を熟と堪へ

涙のみはら〳〵と頬へ落した。

漸う氣を取直すと、屹となつて、

（叔母さんも、秋夫さんも堪忍して下さいよ！）

聲は立てず、胸で言ひ、心で詫び、露の小草を音なく踏んで、蹌踉と前へ出て、垣の間から、三年住馴れた座敷の邊を、熟と懐かしさうに視めたが、旋て思ひ切つて背向けると、ものに引かれた風情で、一足退つて、はらりと褄が飜つたが、向直つて、暗い林の中へ入つたので。

道の程、何丁來たのか、また何うして來たのか、渠も那麼事は考へやうとはしなかつたが、此時立つて居るのは、實に此林の出外れた處で、足許には離々たる秋の草、津々に露を浴び、直ぐ前の低みをば小川が流れて、其向ふは實がちになつた蕎麥の畠である。

月は暗く、雲離れず、林に鳴るは魔の息か、潺湲たる流の聲も、浮世に遠く聞きなさるゝ紅葉した草の中に、幻に淡彩した趣で、愁然として佇んだ、血凍る思ひの文枝は、此品のみ父母の紀念だといふ、錦の袋に包まれた、蠟塗の短刀を深く納めて、胸を密と押へたまゝ、初めて聲を揚げて泣き倒れたのである。

『如何致しませう、誰か遣りませうか。』と富は重ねて訊いた。

『否、其にも及ぶまい、逢ふ氣のないものは仕方がないから。

けれども僕は逢ひたかつた、未練のやうだが一目見たかつたが、是非もない、あゝ、文枝は何故逢つてくれないんだらう。

三年の間、心の裡ぢや妻ぞと思つて居た文枝だが、義母の前でも誓つた位ゐだ、今となつちや決して女房に持たうの、何のといふ氣はないけれど、逢つたら、一生の別離に、唯一言々ひたい事があつたのに。』と殘惜しげに言差して、胸迫つて聲が絶えると、渠は竊かに熱き涙を吞んだ。

富は返す言葉もない。

此折から、月は雲を離れて、銀光閘の露に照り、秋夫が立つた裾にこぼれた。

忽ち明るく見渡さるゝ、野面、林を打覗めたが、覺えずはら／＼と落涙して、

「噫！　文枝は何處へ行つたのか！」といふと堪へず内に入つた、胸を絞つた此一言に、幾許の思ひが籠つたらう、あはれ三年の辛らき戀は、恁くて味氣ない終を告げたのである。

と殆ど同時。

其妙なる月光を浴びて、白露の玉と輝く、末枯の秋の草の中に、端然として座した文枝は、既に短刀の鞘を拂つた、五寸の白虹、月に映じて霜を呼ぶ。

鋩を咽に擬した時、唇は、早折敷かれた桔梗の後れ咲の如く、顔の色は其の葉に似て、弔らひ顔に蟲が啼いた。

是れを名殘の、文枝は其のあはれな聲を聞きながら、打仰いで月を見た、星を見た、雲を見た。顧みて木立を見た、俯して蕎麥の畠を見た。秋草を見た、置く露を見た。あはれ其の露よりも、落つる涙の繁きかな。

冷龍一躍！　雪の咽喉に、あはや紅を染めむとした。

一刹那！　何かは知らず、曾ぞ覺えのないものを、文枝は胸に犇と感じて、カチリ刀を取落すと、兩手で面と目を掩ひ、少時は死せるものゝ如く。

旋て屹と顔を揚げると、清しく輝く星の瞳に、澄渡つた月を望んで、衝と立上つたが、一種犯し難き威が見えた。

「什麼して這麼に氣が弱かつたらう、死ぬッて覺悟さへ有つてたら、自分で信ずる通りに、何事でも出來るのにねえ。」と獨言ちて、げつそり削けた頰へ、得言はれぬ微笑を浮べた。

秋も終の、露寒き一夜は、恁くて靜かに更けて行くのである。

（作者淺井龍夫氏の住所を報道あれ）

二月號記事豫告

二月五日發行

每月五日發行

定價表

一冊（紙數二百八頁）	金二十錢
四冊（三ヶ月分）	前金七十五錢
八冊（半ヶ年分）	前金一圓四十五錢
十六冊（一ヶ年分）	前金二圓八十錢

内 定刊數……十二冊
増刊四回…一、四、七、十月價格同一

郵税　一冊　二錢

廣告料

	二十四字詰一行	半頁（卅二行）	一頁（六十四行）
特等	……	二十圓	割引 四十圓
一等	五十八錢	十七圓	割引 三十三圓
二等	五十錢	十四圓五十錢	割引 二十八圓
三等	四十二錢	十二圓	割引 二十三圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

註文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割増にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

明治四十年一月一日發行（第七卷第壹號）

編輯兼發行人　松原岩五郎
印刷人　山田英二
印刷所　博文館印刷所（東京市小石川區久堅町百八番地）

發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話　三千百十三番　三千八百十八番
本局　二千六百二十二番　三千二百九十二番

〔[illegible]〕

君が為め惜からさりし命さえ長くしかなと思ひけるかな　藤原義孝

博文館出版圖書拔萃目錄

注文之注意

▲博文館は自館出版品と一手專賣の委託品の外他店出版品は一切取扱不申候

▲御注文の節は必ず代金御添付の事、又郵券代用は一割增に限り申候

▲郵便爲替の御送金は受取局を東京十軒店受取人を博文館と爲替券面記入欄へ御明記被下度候

▲書狀の宛名は必ず日本橋區本町三丁目 博文館小賣係 と御認め被下度小石川區の印刷工場又は博文館編輯局等筋違の宛名にて御注文は書狀の紛失其他の錯誤あるも弊館は其責に任じ難く候

▲書狀は文字を分明に御認め被下度候殊に御住所御姓名は最も御注意願上候

▲金高一圓以上の御送金には受領證差上げ可申候得共壹圓以下は送本丈けにて用辨可仕候

▲御進物賞品等に最便利なる圖書切符を發賣し金高の御随意に調製可仕候

▲本館發行圖書總目錄は往復はがきにて御申越次第贈呈可仕候

▲金高壹圓以上の御注文には割引を爲す其の割合規定は別に相定申候

振替貯金番號二百四十番
販賣用電話本局二六二〇

廣告之案内

弊館の月刊雜誌は次頁に連載せる如く既に十有餘種の多きに達し何れも社會の各方面に於て好評を辱ふし其發行高は現今の雜誌界に於て他に匹儔を見ざる好況を呈し且つ販賣區域は全國各地に及び如何なる僻陬の地と雖も弊館雜誌の至らざる所なく數十萬の顧客を有するを以て其廣告効力の偉大顯著なること他の新聞雜誌の企て及ぶ所に非らず希くば大方の商工業製造家諸君弊館雜誌中其營業に適應せるものを撰み一たび揭出の榮を賜はり敢て其誇張の言にあらざることを試みられたく候

追告弊館雜誌廣告料金は他雜誌に比較し割高の樣に相見え候へども事實は決して然る譯にこれなく既に主文に申述べ候通り弊館雜誌は發行高多大なる爲め印刷に關する費用相嵩み已むを得ざる次第に付幾重にも御諒察を賜はり度尚ほ此業の慣例として廣告面の大小等級の如何に依りては幾分の割引も可仕候間御照會之上御用命願上候

▶廣告料金定價表は御申込次第送呈可仕候◀

女(後付の一)

博文館

明治四十四年定期

太陽

◎太陽　東洋雜誌界の覇王政治文學科學經濟宗敎其他各方面に亘り雄大莊嚴名海外に轟く。

毎月一回一日發行▲年刊十二册▲臨時增刊四回（定價同一）大判（四六判二倍大）紙數二百五十六頁寫眞版アートペーパー四頁普通十六頁▲本文中寫眞版數十個挿入

正價（●一册參拾錢 郵稅參錢）前金（●四册金壹圓拾五錢●八册金貳圓廿錢●十六册金四圓貳拾錢▲外要郵稅）

商工世界 太平洋

◎太平洋　商工界の絕好機關當世第一流の意見と實業界の事情を網羅す。

毎月二回一日、十五日發行▲年刊二十四册▲外臨時增刊▲大判（四六判二倍大）紙數百十二頁▲寫眞版アートペーパー四頁

正價（●一册拾貳錢 郵稅一錢五厘）前金（●六册金六十八錢●十二册金壹圓參拾五錢●廿四册金貳圓六拾錢▲外要郵稅）

農業世界

◎農業世界　農事改良の急務に應じて創刊せり、眞に國本培養の良資料主筆は石阪農學士なり。

毎月一回十日發行▲外臨時增刊▲菊判紙數二百四十頁▲水彩畫（石版彩色刷）二枚▲光澤紙寫眞版四頁▲普通寫眞四頁挿入

正價（●一册貳拾錢 郵稅貳錢）前金（●四册金七拾五錢●八册金壹圓四拾五錢●十六册金貳圓八拾錢▲外に要郵稅）

文藝俱樂部

◎文藝俱樂部　小說に時文に將た美文に天下の名篇を蒐む活社會の消息藝苑の事情最新の流行等を網羅せり。

毎月一回一日發行▲年刊十二册▲增刊年四回▲菊判、三百廿頁▲木版摺錦繪一枚▲原色版一枚▲光澤寫眞版二頁、普通八枚

正價（一册貳拾五錢 郵稅貳錢五厘）前金（四册金九拾五錢●八册金壹圓八拾錢●十六册金參圓五拾錢▲外要郵稅）

寫眞畫報

◎寫眞畫報　時事の出來事と世界の大觀を讀者の眼前に活寫實現せしむ。

毎月一回八日發行▲太𣁾判石版刷彩色表紙▲石版極彩色刷三頁▲光澤紙彩色二度刷寫眞版四頁▲コロムミ仙版一枚寫眞銅版二十四枚▲本文記事八十頁▲（本文中木版及寫眞版挿入）

正價（●一册貳拾錢 郵稅貳錢）前金（●四册金七拾五錢●八册金壹圓四拾五錢●十六册金貳圓八拾錢▲外要郵稅）

女學世界

◎女學世界　趣味實益兼備なる家庭必置の好雜誌女子品性智識の寶庫、女學生最良の課外敎師。

毎月一回五日發行▲年刊十二册▲增刊年四回▲菊判、二百八頁▲習畫帖八頁▲光澤寫眞版四頁、普通四枚挿入

正價（●一册貳拾錢 郵稅貳錢）前金（●四册金七拾五錢●八册金壹圓四拾五錢●十六册金貳圓八拾錢▲外要郵稅）

少年世界

◎少年世界　國定敎科書に連絡し、記事口繪共遙に同種他雜誌に超絕す。

毎月一回一日發行▲年刊十二册▲增刊年四回▲菊判百三十六頁▲原色寫眞版標本畫、彩色毛筆畫各一枚▲光澤寫眞版四頁挿入

正價（●一册拾錢 郵稅一錢五厘）前金（●四册金參拾八錢●八册金七拾五錢●拾六册金壹圓四拾錢▲外要郵稅）

女（發付の二）

刊行十四大雜誌

發行

少女世界

◎少女世界　少女に最も適應せる諸學科を網羅し家庭に於ける子女教育に裨補せんことを期せり。

毎月一回一日發行▲年刊十二册▲增刊年四回▲菊判百十二頁▲石版極彩色刷口畫二枚▲光澤寫眞版四頁挿入

正價（●一册拾錢 郵税一錢五厘）前金（●四册金參拾八錢●八册金七拾五錢●十六册金壹圓四拾錢▲外要郵税）

幼年畫報

◎幼年畫報　稚兒幼童唯一の良友、繪畫寫眞等善盡し美極む記事は是れ小波山人獨得の壇場

毎月一回五日發行▲年刊十二册▲外に臨時增刊發行▲菊判美麗畫本▲石版極彩色刷繪畫十六頁▲色刷木版寫眞刷込十六頁

正價（●一册金拾錢 郵税五厘）前金（●三册金貳拾九錢●六册金五拾六錢●十二册壹年分金貳圓拾錢▲外要郵税）

中學世界

◎中學世界　中學程度各種學生の必讀誌、學生の需むる處盡く備はれり。

毎月一回十日發行▲年刊十二册●增刊年四回▲菊判、紙數二百四十頁▲習畫帖五頁▲寫眞版光澤紙四頁、普通四枚挿入

正價（●一册貳拾錢 郵税貳錢）前金（●四册金七拾五錢●八册金壹圓四拾五錢●十六册金貳圓八拾錢▲外要郵税）

文章世界

◎文章世界　人間一日も文章なかるべからず、本誌各種の文體を表裏縱横に說き實益に資せり。

毎月一回十五日發行▲外臨時增刊▲菊判紙數二百四十頁▲水彩畫（石版彩色刷）二枚▲光澤紙寫眞版四頁▲普通四頁挿入

正價（●一册貳拾錢 郵税貳錢）前金（●四册金七拾五錢●八册金壹圓四拾五錢●十六册金貳圓八拾錢▲外要郵税）

理科講義錄

◎理科講義錄　中學教育程度に由り課外研究の資料に備ふる目的を以て講述せり。

毎月一回十五日發行▲年刊十二册▲菊判紙數百三十六頁▲毎編寫眞版及密畫數多挿入

正價（●一册貳拾錢 郵税貳錢）前金（六册金壹圓拾錢●十二册金貳圓拾錢▲外要郵税）

數學世界

◎數學世界　算術代數幾何の三種に分ち本邦無二の數學雜誌也。

毎月一回一日發行▲菊判紙數一册八十頁以上▲全部十二册宛……算術 代數學 幾何學（三科共年刊十二册宛）▲各科共一ケ年卒業●一册正價拾錢▲郵税壹錢

前金（三册（三ケ月分）貳拾九錢宛●六册五拾錢 一ケ年分十二册一圓拾錢宛▲外要郵税）

圖書世界

◎圖書世界　出版界の時報にして博文館出版圖書の機關誌たり。文運の大勢亦以て窺ふに足る。

毎月一回定期發行▲外に臨時增刊發行▲大判（縱一尺三寸横九寸）紙數十六頁▲外に臨時圖書總目錄附載

正價（●一册參錢 郵税五厘）前金（●六部 金拾六錢●十二部 金參拾錢▲外要郵税）

史傳地理書類



▲歷史傳記書類

● **大日本通史**　東京帝國大學教授文學博士萩野由之君編（全三册…中下卷近刊）
上卷　大判一〇〇〇頁　脊皮上綴　正價壹圓五拾錢　小包料拾五錢

● **大日本歷史**　法學博士文學士有賀長雄君著
正價　小包料

● **帝國史略**　法學博士有賀長雄君著
全一册　大判一〇三〇頁　脊皮上綴　正價壹圓參拾錢　小包料拾五錢

● **新撰日本外史**　落合直文君　池邊義象君共著（畫伯數名密畫挿入）
全一册　大判一一〇二頁　脊皮上綴　正價壹圓貳拾錢　小包料拾五錢

● **中等教育日本歷史**　文學博士萩野由之君著　沿革地圖挿入（文部省檢定濟）
上下二册　中判六七五頁　脊皮上綴　正價各五拾五錢　郵稅各八錢

● **日本歷史**　文學士木寺柳次郎君著
全一册　大判三七六頁　洋並綴　正價四拾錢　郵稅八錢
▲特製本　洋布上綴　正價五拾五錢　郵稅拾錢

● **新撰大日本帝國史**　松井伯軒君著
全一册　大判五六四頁　洋並綴　正價四拾錢　郵稅拾貳錢

● **新撰日本小歷史**　文學博士栗田寛君校閲　增田于信君著（西洋木版畫挿入）
全一册　大判二一七頁　洋並綴　正價拾五錢　郵稅六錢

● **通俗日本歷史**　足立栗園君著
全一册　大判三三四頁　洋並綴　正價貳拾五錢　郵稅八錢

● **通俗明治歷史**　坪谷善四郎君著
全一册　大判三五〇頁　洋並綴　正價貳拾五錢　郵稅八錢

● **通俗德川十五代史**　岸上操君著
全一册　大判三三四頁　洋裝並綴　正價貳拾錢　郵稅八錢

● **增補西南戰史**　川崎紫山君著
全一册　大判一三五〇頁　洋布上綴　賣價八拾錢　小包料貳拾錢

● **平壤包圍攻擊**　陸軍大將野津道貫君序　藤野房次郎君著（寫眞版挿入）
全一册　大判七八二頁　洋布上綴　正價七拾錢　小包料拾五錢

● **黃海大海戰**　海軍大將伊東祐亨君題辭　平田勝馬君著（寫眞版挿入）
全一册　大判八三八頁　洋布上綴　正價九拾錢　小包料貳拾錢

● **東洋通史**　文學士久保天隨君著　全部十二册割引金五圓　小包料五拾錢
全部十二册和裝　正價一册五拾錢
大判一册三百頁　郵稅一册八錢

- ●第一卷より第二卷……………漢族生育時代
三皇五帝の世より楚漢の角逐迄
- ●第三卷より第六卷……………漢族繁榮時代
前漢の世より唐の中世迄
- ●第七卷より第九卷……………蒙古優勢時代
唐の末世より朱元間の人文迄
- ●第拾卷より第拾貳卷……………歐人東漸時代
明の初世より最近東洋事局迄

●日露戰史　從軍知名記者共編　全部十六册（大判三二〇〇頁）
▲全部割引金四圓貳拾錢　郵稅四拾錢
正價一册參拾錢
郵稅一册參錢宛

●第一卷　日露の危局と戰役
●第二卷　初期の海戰
●第三卷　第一軍初期の活動
●第四卷　第二軍の前進
●第五卷　海軍作戰の成功
●第六卷　大孤山上陸軍及第四軍初期の活動
●第七卷　第一軍次期の活動
●第八卷　遼陽の總攻擊
●第九卷　第三軍初期の活動
●第十卷　沙河の大會戰
●第十一卷　旅順要塞攻陷戰
●第十二卷　奉天大會戰前記
●第十三卷　北征陸海軍戰記
●第十四卷　日本海大海戰
●第十五卷　奉天の大會戰後記
●第十六卷　戰時の外交
戰時の後方勤務

●東洋歷史　文學士木寺柳次郎君著　中等教育　沿革地圖及密畫挿入（文部省檢定濟）
全一册背皮上綴　大判二八八頁　正價八拾錢　郵稅拾貳錢

●東洋歷史　文學士幸田成友君著
全一册洋並綴　大判三二四頁　正價四拾錢　郵稅八錢
▲特製本　洋布上綴　正價五拾五錢　郵稅拾錢

●羅馬史論　以太利馬加威里著　日本男爵林董君譯
全一册洋布上綴　大判六六〇頁　正價壹圓八拾錢　小包料拾五錢

●現代露西亞　法學士須崎芳三郎君著
全一册洋並綴　大判四二六頁　正價四拾錢　郵稅八錢
▲特製本　洋布上綴　正價五拾五錢　郵稅拾錢

●露國侵略史　法學士須崎芳三郎君著　銅版地圖挿入
全一册洋並綴　大判二七八頁　正價四拾錢　郵稅八錢
▲特製本　洋布上綴　正價五拾五錢　郵稅拾錢

●西洋歷史　文學士木寺柳次郎君著　中等教育　沿革地圖及密畫挿入（文部省檢定濟）
全一册背皮上綴　大判二六六頁　正價七拾錢　郵稅拾貳錢

●西洋歷史　文學士吉國藤吉君著
全一册洋並綴　大判三四八頁　正價四拾錢　郵稅八錢
▲特製本　洋布上綴　正價五拾五錢　郵稅拾錢

●世界史　上卷　文學士（史學專攻）阪本健一君著
洋裝背皮上綴　大判一〇八〇頁　正價壹圓六拾錢　小包料拾五錢

●同　下卷　同
洋裝背皮上綴　大判一四五四頁　正價貳圓　小包料貳拾錢

●通俗世界歷史　長谷川天溪君著
全一册洋並綴　大判三三四頁　正價貳拾五錢　郵稅八錢

●日本歷史寶鑑　文學士久保天隨君著
全一册洋布上綴　大判一六〇〇頁　正價參圓　郵稅參拾錢

●日本歷史評林　文學博士萩野由之君譯述
全一册洋布上綴　大判一九一二頁　正價壹圓八拾錢　小包料貳拾錢

●印度文明史　文學士常盤大定君著
全一册洋並綴　大判三四七頁　正價四拾錢　郵稅八錢
▲特製本　洋布上綴　正價五拾五錢　郵稅拾錢

●世界文明史　文學博士高山林次郎君著
全一册洋並綴　大判三七六頁　正價四拾錢　郵稅八錢
▲特製本　洋布上綴　正價五拾五錢　郵稅拾錢

●日本文明史　文學士大町桂月君著
全一册洋並綴　大判三〇二頁　正價四拾錢　郵稅八錢
▲特製本　洋布上綴　正價五拾五錢　郵稅拾錢

●支邦文明史　文學士白河次郎君　國府種德君共著
全一册洋並綴　大判三二六頁　正價四拾錢　郵稅八錢
▲特製本　洋布上綴　正價五拾五錢　郵稅拾錢

●朝鮮史　文學士久保天隨君著
全一册洋裝　大判三三六頁　正價四拾錢　郵稅八錢
▲特製本　洋布上綴　正價五拾五錢　郵稅拾錢

●朝鮮開化史　國友重章閱　恒屋盛服君著（地圖挿入）
全一册洋布上綴　大判五六六頁、正價壹圓　郵稅拾四錢

●日本風俗史　文學士阪本健一君著（密畫挿入）
全一册洋並綴　大判三四二頁　正價四拾錢　郵稅八錢
▲特製本　洋布上綴　正價五拾五錢　郵稅拾錢

女（後付の五）

重田勘次郎君著

●世界風俗志（各國風俗寫眞廿三個入）

全一冊 中判 四六三頁 洋並綴 正價五拾錢 郵税八錢

法學士山内正瞭君著

●世界殖民史

全一冊 中判 三〇四頁 洋並綴 正價四拾錢 郵税八錢

▲特製本 洋布上綴 正價五拾五錢 郵税拾錢

文學博士萩野由之君編述 中等教育

●日本歴史要解

全一冊 中判 四二四頁 洋布上綴 正價五拾錢 郵税六錢

法學博士阪谷芳郎君編

●青淵先生六十年史

▲一名近世實業發達史

全二冊 大判 二二二〇頁 洋布上綴 賣價壹圓五拾錢 小包料参拾錢

文學博士前田慧雲君述

●親鸞聖人

全一冊 大判 一二五頁 大和綴 正價貳拾五錢 郵税四錢

太陽評論記者 鳥谷部春汀君著

●明治人物小觀

全一冊 中判 四二八頁 紙皮上綴 正價参拾八錢 郵税八錢

長田秋濤君著

●世界富豪の表裏

全一冊 大判 二六二頁 洋並綴 正價参拾五錢 郵税六錢

太陽評論記者 鳥谷部春汀君著

●明治人物評論

全一冊 小判 四二三頁 紙皮上綴 正價貳拾五錢 郵税六錢

同

●續明治人物評論

全一冊 小判 四四八頁 紙皮上綴 正價参拾錢 郵税六錢

松井柏軒君著

●上杉謙信

全一冊 小判 一三四頁 紙皮上綴 正價貳拾錢 郵税四錢

海軍省教育本部大島貞益君譯 英國水師提督

●子ルソン傳

全一冊 大判 一三二〇頁 洋布上綴 正價壹圓六拾錢 小送料拾五錢

慶應義塾教授菅絲隆君著

●カーギー

全一冊 中判 一五四頁 紙上皮綴 正價貳拾五錢 郵税四錢

▲地理紀行書類

理學士山崎直方君 理學士佐藤傳藏君共著

●大日本地誌

全部拾冊大判背皮上綴 總紙數約一千頁

全部を十部に分ち、其地形地勢より説き起して、歴史上の沿革、産業の盛衰、行政、司法、宗教、教育、軍事、交通、等に至る迄、精査細述、漏す所なし、蓋し本邦地理書中の巨擘たるを疑はず。

第壹卷＝關東

相模、武藏、安房、上總、下總、常陸、上野、下野、伊豆七島及小笠原島

都市彩色地圖拾葉 寫眞銅版貳百餘圖

紙數九百三十頁 ◉正價貳圓五拾錢 ◉小包送料拾五錢

第貳卷＝奥羽

盤城、岩代、陸前、陸中、陸奥、羽前、羽後の七ヶ國

石版彩色地圖八葉 寫眞銅版百七十圖

紙數九百六十頁 ◉正價貳圓五拾錢 ◉小包送料拾五錢

第三卷＝中部

尾張、三河、遠江、駿河、甲斐、伊豆、美濃、飛驒、信濃、

石版彩色地圖九葉 寫眞銅版二百圖

紙數千五十餘頁 ◉正價貳圓五拾錢 ◉小包送料貳拾錢

第四卷＝近畿

山城、大和、河內、和泉、攝津、伊賀、伊勢、近江、丹波、丹後、播磨、紀伊、淡路、

石版彩色地圖拾葉 寫眞銅版九拾四圖

紙數千三百餘頁 ◉正價參圓 ◉小包送料貳拾錢

第五卷 北陸

若狹、越前、加賀、能登、越中、越後、佐渡、
都市彩色地圖四葉 寫眞銅版百六十圖 紙數七百五十頁
◉正價貳圓五拾錢 ◉小包送料拾五錢

理學士佐藤傳藏君著
● **日本新地理** 全一册 大判 三一四頁 洋並綴 正價四拾錢 郵稅八錢
▲特製本 洋布上綴 正價五拾五錢 郵稅拾錢

大和田建樹君著
● **通俗日本地理** 全一册 大判 二九六頁 洋並綴 正價參拾錢 郵稅八錢

野崎左文君 田山花袋君 島田定知君 藤本藤隆君共著
● **日本名勝地誌** 全十二册 中判 五一〇〇頁 洋並綴 正價一册參拾錢 郵稅一册六錢

八木奘三郎君著（關東の部）
● 學生必携 **修學旅行案内** 全一册洋布上綴 三六判 六九二頁 正價四拾五錢 郵稅八錢

中村士德君 大久保千濤君共著
● **本邦地理詳說** 全一册洋布上綴 大判 七〇〇頁 正價壹圓八拾錢 小包料拾五錢

理學士佐藤傳藏君著（上卷日本ノ部）（下卷外國ノ部）
● 中等教育 **地理學教科書** 全二册脊皮上綴 大判 四二四頁 正價一册五拾錢 郵稅一册八錢

理學士佐藤傳藏君著
● **萬國新地理** 全一册 大判 三三八頁 洋並綴 正價四拾錢 郵稅八錢
▲特製本 洋布上綴 正價五拾五錢 郵稅拾錢

澁江保君著
● **通俗世界地理** 全一册 大判 三四〇頁 洋並綴 正價參拾錢 郵稅八錢

理學士吉田弟彦君著
● **地文學** 全一册 大判 三二八頁 洋並綴 正價四拾錢 郵稅拾錢
▲特製本 洋布上綴 正價五拾五錢 郵稅拾錢

法學士山本信博君著
● **政治地理學** 全一册 大判 三三〇頁 洋並綴 正價四拾錢 郵稅八錢
▲特製本 洋布上綴 正價五拾五錢 郵稅拾錢

理學士佐藤傳藏君著
● **地質學** 全一册 大判 三三六頁 洋並綴 正價四拾錢 郵稅八錢
▲特製本 洋布上綴 正價五拾五錢 郵稅拾錢

文學博士文學士原秀四郎君著
● **日本國史地圖** 全一册洋布上綴 大判本文一九二頁 正價壹圓七拾錢 郵稅拾四錢
▲大判着色地圖二十四枚▲細圖百餘枚挿入（五二共進會銀牌受領）

麻生鐵三君著
● 全國鐵道線路名所古蹟明細 **旅行案内地圖** 麻生式新案折本 正價四拾五錢 郵稅四錢

理學士佐藤傳藏君著（統計表及寫眞版三十二葉入）
● 中等教育 **日本地圖** 全一册 洋上綴 大判 七〇頁 正價四拾五錢 郵稅八錢

理學士佐藤傳藏君著（統計表及寫眞版四十葉挿入）
● 中等教育 **萬國地圖** 全一册 洋上綴 大判 八〇頁 正價六拾錢 郵稅八錢

理學士吉田弟彦君著 大判縱一尺二寸橫八寸八分附錄重要統計四十圖
● 改訂 **日本商業地圖** 全一册 洋上綴 大地圖十一圖 正價壹圓 小包料拾五錢

法學士勝部國臣君著
● **淸國商業地理** 全一册 大判 三五八頁 洋並綴 正價四拾錢 郵稅八錢
▲特製本 洋布上綴 正價五拾五錢 郵稅拾錢

文學士田淵友彦君著
● **韓國新地理** 全一册 大判 三五〇頁 洋並綴 正價四拾錢 郵稅八錢
▲特製本 洋布上綴 正價五拾五錢 郵稅拾錢

松永聽劍君編纂
● **樺太及勘察加** 全一册 大判 三六〇頁 洋並綴 正價五拾錢 郵稅八錢

河口慧海君著（石版地圖及寫眞銅版挿入）
● 世界の秘密國 **西藏旅行記** 全二册洋布上綴 大判 八九〇頁 正價一册壹圓 郵稅一册拾貳錢

女（後付の七）

博文館編輯局主幹坪谷善四郎君著
● 日本漫遊案内（上下）全二冊 洋布上製頗美本 中判一三〇〇頁 正價一册壹圓 郵税一册拾錢
共）府縣廳所在地銅版圖二十餘頁、風景寫眞八十餘圖、全國兩半部彩色刷大地圖添附

野崎左文君 田山花袋君共著
● 改訂増補 漫遊案内 全一册洋布上製 小判六二六頁 正價五拾錢 郵税八錢

大橋乙羽君著（寫眞版二十八葉挿入）
● 増補 千山萬水 全一册洋布上製 小判七〇二頁 正價五拾錢 郵税拾錢

大橋乙羽君著（寫眞版二十八葉挿入）
● 續千山萬水 全一册洋布上製 小判六五〇頁 正價五拾錢 郵税拾錢

文學士久保天隨君著
● 檜木笠 全一册紙皮上製 小判五〇〇頁 正價貳拾五錢 郵税六錢

大町桂月君著（寫眞版八葉挿入）
● 一蓑一笠 全一册紙皮上製 小判三七六頁 正價參拾錢 郵税六錢

大橋乙羽君著（彩色美麗寫眞版及木版密畫挿入）
● 歐山米水 全一册特別上製 大判一七〇頁 正價壹圓五拾錢 郵税八錢

大橋乙羽君著（寫眞版挿入）
● 歐米小観 全一册洋布上製 小判二六二頁 正價四拾錢 郵税四錢

鎌田榮吉君著（寫眞版挿入）
● 歐米漫遊雜記 全一册紙皮上製 小判四二四頁 正價四拾錢 郵税六錢

水田榮雄君著（寫眞版挿入）
● 大英國漫遊實記 全一册紙皮上製 小判七〇〇頁 正價七拾錢 郵税拾錢

松井廣吉君著（寫眞版十六葉挿入）
● 米國漫遊雜記 全一册紙皮上製 小判二八六頁 正價參拾八錢 郵税六錢

安部磯雄君著
● 北米の新日本 全一册洋並製 中判二二三頁 正價參拾五錢 郵税四錢

飯島榮太郎君著（寫眞版挿入）
● 米國渡航案内 全一册紙皮上製 小判三七二頁 正價四拾錢 郵税六錢

木村芳五郎君 井上胤文君共著
● 最新正確 布哇渡航案内 全一册洋並製 大判二三六頁 正價參拾八錢 郵税六錢

四國寺侯爵題辭 香川悅次君著
● 支那旅行案内 全一册洋並製 三六判六〇〇頁 正價四拾錢 郵税八錢

森次太郎君著
● 歐米書生旅行 全一册洋並製 三六判三二〇頁 正價參拾五錢 郵税六錢

石倉重繼君著（寫眞銅版三十四葉挿入）
● 本派本願寺名所圖會 全一册洋並製 大判三九四頁 正價六拾錢 郵税拾錢

石倉重繼君著（石版密畫及寫眞銅版十六葉入）
● 大谷派本願寺名所圖會 全一册洋並製 大判二二八頁 正價四拾五錢 郵税八錢

石倉重繼君著（寫眞銅版十六葉挿入）
● 佛光寺名所圖會 全一册洋並製 大判一〇八頁 正價貳拾五錢 郵税四錢

石倉重繼君著（寫眞銅版二十二葉挿入）
● 日蓮宗各本山名所圖會 全一册洋並製 大判三五六頁 正價五拾錢 郵税拾錢

石倉翠葉君著（寫眞銅版廿三葉挿入）
● 成田山名所圖會 全一册洋並製 大判一五八頁 正價參拾五錢 郵税六錢

石倉翠葉君著（寫眞銅版數多挿入）
● 善光寺名所圖會 全一册洋並製 大判二七六頁 正價四拾五錢 郵税八錢

高野山座主原心猛大僧正題辭 石倉翠葉君著（寫眞銅版三十餘枚挿入）
● 高野山名所圖會 全一册洋並製 大判三四二頁 正價六拾錢 郵税拾錢

石倉翠葉君著（寫眞銅版二十四葉挿入）
● 日光名所圖會 全一册洋並製 大判五一〇頁 正價六拾五錢 郵税拾貳錢

女（後付の八）

文學及作文書類



文學博士高山林次郎君著　姉崎博士　齋藤學士共輯（全部六卷）

- ●樗牛全集 第一卷 **美學及美術史**　全一冊洋布上綴　大判 五五二頁　正價壹圓五拾錢　小包料拾五錢
- 同 ●樗牛全集 第二卷 **文藝及史傳** 上　全一冊洋布上綴　大判 一〇〇〇頁　正價壹圓五拾錢　小包料貳拾錢
- 同 ●樗牛全集 第三卷 **文藝及史傳** 下　全一冊洋布上綴　大判 七七〇頁　正價壹圓五拾錢　小包料拾五錢
- 同 ●樗牛全集 第四卷 **時論及思索**　全一冊洋布上綴　大判 一一一八頁　正價壹圓五拾錢　小包料貳拾錢
- 同 ●樗牛全集 第五卷 **想華及消息**　全一冊洋布上綴　大判 六七〇頁　正價壹圓五拾錢　小包料拾五錢

文學士太田善男君編
●**文學概論**　全一冊洋並綴　大判 三〇〇頁　正價四拾錢　郵税八錢
▲特製本　洋布上綴　正價五拾五錢　郵税拾錢

文學士林森太郎君著
●**日本文學史**　全一冊洋並綴　大判 三五二頁　正價四拾錢　郵税八錢
▲特製本　洋布上綴　正價五拾五錢　郵税拾錢

文學士久保天隨君著
●**日本儒學史**　全一冊洋並綴　大判 二九二頁　正價四拾錢　郵税八錢
▲特製本　洋布上綴　正價五拾五錢　郵税拾錢

文學士笹川臨風君著
●**支那文學史**　全一冊洋並綴　大判 三二二頁　正價四拾錢　郵税八錢
▲特製本　洋布上綴　正價五拾五錢　郵税拾錢

奥村信太郎君著
●**日本文學汎論**　全一冊洋並綴　大判 三二六頁　正價貳拾錢　郵税八錢

文學士小川銀次郎君編
●**世界美術史** 上下　全二冊洋並綴　大判 六四八頁　正價一冊四拾錢　郵税一冊八錢
洋布上綴　正價一冊五拾五錢　郵税一冊拾錢

文學士小川銀次郎君著
●**近世美術史**　全一冊洋並綴　大判 三二八頁　正價四拾錢　郵税八錢
▲特製本　洋布上綴　正價五拾五錢　郵税一冊拾錢

文學博士高山林次郎君著
●**近世美學**　全一冊洋並綴　大判 三二八頁　正價四拾錢　郵税八錢
▲特製本　洋布上綴　正價五拾五錢　郵税拾錢

文學士石倉小三郎君著
●**西洋音樂史**　全一冊洋並綴　大判 三一五頁　正價四拾錢　郵税八錢
▲特製本　洋布上綴　正價五拾五錢　郵税拾錢

文學士白河次郎君　國府犀東君共著
●**支那學術史綱**　全一冊洋並綴　大判 一三八頁　正價拾五錢　郵税四錢

文學士有馬祐政君著
●**藝術論**　全一冊洋並綴　大判 三二〇頁　正價四拾錢　郵税八錢
▲特製本　洋布上綴　正價五拾五錢　郵税拾錢

太陽記者長谷川天溪君著
●**文學訓**　全一冊洋並綴　小判 三五〇頁　正價金參拾錢　郵税六錢

- ●時代管見　文學博士高山林次郎君著　全一册紙皮上綴　小判五二〇頁　正價參拾錢　郵稅六錢
- ●文藝評論　文學博士高山林次郎君著　全一册紙皮上綴　小判四八〇頁　正價參拾錢　郵稅六錢
- ●文藝小品　内田不知庵君著　全一册紙皮上綴　小判六一〇頁　賣價貳拾五錢　郵稅六錢
- ●龍吹鶴語　國府犀東君著　全一册紙皮上綴　小判二六四頁　賣價拾五錢　郵稅四錢
- ●大絃小絃　文學士大町桂月君著　全一册紙皮上綴　小判四二〇頁　正價參拾錢　郵稅六錢
- ●みだれ箱　齋藤綠雨君著　全一册紙皮上綴　小判三九八頁　正價貳拾八錢　郵稅四錢
- ●あられ酒　齋藤綠雨君著　全一册紙皮上綴　小判四六五頁　正價貳拾五錢　郵稅六錢
- ●うもれ木　與謝野鐵幹君作　全一册紙皮上綴　小判二六八頁　正價貳拾五錢　郵稅四錢
- ●雅三俗四　石井研堂君著　全一册紙皮上綴　小判二〇〇頁　賣價拾五錢　郵稅六錢
- ●古人今人孰是孰非　風雲月露大珠小珠　小文章　紫山川崎三郎君著　全一册紙皮上綴　小判三〇四頁　賣價拾錢　郵稅四錢
- ●月の光　谷信次君著　全一册紙皮上綴　小判二八〇頁　正價拾八錢　郵稅四錢
- ●新文林　大和田建樹君著　全一册洋並綴　中判四三二頁　正價貳拾四錢　郵稅六錢
- ●雨絲風片　文學士笹川臨風君著　全一册紙皮上綴　小判二三六頁　正價拾五錢　郵稅四錢

- ●渓韻松聲　呦鹿庵主人著　全一册紙皮上綴　小判二八〇頁　正價拾錢　郵稅四錢
- ●透谷全集　北村門太郎君遺稿星野、島崎、平田、戸川四君共纂　全一册洋並綴　中判八六〇頁　正價壹圓　郵稅拾五錢　▲洋布特製正價壹圓參拾五錢小包料拾五錢
- ●少年必讀　日本文庫　内藤耻叟君校訂　全十二册洋装中判　正價｛一册金貳拾五錢郵稅一册金六錢　｛五册以上八分引〇十册以上壹割貳分引
- ●近古文藝　温知叢書　内藤耻叟君　小宮山綏介君標註　全十二册洋装中判　正價｛一册金貳拾五錢郵稅一册金六錢　｛五册以上八分引〇十册以上壹割貳分引
- ●通俗作文全書　文章組立法　大和田建樹君著　全一册洋並綴　中判三二〇頁　正價參拾五錢　郵稅六錢
- ●通俗作文全書　書簡文組立法　大和田建樹君著　全一册洋並綴　中判三二〇頁　正價參拾五錢　郵稅六錢
- ●通俗作文全書　美文作法　田山花袋君著　全一册洋並綴　中判三二〇頁　正價參拾五錢　郵稅六錢
- ●通俗作文全書　商業作文法　天城安政君著　全一册洋並綴　中判三二〇頁　正價參拾五錢　郵稅六錢
- ●中等學生作文寶鑑　内山幻堂君著　全一册洋布上綴　中判六二〇頁　正價七拾五錢　郵稅拾貳錢

女（後付の一〇）

文學博士重野安繹君序 石崎篁園君編述 ●國民作文軌範 全一册紙皮上綴 三六判五六〇頁 正價四拾錢 郵稅六錢

大和田建樹君著 ●袖珍實用作文寶典 全一册洋布上綴 小判一〇二〇頁 正價六拾五錢 郵稅六錢

百束持中君編 ●作文熟語字典 全一册洋布上綴 小判九八〇頁 正價八拾錢 郵稅拾錢

文學博士萩野由之君著 ●中等教育作文法 全一册洋並綴 中判五〇〇頁 正價參拾錢 郵稅六錢

宮川鐵次郎君著 ●通俗文章學 全一册洋並綴 大判三〇〇頁 正價參拾錢 郵稅八錢

上村左川君編 ●記事論說文範（美麗寫眞版挿入） 全一册洋並綴 大判二四四頁 正價貳拾五錢 郵稅六錢

華族女學校學監下田歌子女史著 ●女子作文の栞 全一册和並綴 大判二三六頁 正價參拾五錢 郵稅八錢

岸上操君編 ●作文自在（彩色木版寫眞銅版挿入） 全一册洋並綴 大判二七四頁 正價貳拾五錢 郵稅六錢

大和田建樹君著 ●作文組立法 全一册洋並綴 大判一六九頁 正價拾五錢 郵稅六錢

池田一倒君著 ●今體作文六大秘訣 全一册紙皮上綴 小判三二二頁 正價貳拾五錢 郵稅六錢

堀江秀雄君著 ●學生必携作文資料 全一册洋並綴 小判二一六頁 正價拾五錢 郵稅四錢

井上敏夫君著 ●國語漢語類語作文錦囊 全一册紙皮上綴 小判四三〇頁 正價參拾五錢 郵稅六錢

文學士武島又次郎君著 ●修辭學 全一册洋並綴 大判三〇六頁 正價四拾錢 郵稅八錢 ▲特製本 洋布上綴 正價五拾五錢 郵稅拾錢

博文館編輯局編纂 ●祝辭演說法（彩色木版寫眞版挿入） 全一册洋並綴 大判二五〇頁 正價貳拾五錢 郵稅六錢

中島氣崢君著 ●演說活法 附 演說法名家談 全一册洋布上綴 小判二二六頁 正價參拾錢 郵稅四錢

宮田修君著 ●通俗言語學 全一册洋並綴 大判三五〇頁 正價貳拾五錢 郵稅八錢

文學博士金澤庄三郎君、後藤朝太郎君共譯 ●言語學 上下 全二册洋並綴 大判 頁 正價一册四拾錢 郵稅一册八錢 ▲特製本 洋布上綴 正價一册五拾五錢 郵稅一册拾錢

石橋思案君校 星野参人君編 ●紅葉書翰抄 全一册洋並綴 大判橫綴 一三九頁 正價五拾錢 郵稅六錢

幻堂內山正如君著 ●實用普通作文寶鑑 全一册洋布上綴 中判五〇〇頁 正價七拾錢 郵稅拾四錢

神戸高等商業學校敎授中川靜君著 ●書翰文研究 全一册紙皮上綴 中判長形 四三三頁 正價六拾五錢 郵稅八錢

中村秋香君著 ●書翰文大成 全一册洋布上綴 大判三四八頁 正價壹圓 小包料拾五錢 ▲和裝箱入 正價壹圓 小包料拾六錢

內山幻堂君著 ●明治書翰文大全（寫眞版八葉挿入） 全一册洋並綴 大判四六〇頁 正價五拾錢 郵稅拾錢

大和田建樹君著 ●書簡組立法 全一册洋並綴 大判一六〇頁 正價拾五錢 郵稅六錢

樋口一葉女史著 ●通俗書翰文（彩色木版寫眞版挿入） 全一册洋並綴 大判二四六頁 正價貳拾五錢 郵稅六錢

物集文學士（長文學士共編） ●散文韻文美文辭彙 全一册洋布上綴 三六判九七〇頁 正價壹圓貳拾錢 郵稅拾錢

國文和歌書類

第二高等學校教授岡澤鉦次郎君著
● 新式 日本文典原理 一名理論的日本文典
全一冊洋布上綴 大判 頁 正價 郵稅

文學士岡田正美君著
● 解說批評 日本文典
上下二冊洋並綴 大判六〇八頁 正價各四拾錢 郵稅各八錢
▲特製本 洋布上綴 正價一冊五拾五錢 郵稅一冊拾錢

落合直文君著
● 中等教育 日本文典（文部省檢定濟）
全一冊脊皮上綴 中判四八八頁 正價六拾錢 郵稅拾錢

落合直文君著
● 中等教育 文法教科書
全一冊脊皮上綴 大判一二六頁 正價四拾五錢 郵稅六錢

學習院女子部長下田歌子女史著
● 女子普通文典
全一冊和並綴 大判二四六頁 正價參拾五錢 郵稅八錢

文學士鈴木暢幸君著
● 日本口語文典
▲洋布特製 正價五拾五錢 郵稅拾錢
全一冊洋並綴 大判三一六頁 正價四拾錢 郵稅八錢

內藤耻叟君校閱 大宮宗司君校註
● 校註神皇正統記
全一冊洋並綴 大判二五八頁 正價貳拾五錢 郵稅六錢

中村秋香君校訂
● 吉野拾遺詳解
全一冊洋並綴 大判一五二頁 正價貳拾五錢 郵稅四錢

大和田建樹君删定
● 中等教育 删定徒然草（文部省檢定濟）
全一冊洋並綴 大判一一二頁 正價拾八錢 郵稅四錢

佐々木信綱君校註
● 校註徒然草
全一冊洋並綴 大判二〇六頁 正價貳拾五錢 郵稅四錢

文學博士萩野由之君校註
● 標註枕草子
全二冊洋並綴 大判五三四頁 正價一冊參拾錢 郵稅一冊六錢

佐々木信綱君校註
● 校註竹取物語
全一冊洋並綴 大判七六頁 正價拾貳錢 郵稅貳錢

同
● 校註土佐日記
全一冊洋並綴 大判五〇頁 正價拾錢 郵稅貳錢

同
● 校註方丈記
全一冊洋並綴 大判六〇頁 正價八錢 郵稅貳錢

同
● 校註伊勢物語
全一冊洋並綴 大判一〇六頁 正價拾貳錢 郵稅四錢

同
● 校註更科日記
全一冊洋並綴 大判九四頁 正價拾貳錢 郵稅四錢

文學博士萩野由之君 落合直文君 池邊義象君 校註
● 文學全書
全部廿四冊 中判一冊約四百頁 正價一冊廿五錢 郵稅參錢宛

● 第一編 ○竹取物語 ○伊勢物語 ○住吉物語 ○徒然草 ○紫式部日記
● 第二編 ○土佐日記 ○枕草紙 ○更科日記
● 第三編 ○方丈記 ○十六夜日記 ○落窪物語 ○辨內侍日記
● 第四編 ○とりかへばや物語 ○堤中納言物語 ○四季物語
● 第五編 ○中務內侍日記 ○蜻蛉日記 ○讃岐典侍日記 ○和泉式部日記
● 第六編 ○濱松中納言物語 ○大和物語 ○唐物語

女（後付の一二）

●第七編
○宇治拾遺物語
○多武峰少將物語

●自第八編至第十二編
○源氏物語五册（に分本）

●自第十三編至第十五編
○榮花物語上、中、下三册

●自第十六編至第十八編
○太平記上、中、下三册

●第十九編
○保元物語
○平治物語
○秋夜長物語
○鵯鶴合戰物語

●第二十編
○平家物語

●第廿一編
○古今著聞集

●第廿二編
○公事根源

●第廿三編
○十訓抄
○水鏡

●第廿四編
○大鏡
○增鏡

大和田建樹君選
●古文讀本　全六册和 並綴 大判七五六枚 正價壹圓六拾錢 郵稅各四錢
▲正價一卷ヨリ五卷迄貳拾五錢 六卷參拾五錢

國學院編纂
●名文評釋　全一册洋 並綴 大判四五二頁 正價五拾錢 郵稅拾錢

落合直文君編 中等教育
●國文軌範　全一册洋 並綴 中判三八〇頁 正價貳拾五錢 郵稅六錢

大和田建樹君著
●新撰假名遣活法　全一册洋 並綴 小判一七〇頁 正價拾五錢 郵稅貳錢

大和田建樹君著
●歌まなび　全一册洋布上綴 中判一〇三八頁 正價壹圓五拾錢 小包料拾五錢

佐々木信綱君著
●增補詠歌自在　全一册洋布上綴 中判七八〇頁 正價壹圓 郵稅拾貳錢

落合直文君著
●新撰歌典　全一册洋 並綴 中判六一〇頁 正價四拾錢 郵稅八錢

華族女學校學監下田歌子女史著
●詠歌の栞　全一册和 並綴 大判二一〇頁 正價參拾五錢 郵稅八錢

佐々木信綱君著
●詠歌辭典　全一册洋布上綴 小判一三七六頁 正價七拾五錢 郵稅八錢

宮澤春文君著
●作歌自在（彩色木版寫眞版挿入）　全一册洋 並綴 大判二四〇頁 正價貳拾五錢 郵稅六錢

文學士武島羽衣君著
●霓裳歌話　全一册紙皮上綴 小判三四〇頁 正價貳拾錢 郵稅六錢

佐々木信綱君校註
●賀茂眞淵翁全集　全二册洋 並綴 中判一〇〇〇頁 正價一册卅五錢 郵稅一册八錢

佐々木信綱君校註
●本居宣長翁全集　全一册洋 並綴 中判五四二頁 正價參拾五錢 郵稅八錢

佐々木信綱君校註
●香川景樹翁全集　全一册洋 並綴 中判一〇一三頁 正價一册卅五錢 郵稅一册八錢

佐々木信綱君校註
●小澤蘆庵翁全集　全一册洋 並綴 中判五二一頁 正價參拾五錢 郵稅八錢

佐々木信綱君校註
●近世名家々集　全二册洋 並綴 中判一〇七二頁 正價一册卅五錢 郵稅一册八錢

佐々木信綱君校註
●近世長歌今樣歌集　全一册洋 並綴 中判五七〇頁 正價參拾五錢 郵稅八錢

佐々木信綱君校註
●桂園門下家集　全一册洋 並綴 中判五七〇頁 正價參拾五錢 郵稅八錢

佐々木信綱君校註
●明治名家々集　全二册洋 並綴 中判一一五四頁 正價一册卅五錢 郵稅一册八錢

加茂眞淵翁編
●賀茂翁家集　全五册木版刷 中判二百廿三枚 正價六拾錢 郵稅拾錢

黑澤翁滿翁編
●むぐらね集　全三册和本綴 大判木版刷 正價八拾錢 郵稅拾錢

佐々木信綱君校註
●校註明倫歌集　全一册洋 並綴 大判二二二頁 正價貳拾五錢 郵稅四錢

女（綴付の一三）

佐々木弘綱君　佐々木信綱君校訂

日本歌學全書

全部十二冊　正價一冊廿五錢
中判　每冊約四百頁　郵税六錢宛

第一編
○古今和歌集　○躬恒家集　○友則家集　○貫之家集　○忠岑家集

第二編
○後撰和歌集　○元補家集　○順家集　○能宣家集　○天德歌合

第三編
○拾遺和歌集　○紫式部家集　○公任家集　○清少納言家集

第四編
○後拾遺和歌集　○相模家集　○經信卿母歌集　○高陽院歌合

第五編
○金葉和歌集　○詞華和歌集　○堀川百首

第六編
○千載和歌集　○永久百首　○忠度朝臣集　○後京極自歌合

第七編
○新古今和歌集　○自讃歌

第八編
○鴨長明集　○林下集　○源三位頼政集　○山家集　○金槐集

自第九編至第十一編
○萬葉集上、中、下三冊

第十二編
○悅目抄　○無名抄　○歌かたり　○にひまなび　○新學異見　○歌ぶくろ　○調の直路

校註古今和歌集
岸本宗道君校註
全一冊　洋並綴　正價拾五錢
中判　二四八頁　郵税四錢

百人一首講義
佐々木信綱君校註
全一冊　洋並綴　正價貳拾錢
中判　三〇〇頁　郵税四錢

おもひ草
佐々木信綱君著
全一冊　洋布上綴　正價五拾錢
中判　一五二頁　郵税六錢

竹柏園集 第一編
佐々木信綱君編纂
全二冊　紙皮上綴　正價一冊卅五錢
小判　一〇七〇頁　郵税一冊六錢

庭の摘草 附歌德記
子爵黒田清綱君、税所敦子女史共撰
村松今朝太郎君編
全一冊　和上綴　正價參拾五錢
中判　二六二頁　郵税六錢

冠詞例歌集
從五位末松房泰君著
全一冊　紙皮上綴　實價四拾五錢
小判　二一〇頁　郵税四錢

新體詩歌自在
中郁秋香君著
全一冊　洋布上綴　正價壹圓貳拾錢
中判　八三四頁　郵税拾錢

新體詩學
大和田建樹君著
全一冊　洋並綴　正價拾五錢
小判　二二四頁　郵税四錢

美文韻文 花紅葉
鹽井雨江君、武島羽衣君、大町桂月君合著
全一冊　洋布上綴　正價參拾錢
小判　四二二頁　郵税六錢

美文韻文 黄菊白菊
文學士大町桂月君著
全一冊　紙皮上綴　正價貳拾五錢
小判　四〇二頁　郵税六錢

天地有情
文學士土井晩翠君著
全一冊　洋布上綴　正價貳拾五錢
小判　二三〇頁　郵税四錢

美文韻文 霓裳微吟
文學士武島羽衣君著
全一冊　紙皮上綴　正價參拾五錢
小判　三六八頁　郵税六錢

美文韻文 暗香疎影
文學士鹽井雨江君著
全一冊　紙皮上綴　正價貳拾五錢
小判　三五四頁　郵税六錢

美文韻文 磯馴松
佐々木信綱君、印東昌綱君合著
全一冊　紙皮上綴　正價貳拾八錢
小判　四一二頁　郵税六錢

散文韻文 雪月花
大和田建樹君著
全一冊　紙皮上綴　正價參拾五錢
小判　六二六頁　郵税六錢

散文韻文 深山櫻
大和田建樹君著
全一冊　紙皮上綴　正價四拾錢
小判　七〇二頁　郵税六錢

散文韻文 藻鹽木
大和田建樹君著
全一冊　紙皮上綴　實價貳拾五錢
小判　五九〇頁　郵税六錢

美文韻文 創作要訣
西村醉夢君著
全一冊　洋並綴　正價拾貳錢
中判　二〇六頁　郵税六錢

女（後付の一四）

小說書類



●紅葉全集

故尾崎紅葉君著、小波君思案君校訂

全部六册洋裝大判總クロース金字金模樣附……堅牢美本

▲正價一册壹圓八拾錢全部金拾圓小包料拾五錢宛

▲紙數一册約九百餘頁總紙數五千六百頁

第一巻 ●色懺悔 ●巴波川 ●戀の蜆 ●關東五郎 ●猿枕 ●二人むく助 ●風雅娘 ●南無阿彌陀佛 ●此ぬし ●新色懺悔 ●わかれ蚊帳 ●二人女房 ●新桃花扇 ●枯華微笑 ●夏痩 ●文ながし ●七十二文命の安寶

第二巻 ●伽羅枕 ●紙きぬた ●おぼろ舟 ●夏小袖 ●むき玉子 ●戀の病

第三巻 ●三人妻 ●心の闇 ●俠黑兒 ●袖時雨 ●男ごゝろ ●むらさき

第四巻 ●隣の女 ●三箇條 ●靑葡萄 ●不言不語 ●冷熱 ●八重襷 ●鷹料理 ●浮木丸

第五巻 ●多情多恨 ●千箱の玉章 ●安知歇貌林 ●寒牡丹

第六巻 ●金色夜叉前編 ●續金色夜叉 ●煙霞療養 ●金色夜叉中編 ●續々金色夜叉 ●紅葉山人傳 ●金色夜叉後編 ●紅葉著作年表

●露伴叢書

幸田露伴君著

全一册洋布上綴大判一八九〇頁　正價貳圓五拾錢　小包料貳拾錢

●**戀の畵葉書**　巖谷小波君著 和田英作君畵 ▲一名 伯林土產 留學生氣質　全一册洋布上綴 中判 四六〇頁　正價壹圓 郵稅拾錢

●**洋行土產**　同 小波君著　全二册洋布上綴 中判新形 八四〇頁　正價一册壹圓廿錢 郵稅一册拾貳錢

●**休暇之友 笑の國**　同 君著　全一册洋布上綴 中判 三七七頁　正價金六拾錢 郵稅八錢

●**日露戰役紀念 彈片**　海軍主計中監 鑑田重弌君著　全一册洋並綴 三六判 五〇〇頁　正價參拾五錢 郵稅六錢

●**最近外交秘密**　千葉紫草君纂譯　全一册洋並綴 小判 三一七頁　正價參拾錢 郵稅六錢

●**換菓篇**　泉鏡花君外十四名合作　全一册新形美本 中判 三〇〇頁　正價六拾錢 郵稅八錢

●**女道樂**　村井弦齋君著（木版彩色密畵挿入）　全一册和裝上綴 大判 四六六頁　正價八拾錢 郵稅拾貳錢

●**酒道樂**　村井弦齋君著（木版彩色密畵挿入）　全二册洋布上綴 大判 五五四頁　正價一册五拾五錢 郵稅一册八錢

●**軍事小說 武裝の卷**　江見水蔭君著（極彩色木版畵口繪挿入）　全一册石版表紙 大判 二四八頁　正價貳拾五錢 郵稅八錢

●**社會主義新小說 文明の大破壞**　理學士依緣軒主人著　全一册洋並綴 大判 四五四頁　正價四拾錢 郵稅八錢

女（後付の一五）

●社會百面相　内田不知庵君著　全一册洋並綴　大判五五四頁　正價五拾五錢　郵稅拾貳錢

●一葉全集　樋口一葉女史著　全一册洋並綴　大判四八六頁　正價四拾錢　郵稅拾錢

●花鳥集　大橋乙羽君著（彩色大版密畫挿入）　全一册洋布上綴　中判一二〇八頁　正價壹圓　小包料拾五錢

●初子集　大橋乙羽君著（彩色木版密畫挿入）　全一册洋布上綴　小判五九六頁　正價四拾錢　郵稅六錢

●風月集　大橋乙羽君著（彩色木版密畫挿入）　全一册洋布上綴　小判四二二頁　正價參拾五錢　郵稅六錢

●若菜籠　大橋乙羽君君（彩色木版密畫挿入）　全一册和本綴　小判三二〇頁　正價貳拾八錢　郵稅四錢

●政治小説累卵の東洋　大橋乙羽君著　全一册洋並綴　小判二〇六頁　正價拾八錢　郵稅四錢

●ひげ男　幸田露伴君著（木版彩色密畫挿入）　全一册洋並綴　大判三四八頁　正價參拾錢　郵稅六錢

●聚寶盆　饗庭篁村君著　全一册紙皮上綴　小判四九二頁　實價貳拾五錢　郵稅六錢

●女波男波　巖谷小波君著（寫眞銅版挿入）　全一册紙皮上綴　小判六二二頁　正價四拾錢　郵稅八錢

●笑　巖谷小波君著（寫眞銅版挿入）　全一册紙皮上綴　小判五三八頁　正價參拾五錢　郵稅六錢

●戀　江見水蔭君著（寫眞銅版挿入）　全一册紙皮上綴　小判三八二頁　正價參拾錢　郵稅四錢

●星　江見水蔭君著（寫眞銅版挿入）　全一册紙皮上綴　小判六八四頁　實價貳拾五錢　郵稅八錢

●密告　塚原蓼洲君著　全一册洋並綴　小判一五〇頁　實價五錢　郵稅貳錢

●小公子　若松賤子女史譯述（肖像入）　全一册洋並綴　大判三七四頁　正價參拾五錢　郵稅八錢

●十五少年　森田思軒君譯述（寫眞版密畫入）　全一册洋並綴　大判二九六頁　正價參拾五錢　郵稅八錢

●哥薩克兵　露國レオ、トルストイ伯著　田山花袋君譯　全一册洋並綴　大判二三〇頁　正價拾八錢　郵稅六錢

●ロビンソン絶島漂流記　高橋光威君譯述　全一册洋並綴　大判四九八頁　正價四拾錢　郵稅八錢

●勇少年冒險譚初航海　櫻井鷗村君譯述　全一册紙皮上綴　小判三一八頁　正價貳拾五錢　郵稅四錢

●海底軍艦　押川春浪君著　全一册紙皮上綴　小判三九八頁　正價參拾錢　郵稅六錢

●英雄小説武侠の日本　同　全一册紙皮上綴　小判四八二頁　正價四拾錢　郵稅六錢

●海國冒險奇談新造軍艦　同　全一册紙皮上綴　小判三五一頁　正價參拾錢　郵稅六錢

●英雄小説武侠艦隊　同君著　全一册紙皮上綴　小判三三二頁　正價參拾錢　郵稅六錢

●英雄小説新日本　同君著　全一册紙皮上綴　小判三七二頁　正價參拾五錢　郵稅八錢

●傳奇小説銀山王　同君著　全一册洋並綴　小判三二七頁　正價參拾錢　郵稅六錢

●海島探險塔中の怪　同君著　全一册紙皮上綴　小判三三二頁　正價貳拾五錢　郵稅四錢

女（後付の一六）

櫻井鷗村君譯

●世界冒險譚

正價一冊參拾錢　郵稅六錢宛

全部十二冊中判　每編一冊二百四十餘頁

- 一編　●金掘少年
- 二編　●遠征奇談
- 三編　●二勇少年
- 四編　●續遠征奇談
- 五編　●決志少年
- 六編　●漂流少年
- 七編　●殖民少年
- 八編　●航海少年
- 九編　●不撓少年
- 十編　●朽木の舟
- 十一編　●俠勇少年
- 十二編　●絕島奇談

●帝國文庫

正價（●壹冊金六拾錢　●拾冊以上五分引　●參拾冊以上壹割貳分引）

全部五十冊　一冊約千頁　洋裝中判總布脊皮金文字入

▲郵稅拾六錢宛（小包送二百廿匁許）

- 一編　眞書太閤記卷一
- 二編　眞書太閤記卷二
- 三編　眞書太閤記卷三
- 四編　眞書太閤記卷四　▲附 太閤記朝鮮軍記
- 五編　源平衰盛記
- 六編　南總里見八犬傳上
- 七編　南總里見八犬傳中
- 八編　南總里見八犬傳下
- 九編　東海、奧羽、木曾、江の島 道中膝栗毛
- 一〇編　梅曆春告鳥
- 一一編　通俗三國志上
- 一二編　通俗三國志下
- 一三編　三馬傑作集
- 一四編　卯澤、越後、黒田、加賀、伊達 騷動實記
- 一五編　京傳傑作集
- 一六編　種彥傑作集
- 一七編　星月夜鎌倉顯晦錄／北條九代記
- 一八編　通俗十二朝軍談／通俗武王軍談／通俗明清軍談
- 一九編　甲越軍記
- 二〇編　通俗呉越軍談／通俗漢楚軍談
- 二一編　楠廷尉秘鑑
- 二二編　風來山人傑作集
- 二三編　西鶴全集上（禁賣）
- 二四編　西鶴全集下（禁賣）
- 二五編　滑稽名作集上
- 二六編　滑稽名作集下
- 二七編　其磧自笑傑作集上
- 二八編　其磧自笑傑作集下
- 二九編　人情本傑作集上
- 三〇編　氣質全集
- 三一編　珍本全集上
- 三二編　珍本全集中
- 三三編　珍本全集下
- 三四編　人情本傑作集下
- 三五編　赤穗復讐全集
- 三六編　水滸傳上
- 三七編　水滸傳下
- 三八編　忠臣藏淨瑠璃集
- 三九編　四大奇書上
- 四〇編　續氣質全集
- 四一編　四大奇書下
- 四二編　近松時代淨瑠璃
- 四三編　大岡政談
- 四四編　佛教各宗高僧實傳
- 四五編　仇討小說集
- 四六編　馬琴傑作集
- 四七編　淨瑠璃名作集
- 四八編　俠客傳全集
- 四九編　續仇討小說集
- 五〇編　近松世話淨瑠璃

●續帝國文庫

正價（●壹冊金六拾錢　●貳拾冊以上八分引　●參拾冊以上壹割貳分引）

▲郵稅壹冊拾六錢宛（小包送二百廿匁內外）

▲全部五十冊　紙數壹冊千頁以上洋裝中判クロース脊皮金文字入美本

- 一編　眞田三代記　▲附日本武士鑑
- 二編　近世說美少年錄
- 三編　日本歌謠類聚上
- 四編　日本歌謠類聚下
- 五編　諺紫田舍源氏
- 六編　竹田出雲淨瑠璃集
- 七編　朝夷巡島記
- 八編　兒雷也豪傑譚
- 九編　江戶作者淨瑠璃集
- 一〇編　前々太平記　▲附 前太平記

女（後付の一七）

一一編 太平記
一二編 紀海音淨瑠璃集
一三編 續近松淨瑠璃集
一四編 近松半二淨瑠璃集
一五編 後太平記 ▲附 北條五代記
一六編 脚本傑作集上（禁賣）
一七編 京山全集
一八編 校訂 落語全集
一九編 並木宗輔淨瑠璃集
二〇編 紀行文集
二一編 一九全集
二二編 漂流奇談全集
二三編 邯鄲諸國物語 檜種彥傑作集
二四編 校訂 續紀行文集
二五編 續水滸傳
二六編 傾城水滸傳
二七編 文耕堂淨瑠璃集
二八編 白縫譚上
二九編 白縫譚下
三〇編 北雪美談時代鏡

三一編 常山紀談
三二編 萬物滑稽合戰記
三三編 續一九全集
三四編 校訂 黃表紙百種
三五編 校訂 俳優全集
三六編 校訂 俗曲大全
三七編 續々紀行文集
三八編 續馬琴傑作集
三九編 脚本傑作集下
四〇編 續京傳三馬傑作集
四一編 釋迦八相倭文庫上
四二編 釋迦八相倭文庫下
四三編 種彥短編傑作集
四四編 俊傑神稻水滸傳上
四五編 俊傑神稻水滸傳中
四六編 俊傑神稻水滸傳下
四七編 校訂 近世奇談全集
四八編 校訂 名家短編傑作集
四九編 佛教各宗 續高僧實傳
五〇編 校訂 名家漫筆集

曲亭馬琴翁著（本箱入）
● 南總里見八犬傳
全五十冊和本製 大判三〇五一枚 正價九圓五拾錢 運賃五拾錢

文學博士坪內逍遙君序文 青々園伊原敏郎君著
● 日本演劇史
全二冊洋並製 大判七八五頁 正價一冊八拾五錢 郵稅一冊八錢
▲特製合本 洋布上製 正價壹圓八拾五錢 小包料拾五錢

文學博士坪內逍遙君著
● 新樂劇論 緒論
全一冊洋並製 大判九八頁 正價貳拾錢 郵稅四錢

同君著
● 新曲 浦島
全一冊洋布上製 中判五四頁 正價八拾五錢 郵稅六錢

同君著
● 新曲 かぐや姫
全一冊和本製 大判五四頁 正價八拾五錢 郵稅六錢

福地櫻痴居士新作
● 肥後武士 江戶藝者 花盛劇楓葉
全一冊洋並製 大判一一八頁 正價貳拾五錢 郵稅四錢

福地櫻痴居士作
● 山中平九郎（密畫插入）
全一冊洋並製 大判一六八頁 正價參拾錢 郵稅六錢

福地櫻痴居士作
● 芳哉義士の譽（密畫插入）
全一冊洋並製 大判一五二頁 正價參拾錢 郵稅六錢

依田學海君著
● 脚本 小御門
全一冊洋並製 小判一八二頁 正價五錢 郵稅貳錢

石橋思案君校訂
● 落語全集
全二冊洋布上製 中判一〇九二頁 正價六拾錢 郵稅拾四錢

博文館編輯局編
● 新撰 落語大全
全一冊洋並製 大判三二〇頁 正價貳拾五錢 郵稅貳錢五厘

博文館編輯局編纂
● 軍談大鑑
全一冊洋並製 大判三二〇頁 正價貳拾五錢 郵稅貳錢五厘

依田學海君序文 松林伯圓翁講演
● 伯圓講演 菅公
全一冊洋並製 大判二五四頁 正價參拾五錢 郵稅六錢

松林伯圓翁講演
● 御前講演 中山大納言
全一冊紙皮上製 小判三七四頁 正價貳拾五錢 郵稅四錢

鶯亭金升君著
● 新撰落語 福
全一冊紙皮上製 小判三一二頁 正價參拾錢 郵稅六錢



歌舞音曲書類

大和田建樹君著
●増補謠曲通解　全一册背皮上綴　大判一七八六頁　正價壹圓八拾錢　小包料貳拾錢

大和田建樹君著
●謠曲文粹　全一册紙皮上綴　小判五三〇頁　正價參拾五錢　郵税六錢

幸田露伴君校訂（上卷狂言記、中卷續狂言記、下卷狂言記拾遺）
●校訂狂言全集　全三册和紙横綴　中判一三〇〇頁　正價一册五拾錢　郵税一册八錢
▲上帙入合本　正價壹圓六拾錢　小包料拾五錢

大和田建樹君著　彩色木版及寫眞銅版挿入
●謠と能　全一册洋並綴　大判二七六頁　正價貳拾五錢　郵税六錢

大和田建樹君著（毎編密畫挿入）
●能のしをり　全六册洋並綴　中判一二九〇頁　正價一册四拾錢　郵税一册六錢

芳賀文學博士　三上文學博士序文　山本九馬亭君著
●淨瑠璃通解　全六册和上綴　大判約一三〇〇頁　正價一册卅五錢　郵税一册六錢
▲全部正價金貳圓　小包料貳拾錢

水谷不倒君校訂
●義太夫百番　全一册洋布上綴　小判六七六頁　正價壹圓　郵税拾貳錢

水谷不倒君編（寫眞銅版挿入）
●竹本攝津大椽　全一册和上綴　大判二三〇頁　正價四拾錢　郵税八錢

博文館編輯局編纂（彩色木版及寫眞銅版挿入）
●聲曲自在　全一册洋並綴　大判二四八頁　正價貳拾五錢　郵税六錢

博文館編輯局編纂　彩色木版寫眞銅版挿入
●琴曲獨稽古　全一册洋並綴　大判二四八頁　正價貳拾五錢　郵税六錢

鶯亭金升君著
●都々逸一千題　全一册紙皮上綴　小判五六〇頁　正價參拾五錢　郵税六錢

鶯亭金升君著
●風雅文庫　全部六册小判洋裝紙皮上製　金文字入紙數各約三百頁
正價●一册金貳拾錢　●六册金壹圓拾錢　▲郵税一册金四錢
〔一〕都々逸の栞　〔二〕冠句の栞　〔三〕狂歌の栞　〔四〕狂句の栞　〔五〕狂體句の栞　〔六〕雜俳の栞

博文館編輯局編
●琴曲獨稽古　全一册洋並綴　大判二四〇頁　正價貳拾五錢　郵税六錢

百足登君著
●胡弓の栞　全一册洋並綴　中判一〇〇頁　正價拾錢　郵税四錢

大阪五行
●義太夫本　上等半紙木版摺　正價壹枚參厘五毛の割
▲大功記外百十六種あり

◉帝國文庫續帝國文庫中歌曲淨瑠璃集少なからざるも右は文庫として小説中に編入しあれば觀客其心して覽玉へかし



家庭書類

●女子衞生學	海軍大軍醫隊岐敬治郎君譯	全一冊 小判 三二〇頁 洋並製	正價參拾錢 郵稅四錢
●育兒と衞生	西田敬止君著(木版刷錦繪及寫眞版挿入)	全一冊 大判 二四四頁 洋並製	正價貳拾五錢 郵稅六錢
●婦女家庭訓	學習院女子部長下田歌子女史著	全一冊 大判 三六二頁 和並製	正價參拾五錢 郵稅八錢
●家庭教育	同	全一冊 大判 二五二頁 和並製	正價參拾五錢 郵稅六錢
●實驗問答日本家庭節用	報知新聞家庭記者中村木公君編	全一冊 三六判 一二七四頁 洋布上製	正價壹圓參拾錢 郵稅拾貳錢
●家庭の心得	學習院女子部長下田歌子女史著	全一冊 大判 二六八頁 和並製	正價參拾五錢 郵稅六錢
●母親の心得	同	全一冊 大判 二六八頁 和並製	正價參拾五錢 郵稅八錢
●學校の心得	同	全一冊 大判 二三〇頁 和並製	正價參拾五錢 郵稅六錢
●女學生訓	文學士大町桂月君著	全一冊 小判 二五六頁 洋並製	正價貳拾五錢 郵稅四錢
●女學生の栞	松原岩五郎君著	全一冊 大判 三三〇頁 洋並製	正價參拾五錢 郵稅六錢
●女訓評釋	干河岸櫻所君評釋	全一冊 大判 四一六頁 和上製	正價六拾錢 郵稅拾錢
●繪入下女讀本	村井弦齋君著	全一冊 大判 一一〇頁 洋並製	正價拾五錢 郵稅四錢
●女子職業案内	近藤正一君著	全一冊 三六判 四七〇頁 洋並製	正價四拾五錢 郵稅六錢
●日本女子立志編	干河岸櫻所君編(木版錦繪口繪挿入)	全二冊 大判 七三六頁 和並製	正價一冊六拾錢 郵稅一冊八錢
●外國少女鑑	學習院女子部長下田歌子女史著	全一冊 大判 二三八頁 和並製	正價參拾五錢 郵稅六錢
●內國少女鑑	同	全一冊 大判 二二八頁 和並製	正價參拾五錢 郵稅六錢
●庭訓お伽噺	同	全一冊 大判 二三四頁 和並製	正價參拾五錢 郵稅六錢
●お伽噺教艸	同	全一冊 大判 二四二頁 和並製	正價參拾五錢 郵稅六錢
●女子遊戲の栞	同	全一冊 大判 二三〇頁 和並製	正價參拾五錢 郵稅八錢
●婦女教育明治姫鏡	濱本義顯君著(木版錦繪挿入)	全一冊 大判 三一四頁 和紙刷	正價六拾錢 郵稅八錢
●明治の令孃	讀賣新聞記者關如來君若(寫眞版十三葉三十九孃挿入)	全一冊 中判 一八二頁 洋並製	正價參拾錢 郵稅六錢
●家庭料理法	治庖會第四教場主幹龜井まき子女史著	全一冊 大判 二三〇頁 洋並製	正價參拾五錢 郵稅八錢
●料理手引草	學習院女子部長下田歌子女史著	全一冊 大判 三三〇頁 洋並製	正價參拾五錢 郵稅八錢
●實用料理法	藤本藤隆君著(木版刷錦繪及寫眞銅版挿入)	全一冊 大判 二八四頁 洋並製	正價貳拾五錢 郵稅六錢
●西洋料理法	佐々木孝君著(木版刷錦繪及寫眞版挿入)	全一冊 大判 二五四頁 洋並製	正價貳拾五錢 郵稅六錢
●料理早指南	醍醐山人編	全二冊 中本 和紙刷 和裝	正價貳拾五錢 郵稅六錢
●衞生食物調理法	阪本隆哉君著	全一冊 大判 一五四頁 和並製	正價參拾錢 郵稅六錢
●病者の食餌	阪本隆哉君著	全一冊 中判長形 一五六頁 紙皮上製	正價貳拾錢 郵稅四錢

俳諧書類



- 中川霞城君著　●平言俗語俳諧美學　全一册洋裝　大判　二五〇頁　正價參拾錢　郵税六錢
- 雪中庵雀志宗匠校閲　五乳人釣雪君編　●俳諧提要　全一册和本橫綴　中判　三五五頁　正價五拾錢　郵税八錢
- 老鼠堂永機君編　●俳諧自在　全一册洋布上綴　小判　一二三〇頁　正價壹圓　郵税拾貳錢
- 三宅青軒君著　●俳諧獨學（彩色木版寫眞銅版挿入）　全一册洋裝　大判　二五六頁　正價貳拾五錢　郵税六錢
- 廣田精知君著　●和歌俳諧節用集　全二册和紙銅刻　小判　二九二枚　正價參拾五錢　郵税四錢
- 伊藤松宇君校訂　●付合作法全集（名家手蹟寫眞銅版挿入）　全一册洋裝　大判　三六三頁　正價參拾錢　郵税八錢
- 內藤鳴雪君閲　今井柏浦君編　●明治壹萬句　全一册和裝橫綴　中判　四四〇頁　正價參拾五錢　郵税六錢
- 老鼠堂永機君　阿心庵雪人君校訂　●芭蕉全集（寫眞版挿入）　全一册洋裝　大判　三〇四頁　正價參拾錢　郵税八錢
- 老鼠堂永機君　阿心庵雪人君校訂　●其角全集（寫眞版挿入）　全一册洋裝　大判　二八〇頁　正價參拾錢　郵税八錢

- 雪中庵雀志君校訂　●嵐雪全集（名家手蹟寫眞版入）　全一册洋裝　大判　二九〇頁　實價貳拾錢　郵税八錢
- 老鼠堂永機君　其角堂機一君校訂　●支考全集（名家手蹟寫眞挿入）　全一册洋裝　大判　三四〇頁　實價貳拾錢　郵税八錢
- 大野洒竹君校訂　●許六全集（名家手蹟寫眞版挿入）　全一册洋裝　大判　三〇〇頁　實價貳拾錢　郵税八錢
- 岡野知十君校訂　●也有全集（名家手蹟寫眞版挿入）　全一册洋裝　大判　二八四頁　實價貳拾錢　郵税八錢
- 不白軒梅年君　雪中庵雀志君　雪袋人宇貫君校訂（寫眞版挿入）　●蓼太全集　全一册洋裝　大判　三二二頁　正價參拾錢　郵税八錢
- 大野洒竹君校訂　●素堂鬼貫全集（名家手蹟寫眞版挿入）　全一册洋裝　大判　二八八頁　正價參拾錢　郵税八錢
- 角田竹冷　佐藤飯人　大野洒竹三君校訂　●蕪翁句集　全三册木版　美濃判和紙刷　正價壹圓　郵税拾錢
- 大野洒竹君校訂　●蕪村曉臺全集（名家手蹟寫眞版挿入）　全一册洋裝　大判　三〇〇頁　正價參拾錢　郵税八錢
- 大野洒竹君校訂　●一茶大江丸全集（名家手蹟寫眞版挿入）　全一册洋裝　大判　三二〇頁　正價參拾錢　郵税八錢

老鼠堂永機君 晉雪庵柳涯君校訂
●蕉門十哲集（名家手蹟寫眞版挿入）
全一冊洋並綴 大判三〇二頁 正價參拾錢 郵稅八錢

大野洒竹君校訂
●芭蕉以前俳諧集（名家手蹟寫眞版挿入）
全二冊洋並綴 大判六三〇頁 正價一冊參拾錢 郵稅一冊八錢

大野洒竹君校訂
●元祿名家句集（名家手蹟寫眞版挿入）
全一冊洋並綴 大判二八六頁 正價參拾錢 郵稅八錢

角田竹冷君校訂
●俳諧句合全集（名家手蹟寫眞版挿入）
全一冊洋並綴 大判二一八頁 正價參拾錢 郵稅八錢

尾崎紅葉君校訂
●俳諧類題句集（名家手蹟寫眞版挿入）
全二冊洋並綴 大判七二〇頁 正價一冊參拾錢 郵稅一冊八錢

俳諧社寺中校
●一茶句集
全二冊和裝 木版和紙刷 正價貳拾五錢 郵稅六錢

竹村秋竹君編
●明治俳句
全一冊紙皮上綴 小判五〇〇頁 正價參拾五錢 郵稅六錢

桒窓無角君編
●俳家成美全集
全一冊洋並綴 小判五二〇頁 實價貳拾錢 郵稅八錢

其角堂永機宗匠外四大家校 森槑直君編
●修身俳諧不朽集
全二冊和並綴 中判一八二頁 正價參拾五錢 郵稅六錢

芭蕉翁編
●掌中俳諧七部集
全二冊 和裝小本 正價貳拾貳錢 郵稅四錢

一葉舍仙兎翁輯
●俳諧玉葉集
全一冊 和裝長本 正價拾五錢 郵稅四錢

北村季吟君撰 高井蘭山君訂
●俳諧增山の井
全二冊 和裝中本 正價貳拾貳錢 郵稅六錢

禾木園主人輯
●俳諧今人發句集
全二冊 中本橫綴 正價參拾錢 郵稅拾錢

巖谷小波君校訂
●俳諧文集（名家手蹟寫眞版挿入）
全一冊洋並綴 大判三二八頁 正價參拾錢 郵稅八錢
目次（●本朝文鑑●和文藻●芙蓉文集●新編俳諧文集●秋風庵文集●雞山集）

巖谷小波君校訂
●俳諧論集（名家手蹟寫眞版挿入）
全一冊洋並綴 大判三三〇頁 正價參拾錢 郵稅八錢
目次（玉くしげ●俳諧●南北新話●俳諧耳底記●三草紙●俳諧一串抄●蕉門俳諧語錄●俳諧參話●柿晉問答●山中問答●湖東問答●俳諧或問俳諧七草）

巖谷小波君校訂
●讀俳諧論集（名家手蹟寫眞版挿入）
全一冊洋並綴 大判三〇六頁 正價參拾錢 郵稅八錢
目次（芭蕉二十五ヶ條●俳諧有也無也關●俳諧十論●俳諧十論爲辨抄●續五論●片歌二夜問答●十二話●白雄夜話●俳諧雪おろし●俳諧七草）

大野洒竹君校訂
●俳諧珍本集（名家手蹟寫眞版挿入）
全一冊洋並綴 大判三一八頁 正價參拾錢 郵稅八錢
目次（立圃句集●梅翁宋因句集●兩吟一日千句●俳諧破邪顯正●丙寅紀行●俳諧爪作●青すだれ●新三百韻●のぼり鶴●節文集●俳諧古選●春泥句集●凉袋獨吟集●花見次郎●舍利風語）

佐藤飯人君校訂（大判古俳人手蹟寫眞入）
●俳諧紀行全集
全一冊洋並綴 大判四〇〇頁 實價貳拾錢 郵稅八錢
目次（發凡七則●俳諧紀行全集提要●日本行脚文集●野洒紀行●翁岡抄●奥細道菅菰集●奥細道拾遺●椎の葉●陸奥千鳥●摩詰菴入日記）

鶴澤四丁君校訂（名家眞蹟寫眞版挿入）
●俳諧逸話全集
全一冊洋並綴 大判三三二頁 正價參拾錢 郵稅八錢
目次（滑稽太平記●行脚怪談袋●蕉翁消息集●俳家奇人談●俳人百家選●歌俳百人選●續俳家奇人談●名家叢談）

角田竹冷君校閲 星野麥人君 牧野望東君合著
●俳諧年表
全一冊和上綴 大判二八六頁 正價六拾錢 郵稅八錢

辭典書類

●石川鴻齋君校訂　鼇頭音譯 康熙字典（銅刻上帙入）
全六册和紙刷　正價四圓五拾錢
中判一五二二枚　小包料貳拾錢
▲桐函入上製　正價五圓五拾錢　小包料參拾錢

●市河淸流君　高井思明君校訂　三音四聲 字貫（銅刻上帙入）
全五册和紙刷　正價五圓參拾錢
中判一六一〇枚　小包料貳拾錢
▲桐函入上製　正價六圓　小包料參拾錢

●石川鴻齋君校訂　篆文詳註 日本大玉篇（銅刻上帙入）
全三册和紙刷　正價貳圓六拾錢
中判七二八枚　小包料拾五錢

●土生柳平君校正　木村晶太郎君編輯　明治大廣益 會玉篇大全（銅刻上帙入）
全三册和紙刷　正價貳圓六拾錢
中判六六四枚　小包料拾五錢

●石川鴻齋君著　新撰日本字典（銅刻上帙入）
全二册和紙上綴　正價壹圓
中判一〇一〇頁　郵税八錢

●千河岸貫一君撰　作文演說 格言辭典
全一册洋布上綴　正價五拾錢
小判五八四頁　郵税八錢

●靑木輔淸君編　廣益中字典
全一册洋布上綴　正價八拾錢
中判八三〇頁　郵税拾錢

●戶田翠香君著　文章字典（銅刻上等和紙刷）
全一册和上綴帙入　正價七拾錢
中判五八二頁　郵税六錢

●大田淳軒君著　新撰歷史字典（銅刻上等和紙刷）
全一册和上綴帙入　正價六拾錢
中判四九五頁　郵税六錢

●石川鴻齋君補閲　川田孝吉君編輯　皐補 和漢歷史文章字引
銅刻和並綴　正價五拾五錢
中判二〇四枚　郵税拾貳錢

●大田淳軒君著　新撰明治字典
銅刻和紙上綴　正價參拾八錢
小判四七〇頁　郵税四錢

●齋木寬直君著　明治文選字引
銅刻和紙上綴　正價貳拾五錢
小判二一六枚　郵税四錢

●棚橋廣君著　新撰漢語字引
銅刻和紙上綴　正價貳拾五錢
小判一三八枚　郵税貳錢

●大和田建樹君著　日本大辭典
全一册總皮上綴　正價貳圓貳拾錢
大判一八〇〇頁　小包料拾五錢

●大和田建樹君著　日本小辭典
全一册洋布上綴　正價七拾五錢
小判一一八〇頁　郵税八錢

●大宮宗司君編纂　日本辭林
全一册洋並綴　正價參拾錢
小判七二〇頁　郵税六錢
▲特製本洋布上綴　正價四拾錢　郵税八錢

●棚橋廣君著　日本いろは新字典
全一册銅刻和綴　正價參拾錢
小判二二〇頁　郵税四錢

●大月晴四郎君編　懷中玉篇
銅刻洋布上綴　正價貳拾錢
小判三三六頁　郵税四錢

●文學士大町芳衛君　文學士久保天隨君　大田淳軒君共編　新式いろは引節用辭典
全一册洋布上綴　正價貳圓
三六判三〇〇頁　小包料拾五錢
▲擬革特製本　正價貳圓五拾錢　小包料拾五錢

●博文館編輯局編纂　傳家寶典 明治節用大全　彩色美麗木版圖挿入（事物節用）
全一册脊皮上綴　正價壹圓六拾錢
大判一二三二頁　小包料貳拾錢

立志及受驗書類



文學士大町桂月君著 ●軍國訓 全一册洋並綴 小判三三六頁 正價貳拾八錢 郵稅四錢

文學士大町桂月君著 ●學生訓 全一册紙皮上綴 小判二四八頁 正價貳拾錢 郵稅四錢

文學士大町桂月君著 ●續學生訓 全一册紙皮上綴 小判二五六頁 正價貳拾五錢 郵稅四錢

文學士大町桂月君著 ●青年訓 全一册洋並綴 小判三一八頁 正價貳拾八錢 郵稅四錢

文學士大町桂月君著 ●處世訓 全一册洋並綴 小判二五〇頁 正價貳拾五錢 郵稅四錢

慶應義塾教授菅綠陰君著 ●成功要錄 全一册紙皮上綴 中判二二〇頁 正價貳拾八錢 郵稅四錢

慶應義塾教授菅綠陰君著 ●言行要錄 全一册紙皮上綴 中判二六八頁 正價參拾錢 郵稅六錢

文學博士中村正直君譯述 ●改正西國立志編 全一册洋並綴 中判六〇八頁 正價貳拾七錢 郵稅八錢

東京女學館教授西田敬止君編 ●益軒十訓 全一册背皮上綴 中判一一〇二頁 正價壹圓 小包料拾五錢

風間禮助君著 ●偉人修養錄 全一册洋並綴 中判四〇八頁 正價四拾錢 郵稅八錢

文學士萩原朝之助君著 ●帝國修身軌範 全四册和並綴 小判三六九頁 實價一册拾錢 郵稅一册四錢

高等師範學校教諭本田增次郎君著 ●處世要訓 全一册洋並綴 中判二四〇頁 正價參拾錢 郵稅六錢

法學士田中次郎君譯述 ●學生立身策 全一册洋並綴 小判一七六頁 正價拾貳錢 郵稅四錢

米國ジョン、トット氏原著 吉田已之助君譯述 ●成功遂志勤學要訣 全一册洋並綴 中判四七〇頁 正價貳拾八錢 郵稅六錢

法學士丸尾雄君著 ●日常行爲法則（彩色木版密畵寫眞版挿入） 全一册洋並綴 大判二五六頁 正價貳拾五錢 郵稅六錢

法學士桐生政次君著 ●勤學と處世（彩色密畵挿入） 全一册洋並綴 大判二四〇頁 正價貳拾五錢 郵稅六錢

澁江保君著 ●世界格言大全 全一册洋布上綴 小判一三七二頁 正價四拾錢 郵稅四錢

文學博士井上哲次郎君 文學士有馬祐政君共編 ●武士道叢書 全三册洋裝 大判約一六〇〇頁 正價一册五拾錢 郵稅一册拾貳錢 ▲下卷に限り郵稅拾四錢

秋山悟庵君編纂 ●現代大家武士道叢論 全一册洋並綴 大判約四百餘頁 正價五拾錢 郵稅拾錢

文學士有馬祐政君 秋山悟庵君共編 ●武士道家訓集 全一册洋並綴 大判三三六頁 正價四拾五錢 郵稅八錢

女 後付の二五

赤堀又次郎君校訂
●心學叢書
全六册和本上綴 大判約一九〇〇頁 正價一册四拾錢 郵稅一册拾錢

故中江兆民君著
●一年有半
全一册洋並綴 大判二八八頁 正價參拾五錢 郵稅八錢

同
●續一年有半
全一册洋並綴 大判三六六頁 正價參拾八錢 郵稅八錢

京都帝國大學內自彊會々員共編
●學界之先蹤青年修學指針
▲一名無神無靈魂
全一册洋上綴 三六版七〇〇頁 正價六拾錢 郵稅八錢

星野久成君著
●讀書法
全一册洋並綴 小判二二二頁 正價拾錢 郵稅四錢

山田槌太郎君編
●博士試驗論文集
全一册洋並綴 大判二八六頁 正價參拾錢 郵稅六錢

博文館編輯局編纂 寫眞版挿入 改訂新版
●官私立諸學校就學案內
全一册洋並綴 大判二二八頁 正價貳拾五錢 郵稅六錢

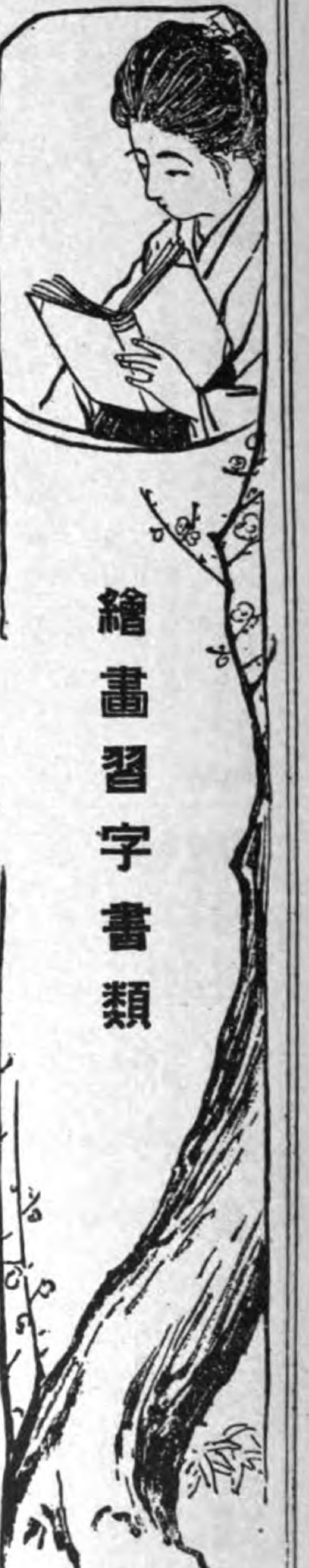
飯泉規矩三君著
●學術自習法
全一册洋並綴 小判二四八頁 正價拾貳錢 郵稅四錢

北一鵠君編纂
●現行試驗規則大全
全一册紙皮上綴 小判六八八頁 正價四拾五錢 郵稅六錢

●受驗問答叢書
▲全部卅六册洋裝袖珍紙皮金文字入上製

正價 ●壹册金貳拾錢 ●拾册金壹圓八拾錢 ●貳拾册金參圓五拾錢 ●卅六册金五圓四拾錢 ▲郵稅壹册四錢宛

全部書目
●第一編 鼇頭新撰日本地理問答……上村左川君編
●第二編 新撰日本歷史問答……宮田修君編
●第三編 新撰世界地理問答……武田櫻桃君編
●第四編 新撰東洋歷史問答……松原岩五郎君編
●第五編 新撰西洋歷史問答……長谷川誠也君編
●第六編 新撰國文問答……鷹野勇雄君編
●第七編 新撰漢文問答……太田才次郎君編
●第八編 新撰算術問答……竹貫登代多君編
●第九編 新撰代數問答……竹貫登代多君編
●第十編 新撰幾何問答……竹貫登代多君編
●第十一編 新撰化學問答……武田櫻桃君編
●第十二編 新撰物理問答……上村貞子君編
●第十三編 新撰動植物學問答……寺崎留吉君編
●第十四編 新撰地文天文問答……木村定次郎君編
●第十五編 新撰法制經濟問答……中村龍造君編
●第十六編 新撰文官普通及裁判所書記試驗問答……小野拓君編
●第十七編 新撰倫理教育問答……永遐藤一郎君編
●第十八編 新撰鑛物地質問答……寺崎留吉君編
●第十九編 新撰心理論理問答……德谷豐之助君編
●第二十編 新撰和英文典問答……上村貞子君編
●第廿一編 新撰農業要項問答……志岐守二君編
●第廿二編 新撰英語會話作文問答……森美文君編
●第廿三編 明治三十六年文官高等試驗答案集……相澤新八君編
●第廿四編 新撰商業要項問答……濱田四郎君編
●第廿五編 新撰獨逸文典問答……藤井憲君編
●第廿六、七編 新撰工業要項問答（上下二册）……加野友次郎君編
●第廿八編 新撰作文問答……西村眞次君編
●第廿九編 新撰衛生生理問答……醫學士石原喜久太郎君閲 首藤環君編
●第三十編 新撰家事問答……近藤正一君編
●第卅一編 新撰憲法行政法問答……法學士辻宏吉君編
●第卅二編 新撰商法問答……法學士太田資時君編
●第卅三編 新撰國際公法私法問答……土屋法學士編
●第卅四編 新撰刑法問答……法學士石原磊三君編
●第卅五編 新撰民刑訴訟法問答……法學士清水孝藏君編
●第卅六編 新撰民法問答……宮川大壽君編



繪畫習字書類

海軍省御認可 日露戰役 **海軍寫眞集** 第一輯 ▲特製本光澤紙刷 正價七拾五錢 郵税八錢
太陽判寫眞五十枚 正價貳拾五錢 郵税六錢

同 **同** ▲特製本光澤紙刷 正價一册八拾錢 郵税八錢
自第二輯至第四輯 太陽判寫眞各五十枚 正價一册參拾錢 郵税一册六錢

毛筆畫研究會編 **初心毛筆畫譜** 全五册和裝木版 和紙彩色刷 正價一册拾貳錢 郵税一册四錢

小林永濯君畫 **子供遊び畫帖** 全一册和裝上製 大判錦繪木版刷 正價參圓五拾錢 郵税貳拾錢

瀧和亭翁畫 **花鳥畫譜** 全一册和裝上製 大判錦繪木版刷 正價參圓 郵税拾四錢

酒井抱一畫伯編 **光琳百圖** 全二册和紙木版 大判七二枚 正價五拾錢 郵税四錢

狩野探幽畫伯筆 **探幽百富士** 全四册和紙木版 大判一一〇頁 正價壹圓 郵税拾四錢

狩野康信君編 探幽縮圖 **聚珍畫譜** 全三册和紙木版 本書大判六九枚 正價貳圓 郵税拾四錢

谷文晁畫伯筆 谷文晁 **本朝畫纂大全** 全四册和紙木版 大判一一〇枚 正價壹圓貳拾錢 郵税拾錢

西川祐信君著 **祐信畫鑑** 全三册和紙木版 大判五三枚 正價四拾五錢 郵税拾錢

中島亭齋君著 **亭齋畫譜** 全二册和紙木版 大判四二一枚 正價參拾錢 郵税六錢

市河米菴君著 **楷行薈編**（上等和紙木版刷） 全十五册和上綴 大判六二五枚 正價參圓 小包料貳拾錢

瀬尾鷗齋君編纂 **草叢**（上等和紙木版刷） 全十二册和上綴 美濃判七〇〇枚 正價參圓五拾錢 小包料貳拾錢

河村鼎稼君著 **十體千字文** 全一册和紙木版 中判一八二頁 正價貳拾參錢 郵税四錢

柳澤小陽君書 **三體千字文** 全一册和紙木版 半紙刷七五枚 正價四拾錢 郵税四錢

巖谷一六君書 **一六蘭亭帖** 全一册和紙刷 半紙判二七枚 正價貳拾錢 郵税貳錢

日下部鳴鶴君書 **鳴鶴蘭亭帖** 全一册和紙木版 半紙判二五枚 正價貳拾錢 郵税貳錢

大和田建樹君著 巖谷一六居士書 **明治書翰文** 全一册和紙木版 大判一〇〇枚 正價參拾錢 郵税四錢

依田學海君著 巖谷一六居士書 **新撰應用書翰** 全一册和紙木版 大判八五枚 正價參拾五錢 郵税四錢

河村吉之輔君著 **初學手紙の文** 全二册和紙木版 大判一〇〇枚 正價參拾五錢 郵税六錢

理科及數學書類



理學士福井政一君著
●普通物理學　上下二册洋並綴　大判　六三〇頁　正價一册四拾錢　郵税一册八錢

岐阜縣師範學校敎諭蒔田宗次君著述
●中等教育新撰物理學楷梯　全一册洋布上綴　中判　三八八頁　正價五拾錢　郵税八錢

理學士龜高德平君著
●有機化學　全一册洋並綴　大判　四〇〇頁　正價四拾錢　郵税八錢

理學士眞島利行君著
●無機化學　全一册洋並綴　大判　三五四頁　正價四拾錢　郵税八錢

福岡東筑中學敎諭松村青之助君著
●受驗適用新撰化學參考書　全一册洋布上綴　中判　二六〇頁　正價四拾八錢　郵税六錢

仙臺醫學專門學校敎授須崎勝三郎君著
●應用定量分析　全一册並綴　大判　三四四頁　正價四拾錢　郵税八錢

▲右四種共各洋布特製一册正價五拾五錢　郵税拾錢宛

藤野修吉君　花井七三郎君　草野堅巌君共著
●通俗理化一斑　全一册洋並綴　大判　三三〇頁　正價參拾錢　郵税八錢

池上秦次郎君著
●受驗必携物理學演習　全一册洋並綴　小判　一五〇頁　正價拾五錢　郵税四錢

理學士須藤傳治郎君著
●星學　全一册洋並綴　大判　三三二頁　正價四拾錢　郵税八錢
▲特製本　洋布上綴　正價五拾五錢　郵税拾錢

農學博士稻垣乙丙君著
●農藝物理氣象學　全一册脊皮上綴　大判　五四〇頁　正價壹圓五拾錢　小包料拾五錢

理學士岡田武松君著
●近世氣象學　全一册洋並綴　大判　三三八頁　正價四拾錢　郵税八錢

理學士一戶直藏君著
●高等天文學　全一册洋並綴　大判　三二四頁　正價四拾錢　郵税八錢

▲右二種共各洋布上綴一册　正價五拾五錢　郵税拾錢宛

理學士蘆野敬三郎君編
●科學藝術純正寫眞術　全一册洋布上綴　中判　三五八頁　正價壹圓　郵税八錢

藥學得業士金澤巖君著
●寫眞及幻燈　全一册洋並綴　大判　二三二頁　正價貳拾五錢　郵税六錢

第二高等學校敎授理學士安田篤君著
●增補訂正植物學汎論（密畫挿入）　全一册脊皮上綴　大判　六四八頁　正價貳圓　小包料拾五錢

理學士飯塚啓君著
●植物學新論　全一册洋並綴　大判　三一四頁　正價四拾錢　郵税八錢
▲特製本　洋布上綴　正價五拾五錢　郵税拾錢

理學士遠藤吉三郎君著
●日本有用海產植物　全一册洋布上綴　大判　二二八頁　正價壹圓廿五錢　郵税八錢

理學士會田龍雄君著
●新撰動物學　全二册洋布上綴　大判　五六〇頁　正價一册四拾錢　郵税一册八錢
▲特製本（密畫入）　洋布上綴　正價一册五拾五錢　郵税一册拾錢

川村守義君著
●通俗動物學　全一册洋並綴　大判　三〇〇頁　正價貳拾錢　郵税八錢

永島長五郎君著
●通俗昆蟲學　全一册洋並綴　大判　二八〇頁　正價參拾錢　郵税八錢

女（後付の二八）

● **動物發生學** 東京帝國大學助教授理學士飯塚啓君著
全一冊洋並綴 大判三五〇頁 正價四拾錢 郵稅八錢
▲特製本 洋布上綴 正價五拾五錢 郵稅拾錢

● 實用 **鑛物及地質** 腹卷助太郎君編 理學士大築佛郎君 理學士八谷彪一君共著
全一冊洋並綴 中判二五九頁 正價參拾錢 郵稅六錢

● **鑛物學**
全一冊洋並綴 大判三六四頁 正價四拾錢 郵稅八錢
▲特製本 洋布上綴 正價五拾五錢 郵稅拾錢

理科及數學書共受驗問答叢書中のもの數種あれども受驗書類中に掲載せしを以て此欄に除けり

● **新式算術講義** 東京帝國大學敎授理學博士高木貞治君著
全一冊洋布上綴 大判四七〇頁 正價壹圓貳錢 郵稅拾錢

● **新撰算術** 東京帝國大學敎授理學博士高木貞治君著
全一冊洋並綴 大判三〇六頁 正價四拾錢 郵稅八錢

● **新撰代數學** 東京帝國大學敎授理學博士高木貞治君著
全一冊洋並綴 大判三〇四頁 正價四拾錢 郵稅八錢

● **新撰幾何學** 京都帝國大學敎授理學士林鶴一君著
全一冊洋並綴 大判三〇四頁 正價四拾錢 郵稅八錢

● **新撰解析幾何學** 理學士松村定次郎君著
全一冊洋並綴 大判三〇〇頁 正價四拾錢 郵稅八錢

● **新撰三角法** 理學士松村定次郎君著
全一冊洋並綴 大判二八二頁 正價四拾錢 郵稅八錢

● **新撰微分積分學** 理學士松村定次郎君著
全一冊洋並綴 大判三五六頁 正價四拾錢 郵稅八錢
▲右四種共各洋布特製一冊 正價五拾五錢 郵稅拾錢宛

● 商業叢書 **商業數學** 理學士藤田外次郎君著
全一冊洋並綴 大判四〇二頁 正價五拾五錢 郵稅八錢
▲特製本 洋布上綴 正價七拾錢 郵稅拾錢

● 工業叢書 **工業數學** 工學士重見道之君著
全一冊洋布上綴 中判四三〇頁 正價九拾錢 郵稅貳錢

● 新撰中等 **用器畫敎科書解說** 第六高等學校敎授松尾哲太郎君著
全一冊洋布上綴 大判一七三頁 正價五拾錢 郵稅八錢

● 新撰中等 **用器畫敎科書圖式** 同
全一冊厚表紙綴 太陽版石版摺 正價五拾錢 郵稅六錢

● 初等平面 **三角法敎科書** 理學士林鶴一君著（文部省檢定濟）
全一冊洋布上綴 中判一二〇頁 正價四拾錢 郵稅四錢

● 文部省檢定受驗用 **新撰數學講義** 理學士藤田外次郎君著（上卷算術代數の部 下卷幾何學の事）
全二冊洋並綴 中判五七八頁 正價一冊卅八錢 郵稅一冊六錢

● 中等敎育 **算術敎程** 佐久間文太郎君著
全一冊洋並綴 大判二二二頁 正價四拾錢 郵稅六錢

● **數學世界** 竹貫登代多君編（算術、代數、幾何の三科とし各科共各十二冊にし完結）
全卅六冊洋並綴 大判一冊各八〇頁 正價一冊拾錢 郵稅一冊壹錢
三六判洋並綴 各冊約百七十頁 正價一冊拾錢 郵稅一冊壹錢

● 記臆すべき公式と **答案の書き方** 竹貫直人君編
▲全三冊上卷算術と三角 中卷代數學 下卷幾何學

● 實用 **新式速算法** 竹貫婁文君補
全一冊洋並綴 中判二九四頁 正價參拾五錢 郵稅六錢

● **算術手引草** 竹貫登代多君編
全一冊脊皮上綴 中判四七六頁 正價五拾錢 郵稅六錢

● 實用 **數學一萬題** 三田暉信君著
全一冊洋並綴 中判五一〇頁 正價四拾錢 郵稅八錢

● **數學遊戲** 竹貫直人君著
全一冊紙皮上綴 小判二五〇頁 正價貳拾五錢 郵稅四錢

● **少年算術遊戲** 竹貫直人君著
全一冊洋並綴 中判二五〇頁 正價貳拾五錢 郵稅四錢

● 地理歷史敎育兵事理科實用 **新題算術** 峰是三郎君著
全一冊洋並綴 中判二六〇頁 正價拾八錢 郵稅四錢



遊戲及技藝書類

- 石橋思案君序文　加野孤雁君編　新案 **福引種本**　全一册新形美本 中判一六〇頁　正價拾八錢 郵稅四錢
- 石橋思案君序文　加野孤雁君 有田鐵浟君共編　征露紀念 **續福引種本**　全一册新形美本 中判一四六頁　正價拾八錢 郵稅四錢
- 安藤謙吉君著　**福引集**　全一册洋並綴 小判一四四頁　正價拾貳錢 郵稅貳錢
- 日本遊戲研究會編纂　**模範運動會法** 附 新式舞踏遊戲　全一册洋並綴 中判三〇〇頁　正價參拾錢 郵稅六錢
- 早稻田大學野球撰手橋戸信君著　**最近野球術**　全一册紙皮上綴 三六判二七五頁　正價參拾錢 郵稅六錢
- 前山口縣知事法學士武田千代三郎君著　理論實驗 **競技運動**　全一册布上綴 大判六七八頁　正價壹圓貳拾五錢 小包料拾錢
- 同　心身鍛錬 **少年競技運動**　全一册洋並綴 小判一五四頁　正價拾八錢 郵稅四錢
- 津田素彦君著　**ベースボール クリツケツト**　全一册洋並綴 小判一二六頁　正價拾貳錢 郵稅貳錢
- 野田圭園君著　**庭球術**　全一册洋並綴 小判一五〇頁　實價八錢 郵稅貳錢
- 小川文雄君著　新案圖解 **玉突術**　全一册紙皮上綴 大判二二八頁　正價七拾五錢 郵稅八錢

- 三宅鐵骨君著　**玉突術**　全一册洋並綴 小判一六〇頁　正價拾貳錢 郵稅貳錢
- 志岐守二君著　**室內遊戲法**　全一册洋並綴 小判二三二頁　正價拾貳錢 郵稅貳錢
- 太田才次郎君著　**全國兒童遊戲法**　全三册洋並綴 大判四五〇頁　正價一册拾錢 郵稅一册四錢
- 神刀流擊劍劔武術開祖日比野雷風君著　武道根本 **劔武術**　全一册洋並綴 中判二四二頁　正價貳拾五錢 郵稅四錢
- 適心齋井口義爲君著　露國征伐 **劍舞獨習圖解**　全一册洋並綴 中判二四六頁　正價貳拾五錢 郵稅四錢
- 血達磨鵜飼貞君編　**夢判斷** 附 夢占法　全一册洋並綴 中判一一四頁　正價貳拾錢 郵稅四錢
- 澁江保君著　西洋秘傳 **魔術**　全一册洋並綴 大判三五〇頁　正價參拾錢 郵稅八錢
- 戸田主獵局長校閲 報知新聞記者高橋迎月君著　名家實談 **銃獵案內**　全一册洋上綴 三六判二四六頁　正價參拾錢 郵稅六錢
- 佐野信三郎君 內藤恍行君合著　**銃獵案內**　全一册洋並綴 小判一九六頁　正價拾貳錢 郵稅貳錢
- 志岐守二君著　**鳥獸狩獵法**　全一册洋並綴 小判一四八頁　實價八錢 郵稅貳錢

女（後付の三〇）

女（後付の三二）



幼年少年書類



●教訓繪ばなし
武田櫻桃君 木村小舟君 共編

全部廿四册 洋並綴大判 正價一册五錢 郵稅一册貳錢宛

- 第壹編●家庭の卷
- 第貳編●お噺の卷
- 第叁編●海軍の卷
- 第四編●陸軍の卷
- 第五編●動物の卷
- 第六編●植物の卷
- 第七編●ポンチの卷
- 第八編●遊戯の卷
- 第九編●地理の卷
- 第十編●歴史の卷
- 第十一編●立志の卷
- 第十二編●冒險の卷
- 第十三編●修身の卷
- 第十四編●お伽の卷
- 第十五編●戰爭の卷
- 第十六編●逸話の卷
- 第十七編●奇談の卷
- 第十八編●娯樂の卷
- 第十九編●理科の卷
- 第二十編●博物の卷
- 第廿一編●發明の卷
- 第廿二編●衛生の卷
- 第廿三編●尙武の卷
- 第廿四編●談話の卷

●明治お伽噺
巖谷小波君著

全部十二册 洋並綴大判 正價一册拾貳錢 郵稅一册四錢宛

- 第壹編●お伽十番
- 第貳編●お伽三幅對
- 第叁編●新八犬傳(上)
- 第四編●新八犬傳(下)
- 第五編●お伽四天王(上)
- 第六編●お伽四天王(下)
- 第七編●新伊蘇普物語
- 第八編●お伽十二支(上)
- 第九編●お伽十二支(下)
- 第十編●お伽洋行船(上)
- 第十一編●お伽洋行船(下)
- 第十二編●お伽立志噺

●日本昔噺
巖谷小波君著(有名畫家密畫十數個挿入)

全廿四册 洋並綴大判 正價一册五錢 郵稅一册貳錢宛

- 第一編●桃太郎
- 第二編●玉の井
- 第三編●猿蟹合戰
- 第四編●松山鏡
- 第五編●花咲爺
- 第六編●大江山
- 第七編●舌切雀
- 第八編●俵藤太
- 第九編●かち〳〵山
- 第十編●瘤取
- 第十一編●物臭太郎
- 第十二編●文福茶釜
- 第十三編●八頭の大蛇
- 第十四編●兎と鰐
- 第十五編●羅生門
- 第十六編●猿と海月
- 第十七編●安達ケ原
- 第十八編●浦島太郎
- 第十九編●一寸法師
- 第二十編●金太郎
- 第廿一編●雲雀山
- 第廿二編●猫の草紙
- 第廿三編●牛若丸
- 第廿四編●鼠の嫁入

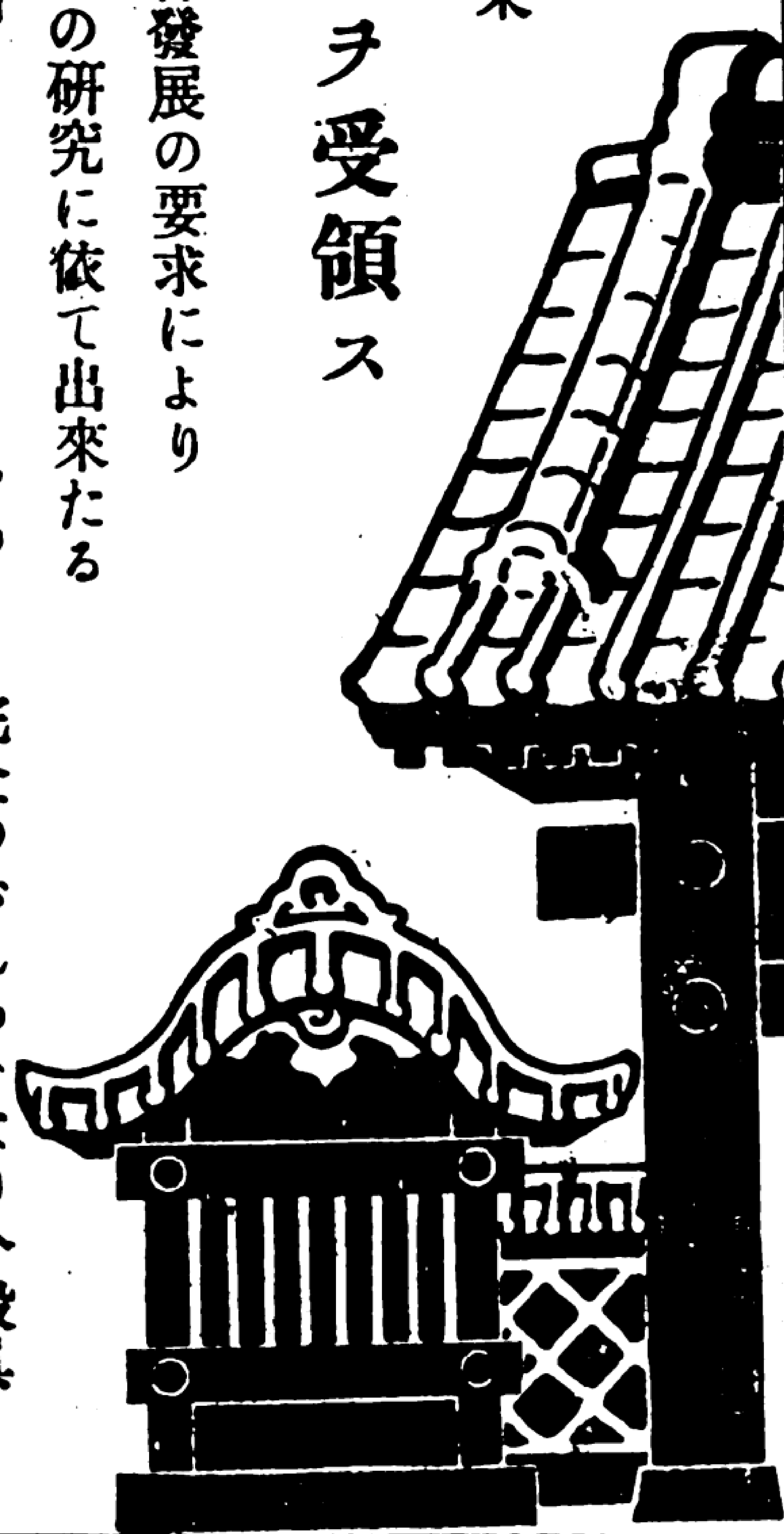
●日本お伽噺
巖谷小波君著(有名密畫十數個挿入)

全部廿四册 洋並綴大判 正價一册六錢 郵稅一册貳錢宛

- 第一編●八咫烏
- 第二編●田村將軍
- 第三編●玉取
- 第四編●源三位
- 第五編●八幡太郎
- 第六編●武藏坊
- 第七編●一休和尙
- 第八編●東照公
- 第九編●姨捨山
- 第十編●川中島

文〃後付の三二〃

女學世界
第七卷第壹號
（明治四十年一月一日發行 每月一回五日發行）
（明治廿三年十二月廿五日 第三種郵便物認可）



（定價金貳拾錢●郵稅貳錢本號に限り郵稅貳錢五厘）